長岡京市文化財調査報告書

第 17 冊

1986

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 17 冊

1986

長岡京市教育委員会

(1)勝龍寺城跡全景（小畑川と犬川の合流点から北を望む）

(2)勝龍寺城の土塁・空堀残存状況（南から）

(1)神足古墳全景（東から）

(2)神足古墳主体部の遺物出土状況

(3)神足古墳と勝龍寺城土塁（ＳＡ16303）の盛土断面

(1)勝龍寺城堀跡（溝ＳＤ16305Ａ）出土壺（信楽焼の四耳壺＝左・大壺＝右）

(2)神足古墳主体部出土遺物

(1)光林寺火葬墓群（第Ⅲ期遺構面―東から）

(2)火葬墓出土骨壺（左―丹波焼四耳壺・右上の左―伊万里焼白磁蓋付壺
右上の右―唐津焼刷毛目蓋付碗・右下―陶磁器小壺）

序　　文

本市の市民憲章は，昭和52年11月３日に制定され，その中で「学ぶ心と歴史遺産を大切にして文化の豊かなまちをつくりましょう」と唱っています。

また，昭和59年度に策定された長岡京市新総合計画の５つの将来像の中では，〝さまざまな文化に出会える成熟したまち〟を設定しております。本市の文化財行政推進に当っては，これらの基本理念に基づき今日まで鋭意努力を重ねてきました。

その一環といたしまして，昭和57年度に財団法人長岡京市埋蔵文化財センターを設立し，発掘調査体制の充実を図るかたわら，昭和59年には長岡京遷都1200年記念事業として長岡京市立埋蔵文化財調査センターを建設し，昭和60年10月１日にその調査センターに収蔵されている出土品を一般市民に公開するなど、文化財を広く市民文化の向上に役立てるための施策を推し進めてまいりました。

本書は，昭和60年度中に教育委員会が直営で実施した国庫補助事業の調査成果を掲載しました。その内容としましては，古墳時代後期の群集墳である七ツ塚古墳群第５号墳にかかる調査と長岡京跡および勝龍寺・光林寺の調査等であります。

これらの調査成果は，今後，本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに広く市民に活用されれば，幸いと考えております。

最後に調査実施にあたり，種々ご指導ご協力をいただいた諸先生方ならびに土地所有者，また関係者各位に紙上をお借りし，心よりお礼申しあげます。

昭和61年３月

長岡京市教育委員会

教育長　湯　浅　成　治

凡　　例

1. 本冊は，昭和60年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長法寺七ツ塚古墳及び長岡京跡の発掘調査の概要報告である。
2. 上記の調査地は付表１のとおりである。その位置は第１図に示した。
3. 長岡京跡の調査地の次数は，長岡京跡左京，長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は，高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977)』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。
4. 長岡京内の条坊名は，山中章他「第126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第８集1982年）による呼称に従った。
5. 各調査報告の執筆者は，各章のはじめまたは文末に記した。
6. 本書の編集は長岡京市教育委員会管理課　中尾秀正が担当した。
7. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。

〔調査作業員〕　岩崎又男・岩岸三郎・田中寅吉・高橋治一・中村正雄・天野菊次郎・麻田安太郎・井本千代治・佐藤昭三・池末安秀・広沢勝己

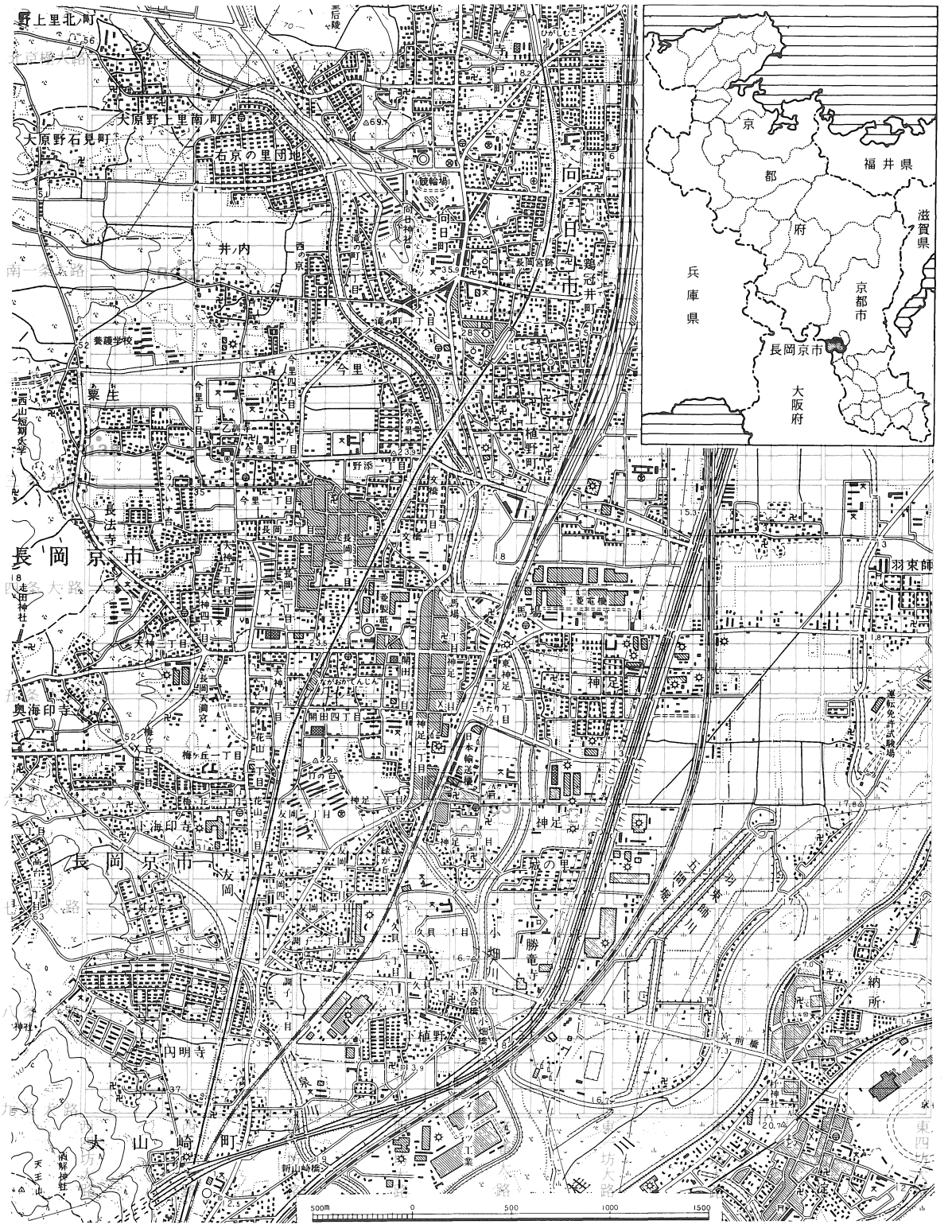
〔調査補助員・整理員〕

島田吉男・花村　潔・山田　剛・小島絢子・渡辺美智代・鈴木芙美子・岩川絢子・前田明美・桂　光良・青木也寸志・戸川隆史・田中智紀・木村弘子・赤木　恵・大久保泰江・小田昌子・田中佐知子

付表―１　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間	調査面積	備考
長法寺七ツ塚古墳群第１次調査	7ANJKK	長岡京市長法寺北畠21番	佐藤久夫	1985.4 .20 ～1986.3 .31	m² 450	現地調査　1983.10.24～1983.12.28 長岡京跡右京第138次調査
長岡京跡右京第168次調査	7ANMKI	長岡京市東神足二丁目15	㈱ハヤシ建設工業	1985. 4.20 ～1986. 3.31	803	現地調査 1984.5.25～1984.8.30
長岡京跡右京第207次調査	7ANMKI-2	長岡京市東神足二丁目６－15	光林寺　住職木本弘昭	1985. 9. 3 ～1985.10.10	110	勝龍寺城跡 神足遺跡 光林寺・徳勝(祥)寺
長岡京跡右京第213次調査	7ANGKT	長岡京市井ノ内頭本3 －３他	長谷川弥一	1985.11.25 ～1985.12.24	360	

長岡京条坊復原図（平城京型復原）



第１図　本報告発掘調査地位置図

図　版　目　次

巻頭図版１　(1)勝龍寺城跡全景　(2)勝龍寺城の土塁・空堀残存状況
巻頭図版２　(1)神足古墳全景　(2)神足古墳主体部の遺物出土状況
(3)神足古墳と勝龍寺城土塁（ＳＡ16303）の盛土断面
巻頭図版３　(1)勝龍寺城堀跡（溝ＳＤ16305Ａ）出土壺　(2)神足古墳主体部出土遺物
巻頭図版４　(1)光林寺火葬墓群　(2)火葬墓出土骨壺

長岡京跡右京第138次（７ＡＮＪＫＫ地区）調査

図版　1　(1)　七ツ塚古墳群遠景（1983年，㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影）
(2)　七ツ塚古墳群全景（1946年，米軍撮影）
図版　2　５号墳と周濠ＳＤ13801検出状況（1983年，京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影）
図版　3　(1)　６トレンチ全景（西から，完掘後）　(2)　６トレンチ全景（南から，完掘後）
図版　4　(1)　周濠ＳＤ13801全景（西から，調査中）(2)　周濠ＳＤ13801の遺物の出土状況（北から）
図版　5　(1)　１トレンチ全景（東から）　(2)　２トレンチ全景（西から）
図版　6　(1)　３トレンチ全景（東から）　(2)　４トレンチ全景（西から）
図版　7　(1)　６号墳全景（南から）　(2)　６号墳墳丘断面（西から）
図版　8　出土遺物その１（土壙ＳＫ13805・周濠ＳＤ13801）
図版　9　出土遺物その２（周濠ＳＤ13801・溝状遺構ＳＸ13803・３号墳採集）
図版　10　出土遺物その３（７号墳採集）

長岡京跡右京第163次（７ＡＮＭＫＩ地区）調査

図版　11　(1)　溝ＳＤ16305検出の第２・３・４トレンチ全景（北東から）
(2)　溝ＳＤ16305－(B)全景（第３トレンチ南から）
図版　12　(1)　溝ＳＤ16305－(2)全景（南から）　(2)　溝ＳＤ16305断面（第２トレンチ南断面）
図版　13　溝ＳＤ16305出土土師器皿
図版　14　溝ＳＤ16305，空堀ＳＤ16302出土土師器皿
図版　15　(1)　轉讀札　(2)　墨書土器(1)
(3)　墨書土器(2)
図版　16　瓦器，土師器

図版　17　溝ＳＤ16305(A)出土唐津焼

図版　18　溝ＳＤ16305(B)出土唐津，信楽焼

図版　19　溝ＳＤ16305(C)出土唐津焼

図版　20　溝ＳＤ16305出土瀬戸焼系陶器

図版　21　空堀から出土した国産陶器（瀬戸，唐津，京焼）

図版　22　溝ＳＤ16305(A)・(B)出土染付

図版　23　土塁・空堀出土の染付，白磁

図版　24　(1)　輸入磁器　　(2)　緑釉陶器

(3)　小型製品　　(4)　近世軒丸瓦

図版　25　(1)　平安時代須恵器　　(2)　平安時代土師器

(3)　神足古墳出土須恵器蓋坏

図版　26　古墳時代須恵器，土師器

図版　27　(1)　弥生土器　　(2)　磨製石剣

図版　28　(1)　鉄製槍先　　(2)　鉄製直刀

(3)　青銅製品

長岡京跡右京第207次（７ＡＮＭＫＩ－２地区）調査

図版　29　(1)　第Ⅳ期遺構全景（南から）　　(2)　池ＳＧ20703（南から）

図版　30　(1)　第Ⅲ期遺構検出状況全景(南から)　(2)　第Ⅲ期遺構完掘状況全景(南から)

図版　31　(1)　火葬墓ＳＸ20732全景(東から)

(2)　寛永通寶出土状況（火葬墓ＳＸ20732北西端）

(3)　唐津焼出土状況（火葬墓ＳＸ20732北西端）

(4)　元祐通寶出土状況（火葬墓ＳＸ20732中央）

(5)　火葬墓ＳＸ20719全景（西から）　　(6)　骨壺出土状況(火葬墓ＳＸ20719中央)

(7)　火葬墓Ａ列群の細部

(8)　火葬墓骨出土状況（火葬墓ＳＸ20731中央）

図版　32　(1)　火葬墓ＳＸ20715全景（東から）　　(2)　火葬骨出土状(火葬墓ＳＸ20715中央)

(3)　火葬墓ＳＸ20727全景(西から)　　(4)　火葬骨出土状況(火葬墓ＳＸ20727)

(5)　火葬墓ＳＸ20729全景(西から)　　(6)　火葬骨出土状況(火葬墓ＳＸ20729南端)

(7)　火葬墓Ｂ例群の細部　　(8)　納骨器出土状況(火葬墓ＳＸ20717中央)

図版　33　(1)　火葬墓ＳＸ20706（北から）　　(2)　骨壺出土状況(火葬墓ＳＸ20726)

(3)　火葬墓ＳＸ20709（東から）　　(4)　蔵骨器出土況(火葬墓ＳＸ207209)

(5)　火葬墓ＳＸ20708（西から）　　(6)　石仏出土状況(火葬墓ＳＸ20708)

(7) 火葬墓Ｃ列群の細部　(8) 一石五輪塔出土状況(火葬墓ＳＸ20708)
図版 34 (1) 第Ⅱ期遺構全景（南から）　(2) 第Ⅰ期全景（南から）
図版 35 (1) 土葬墓ＳＫ20738（南から）と頭骨，副葬品出土状況
(2) 寝棺墓群（西から），(下)―土葬墓ＳＫ20741，(上)―土葬墓ＳＫ20759
図版 36 (1) 土壙ＳＫ20736（東から）　(2) 土壙ＳＫ20742（東から）
(3) 土壙ＳＫ20758（北から）　(4) 土壙ＳＫ20743（北から）
(5) 整地盛土と第Ⅰ期落ち込み（トレンチ東壁）
(6) 整地盛土と火葬墓Ａ列群の土層（トレンチ南壁）
(7) 墓道整地層（トレンチ西壁）　(8) 土壙ＳＫ20761土層(トレンチ北壁)
図版 37 第Ⅳ期遺構・包含層出土遺物
図版 38 第Ⅳ・Ⅲ期遺構・包含層出土遺物
図版 39 第Ⅲ期火葬墓出土遺物
図版 40 第Ⅲ期火葬墓出土納骨器
図版 41 火葬墓出土土師器皿(1)
図版 42 火葬墓出土土師器皿(2)
図版 43 (1) 第Ⅱ期土壙出土土師器皿　(2) 長岡京期の遺物
(3) 刀子の線刻画部分
図版 44 (1) 伏見人形　(2) 陶磁器片
図版 45 (1) 古貨幣と刀子　(2) 火葬墓ＳＸ20715出土金属器
図版 46 土葬墓ＳＫ20738出土頭蓋骨

長岡京跡右京第213次（７ＡＮＧＫＴ地区）調査

図版 47 (1) 調査地全景(南西から，調査前)　(2) Ａトレンチ全景(南から)
図版 48 (1) Ｂトレンチ全景(上層，南東から)(2) Ｂトレンチ全景(下層，南東から)
図版 49 (1) Ａトレンチ溝ＳＤ21301(北西から)
(2) Ａトレンチ東壁南端の土層堆積状況（西から）
(3) Ｂトレンチ西壁の土層堆積状況（東から）
(4) Ｂトレンチ南壁の土層堆積状況（北から）
図版 50 (1) 出土遺物（その１）　(2) 出土遺物（その２）

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図……iii

長法寺七ツ塚古墳群第１次調査

第２図　調査地位置図……1
第３図　周辺の地形と古墳の分布(地形分類は日下雅義氏の原図による)……3
第４図　６号墳墳丘測量図……4
第５図　６号墳墳丘土層図……4
第６図　七ツ塚古墳群地形測量図……5
第７図　試掘調査地全景……7
第８図　周濠の調査風景……7
第９図　検出遺構図……8
第10図　周濠ＳＤ13801土層図……9
第11図　Ｃライン断面写真……10
第12図　Ｄライン断面写真……10
第13図　周濠ＳＤ13801実測図……11
第14図　調査地土層図……13
第15図　遺構出土遺物実測図……15
第16図　周濠ＳＤ13801出土遺物実測図－１……16
第17図　周濠ＳＤ13801出土遺物実測図－２……17
第18図　遺構出土遺物実測図……18
第19図　３号墳出土遺物実測図……19
第20図　７号墳出土遺物実測図……19

長岡京跡右京第163次（７ＡＮＭＫＩ地区）調査

第21図　発掘調査地位置図（１／5000）……25
第22図　溝ＳＤ16305Ａ出土土師器実測図（１／４）……31
第23図　溝ＳＤ16305Ｂ出土土師器実測図（１／４）……32
第24図　溝ＳＤ16305Ｃ出土土師器実測図（１／４）……33
第25図　土塁・空堀出土土師器，溝ＳＤ16305出土轉讀札と坩堝実測図（１／４）……34
第26図　溝ＳＤ16305出土近世陶磁器実測図(1)（１／４）……35

第27図　溝ＳＤ16305出土近世陶磁器実測図(2)（１／４）…… 36
第28図　溝ＳＤ16305出土近世陶磁器実測図(3)（１／４）…… 37
第29図　土塁・空堀出土近世陶磁器実測図（１／４）…… 38
第30図　中・近世瓦器，土師器実測図（１／４）…… 39
第31図　近世擂鉢実測図（１／４）…… 40
第32図　中・近世瓦器，土師器（519～522土師器甕）実測図（１／４）…… 41
第33図　近世土師器鍋，鉢実測図（１／６）…… 42
第34図　近世瓦器鉢，壺実測図（１／６）…… 43
第35図　平安時代初期の土師器実測図（１／４）…… 44
第36図　平安時代初期・中期の須恵器実測図（１／４）…… 45
第37図　古墳時代須恵器，土師器実測図（１／４）…… 46
第38図　弥生土器実測図（１／４）…… 47
第39図　縄文土器，弥生土器実測図（１／４）…… 48
第40図　弥生時代石器(上段)，近世石臼(下段)実測図(石器１／２，石臼１／４)…… 49
第41図　近世砥石，軒瓦実測図（１／４）…… 50
第42図　鉄器，鉄製品実測図（１／４）…… 51
第43図　土師器皿の形態別総量比…… 54
第44図　土師器皿の形態別法量分布図…… 56
第45図　土師器皿の出土遺構別・形態別法量分布図…… 57
第46図　乙訓地域の中・近世遺物編年図…… 59

長岡京跡右京第207次（７ＡＮＭＫＩ－２地区）調査

第47図　発掘調査地位置図（１／5000）…… 61
第48図　調査地土層図（１／40）…… 63
第49図　第Ⅳ期遺構配置図（１／ 100）…… 65
第50図　池ＳＧ20703の細部（１～２は構築状況，３～４は遺物出土状況）…… 66
第51図　池ＳＧ20703実測図（１／20）…… 67
第52図　第Ⅲ期遺構配置図(１／100）…… 68
第53図　石敷溝ＳＤ20718実測図（１／40）…… 69
第54図　火葬墓Ａ列群（１／40）…… 70
第55図　火葬墓Ｂ列群（１／40）…… 72
第56図　火葬墓Ｂ列群の遺物出土状況…… 73
第57図　火葬墓Ｃ列群（１／40）…… 74

第58図　火葬墓Ｄ列群（１／40）…… 76
第59図　第Ⅱ期遺構配置図(１／100）…… 77
第60図　土葬墓ＳＫ20738実測図（１／20）…… 78
第61図　土葬墓ＳＫ20758実測図（１／20）…… 79
第62図　土壙ＳＫ20736実測図（１／20）…… 79
第63図　土壙ＳＫ20742実測図（１／20）…… 80
第64図　土壙ＳＫ20743実測図（１／20）…… 80
第65図　第Ⅰ期遺構配置図(１／100）…… 81
第66図　第Ⅳ期出土遺物実測図（１／４）…… 85
第67図　第Ⅲ期(火葬墓)出土遺物実測図(1)（１／４）…… 86
第68図　第Ⅲ期(火葬墓)出土遺物実測図(2)（１／４）…… 87
第69図　第Ⅰ・Ⅱ期遺構・第Ⅲ期整地層他出土遺物実測図（１／４）…… 88
第70図　第Ⅱ期以降出土古貨幣・刀子…… 89
第71図　土師器皿の形態別・時期別法量分布図…… 95
第72図　土師器皿の形態別法量表…… 98
第73図　検出遺構変遷図…… 100
第74図　光林寺所蔵涅槃図（寛永17年６月15日）…… 102
第75図　光林寺所蔵涅槃図寄進者名（涅槃図裏面）…… 102
第76図　調査前の光林寺本堂（南西から，光林寺所蔵）…… 103
第77図　家老横田主水他，永井直清の家臣の墓…… 103
第78図　光林寺本堂棟札…… 103
第79図　「全廊比丘」無縫塔…… 103
第80図　火葬墓型式分類平面略図…… 106
第81図　火葬墓の構築法型式分類図…… 106
第82図　「徳勝寺總境内之図」(明治43年）徳勝寺履暦写…… 108
第83図　城州乙訓郡神足村光林寺/徳勝寺寺地抗木打渡裏書図（寶暦二年）…… 108
第84図　現在の光林寺（昭和44年）…… 108
第85図　大正の光林寺…… 108
第86図　火葬墓ＳＸ20717骨壺(83)埋納火葬骨…… 110
第87図　火葬墓出土石仏，石塔婆…… 115

長岡京跡右京第213次（７ＡＮＧＫＴ地区）調査

第88図　発掘調査地位置図…… 116

第89図　調査地周辺図……117
第90図　Aトレンチ検出遺構図……114
第91図　Bトレンチ検出遺構図……120
第92図　調査地土層図……122
第93図　出土遺物実測図……124
第94図　井ノ内集落周辺の旧地形と小字名（昭和11年）……125
第95図　社乃神神社……126

付　表　目　次

付表－1　本報告調査地一覧表……ii
付表－2　長法寺七ツ塚古墳群出土遺物観察表……22～24
付表－3　神足遺跡の時期区分……26
付表－4　勝龍寺城の歴史的画期……27
付表－5　遺物出土遺構一覧表……52・53
付表－6　土師器皿の形態分類表……53
付表－7　陶磁器出土総数及び土師器皿との割合……55
付表－8　出土遺物観察表……90
付表－9　土師器皿の形態分類表……93
付表－10　古貨幣の出土遺構表……97
付表－11　土師器皿の形態別出土個数……98
付表－12　出土土器総量……98
付表－13　検出遺構変遷表……100
付表－14　徳勝寺，光林寺略歴……101
付表－15　脳頭蓋の計測値と示数……114

本　文　目　次

第１章　長法寺七ッ塚古墳群第１次調査概要（長岡京跡右京第138次調査概要）…… 1

１．はじめに　２．遺跡の環境と過去の調査　３．検出遺構

４．出土遺物　５．まとめ

第２章　長岡京跡右京第163次調査概要…… 25

１．はじめに　２．検出遺構の時期区分　３．出土遺物

４．まとめ

第３章　長岡京跡右京第207次調査概要…… 61

１．はじめに　２．調査経過　３．検出遺構　４．出土遺物

５．まとめ　６．長岡京跡出土の江戸時代人骨について

第４章　長岡京跡右京第213次調査概要……116

１．はじめに　２．調査経過　３．検出遺構　４．出土遺物

５．まとめ

第一章　長法寺七ツ塚古墳群第１次調査概要

長岡京跡右京第138次（７ＡＮＪＫＫ地区）調査概要

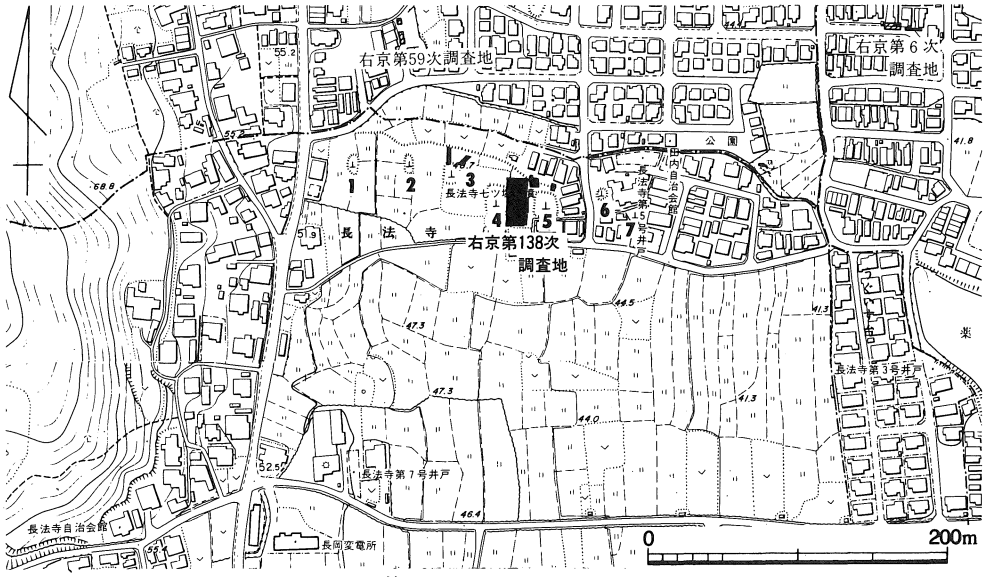
１　は　じ　め　に

1　本報告は，1983年10月24日から12月28日まで，長岡京市長法寺北畠21において実施した長岡京跡右京三条四坊十四町・西四坊第二小路推定地および長法寺七ツ塚古墳３・４・５号墳の発掘調査に関するものである。なお当古墳群の性格を明らかにするために，この調査に先だって昭和56年度に実施された６号墳の緊急調査の成果および３・７号墳出土遺物について合わせて収録した。

2　本調査は，長法寺七ツ塚古墳３・４・５号墳間を開発する計画が起ったため，これらの古墳の保護対策を講じるための資料を作成する目的で実施した発掘調査である。

3　調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡京市教育委員会社会教育課（現管理課）文化財係中尾秀正が担当し，整理報告は（財）長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し，原秀樹が行った。

4　調査実施にあたり，土地所有者である佐藤久夫氏，資料置場・飲料水を提供していただいた佐藤友彦・立田怜・真柴勝昭の各氏，地元の武本健治氏ほか近隣土地所有者住民の方々から種々のご協力を得た。また，現地調査から本報告に至るまで，京都文教短期大学教授中山修一・大阪大学教授都出比呂志・(財)京都市埋蔵文化財研究所丸川義広・上村和直・京都市埋蔵文化財調査センター北田栄造・平安高校教諭萩本勝の各氏ほかから貴重なご教示をい



第２図　発掘調査地位置図

ただいた。さらに遺物写真は，７号墳のものを元文部技官高橋猪之介氏に，その他を(財)京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏等に撮影・指導していただき，航空写真の一部は(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影のものを提供していただいた。

5　本報告の編集は，原，中尾が行い，執筆は１－中尾，２の一部－山本輝雄，それ以外を原が行った。

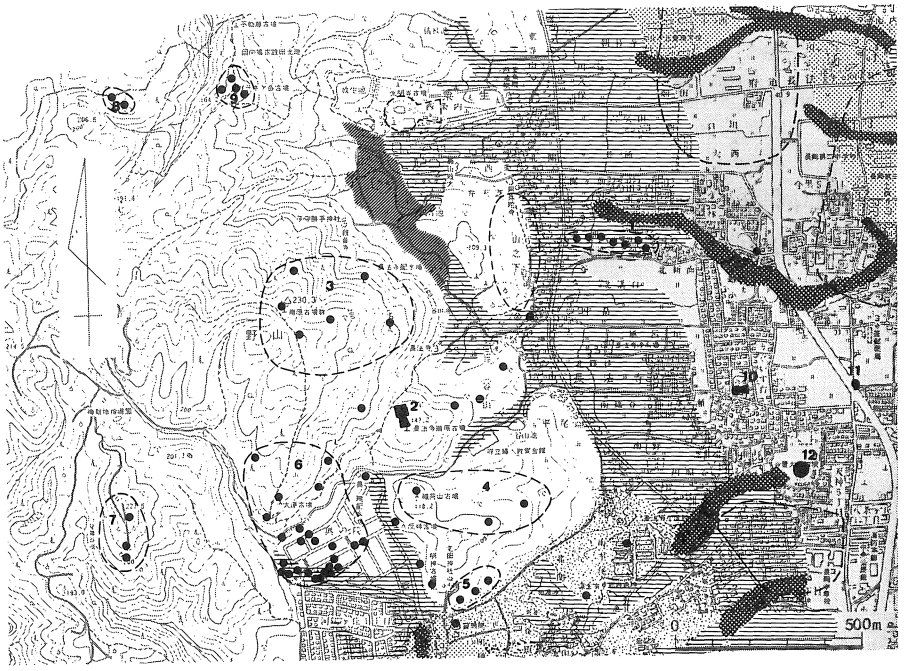
2　遺跡の環境と過去の調査

古墳の立地　七ツ塚古墳群は，長岡京市北西部にある長法寺集落東側の水田の中にあり，東西一列にほぼ30ｍ間隔で７基の古墳が並び，西から順に１号…７号墳と呼称されている。この古墳群は，西方にある西山山地の山裾に展開する下位段丘面に形成された扇状地上に立地し，南側の谷状に入り込んだ緩扇状地と北側の開析谷にはさまれた舌状を呈する小高い台地上に築造されている。標高は51～45.5ｍを測る。近年宅地開発により，５～７号墳の周囲は住宅地となり，一望できなくなってきている。

周辺の古墳　七ツ塚古墳群の背後の山中は，市内でもっとも数多くの古墳が築造された地域である。前期の古墳には，本市で最古とされる南原古墳がある。この古墳は，平地を望む尾根の頂部に築かれ，これまでの数次の発掘調査で４世紀後半の前方後方墳と判明した[(1)]。前期末ないしは中期初頭の古墳として，南原古墳の東隣の南原東１・２号墳[(2)]やこの北約１㎞に直経約30ｍで粘土槨の埋葬施設を有するカラネガ岳２号墳[(3)]がある。これらの前期～中期初頭の古墳はこの地域の古墳時代の首長系譜を解明する上で重要な古墳と考えられている。それ以降，後期までの古墳はほとんど確認されていない。後期に入ると多くの群集墳が築造され，古墳の密集地となる。南原古墳群（６基）・大原古墳群（25基）・野山古墳群（３基）・稲荷山古墳群（３基）・走田古墳群（３基）・中山古墳群（２基）・カラネガ岳古墳群（３基）といった横穴式石室をもつものや，芝12号墳・光明寺古墳・北平尾古墳[(4)]など陶棺を伴うものなどがあり，当地域の古墳時代後期を特徴付けるものになっている。なお，昨年には南原古墳の東側斜面において，農道敷設工事に伴って５世紀前半と推定される埴輪円筒棺が出土している[(5)]。

一方平地には，後期の前方後円墳や円墳が築造されている。既に消滅した古墳（細塚古墳・薬師堂古墳など）もあり不明な点が多いが，今里地区の南西部で舞塚古墳・舞塚第２号墳とその南西約250ｍの今里大塚古墳の３基が確認されている。舞塚古墳は周濠をもつ全長約50ｍの帆立貝式の古墳で人物埴輪などが出土し，６世紀前半の築造と推定されている[(6)]。また今里大塚古墳は，巨石を用いた横穴式石室と周濠を有する直径約45ｍの大規模な円墳で６世紀末ごろの築造と推定され，舞塚古墳とともに，この地域の首長系譜上にあるものと推測されている。

過去の調査　七ツ塚古墳群は，昭和７年に７号墳で村道工事に伴う土採り作業中に，主体部付近から出土した台付子持装飾壺など須恵器類の一部が植田小太郎氏によって紹介され世に



第３図　周辺の地形と古墳の分布（地形分類は日下雅義氏の原図による）（１/2000）

知られるようになった。[7] その後昭和42年に京都府教育委員会実施の地形測量により，初めて墳丘の規模や墳形などが明らかにされた。[8]

東西に並ぶ７基の古墳は，いずれも水田耕作等のためかなり原形を損なっており，比較的原形を保つ４・５号墳は直径17～18m，高さ３～４ｍの円墳であると推定された。なお，この４・５号墳と合わせて３号墳は，江戸時代の長法寺村領地絵図[9]によると，他の古墳と比べ規模が大きく描かれており，築造当初の姿を今日に伝えているものと思われる。また，３号墳から耕作中に出土した須恵器類の報告が西岡巧次氏によってなされ，７号墳と同様に６世紀中頃と考えられた。[10] しかし，その後も本格的な発掘調査は実施されず，古墳群の構造・性格などはまだ明らかにされていない。ただ，６号墳において，駐車場拡幅によって墳丘の一部が削平された際に，墳丘測量および断面観察が行われているのでここに合せて報告しておく。

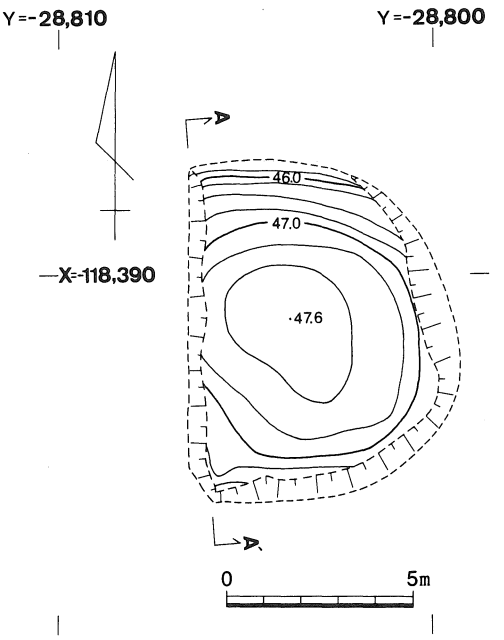
七ツ塚６号墳の調査（第４・５図）　昭和56年２月，６号墳の一部が削平を受けているという市民からの通報が市教育委員会にあった。直ちに職員が現地に赴き，破壊の状況を見聞したところ，墳丘の西側が長さ約７ｍ，幅約1.5ｍの範囲で削平されていること，幸いにも埋葬主体にまで破壊が及んでいないことなどを確認した。この事態を重視した市教育委員会では，京都府教育委員会にその旨を連絡し，善後策について協議した結果，無届出で古墳破壊を行っ

た土地所有者に対して厳重に注意し，旧状に復元するよう求めるとともに，削平部分については緊急の調査を実施することになった。調査は，墳丘の地形測量と盛土の断面観察を主たる目的とし，２月18日から20日までの３日間を費した。以下，調査で明らかとなった事項について略述する。

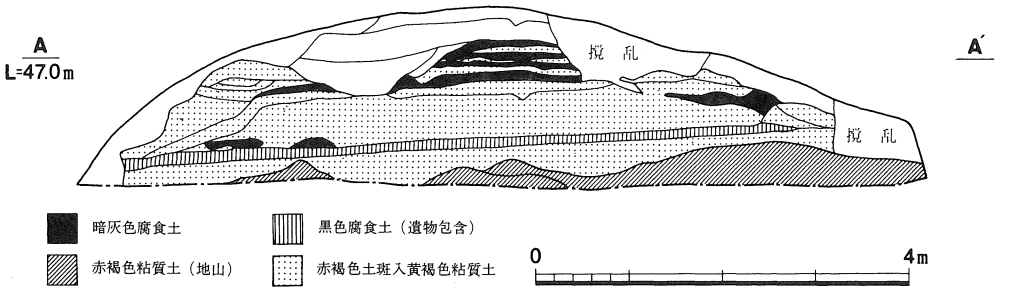
まず，墳形は径約９ｍ，高さ約２ｍ程度の円墳であると考えられているが，標高47ｍ以上の等高線をみると，東および北側が直線的であり，３・５号墳と同じく方墳である可能性も考えられないわけではない。ただし，墳丘裾部の基底線がかなりの部分で削平されており，周濠の有無も未確認である現段階においては，円・方いずれの墳形であるのか確定し難く，将来の詳細な調査を待って判断したい。

次に，墳丘の盛土は，10～40cmの表土（腐葉土）下に，約１ｍほど残存していた。これは，木の根や後世の撹乱穴によって少なからず削平されており，しかも墳丘西側の断面によるものであって，中央部での盛土はもう少し厚いものと推察される。盛土は，赤褐色ないし黄褐色粘質土の地山上に，暗灰色の腐食土と地山を削った土を交互に積み上げており，上部ほど各層の厚さ（５～10cm）は細かい。このことは，盛土の構築工程を探る上に重要であろう。また，遺物は，撹乱穴から須恵器と瓦器の細片，および盛土中から少量の土師器片が出土しているものの，古墳築造の年代を知る手がかりとなるほどのものではない。

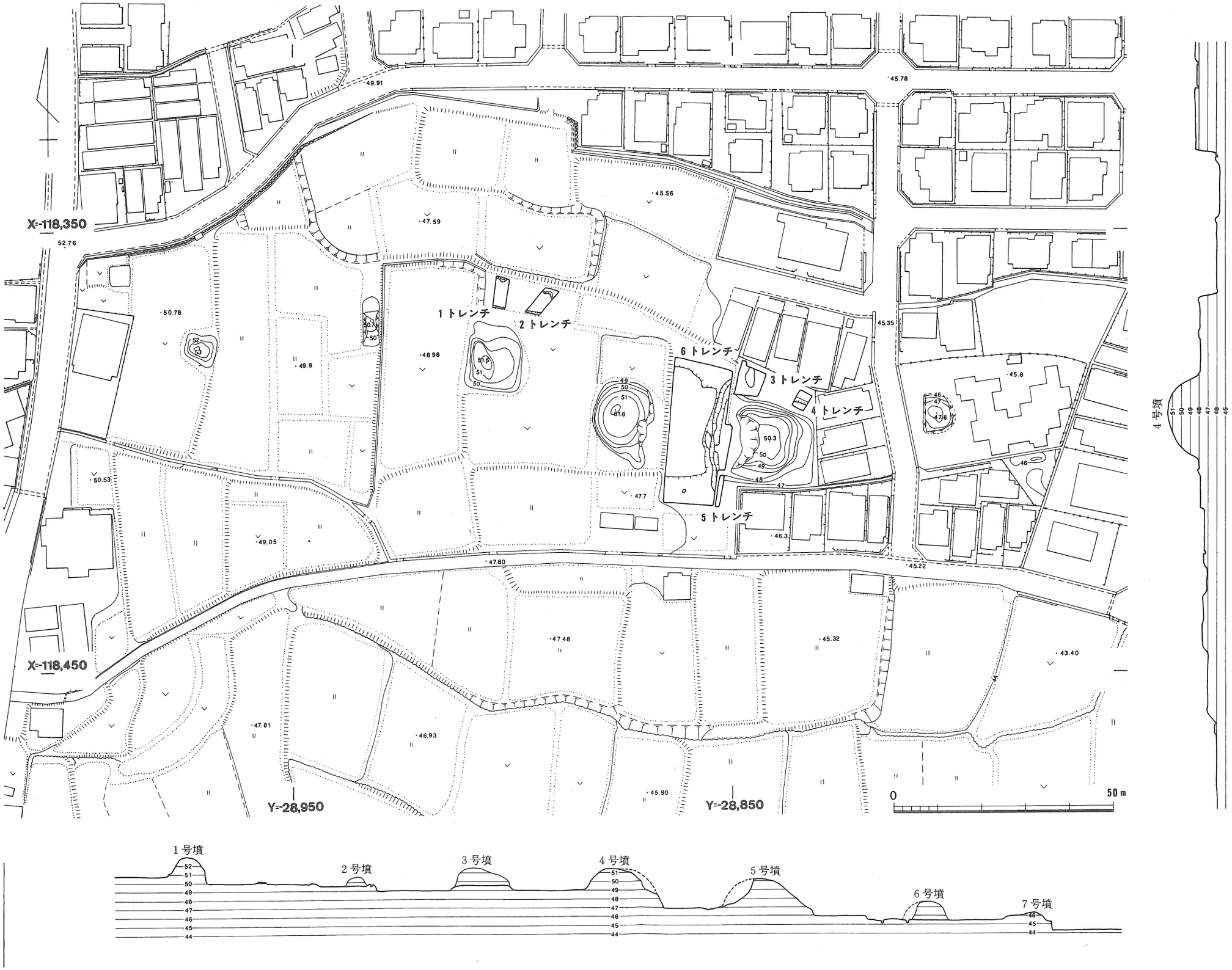
なお，葺石および埴輪などの外表施設は，まったく認められなかった。



第４図　６号墳墳丘測量図（１/20）



第５図　６号墳墳丘土層図（１/80）



第6図　七ッ塚古墳群地形測量図

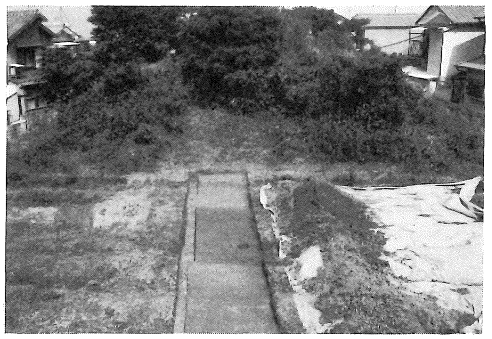
3　検　出　遺　構

本調査を実施するに先立ち，事前に遺構の有無を確認するため４・５号墳間に２×14ｍの試掘トレンチを設定した。その結果，５号墳の周濠と考えられる幅3.5ｍ・深さ0.3ｍの溝を検出し，さらにこの溝が墳丘の西側全体にのびることが予想された。遺物は少片が出土したのみであった。試掘調査は，昭和58年７月22日～８月１日の延べ８日間行なわれ，図面と写真撮影終了後シートをかけて後日の本調査に備えた。

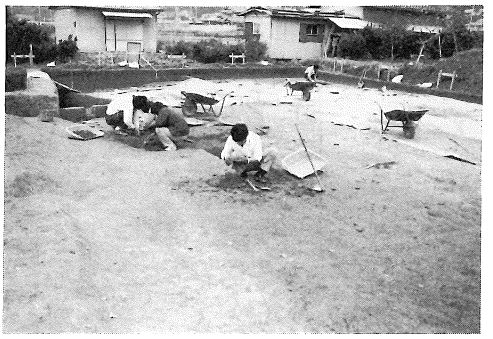
本調査は，試掘調査の結果より５号墳の周濠の全面調査と，墳丘北側の周濠の有無，および３・４号墳の周濠の有無を確認するために調査予定地内に各々６ヵ所のトレンチを設定した。調査は，全て人力による排土作業を行った。遺構はおもに耕作土・床土を除去した地山面で検出された。地山は黄褐色土，又は黄褐色砂礫層となっている。以下，各トレンチにおける調査と各遺構の概要について述べていきたい。

１・２トレンチ　３号墳の北側に設定したトレンチである。トレンチは台地の縁辺部に位置し，北側に比高差約２ｍの崖がある。遺構は，当初期待した３号墳の周濠は検出されず，南側の畦畔下でこれと平行する深さ0.1ｍの溝１条，北側で現地形に沿って北へ傾斜すると思われる不整形な落ち込みが検出された。いずれも調査地外へのびるためその規模等は不明であるが，土取りや耕作に伴うものと考えられる。遺物は出土していない。なお，遺構の検出面はいずれも地山面で，標高28ｍを測る。

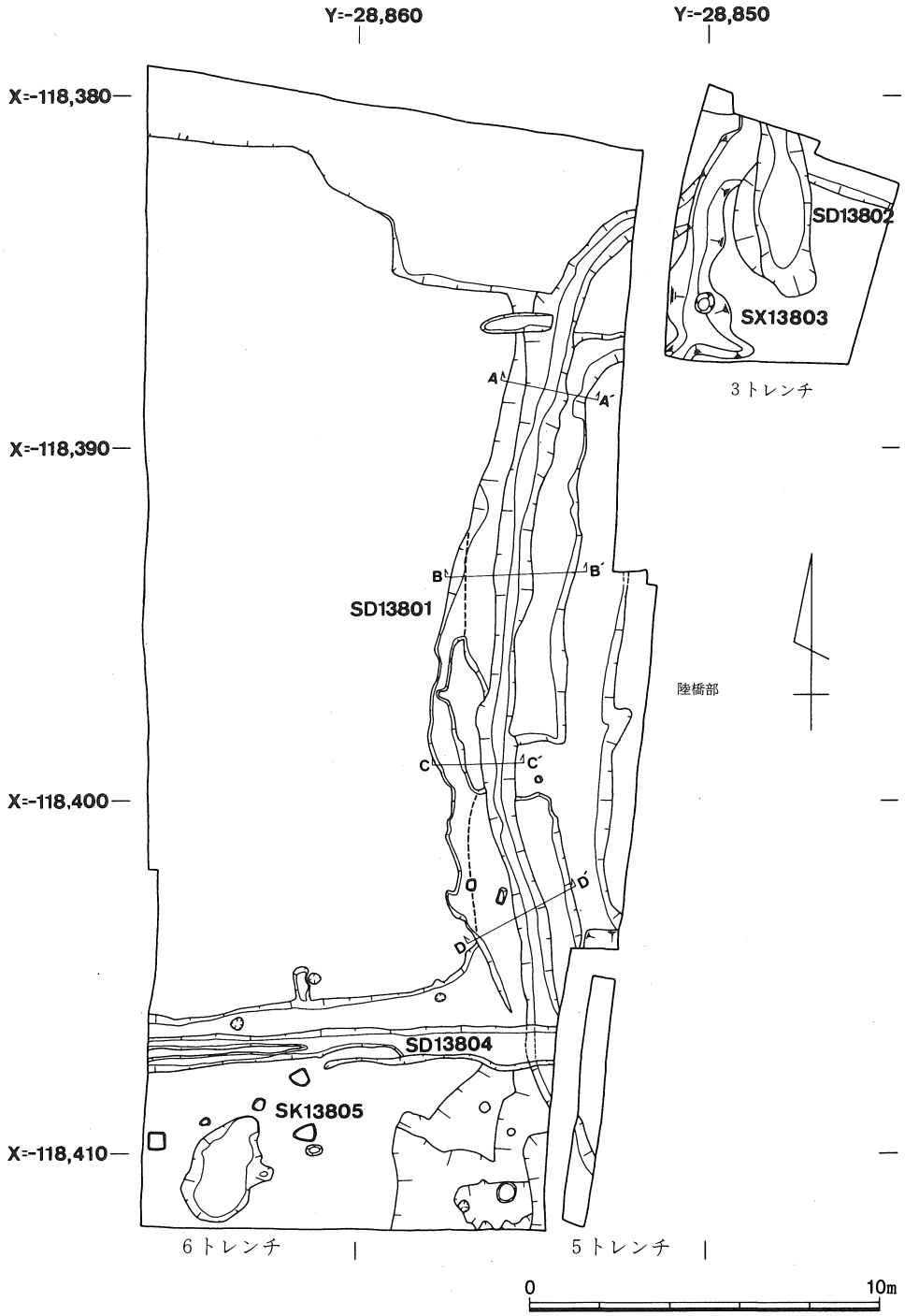
３・４トレンチ　５号墳の北側に設定したトレンチである。遺構は，３トレンチで溝ＳＤ13802と溝状遺構ＳＸ13803を，４トレンチで溝ＳＤ13802と同様に北側へ落ち込む溝をそれぞれ検出した。とくに４トレンチで確認した溝は，出土遺物がないためその時期は明らかにし得ない。ただ埋土である黄灰色粘質土は，他の遺構に比べて土が軟かく，しかも１・２トレンチの北側で検出した不整形な落ち込みの埋土と類似することから，土取りや耕作に伴って掘られたものと考えられる。このことから５号墳に関連するものとは考え難い。なお，地山面はいず



第７図　試掘調査地全景



第８図　周濠の調査風景



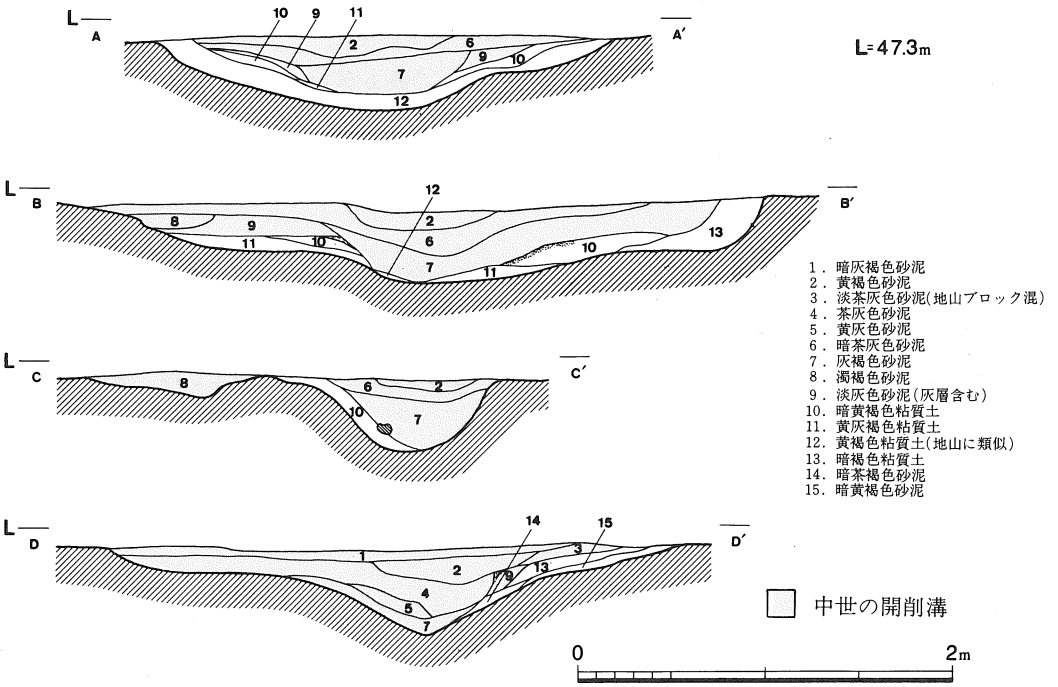
第9図　検出遺構図（1/20）

れも現存する５号墳の墳丘裾から北に向かって緩かに落込み，標高46.4～45.8ｍを測る。

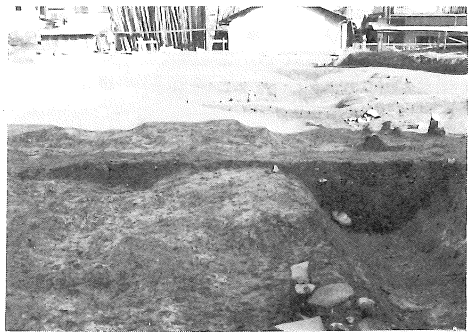
５・６トレンチ　４・５号墳の間に設定したトレンチである。地山面はトレンチ中央の平担部で標高47.2ｍを測り，北東および南東方向に緩やかに傾斜する。この傾斜が埋まって現在のような平担地となるのは，出土遺物から中世以降と考えられる。６トレンチで検出された遺構は，試掘調査で一部確認していた５号墳の周濠ＳＤ13801およびこれを中世に開削した溝の他に溝ＳＤ13804・土壙ＳＫ13805がある。また５トレンチでは，周濠ＳＤ13801を開削した溝のつづきを検出した。これらの遺構はすべて地山面で検出されている。なお，６トレンチでは，４号墳に伴う周濠等の遺構は検出されなかった。

次に３・６トレンチで検出された各遺構について述べていきたい。

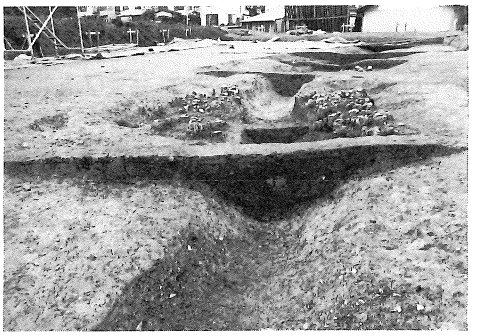
周濠ＳＤ13801（第９・10・11・12図）　６トレンチ東側で検出された５号墳に伴う周濠である。この周濠は，中世に開削された溝によって改変され当初の形状をとどめておらず，その平面形は，墳丘の外側が外方へ張り出した形をしている。周濠の中央付近では，墳丘から外側に向かってのびる凸状の高まりと中世の開削溝に分断された細長い島状の高まりが残されていた。これを断面観察等から復元すると，当初の周濠は，５号墳墳丘側でほぼ直線的に，反対側はゆるやかに弧を描き，北端と南端の傾斜面で浅くなり途切れていたと考えられる。しかも，中央付近の高まりは，周濠を築いた当初は掘り残され，陸橋部になっていたことが明らかとなった。また，この溝は，周濠を縦断して台地の裾へのび，３・５トレンチまで続いていた



第10図　周濠ＳＤ13801土層図（１/40）



第11図　Ｃライン断面写真



第12図　Ｄライン断面写真

ことが判明した。その開削の時期は，溝から周濠内に残された土器とともに13世紀前半の特徴をもつ瓦器椀[11]が出土していることから，ほぼ近接する時期と思われる。遺物は，土師器・須恵器・瓦器・花崗岩の小片などが出土した。

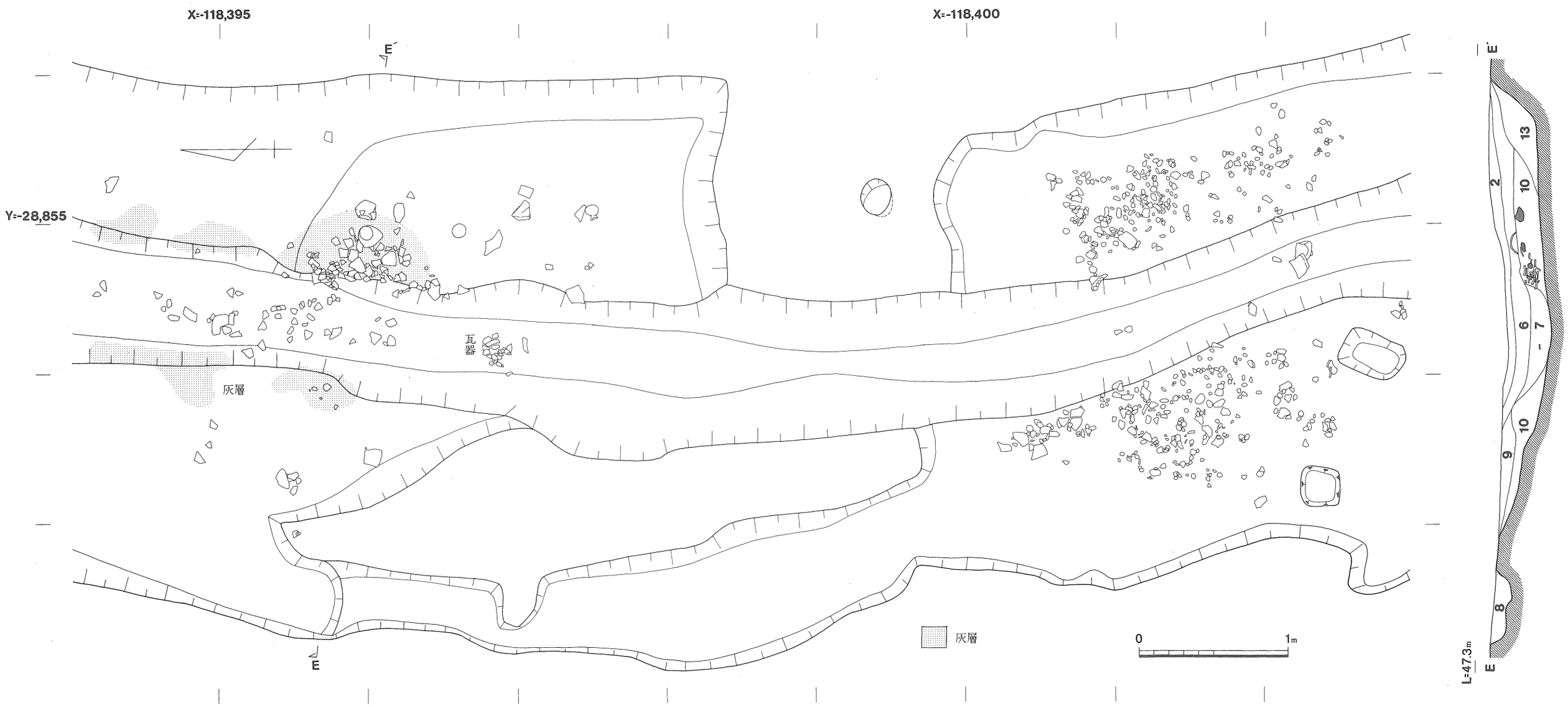
また陸橋部の中央やや南東寄りで検出された柱穴は直径0.2ｍ，深さ約0.2ｍを測る。この柱穴には遺物がなく，その時期・性格は明らかにし得ない。

溝ＳＤ13802（第９図）　３トレンチの北端で表土直下より検出された。幅は0.9ｍ以上，深さ0.5ｍをはかる。埋土は淡黄灰色土である。遺物は土師器と須恵器が出土した。当初遺物が出土したことから遺構と考えたが，層位的に新しく１・２・４トレンチの北部で検出された落込みと同様のものと考えられる。

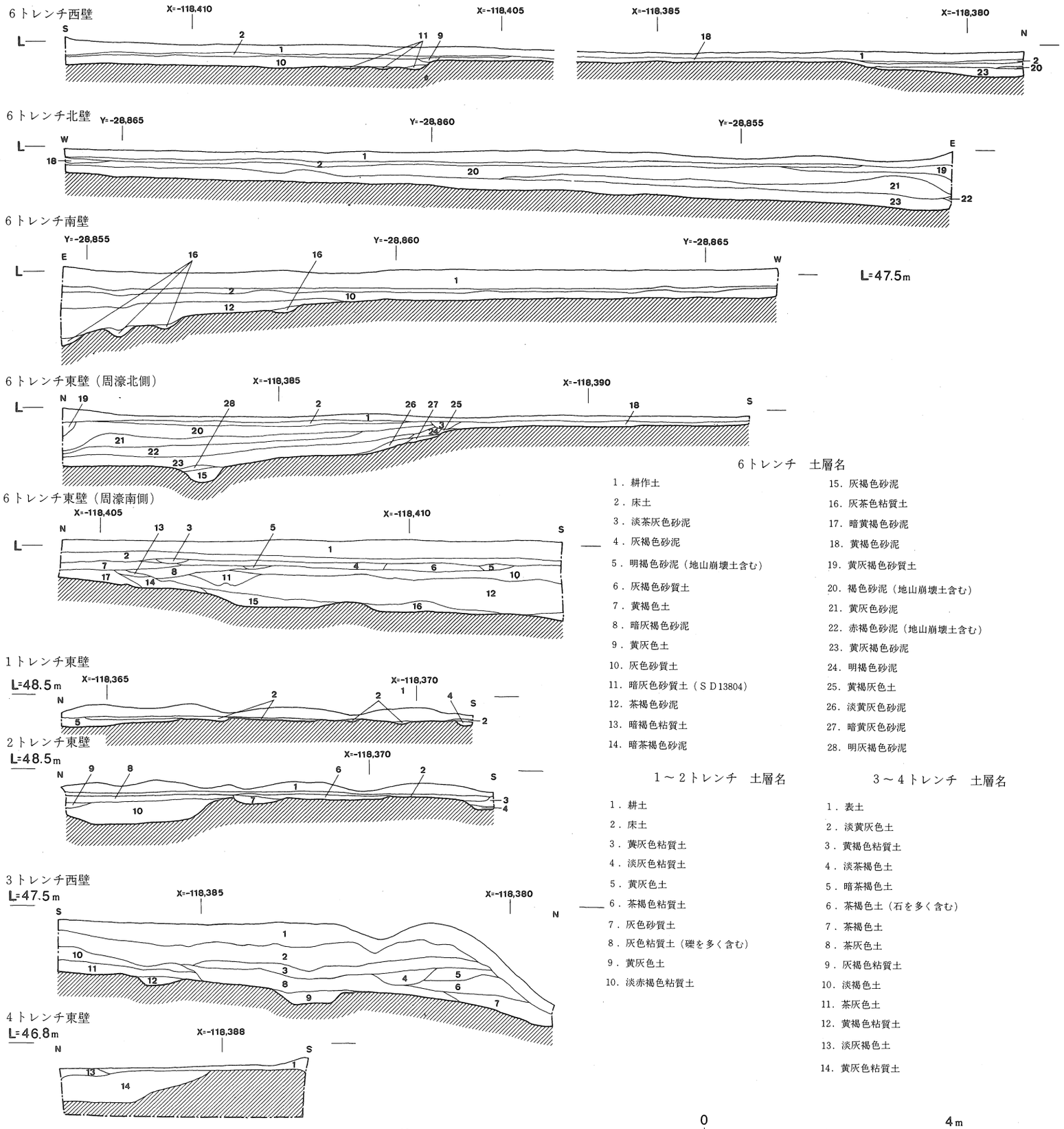
溝状遺構ＳＸ13803（第９図）　３トレンチの地山面で検出され，５号墳の裾からほぼ真北に向ってのびていく。長さ4.8ｍ以上・幅約1.5～2.2ｍで最も深い所で約１ｍをはかる。遺物は土師器と須恵器が少量出土しており，この中には周濠ＳＤ13801から出土した器台の脚部と同様の破片が出土している。埋土は基本的に４層からなり，遺物はおもに第２・３層から出土した。

溝ＳＤ13804（第９図）　６トレンチ南部のなだらかに傾斜する地山面で検出された東西方向の溝である。西から東に向かって徐々に深く，幅も広くなる。東壁部分では幅約1.1ｍ・深さ約0.2ｍをはかる。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は瓦器の細片が出土した。層位的に，周濠ＳＤ13801が埋没した後で掘られたものである。

土壙ＳＫ13805（第９図）　溝ＳＤ13804と同じく６トレンチ南部の地山面で検出された。長辺0.7ｍ・短辺0.5ｍ・深さ0.1ｍをはかり，埋土は地山に類似する黄褐色粘質土である。遺物は瑳が一点だけ出土している。



第13図　　周濠ＳＤ13801実測図



6トレンチ　土層名

1．耕作土
2．床土
3．淡茶灰色砂泥
4．灰褐色砂泥
5．明褐色砂泥（地山崩壊土含む）
6．灰褐色砂質土
7．黄褐色土
8．暗灰褐色砂泥
9．黄灰色土
10．灰色砂質土
11．暗灰色砂質土（ＳＤ13804）
12．茶褐色砂泥
13．暗褐色粘質土
14．暗茶褐色砂泥
15．灰褐色砂泥
16．灰茶色粘質土
17．暗黄褐色砂泥
18．黄褐色砂泥
19．黄灰褐色砂質土
20．褐色砂泥（地山崩壊土含む）
21．黄灰色砂泥
22．赤褐色砂泥（地山崩壊土含む）
23．黄灰褐色砂泥
24．明褐色砂泥
25．黄褐灰色土
26．淡黄灰色砂泥
27．暗黄灰色砂泥
28．明灰褐色砂泥

1～2トレンチ　土層名

1．耕土
2．床土
3．黄灰色粘質土
4．淡灰色粘質土
5．黄灰色土
6．茶褐色粘質土
7．灰色砂質土
8．灰色粘質土（礫を多く含む）
9．黄灰色土
10．淡赤褐色粘質土

3～4トレンチ　土層名

1．表土
2．淡黄灰色土
3．黄褐色粘質土
4．淡茶褐色土
5．暗茶褐色土
6．茶褐色土（石を多く含む）
7．茶褐色土
8．茶灰色土
9．灰褐色粘質土
10．淡褐色土
11．茶灰色土
12．黄褐色粘質土
13．淡灰褐色土
14．黄灰色粘質土

0　4m

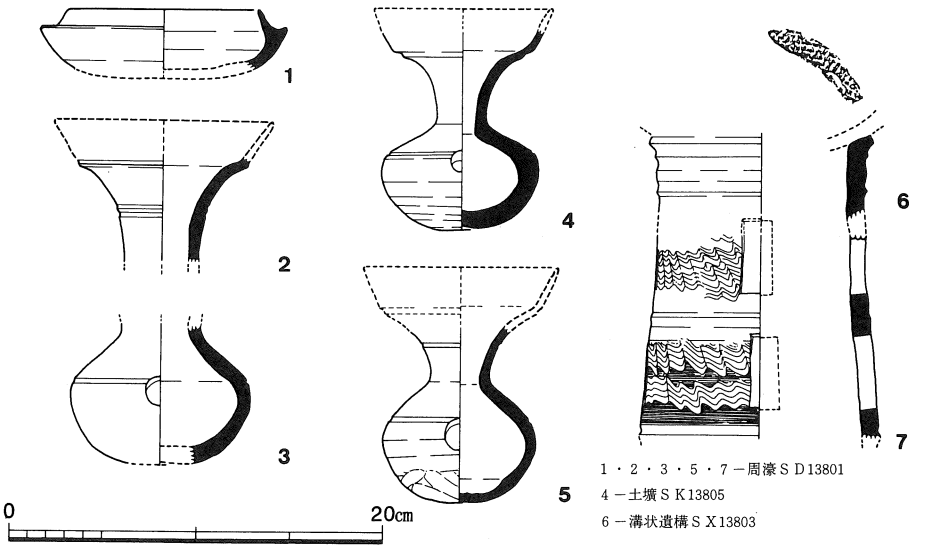
第14図　　調査地土層図

4 出 土 遺 物

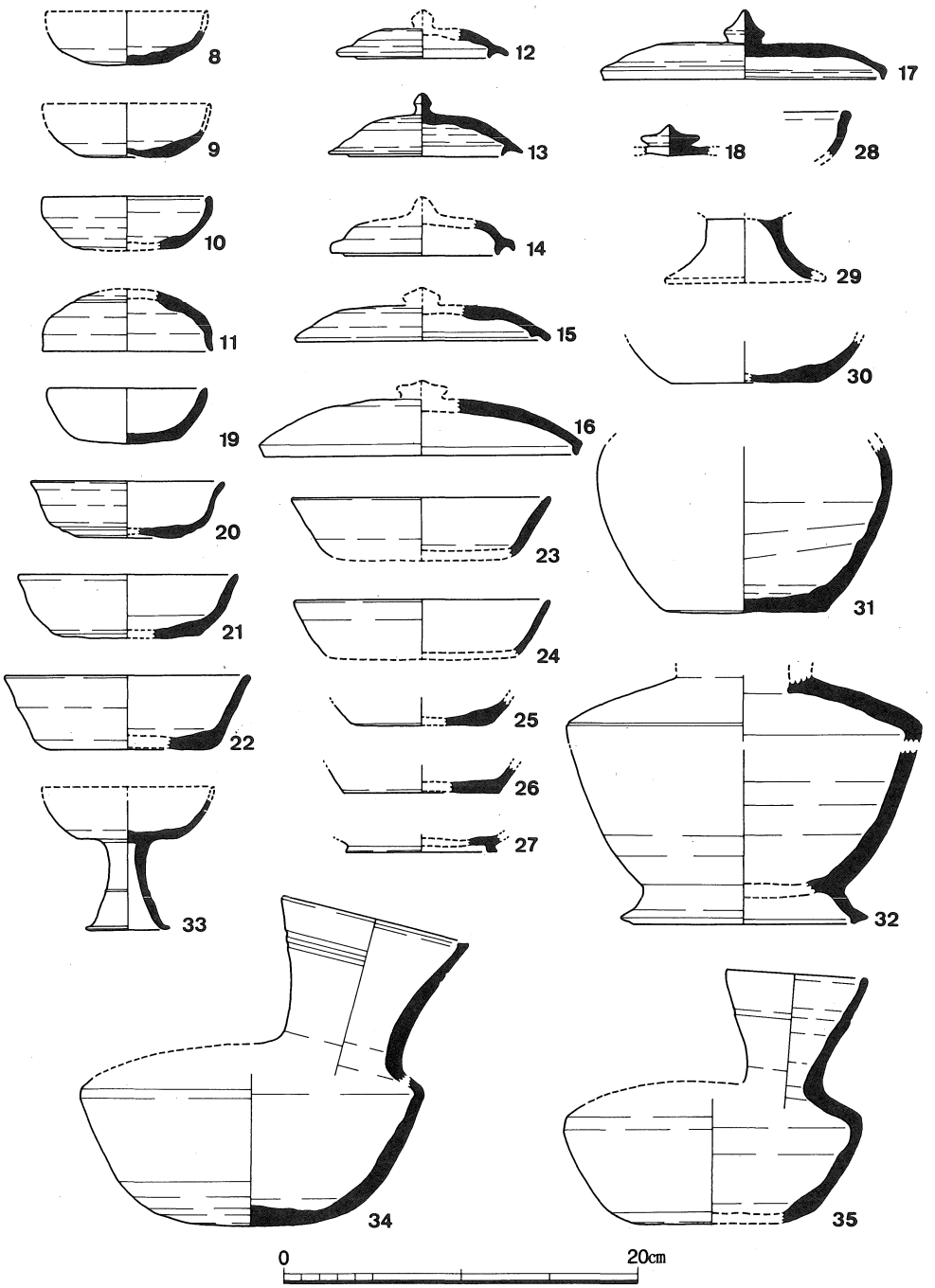
今回の調査で出土した遺物は，土師器・須恵器・瓦器・陶器・染付・花崗岩片などである。これらの遺物の大部分は５号墳の周濠ＳＤ13801から出土したものであり，他の遺構から出土した遺物は極めて少なく，図示できるものも限られている。周濠は中世に開削されたが，７世紀前半代と後半代の遺物を多く出土している。七ツ塚古墳群についてはこれまで墳丘の発掘調査は行なわれていないが，開墾・削平された際に出土した３号墳と７号墳の須恵器が紹介されており，今回は七ツ塚古墳群の築造時期の一端を示すこれらの遺物についても合せて掲載した。なお，器形分類については『平城宮発掘調査報告Ⅶ』[12]に準拠した。

周濠ＳＤ13801等の出土遺物（第15・16・17・18図）　土師器・須恵器・瓦器・花崗岩片が出土した。これらの遺物はおもに陸橋部をはさんで一段深くなった開削溝の両側から集中して出土しており，部分的に灰層が認められる。遺物は土師器と須恵器が大部分をしめるが，前者については全体に摩滅しており接合・実測できるものは極めて少ない。

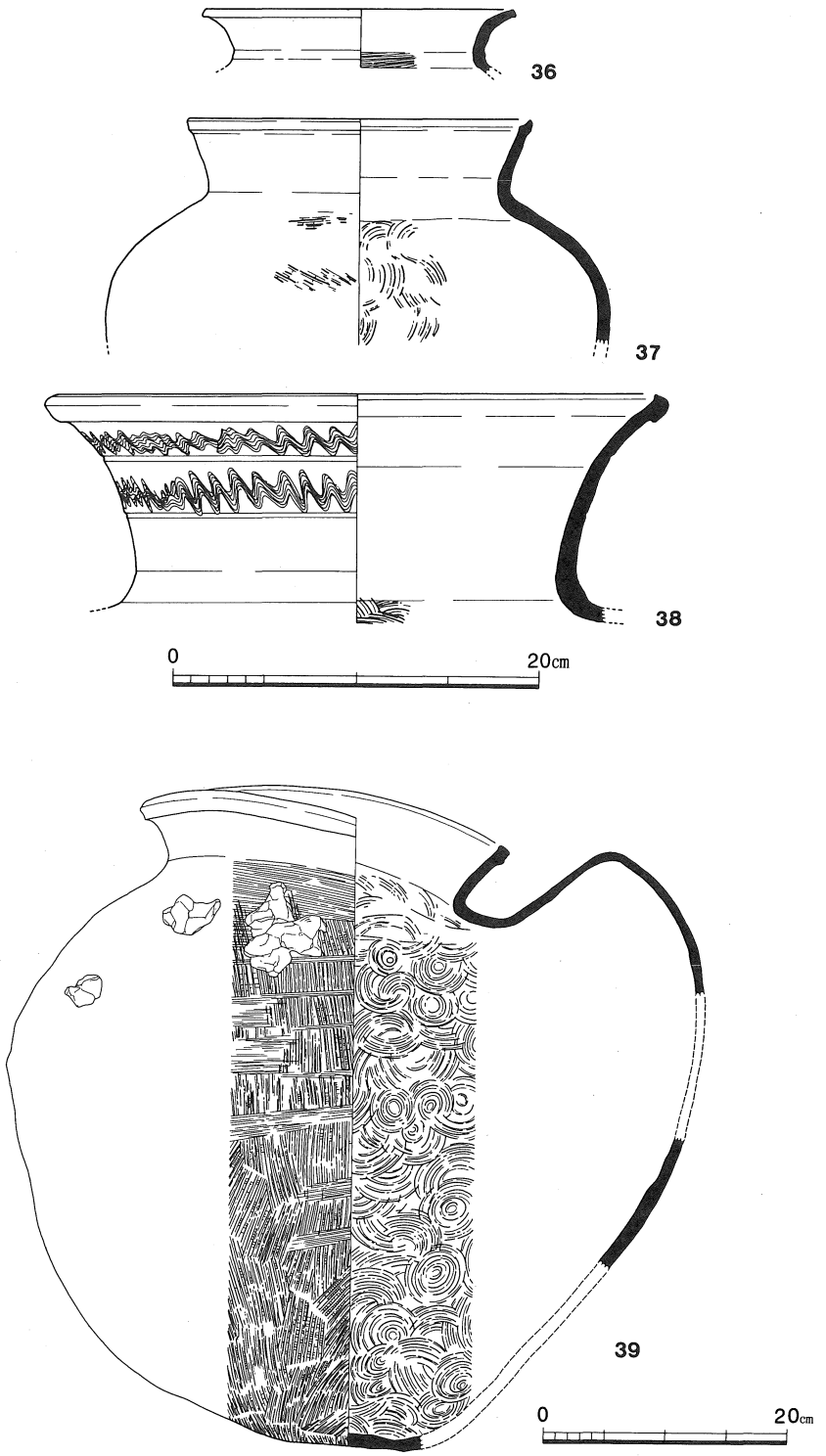
須恵器は，坏Ｈ(坏身)・坏Ａ・坏Ｂ・坏Ｈ蓋・坏Ｇ蓋・坏Ｂ蓋・壺Ｆ・壺Ｋ・甕・平瓶・高坏・瑳・脚部片等が出土した。坏身（１）は６世紀以来の定型化した坏であり１点のみ出土した。底部はわずかしか残っておらずヘラケズリは確認されない。瑳（２・３・５）は，頸部が小さくすぼみ，口縁部もほぼ体部径と同じである。器台脚部（７）は，溝状遺構ＳＸ13803から出土した（６）と同一器形と思われる。坏Ｇ（８～10）と坏Ｇ蓋（12～14）は，互いにセットとして考えられるものである。８～10は底部をヘラ切りする。12～14は内面にかえりを有する。14は口縁部が下方に屈曲しており，内面のかえりもやや肉厚である。蓋（11）は天井部が



第15図　遺構出土遺物実測図（1/4）

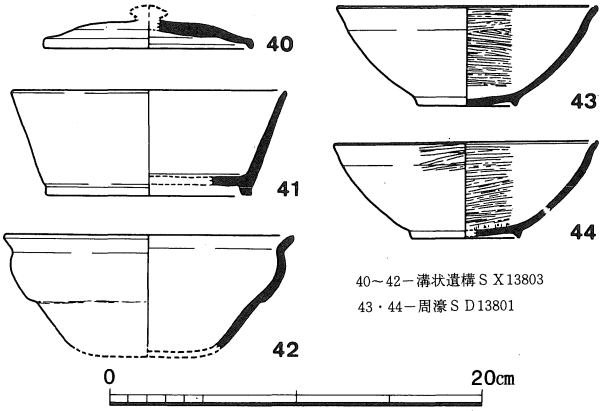


第16図　　周濠ＳＤ13801出土遺物実測図－１(1/4)



第17図　　周濠ＳＤ13801出土遺物実測図－２ 36～38（1/4），39（1/6）

丸味をもち，口縁端部は外反する。短頸壺の蓋になると思われる。坏B蓋（15～18）は，内面にかえりをもつもの（15）と，口縁端部が下垂するもの（16・17）がある。15の内面のかえりは前代に比べて小さくなり退化している。天井部のつまみは，やや扁平な宝珠形つまみをもつもの（18）と，つまみの上半部が尖りぎみに突出するもの（17）がある。坏A（20～26）は25・26の底部を除き，各々体部と口縁部の形態が異なるが，その中でも特に新しい要素として23・24は8世紀以降みられる定形化した坏の形態をもつものである。この中で21～23については，5号墳の墳丘裾部付近と考えられる5トレンチ北端から出土している。また，23・24は坏Aとしたが坏Bの可能性も否定できないであろう。坏B（27）は高台のみの小片である。皿（28）は小片であり口径・器高は不明である。壺F（30・31）は，底部をヘラ切りした平底の壺で球形の体部をもつと考えられる。壺K（32）は，外方へふんばる高台を有する壺であるが，肩部が直線的にのび体部との境は鋭角的である。高坏（33）は，平底を呈する坏部と中位に段を有する脚部とからなる。甕（37～39）は，口径から小型のもの（37）と，大型のもの（38・39）に分けられる。39は1ヵ所からまとまって出土している。



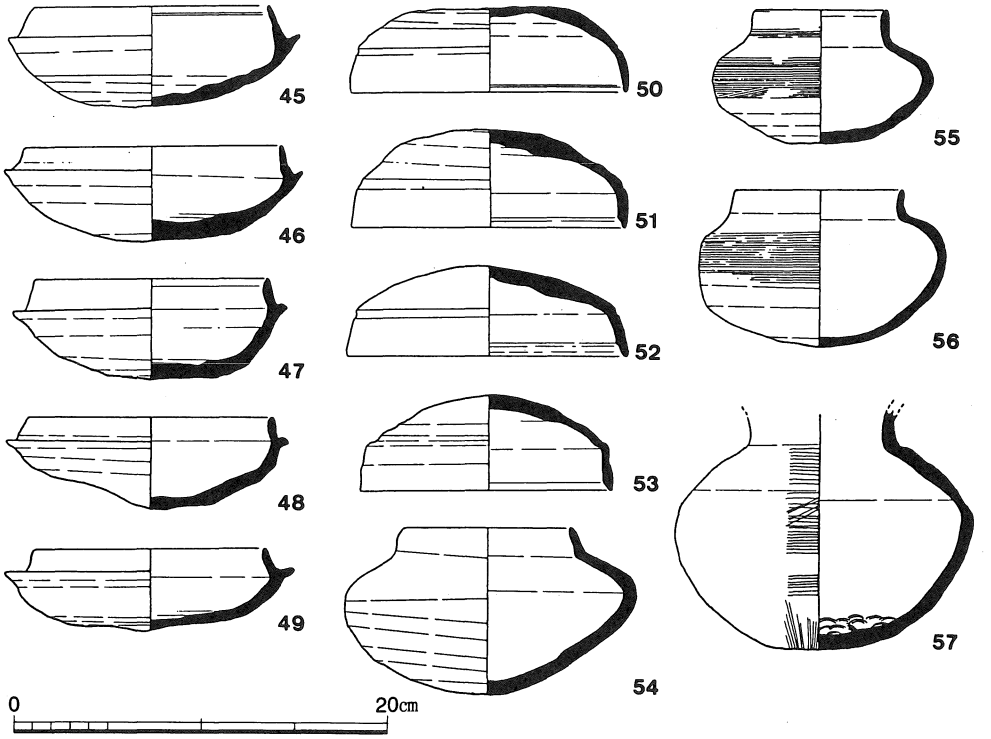
第18図　遺構出土遺物実測図（1/4）

土師器は，坏C・脚部片・甕などが出土した。坏C（19）は，摩滅が激しく調整は不明である。脚部片（29）は，上部に坏がのると考えられ，接合面で剝離したものである。甕（36）は，長胴を呈する甕と考えられる。また，扁平で先端が上方へ屈曲する甕の把手が出土している。

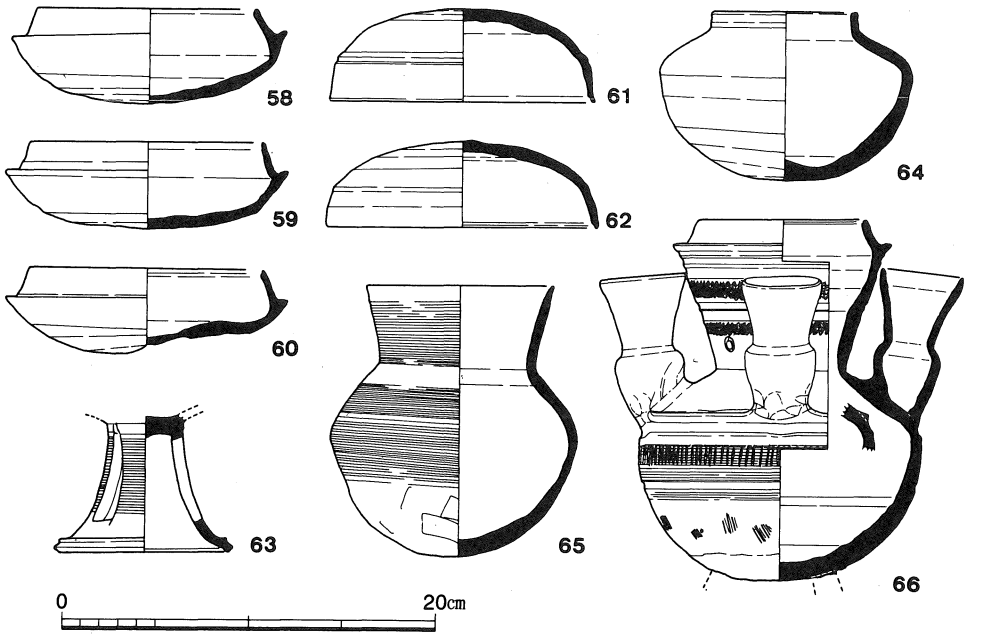
周濠が開削された時期については，周濠の中央を縦断する溝の底から瓦器椀2個体が出土しており，その特徴から13世紀前半に比定される。花崗岩片（67）はほぼ12cm四方・厚さ3～4cmの破片で上下と端面に加工痕をとどめる。色調は，淡褐色を呈し平らな面の一方に火を受けたと思われる痕跡が残る。

溝状遺構ＳＸ13803出土遺物（第18図）　土師器・須恵器が少量出土した。須恵器は，坏B蓋（40）と，坏B（41）がある。40は焼成が甘く，胎土は非常に脆弱である。41は坏Bの蓋である。土師器は，人面土器タイプの壺B（42）が出土した。小片であるが，体部中位に成形時の段を有する独特の形態である。人面や墨線は認められない。

土壙ＳＫ13805出土遺物（第15図）　須恵器が1点出土した。瑙（4）は，その特徴より周濠ＳＤ13801から出土した小型の瑙と同時期と考えられる。当遺構の周辺には，これ以外に遺物を含まない大小の掘込みが所々にみられる。この瑙は遺構に伴うものではなく混入したもの



第19図　３号墳出土遺物実測図（1/4）



第20図　７号墳出土遺物実測図（1/4）

と考えられる。

3号墳出土遺物（第19図）　墳丘の東半分を開墾した際に出土した須恵器である。全部で13個体あり，坏・坏蓋・短頸壺・広口壺がある。[13] これらの須恵器は，坏と坏蓋の特徴からみて概ね陶邑編年[14]のＴＫ10型式に比定される。しかし，坏（49）と坏蓋（53）については，他の個体に比べて口径がやや小さく，49はたちあがりが低く内傾し全体に浅くなっており，53は天井部と口縁部の境目に凹線がみられず型式的にやや新しいものである。同じく短頸壺（54～56）についても，54は肩部が張り底部はヘラ削り調整のみである点から，55・56より新しい要素として識別される。[15]

7号墳出土遺物（第20図）　昭和７年に，村道工事に伴って削平された際に出土した須恵器である。全部で９個体あり，坏・坏蓋・高坏・短頸壺・広口壺・台付子持装飾壺がある。[16] これらの遺物は，坏（58～60）・坏蓋（61・62）の特徴から陶邑編年のＴＫ10型式に比定される。台付子持装飾壺（66）は，壺の胴部に小壺を４個つけたもので，胴部中ほどに突帯を貼りつける。底部に脚部の接合痕をとどめる。このような壺は桂川右岸地域では，長岡京市マト塚[17]（南原古墳群第２号墳）・同走田[18]・向日市物集女車塚[19]などから出土している。

5　まとめ

今回の調査では，５号墳に周濠と陸橋部が付帯することが明らかとなり，なおかつ墳形についても新たな知見を得ることができた。以下，本調査の成果を整理しまとめとしたい。

５号墳の墳形については，これまで径21ｍの円墳とされたが，周濠の輪郭が墳丘側でほぼ直線的にのびることが明らかとなり，墳丘測量図とあわせて再検討した結果，ほぼ一辺20ｍの方墳になると判断される。周濠は，墳丘の北側と南側に設定した３・４・５トレンチでは検出されなかったことから墳丘全体を巡るものではなく，地形の高い西側に限って設定されたと考えられる。また周濠の中央に設けられた陸橋部は，墳丘と墳丘の外を結ぶ墓道としてつくられたものと考えられる。遺物はこの両側から集中して出土した。３号墳については周濠は明らかではないが，墳丘の等高線からみて５号墳と同じく方墳の可能性が指摘される。他は４号墳が円墳である以外，１・２・６・７号墳については不明である。主体部は，３号墳については耕作時の聞き取り調査から木棺直葬と推定されている他はいずれも明らかではない。

周濠とその周辺の遺構から出土した遺物には，坏身（１）と器台（６・７）など６世紀代の，遺物がわずかに含まれている。しかし周濠の遺物は，大部分が７世紀中頃から後半にかけてのものである。この中で須恵器坏Ｇ（８～10）・坏Ｇ蓋（12～14）と甕（37・38）はＴＫ217型式に比定され，脚部片（29）と小型の甕（２～５）についてもこれに伴うものと考えられる。他の遺物については，おおむねＴＫ48型式の範疇に含まれるものと考えられるが，坏Ｂ（23・24）・坏Ｂ蓋（16～18）の壺Ｆ（31）についてはＭＴ21型式に含まれる可能性も否定できないであろう。本調査においては既述のごとく中世に開削されたために層位的に確認されなかった。

５号墳の築造年代については主体部が未調査のため明らかにしえないが，当古墳群が従来より６世紀中頃の築造と考えられていることからすると周濠出土の遺物は隔絶したものとなる。この点について山城盆地において７世紀に築造された旭山古墳群[20]・醍醐古墳群[21]・音戸山第３・４・７・８号墳[22]の規模と比べてみると，いずれも墳形は円（方）墳の径（一辺）が６～15m程度であり前代より縮小化しているのがわかる。これに対して５号墳の墳丘は一辺20mと大きく，むしろ前代のものに近いと考えられる。従って墳丘の規模からみれば七ツ塚古墳群は６世紀代に順次築造されたと考える方が妥当であろう。また周濠から出土した遺物については，ほぼ７世紀を通じて墓として認識されていたことを示唆するものと考えられる。

注 1) 都出比呂志「長法寺南原古墳第３次調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第11冊　1983年

2) 注１文献に同じ。

3) 岡内三真，和田晴吾，宇野隆夫「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」『史林』第64巻第３号　1981年

4) 吉岡博之・木村泰彦他「北平尾古墳発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第１集　1979年

5) 遺跡パトロールにおいて発見された。詳細は『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度　1986年　において報告される予定である。

6) 山口博「昭和57年度発掘調査略報」（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第７号　1983年

7) 植田小太郎「京都府乙訓郡七ツ塚出土の小坩飾付壺」『史想』第９号　1958年

8) 京都府教育委員会「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1968年

9) 長法寺在住，佐藤久夫氏所蔵。

10) 西岡巧次「長法寺七ツ塚古墳出土の須恵器」『京都考古』第９号，1974年。

11) 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会『高槻市文化財調査報告書』第13冊　1980年

12) 奈良国立文化財研究所学報第26冊　1975年

13) 保科幸利氏所蔵

14) 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

15) 本報告に再掲載した中でスケールを¼にし，45，50の実測図を差しかえ，土器観察表に一部加筆した。本報告書の番号との対称は，１→50，２→45，３→51，４→46，５→48，６→49，７→52，８→47，９→53，10→55，11→57，12→56，13→54である。

16) 京都府教育委員会保管

17) 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部　1968年

18) 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿－資料編(1)－」『東京国立博物館紀要』第16号　1981年

19) 新納泉・宮原晋一他「物集女車塚古墳」向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第12集　1984年　小片のため器形は不明である。

付表２　長法寺七ツ塚古墳群出土遺物観察表　　周濠ＳＤ13801（備考に注記のないもの）

器種	器形	法量 口径cm	法量 器高	番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器	瓦		(5.6)	2	○口頸部はラッパ状にひらく。 ○頸部に２条の沈線を有する。	○内外面ヨコナデ。	長石、石英微粒子含む。	やや軟質	淡灰色	頸部のみ残存
		体部径 9.6	(7.4)	3	○体部は丸みをもち、肩部に凹線を有する。	○底部は時計回りのヘラ削りの後ヨコナデ。 ○内外面はヨコナデ。	0.1～5mm大の長石、チャートを含む。	良	淡灰色	⅔
		体部径 8.4	(10.4)	4	○口頸部はラッパ状にひらく。 ○口頸部と体部に凹線を有する。 ○体部に穿孔した粘土塊を残す。	○頸部にしぼり目が残る。 ○底部は逆時計回りのヘラ削り。 ○口縁部から体部ヨコナデ。	長石、チャートを多量に含む。	堅緻	暗灰色	ＳＫ 13805 出土
		体部径 8.2	(9.4)	5	○頸部と体部に凹線を有する。	○頸部から体部はヨコナデ。 ○底部は上半部を右回りのヘラ削り。下半部は不定方向のヘラ削り。	長石、チャート、石英微粒子を多量に含む。	軟質	淡灰色	
	器台			7	○外面にカキ目の後波状文 ○透しは方形で４方向にあける。	○内外面ヨコナデ。	緻密３mm大の砂粒を含む。	堅緻	灰色	ＳＸ 13803と同一器形
	坏身	10.2	(3.6)	1	○たちあがりは低く、内傾する。	○底部は自然釉が付着する。 ○内外面ともヨコナデ。	長石、石英チャートの微粒子を多く含む。	堅緻	暗灰色	¼
	坏G	9.6	(1.8) (1.5) (3.3)	8 9 10	○10の口縁端部は内側に肥厚する。 ○底部は平底状になる。	○内外面ともヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後ナデ。底部内面ナデ。	長石、チャート、石英の微粒子含む。	堅緻 堅緻 堅緻	灰色 灰色 暗灰色	⅓ ⅓ ¼
	坏A	10.9	3.2	20	○体部下半は稜をなし、口縁部は強く外反する。	○底部はヘラ切り。 ○内外面ともヨコナデ。	長石、チャート含む。	堅緻	灰色	⅓
		12.5	3.6	21	○体部は丸味をもち、口縁部は外反する。 ○体部と底部の屈曲部に沈線を有する。	○底部はヘラ切り。 ○内外面ともヨコナデ。		軟質	淡灰色	
		13.8	4.1	22	○体部は外上方に直線的にのび口縁部は外反する。	○底部はヘラ切り。 ○内外面ともヨコナデ。	チャート、長石0.5～3mm大の砂粒を含む。	軟質	淡灰色	⅓
		14.6 14.4	(3.4) (3.1)	23 24	○体部から口縁部は外上方に直線的にのびる。	○内外面ともヨコナデ。	長石４mm大の砂粒を含む。	堅緻 堅緻	淡灰色 淡灰色	⅓ ⅙
		底径 8.0 8.8	(1.2) (1.3)	25 26	○底部は平底で体部は外上方にのびる。	○内面と体部外面ヨコナデ。	２mm以下の石粒含む。 0.5mm以下の石粒含む。	堅緻 軟質	灰色 白灰色	底部⅓ 底部⅓
	坏B	底径 8.5	(0.65)	27	○高台は下方へ垂直にのびるが端部はわずかに外方へふんばる。	○内外面ともヨコナデ。 ○貼り付高台。	0.5mm以下の石粒含む。	堅緻	淡灰色	
	蓋	9.5	3.0	11	○天井部に沈線を有する。 ○口縁端部は外反する。	○内外面ともヨコナデ。 ○天井部はヘラ切り後ナデ。	長石、チャート粒子を多量に含む。	堅緻	灰色	⅓ 短頸壺の蓋か？
	坏G蓋	9.4 11.0	(2.7) 3.5	12 13 14	○天井部中央に乳頭形のつまみがつく。 ○口縁部内面のかえりは端部より下方にのびる。 ○口縁部は、下方に屈曲する(14)。	○天井部はヘラ削り。 ○口縁部から内面ヨコナデ。 ○天井部内面に仕上げナデ(13)。	チャート、長石、石英の微粒子を含む。	堅緻 堅緻 堅緻	淡灰色 青灰色 淡灰色	½外面は自然釉が剥離する。 ½（12・14）。 小片
	蓋B	14.5 17.6 15.8	(3.0) (3.2) 3.9	15 16 17 18	○内面にかえりのつくもの(15)と下垂するもの(16・17)がある。 ○天井部のつまみは扁平なもの(18)と尖り気味のもの(17)がある。	○天井部はヘラ削り。 ○口縁部から内面ヨコナデ。	１mm以下の細石粒含む。 1～2.5mmの石粒含む。 (16・17)	堅緻 堅緻 堅緻 堅緻	明灰色 淡灰色 暗灰色 淡灰色	¼外面は自然釉が剥離する。 天井部に溶着の痕跡あり。 {¼ (16) {完形(17)
	皿A			28	○口縁部はナデにより、わずかに屈曲する。	○内外面ともヨコナデ。	緻密 長石含む。	堅緻	暗灰色	小片
	壺	底径 8.3 9.2	(2.2) (9.4)	30 31	○底部は平底である。 ○体部は丸味をもつ。	○底部はヘラ切り。(31)は逆時計回り。 ○内外面ともヨコナデ。	３mm以下の石粒含む。 ２mm以下の石粒含む。	堅緻 堅緻	暗灰色 淡灰色	外面は自然釉が剥離する。
		底径 12.5	(13.7)	32	○底部は外方へふんばる高台がつく。 ○高台端部は上下に肥厚する。 ○体部は鋭角的に屈曲し、屈曲部に沈線を有する。	○内外面ともヨコナデ。 ○貼り付高台。	長石、チャートを含む。	堅緻	淡灰色	⅓外面は自然釉が剥離する。
	高坏	脚径 4.8	(7.3)	33	○脚部はラッパ状に広がり、脚部中央に段を有する。 ○坏部は大きく上方に屈曲する。	○内外面ともヨコナデ。 ○脚部の成形には芯棒を用いている。	密 0.5mm以下の石粒含む。	堅緻	暗灰色	
	平瓶	10.8	(18.4)	34	○口縁部は外上方に開き、端部は内傾する面をなす。 ○口縁部に二条の沈線を施す。 ○体部はやや扁平な感じである。	○底部をヘラ削り調整し、他はヨコナデ。		堅緻	淡灰色	口頸部は約⅓～⅔残存。 体部⅓残存。 底部完存。
		7.9	14.1	35	○(34)より小型で、口縁部は大きく広がりラッパ状をなす。端部は丸くおさめる。 ○口縁部外面に一条の沈線を施す。 ○頸部には絞った痕跡が残る。	○底部をヘラ削り調整し、他はヨコナデ。	長石、チャートの微粒子を多く含む。	堅緻	青灰色	口頸部ほぼ完形。体部⅓。

器種	器形	法量 口径cm	法量 器高	番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
須恵器	甕	18.6 32.6 30.2	(12.1) 54.3	37 38 39	○体部は丸く、口縁部は直立ぎみに開く。 ○口縁部は ○口縁部は大きく外反し、端部は肥厚する。 ○波状文と沈線を交互に二段に施す。 ○口縁部は短くゆるやかに外上方に開く。端部はやや肥厚させ稜をもつ。 ○体部から底部は丸味を帯びる。 ○口縁部から体部上半が大きくひずんでいる。	○体部外面は叩キ後、ナデ。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部内面は叩キ後、ナデ。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○外面はタテ方向の凝格子叩キの後、頸部から体部中位にかけてカキ目を施す。 ○内面は青海波の叩キ目を施す。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。	４mm以下のチャート、長石含む。 ２mm以下の石粒含む。 １mm前後の石粒含む。	堅緻 堅緻 堅緻	淡灰色 灰色 淡灰色（自然釉部分、濁緑褐色）。	口縁 1/6 口縁 2/3 体部上半部に自然釉付着。体部上半部と底部窯壁と思われる破片が付着。
土師器	坏	9.0	3.1	19	○平担な底部と、外上方へのびる口縁部からなる。端部は丸くおさめる。	○磨滅しており調整不明。	赤色粒、雲母、チャート、長石、石英微粒子を多く含む。	良	橙灰色	歪んでいる完形。
	脚付坏（？）		(3.5)	29	○脚部はラッパ状にひらく。	○磨滅しており調整不明。	２mm以下の石粒、石英粒、チャート含む。	良	淡黄灰色	脚 1/3
		16.8	(.3 5)	36	○強く外反する口縁部を有し、端部は面をもつ。	○頸部内面にハケメを施す。 ○内外面ヨコナデ。	赤色粒、長石、雲母、チャート含む。	良	明褐色	口縁 1/6
瓦器	埦	13.9 14.0	5.3 (5.1)	43 44	○口縁部は外反気味に終り、内面に細い沈線を施す。 ○体部は内湾気味に外上方にのびる。 ○高台は断面三角形。	○内面はヨコナデの後、暗文を施す。(43)は見込みにラセン状と思われる暗文を施す。 ○(44)は、口縁部外面にも暗文を施す。 ○外面は口縁部ヨコナデ、体部に指圧痕が残る。	１mm以下の石粒を含む。 １mm以下の長石含む。	良 良	灰黒色 灰黒色（一部褐色）	 1/2 残

溝状遺構ＳＸ13803

須恵器	坏B	14.6	5.6	41	○体部・口縁部は外上方にのび口縁端部は丸い。 ○底部端から垂直に下がる高台を付し外側で接地する。	○内外面とも磨滅して不明瞭。	１mm以下の小石・砂粒	軟質	灰白色	1/3残
	蓋	11.2	(1.5)	40	○口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。 ○天井部は平担で、口縁部との境界はゆるやかである。	○内面ヨコナデ。	１mm前後の石粒、長石、チャート含む。	堅緻	淡緑灰色	外面は自然釉が剥離する。
	器台			6	○断面三角形の凸帯を有する。	○上面の接合面は叩き目を有する。	0.1~3mmの長石含む。	軟質	淡灰色	
土師器	壺B	15.4	(6.0)	42	○口縁部は短く外反し、端部は上方につまみあげる。 ○胴部は、丸味をもち、底部との境に段をもつ。	○内面と口縁部外面ヨコナデ。 ○胴部外面指オサエ。	１mm以下の石粒を含む。	良	橙褐色	粘土紐痕が明瞭。

３号墳

須恵器	坏身	12.6 13.9 12.8 13.4 12.6	5.5 5.3 3.8 4.8 4.2	45 46 47 48 49	○たちあがりはやや内傾してのびるもの(45)(46)(47)(49)と、短くやや水平にのびるもの(48)がある。 ○受部は外上方にのびるもの(45)(46)(49)と、水平にのびるもの(47)(48)がある。 ○底部は丸味をもつもの (45)(46) (47) (48) と平らに近いもの (49) がある。	○底部はヘラケズリで、他はヨコナデ。	砂混、大粒砂混	軟質 良 良 良 軟質	灰色 暗灰色 暗灰色 暗灰色 暗灰色	(50)とセットで焼かれたらしく内面が淡灰色。(45)(49)は他より口径が小さい。
	坏蓋	14.6 14.7 15.0 13.4	4.9 5.3 3.8 5.0	50 51 52 53	○天井部と口縁部との間に凹細をめぐらし、内湾しながら下方にのびるもの(50~52)と、稜の痕跡を残しながら垂直に下方にのびるもの(53)がある。 ○天井部は上面平らのもの(50)と丸味を帯びるものがある。	○底部はヘラケズリで、他はヨコナデ。	砂粒多い。	軟質 良 良 良	灰色 灰色 黒灰色 暗灰色	(45)とセット (53)は他より口径が小さい。
	短頸壺	6.8 7.0 9.0	9.0 7.9 8.0	54 55 56	○口頸部は内傾するもの(54)と垂直に立ち上がるものがある。 ○体部の張りが大きく、底部も丸くおさめる。	○底部は全体に丁寧なヘラケズリを施し、他はナデ。 ○体部にカキ目を施す(55)(56)。	緻密 砂混	良 良 良	灰黒色 暗灰色 暗灰色	
	広口壺			57	○体部は全体に丸く仕上げる。	○体部にカキ目、底部は平行タタキ目が見られ、内面は荒い青海波を施す。	砂混	良	灰色	口頸部欠損。

24 まとめ

7号墳

器種	器形	法量 口径cm	法量 器高	番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
	坏身	11.7 12.6 12.3	5.1 4.6 4.7	58 59 60	○たちあがりは内傾し、口縁端部は丸くおさめる。 ○底部は丸味をもつ。	○底部⅔をヘラケズリ、他は内外面ともヨコナデ。	長石、チャート、石英を含む。	良好 良好 良好	淡灰色 淡灰色 暗灰色	(58)(60)に自然釉付着。 (58)(59)は器形の歪みが大。
	坏蓋	14.1 14.45	4.9 4.6	61 62	○口縁部は下方に下がるもの(61)やや下外方に下がるもの(62)があり、端部は共に内傾する浅い凹面を成す。 ○天井部は丸味をおび、口縁部との境に稜を成す。	○天井部⅔を時計回りにヘラケズリ。 ○天井部内面ナデ、他はヨコナデ。	0.5～8mm大の砂粒、チャート、石英、長石含む。	良好 良好	灰色 淡青灰色	
	高坏	(底径) 9.0	(7.1)	63	○脚部は基部から下外方に下り裾部で凸面状を成す。 ○方形透しが三方向に見られる。	○脚部の透し部分にカキ目を施し、他はヨコナデ。	長石細粒を含む。	良好	濃灰色 灰色	脚、裾部⅔
	短頸壺	7.7	8.9	64	○口縁部は直立し、端部は内傾する。 ○肩は大きく張り、底部は丸い。	○体部～底部外面逆時計回りのヘラケズリ。 ○体部ヘラケズリ後ナデ、他は内外面ともヨコナデ。	長石、チャートの微粒子含む。	良好	青灰色	
	広口壺	9.9	14.4	65	○口縁部は直立気味に開く。 ○肩部は下外方に下り、屈曲し底部に至る。 ○底部は丸い。	○口縁部～体部ヨコナデのちカキ目を施す。カキ目は部分的にナデ消している。 ○底部は粗いケズリ。	長石、チャート、黒色斑粒含む。	良好	黄灰色 濃灰色	口縁一部欠損
	台付(装飾)子持壺	8.8 小壺 4.2	(19.2)	66	○口頸部は上外方にのび、内傾して端部内面に沈線が一条めぐる。端部は丸い。 ○受部の下部に凸線を一条施し上段11本、下段7本の波状文を施す。その下に竹管文（推定7個）を施す。 を四方に配す。その接合部下部に三角の凸帯を張りつける。 ○体部最大径部分にヘラによるきざみ目を施し、その下に一条の沈線を施す。 ○三方透しの脚がつくと思われる。	○体部最大径部外面は、カキ目の後軽いナデ。体部下半外面ヨコナデの後、部分的にハケ目。 ○他は内外面ともヨコナデ。 ○小型の壺接合部外面はナデとオサエ。 ○他は内外面ともヨコナデ。	精良 長石の微粒子を含む。	良好	淡青灰色	外面に火ダスキがみられる。

20) （財）京都市埋蔵文化財研究所『旭山古墳群発掘調査報告』 1981年

21) （財）京都市埋蔵文化財研究所「醍醐古墳群説明会資料」 1985年5月

22) 3・4号墳は，『音戸山古墳群発掘調査概報』，京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所，1983年に所収。7・8号墳については，昭和60年度の国庫補助事業で報告される予定である。

第２章　長岡京跡右京第163次（７ＡＮＭＫＩ地区）調査概要

―右京六条一坊四町・勝龍寺城跡・神足遺跡・神足古墳―

１　は　じ　め　に

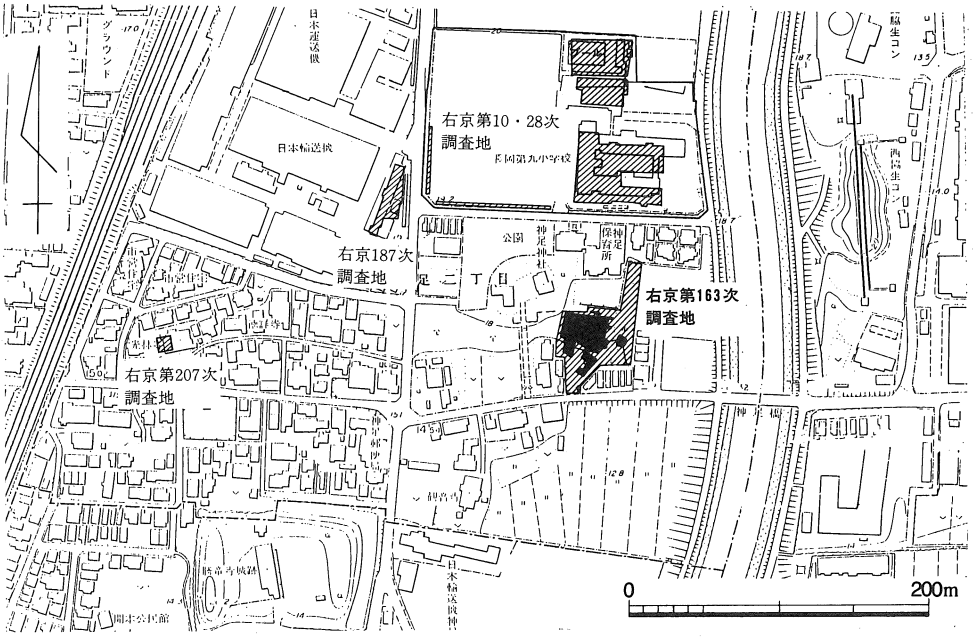
1　本報告は，1984年５月25日から同年８月30日まで，長岡京市東神足二丁目15において実施した発掘調査の出土遺物に関するもので，1985年８月１日から1986年２月28日までに行った遺物整理の成果をまとめたものである。

2　本調査は，宅地開発に伴う事前調査で，調査面積は，803㎡である。

3　遺物整理は，長岡京市教育委員会が主体となり，国庫補助事業として実施した。調査員は㈶長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し，岩崎誠が担当した。

4　本書作成にあたり，遺物の写真撮影・指導には，㈶京都市埋蔵文化財研究所の牛島茂氏ほかの方々，遺物の検討には，同研究所永田信一，梅川光隆両氏及び，平安京調査会小森俊寛氏らの御助言をいただいた。佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二，鈴田由紀夫両氏からは，伊万里焼に関しての御教示を賜った。記して感謝したい。

5　本報告の編集・執筆は，岩崎が行った。本書作成にあたり多くの方々の協力があった。(1)



第21図　　発掘調査地位置図（1/5000）

2　検出遺構の時期区分

当調査で検出した遺構や包含層は，縄文時代晩期，弥生時代中期，古墳時代前期・後期，平安時代初期(＝長岡京期)・前期・後期，鎌倉時代，室町時代前期，安土・桃山時代，江戸時代前期・中期の各時代にわたっている。その内容は，既に報告済みであるので，省略する。(2)

これらの各遺構や包含層から出土した遺物の時期は，当調査地周辺で今日までに実施された調査成果及び文献史料を踏まえて，神足遺跡原始・古代期，長岡京期，平安京期，神足遺跡中世期，勝龍寺城期，神足遺跡近世期に区分できる。この区分はさらに中・小期に細分することができる。すなわち，神足遺跡原始・古代期は，Ⅰ期（縄文時代），Ⅱ期（弥生時代），Ⅲ期（古墳時代），Ⅳ期（飛鳥・奈良時代）に，平安京期は，Ⅰ期（前期），Ⅱ期（中期），Ⅲ期（後期）に，神足遺跡中世期は，Ⅰ期（鎌倉時代），Ⅱ期（鎌倉時代末から室町時代初頭）に，勝龍寺城期は，Ⅰ期（細川頼春・師氏両氏による築城から細川藤孝改修築の14世紀中葉から16世紀中葉），Ⅱ期（藤孝改修築から永井直清改修築前の16世紀後葉から17世紀前葉），Ⅲ期（永井直清居城期間の17世紀前半）に分けた。このうち，弥生時代，古墳時代，室町時代に相当する時期のものは，さらに細分が可能である。また，江戸時代前期に相当する勝龍寺城Ⅲ期以後の遺物もあり，神足遺跡近世Ⅰ期とすることができる。

この時期区分で，検出遺構の変遷を整理したのが，付表―3である。尚，勝龍寺城の変遷を付表―4にまとめた。以下，遺構出土の遺物を中心に概観する。

付表―3　神足遺跡の時期区分

時代	時期		遺構・包含層	神足歴史年譜
縄文	神足原始・古代	Ⅰ	第6トレンチ包含層（暗淡茶灰色土層）	鏃節形石器この時期か？
弥生		ⅡA	溝　SK　16308 土壙　SD　16309 土壙　SK　16310 16311	乙訓地方の拠点的集落 方形周溝墓，土壙墓 竪穴住居
		ⅡB	（第2～4トレンチ包含層(黒色粘質土層)に混入）	
古墳		ⅢA	（第2～4トレンチ包含層(黒色粘質土層)に混入）	集落の中心部が移動
		ⅢB		埴輪円筒棺
		ⅢC	神足古墳 （土塁盛土や溝SD16305埋土に混入）	大集落　竪穴住居 堀立柱建物　近くに古墳構築
飛鳥・奈良		Ⅳ	（第2～4トレンチ包含層(黒灰褐色粘質土)に混入）	
平安	長岡京		第2～4トレンチ黒色粘質土層	右京六条一坊三・四町藤原氏邸宅？
	平安京	Ⅰ	土塁盛土に混入	
		Ⅲ	溝SD16305に混入	
鎌倉	神足中世	Ⅰ	溝SD16305に混入	1216年神足里　墓ピット群
		Ⅱ	土塁SA16301下層ピット群	神足左近次郎信朝(友)活躍　井戸ピット群　土壙
室町	勝龍寺城	Ⅰ	第6トレンチピット群 柵例SA 16306	細川頼春・師氏築城（1339年）
安土・桃山		Ⅱ	溝　SD16305C埋土 空堀SD16302下層	細川藤孝改修工事，居城（1571年） 明智光秀敗戦（1582年）
江戸		Ⅲ	溝　SD16305B埋土 空堀SD16302下層	永井直清改修工事，居城（1633年） 直清，高槻へ（1649年）
	神足近世	Ⅰ	溝　SD16305A埋土 空堀SD16302・16304上層	

3 出 土 遺 物

付表―4　勝龍寺城の歴史的画期

（神足里）		建保四年	1216年	「主殿寮要劇田坪付注進状」
勝龍寺城	Ⅰ	暦応二年	1339年	細川頼春，師氏築城
		文明元年	1469年	畠山義就居城
		二年	1471年	野田泰忠搦手北口攻める
		永禄三年	1560年	石成友通城主を勝家が攻め落とす
		五年	1562年	細川家の居城となる
	Ⅱ	元亀二年	1571年	細川藤孝改修工事
		天正元年	1573年	神足城落城
		六年	1578年	細川忠興へ玉嫁ぐ
		十年	1582年	明智光秀山崎合戦で敗戦
		十四年	1586年	細川幽斎が秀吉から西岡を得る
	Ⅲ	寛永十年	1633年	永井直清二万石城主改修 直清の家老横田主水以下家臣光林寺へ帰依
		慶安二年	1649年	永井直清三万六千石で高槻へ
	Ⅳ			勝龍寺城廃城

当調査で出土した遺物は，土師器，陶・磁器，石器及び石製品，木製品，金属器がある。その時期も，縄文時代から江戸時代にわたり，多種多様である。時期別に量を見ると，近世の遺物が最も多く，遺構別では，溝ＳＤ16305出土の遺物がほとんどである。また，その溝が，勝龍寺城に関連深く，堀と推定されることや，墨書土器を伴出したことから，本報告のメインとする。この他，主なもののみ概観し，他の遺物は，資料紹介にとどめ，機を改めて検討したい。

溝ＳＤ16305出土遺物　当溝は，Ａ・Ｂ・Ｃの３期があり，各期ごとに，遺物の特徴が見られる。近世の遺物に限って見ると，土師器，陶磁器，瓦器の他，少量の鉄製品や石製品がある。付表―７は，瓦器及び鉄製品や石製品を除いた出土破片数と，その割合を算出したものである。この表では，陶磁器の全ての破片の数を数えたが，土師器に関しては，小片を入れると膨大な量となり，陶磁器のしめる割合が読みとりにくくなることから，あえて，¼以上残存するものに限って算出した。土師器の総破片数と対比すると，90％以上が土師器となることは明らかである。

この表では，溝ＳＤ16305のＣ期と，それ以後の時期（Ａ・Ｂ期）との間に，少しではあるが，土師器の減少，国産陶磁器の増加，輸入磁器の減少が見られる。また，輸入磁器の各個を見ると，他の国産陶磁器や土師器の年代より古い型式のものが多分に含まれている。これは，当出土遺構が溝である性格上，はたして伝世品なのか，混入品なのか明らかにし得ない。また，各層の堆積が複雑な部分もあり，一部に取り上げ上の問題もあるが，本論ではその資料をできるだけ除外している。しかし，現地での取り上げ事実を曲げずに図化している。

まず土師器について見ると，皿類が最も多く，各期を通して90％以上をしめる。形態は，Ａ～Ｄ，Ｈ～Ｐの13種がある。このうち，Ａ形態の一部とＢ，Ｃ形態のものは，長岡京期の土師器坏，皿類であり（第35図585～591他），除外する。Ａ形態の皿はわずかに内湾しながら外開きに広がる口縁をもち，口縁端部を丸くおさめるもの（ａ）と，肉厚の底部から尖り気味に薄くした口縁をもつもの（ｂ），全体に肉厚で口縁端部の外面を丸くしたもの（ｃ），口縁部のナデが強く，外反気味のもの（ｄ），口縁部のナデが丁寧で，底部との境が明瞭なもの（ｅ）などがある。皿Ａｄは，Ａ形態の中では特異であり，大分類を別に設定すべきものであるが，今回は，整理の都合上，儘とした。皿Ｄは，扁平な形態で，口縁の大きな巻き込みに特徴がある。

皿Ｈの形態は，平底に，屈曲して外開きに伸びる口縁をもつものである。皿Ｉ形態は，平均的な器壁の厚さで作られているものが多く，平底あるいは，やや上げ底となった底部から，ゆるやかに内湾しながら外に開く口縁をもち，端部は丸くおさめているものである。内面に刷毛目整形痕を残すものが多い。皿Ｊ形態は，皿Ｈ形態の中間的形態であるが，全体に整った形に作られているものが多い。皿Ｋは，深みのある皿で，丸味のある形態をしており，半球形に近いものもある。小型品には，器壁の薄いものも多いが，大型品は概して厚手である。皿Ｌは，皿Ｋと同様に深いものであるが，口縁部は強くなでるため，外反している。皿Ｍは，平底から直立又はやや外傾する口縁部が，直線的につくられているもので，小型品のみである。皿Ｎは，平均した厚さで作られた製品で，底部からなめらかに内湾しながら立ち上がる口縁をもち，比較的整った形をしている。皿Ｏは，薄い器壁で均一に作られており，他の皿類と胎土も異なる。砂や小石の少ない良質の粘土で作られている。皿Ｐは，いわゆるヘソ皿である。ここで出土しなかった皿Ｅ～Ｇは，平安時代（Ｅ・Ｆ），鎌倉末期～室町時代（Ｇ）のある種の皿に設定しているもので，ここでは使用しなかった。また，皿Ｏ，皿Ｐは，出土量が少ないうえに数片であり，他の土師器皿よりもかなり先行する時期のものである。

さて，ここで試みた形態分類により，溝ＳＤ16305及び他の関連遺構（空堀ＳＤ16302･4土塁ＳＡ16301･3）から出土した土師器皿の法量分布を見ると，形態ごとに法量の分布を異にしていることが明らかである（第44図）。量的に多い形態の土師器皿について今少し細かく見ると，¼以上の残存率の個体総数中，35.2％をしめる皿Ａａは溝ＳＤ16305のＡ期からＣ期にかけて30％以上もあり，Ｂ・Ｃ期に少しばかりの増加が見られる。全期間を通して，法量にさほどの変化は見られない。大きさには，大中小の３種がみられるが，各期を通して，大型と中型の法量に境がない。皿Ｋは，13.2％をしめ，そのうち，Ｂ期が最も多く，Ａ期から急増し，Ｃ期には再度下降する傾向にある。法量は各期を通して変化はなく，大きさから，大・中・小に分かれる。そのうち，小型のものが最も多く出土した。皿Ｎは13.2％あり，Ｃ期からＡ期にかけて直線的な伸び率を示す。また法量の大小から，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの４つに明確に分かれており，整った形であることがうかがえる。皿Ｈは，11.6％をしめ，そのほとんどがＣ期の堆積土中から出土したものである。Ｂ期にも少量見られるが，Ａ期からは１点のみである。各形態に表わされた時期別の量の差は，第43図を一見して明らかであり，各形態の時期差による変化は第45図に表われている。

当溝から出土した陶磁器類には，唐津，瀬戸，伊万里，信楽，備前，丹波，京焼等の碗・皿・壺・鉢等がある。このうち食器類は，唐津，瀬戸，伊万里がほとんどで，調理用器や貯蔵用器は信楽，備前，丹波が大多数をしめる。食器類について時期別に見ると，当溝のＣ期では，瀬戸焼系が唐津焼系よりわずかに多く，37.7％対31.2％であり，この両者が陶磁器全破片数の約70％をしめる。伊万里染付や京焼が少量あるが，混入品と考えている。Ｂ期は，瀬戸焼系が

やや減少し，唐津焼がこれを凌ぐようになる。また，伊万里焼系の染付や青磁，白磁や京焼系陶器が出現する。このため，瀬戸焼系と唐津焼系が陶磁器全破片数中63.8％となり，割合が少し低下する。A期は，瀬戸焼系が26.7％と，３割を下まわる。しかし唐津焼系は，C期からさほどの変化もなく，３割強（31.7％）を保っている。また，瀬戸系に従来の黄瀬戸や黒瀬戸等に加えて，志野・織部が出現する。

当溝の出土遺物中には，特筆すべきものも少なくない。例えば，最下層から出土したものには，第24図263と264の２枚の皿と同一層から出土した「[illegible]奉轉讀□□×…（大般若経）」と読める轉讀札（第25図・図版15―(1)327）がある。また，C期埋土から出土した土師器皿と瀬戸焼系の皿の底部外面に墨書のあるものが出土しており，土師器皿には「幢侍」図版15―(2)（241），「者」（243），「□京」（242）と判読できるものがある。墨書された土師器皿は，皿Hの形態の大皿に限られている。これらの注目すべき遺物を含む溝ＳＤ16305Ｃは，細川藤孝の修理増改築の工事（1571年）に伴って設けられた堀と考えられることから，16世紀後葉の遺物群と思われ，土師器の形態，特徴，伴出陶器の内容等とも矛盾しない。このことから墨書は細川藤孝の家臣に関連するものと思われる。また，16世紀末には，勝龍寺城は山崎合戦（1582年）に際し，明智光秀軍の拠点とされており，光秀の家臣に関連するものでないとは断定できない。しかし，光秀軍の本拠地となっていたのはごく短期間であったと思われ，その可能性は薄いと考えている。これを藤孝の家臣に関連するものとすれば，当調査地が「山城国西岡御領知之地図」[(3)]から，神足屋敷とされていることと結びつく。「幢侍」は，職名・身分を表わしたものと思われるが，他の墨書とともに，内容が判然としない点惜しまれる。

この他，Ａ～Ｃの各期から瓦器の鉢・羽釜・鍋類や，丹波，信楽，備前の擂鉢や壺，土師器の鍋などが出土した。

土塁ＳＡ16301，ＳＡ16303，空堀ＳＤ16302出土遺物　土塁や空堀から出土した遺物は，溝ＳＤ16305Ａ～Ｃ期の埋土出土遺物の範囲を出るものはない。空堀の上下２層からなる埋土の下層には土師器皿Ｈが多く，上層では少ない傾向にあり，土師器皿の法量分布や，特徴も，溝ＳＤ16305Ａ～Ｃ期と類似する。陶磁器類では，下層からの良好な資料はなく，上層から伊万里，唐津，瀬戸等が出土している。さらに，土塁や空堀の表土からは，溝ＳＤ16305には見られなかった陶磁器類の仏飯器や灯明皿や柿釉を施した円窓付鉢など，神仏関係の器種と思われるものがある。これらは，調査地の北西に隣接する神足神社に関連する遺物と思われる。また，特記すべき遺物に，空堀ＳＤ16302埋土から鉄製の槍先が出土した（第42図728・図版28―(1)）

溝ＳＤ16305や，土塁・空堀から出土した遺物には，上記した近世の遺物の他，中世の瓦器や土師器・輸入磁器，平安時代の須恵器や土師器，緑釉・灰釉陶器等も出土している。第25図298は，第６トレンチのピット群より出土した皿Ｐで，皿Ｈを伴って出土し，14世紀後半から15世紀前半頃と思われる。これと合わせて溝ＳＤ16305で出土した皿Ｇ（第25図280）は，勝

龍寺城築城と相前後する時期のものであり，遺構や遺物の出土量が少ないとはいえ，興味深い。

神足古墳出土遺物　神足古墳からは，須恵器の蓋坏・高坏・壺類と土師器の高坏が出土している。土師器高坏を除いて主体部の小口から出土したもので，黄色粘土でおおわれていた。坏身・坏蓋とも，天井部や底部がヘラ起こしの痕を広い範囲に残し，ヘラ削りは必要最小限におさえられている。蓋は，口縁部内面に沈線をもつものと，丸くおさめるものがある。身の口縁部は，立ち上がりが短く，外反しながら内側に伸びる。高坏は，口縁に沈線をもつ坏蓋と同様のものを倒立させて坏部とし，これに短い脚部を付けたもの（第37図639）と，長脚の２段３方透しを有し，坏部中央に櫛描波状文を施したもの（第37図640）がある。壺類は，瓶と直口壺がある。瓶は，小さな球形の体部に漏斗状に開く大きな口頸部を有するものである（644）。直口壺は，最大径が体部上半にあり，体部からゆるやかに屈曲して直立する口縁部を有するもので，体部上半から口縁部下半にかけて，カキ目がみられる（645）。短脚の高坏（639）と直口壺（645）は焼が甘く，灰白色のものである。土師器の高坏（651）は，主体部の南西側辺で出土したもので，同時期の副葬と思われる。また，当古墳の上面から直刀一口が工事中に採集されている。出土位置等詳細は明らかでないが，当古墳に伴う副葬品であろう。

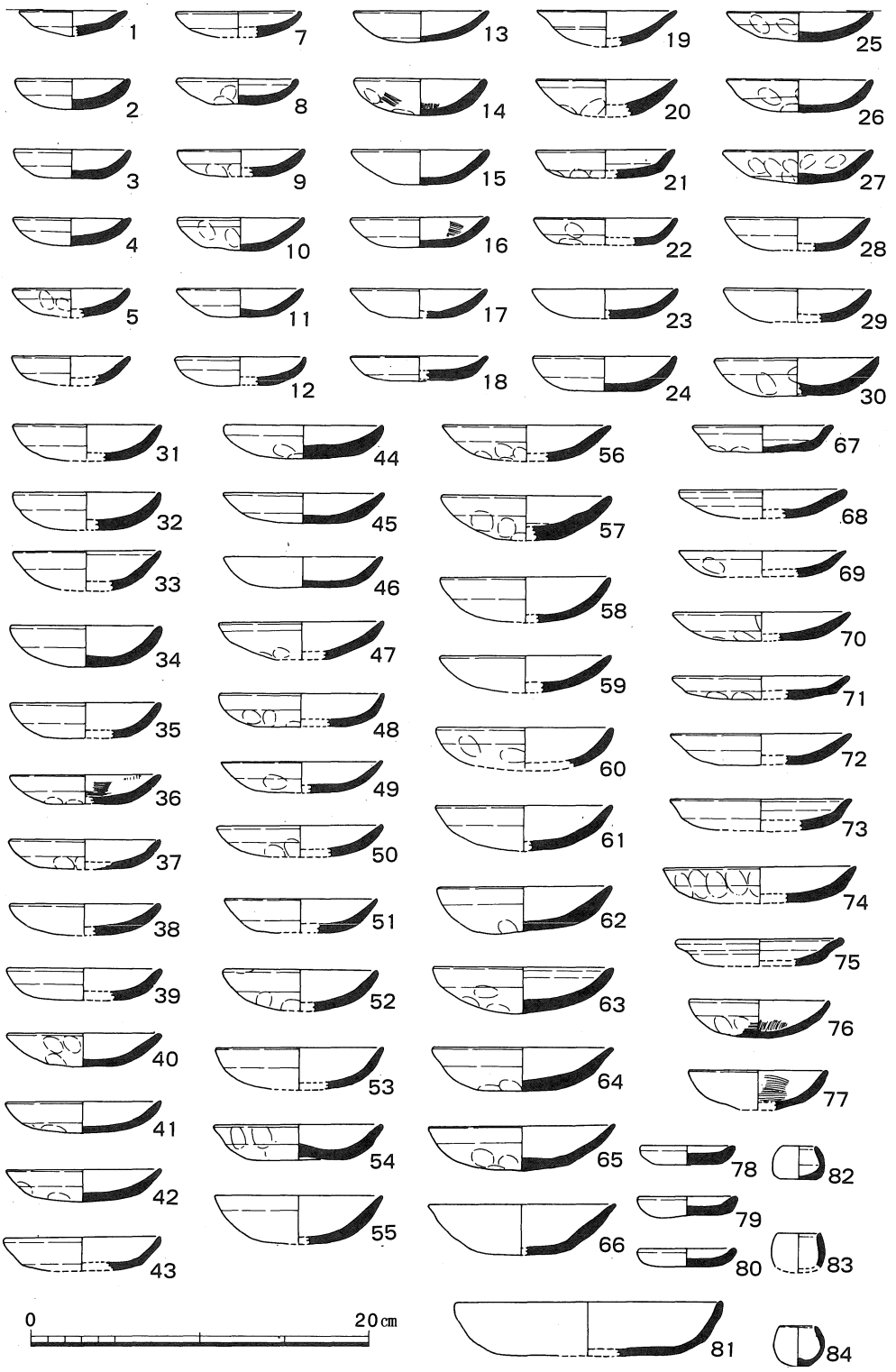
古墳時代の遺物は，この他，土塁や空堀から須恵器の器台や高坏・壺・甕等の破片等が出土している他，小片が近世遺構の埋土内から出土している。また，溝ＳＤ16305の遺構面となっていた平安時代の包含層から，庄内式土器と思われる破片が数点出土している（第39図680他）。

土塁ＳＡ16301下層遺構出土遺物　土塁の下層からは，弥生時代の溝や土壙が検出され，中でも溝ＳＤ16309と土壙ＳＫ16308は，良好な弥生土器が出土した。溝ＳＤ16309からは，中期前半の壺が２個分出土している。両個体とも，体部上半に櫛描波状文を数条描き，　は体部上端に一条の直線文を配している。いずれも口縁部内面に刷毛目を残している。この形態の壺は，乙訓地方では最も変遷のよくわかる形態であり，畿内第Ⅱ様式の新しい段階と考えられる。

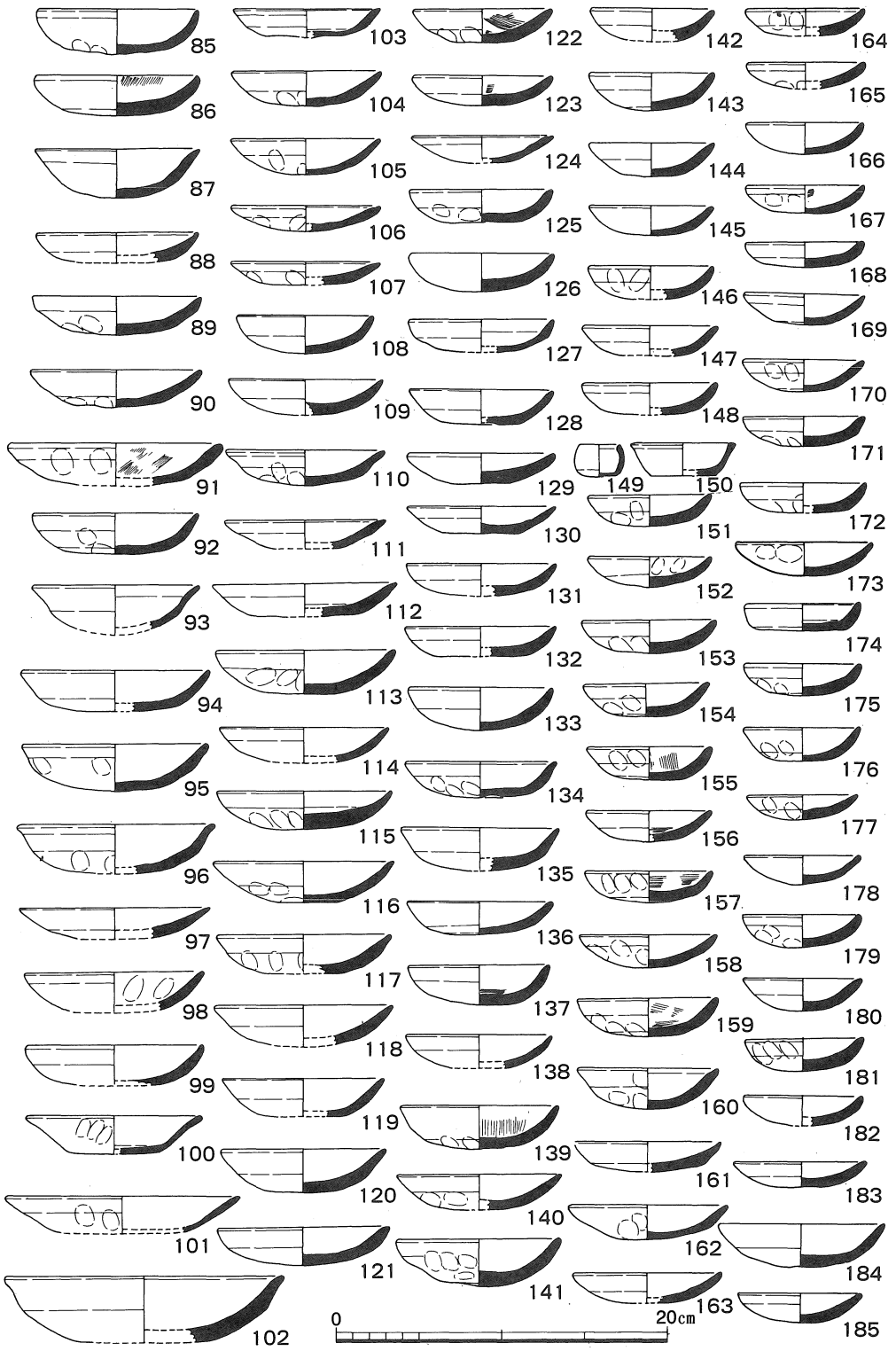
土壙ＳＫ16308出土土器には，中期前半の甕がある（第39図668）。この甕に伴って，中型の磨製石剣（第40図685）の完形品が出土した。

弥生時代の遺物は他に，土塁盛土や溝ＳＤ16305の埋土から，中期から後期の遺物も出土しており，神足古墳封土からは，石包丁の破片等も出土している（第40図上段）。

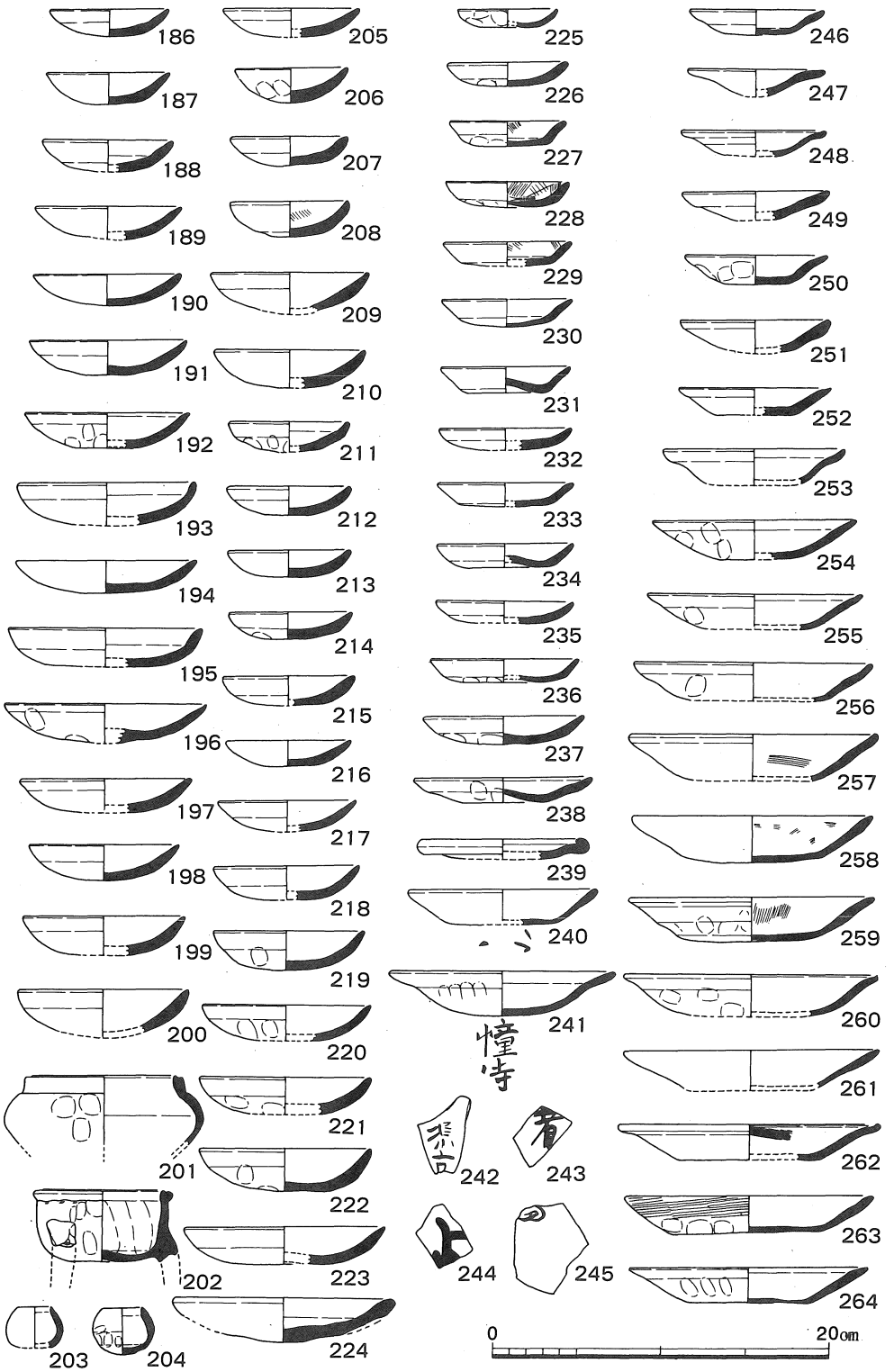
第６トレンチ包含層出土遺物　第６トレンチの南半分で検出された茶色土層系の包含層からは，縄文時代後期の土器片が少量出土した（第39図683･684）。しかし，遺構や伴出遺物はなく，また，細片のため，時期を決定するには及ばなかった。



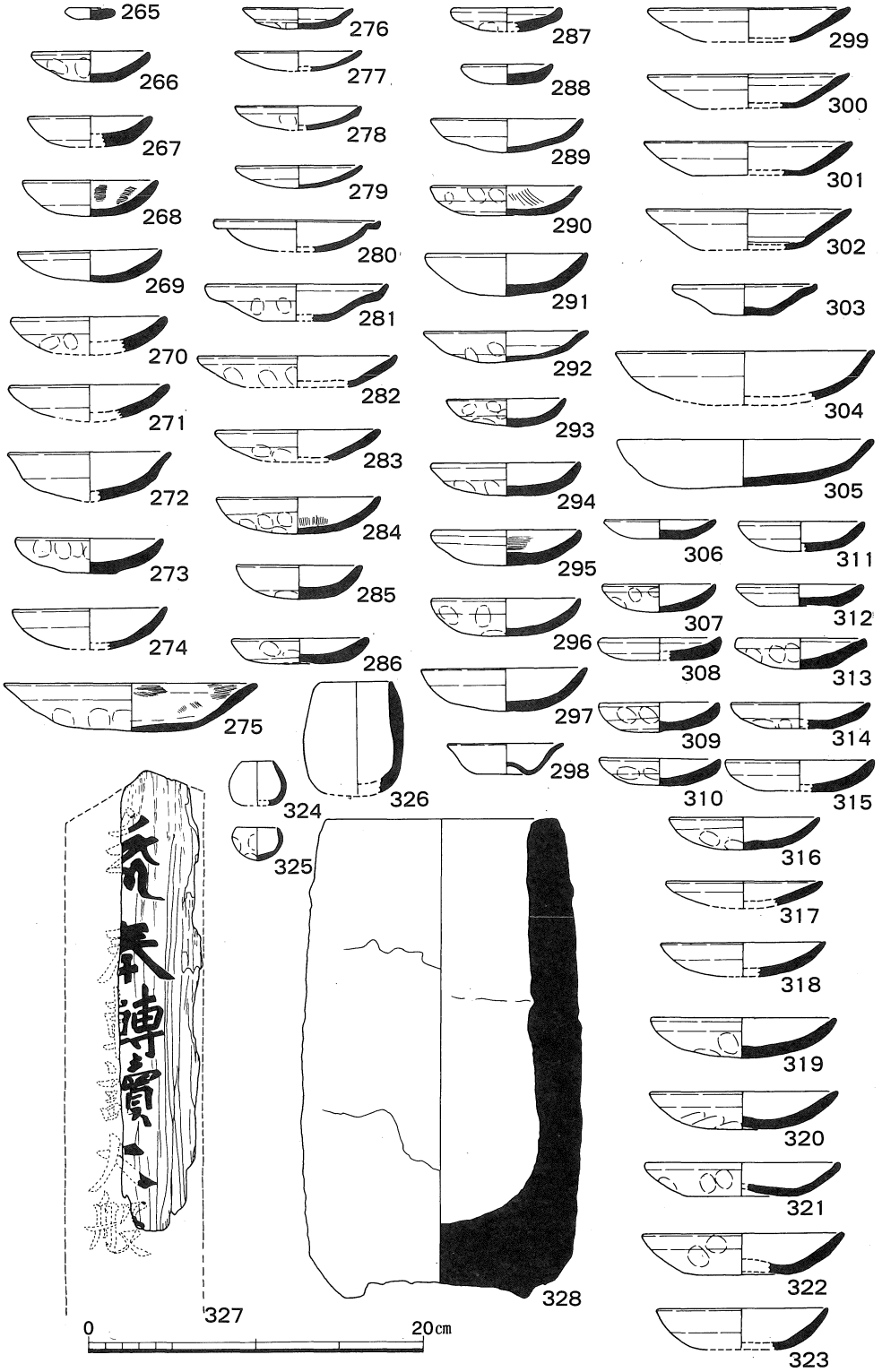
第22図　　溝ＳＤ16305Ａ出土土師器実測図（1/4）



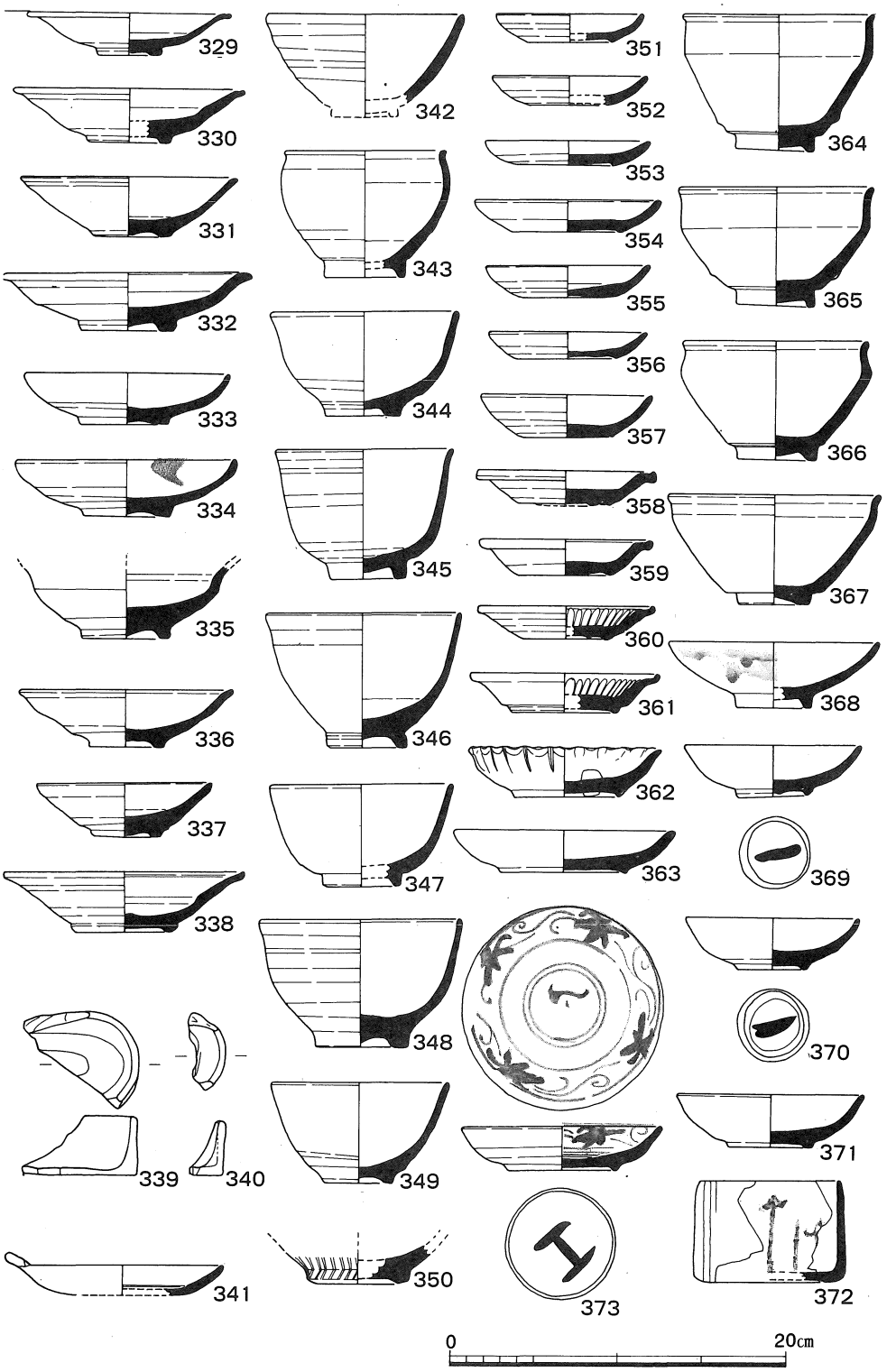
第23図　　溝ＳＤ16305Ｂ出土土師器実測図



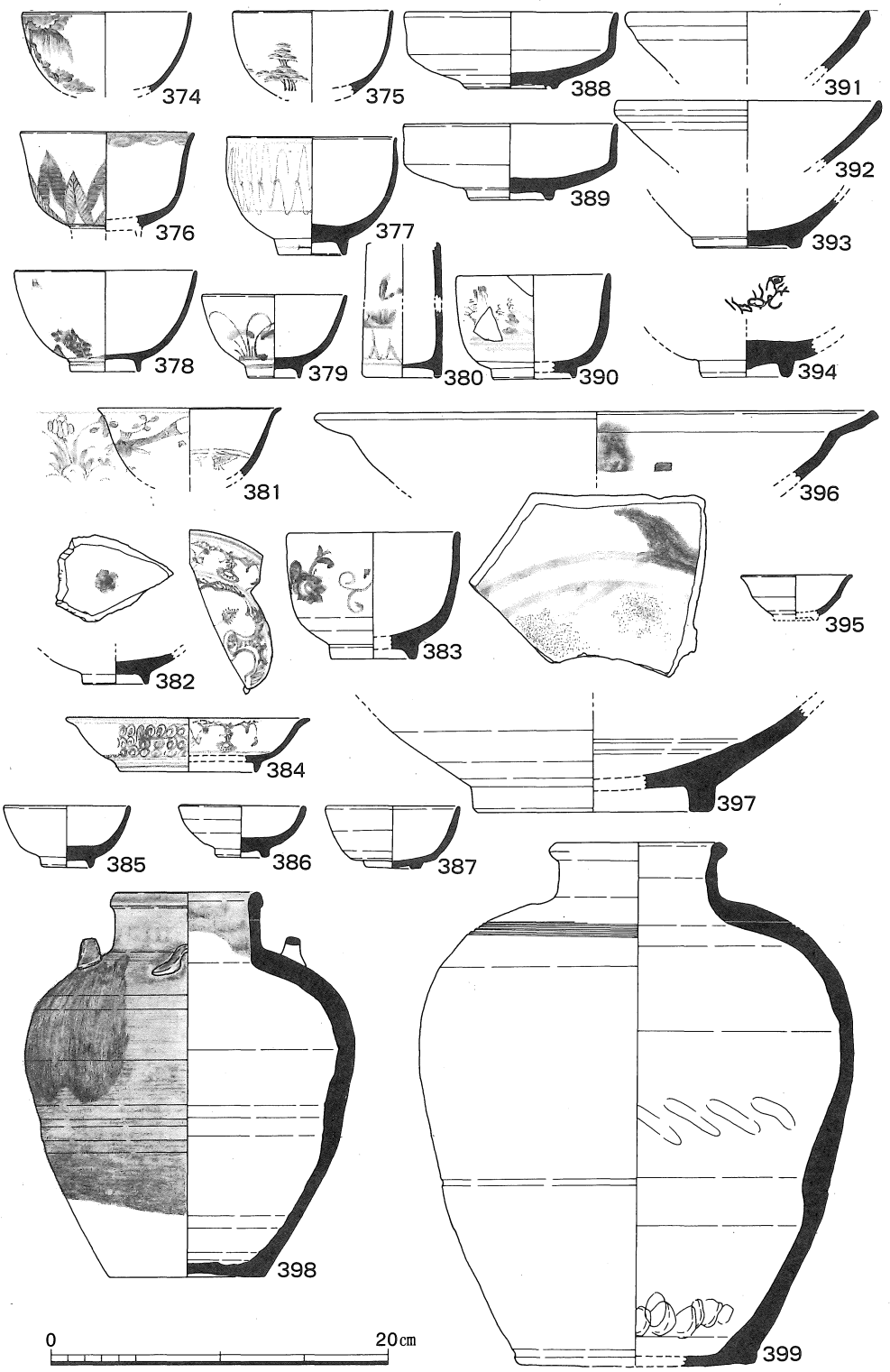
第24図　　溝ＳＤ16305Ｃ出土土師器実測図



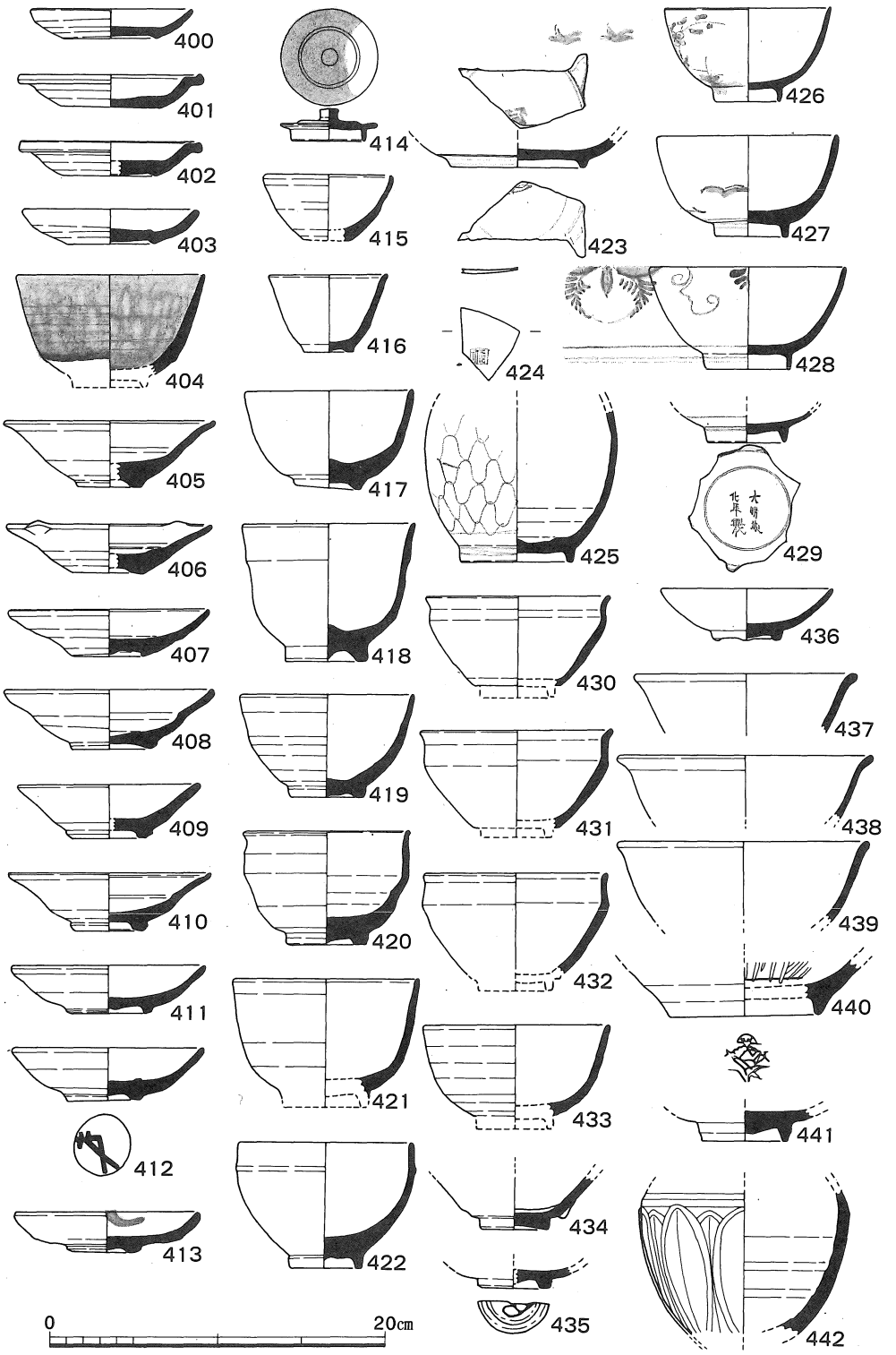
第25図　土塁・空堀出土土師器，溝ＳＤ16305出土轉讀札と坩堝実測図（1/4）



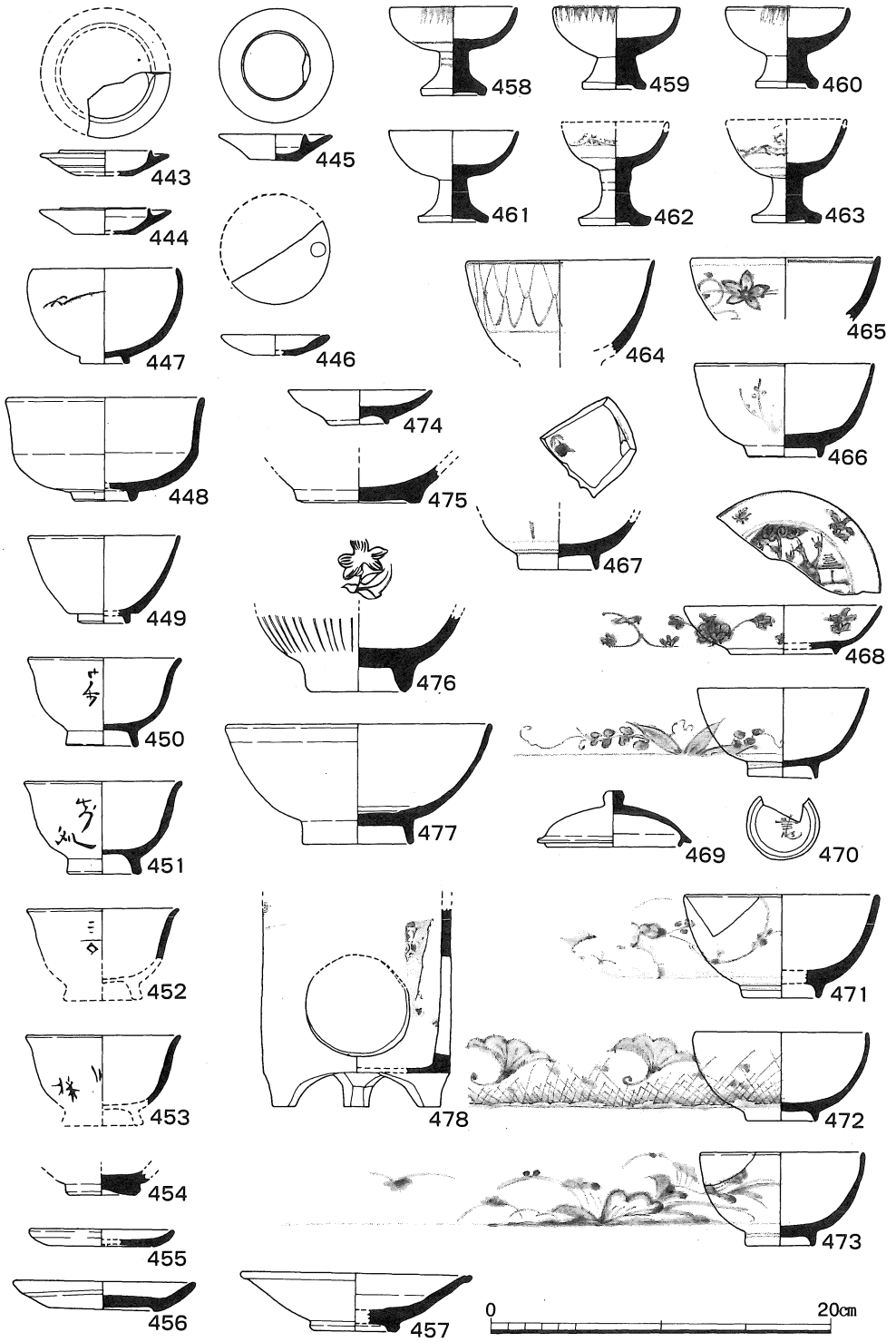
第26図　　溝ＳＤ16305出土近世陶磁器実測図(1)(1/4)



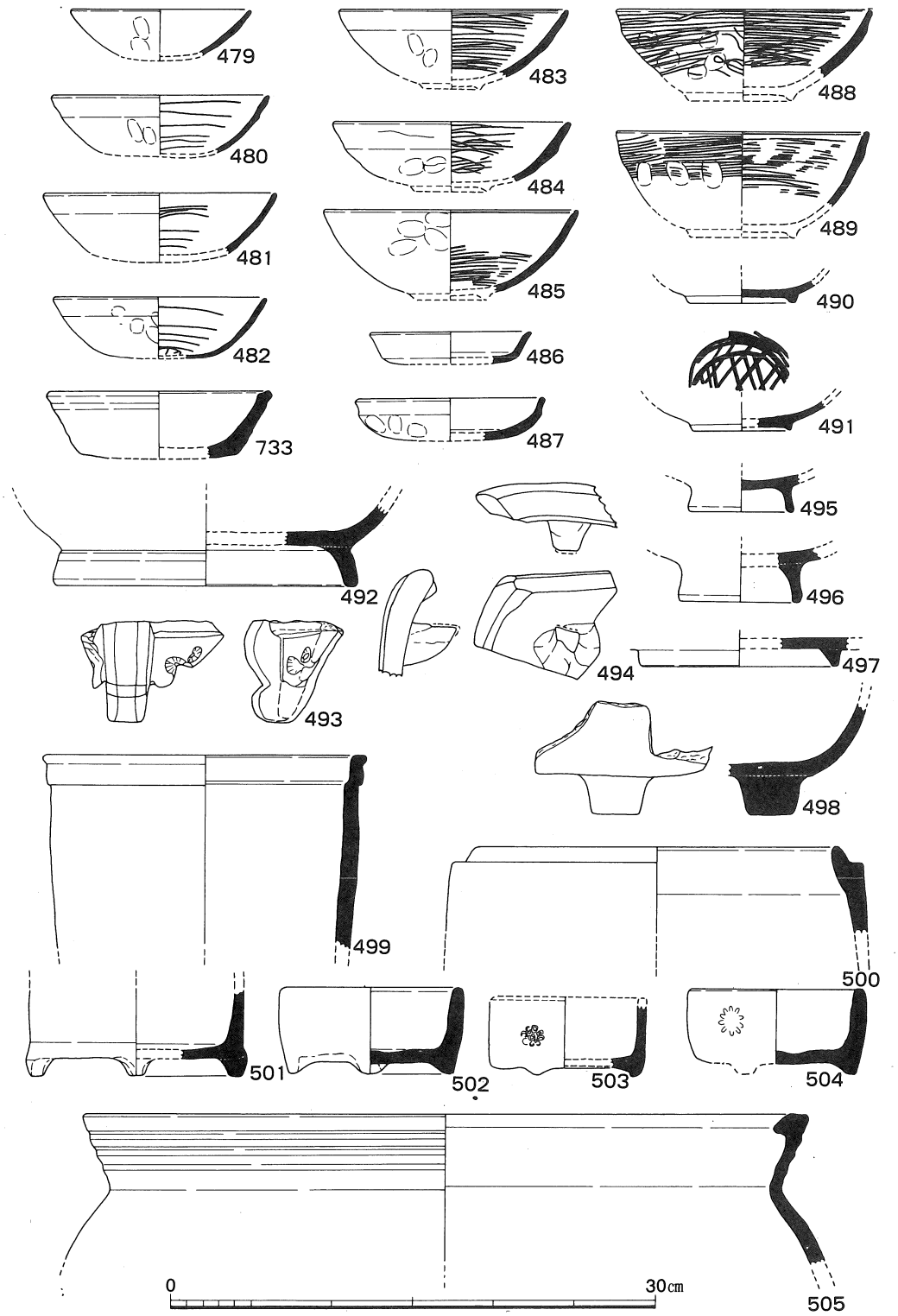
第27図　溝ＳＤ16305出土近世陶磁器実測図(2)(¼)



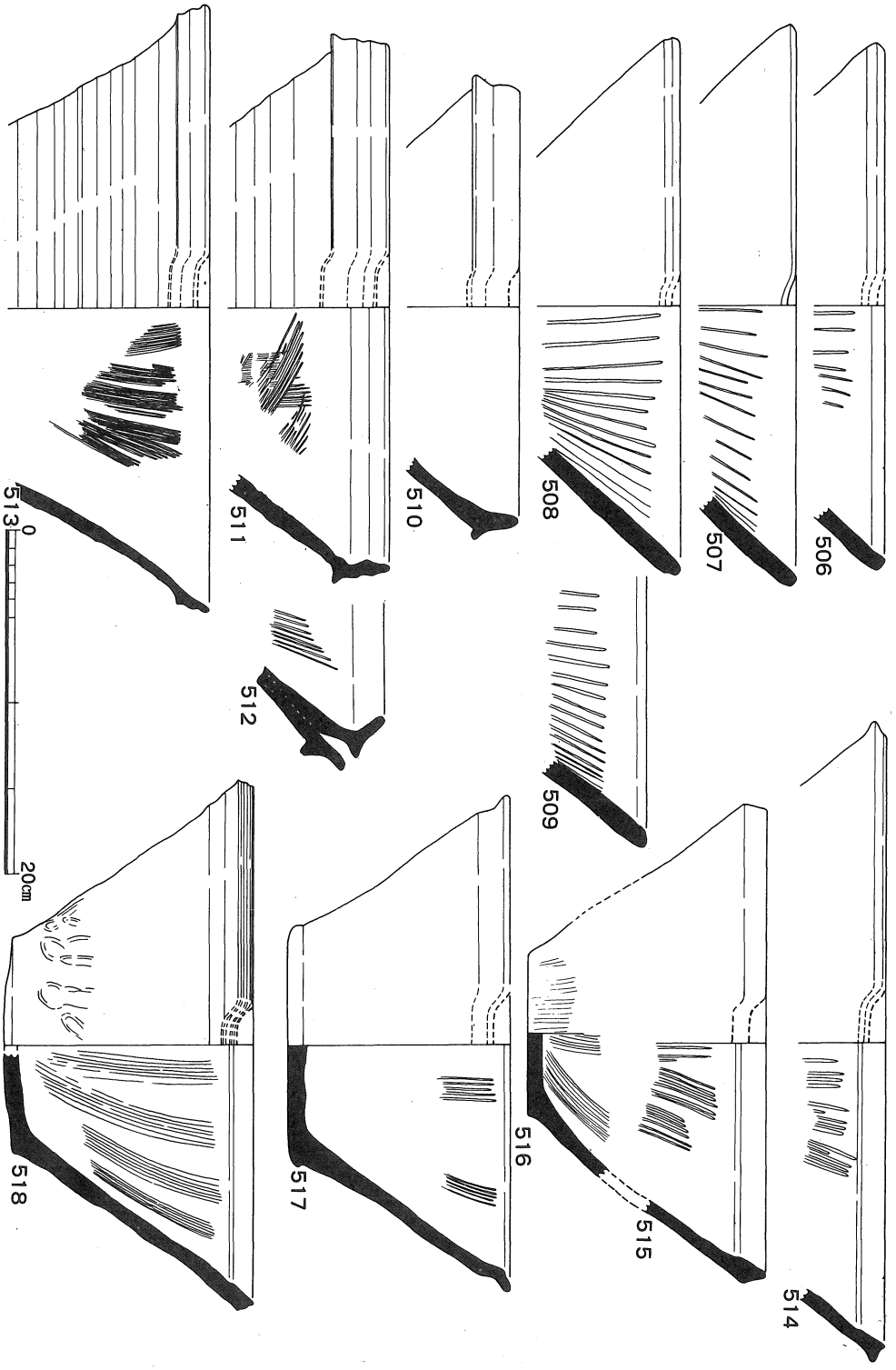
第28図　溝ＳＤ16305出土近世陶磁器実測図(3)(1/4)



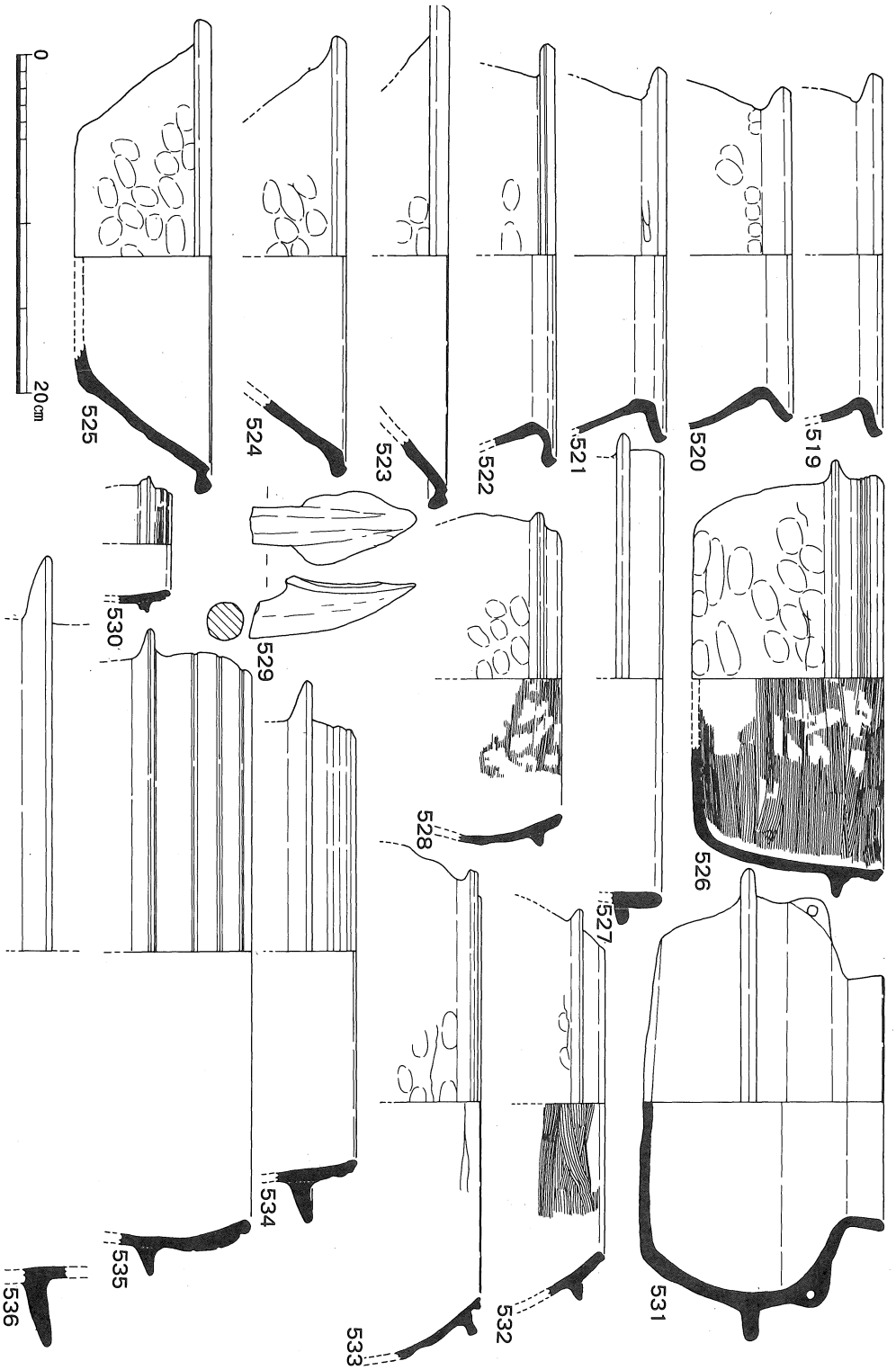
第29図　土塁・空堀出土近世陶磁器実測図（¼）



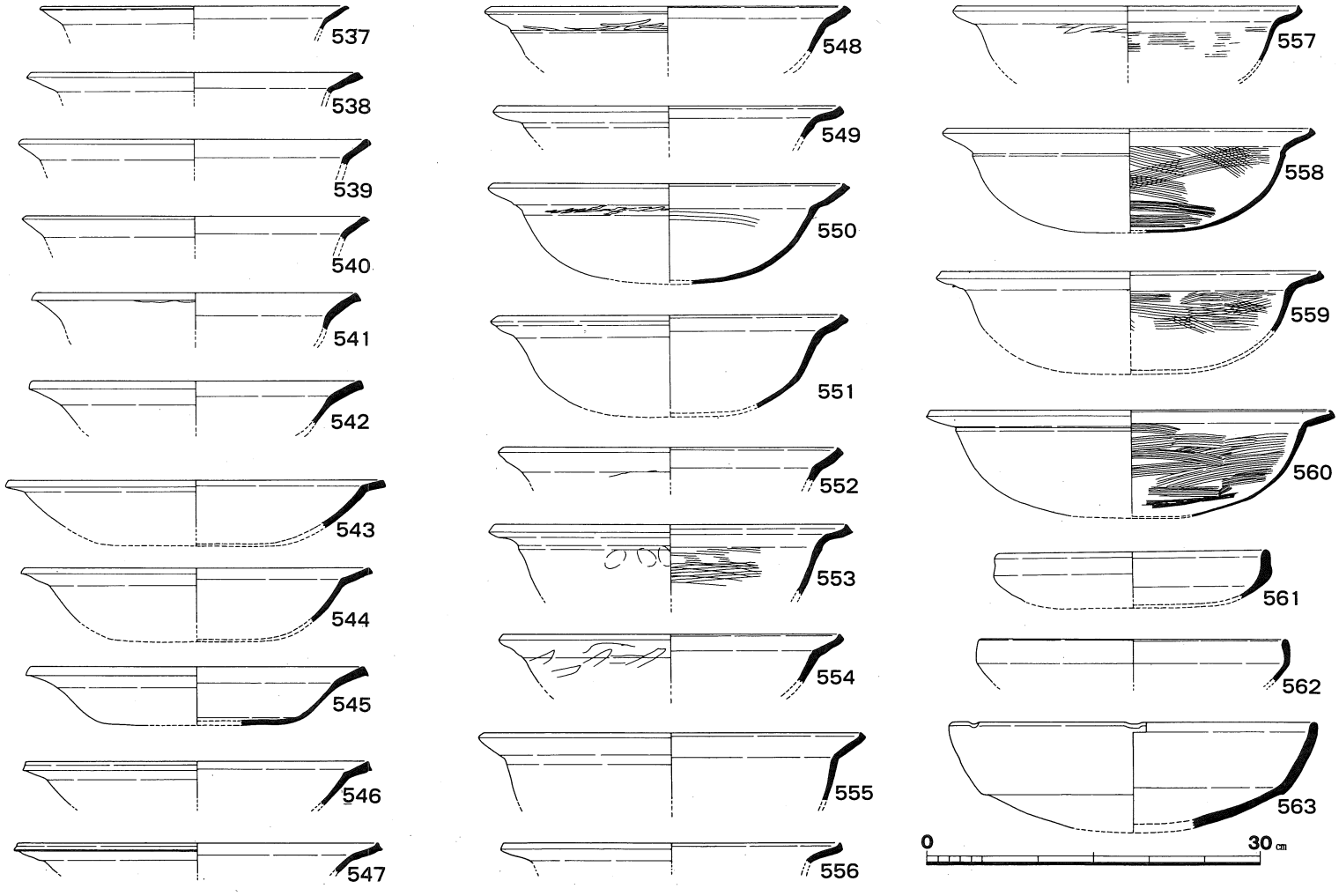
第30図　　中・近世瓦器，土師器実測図（1/4）



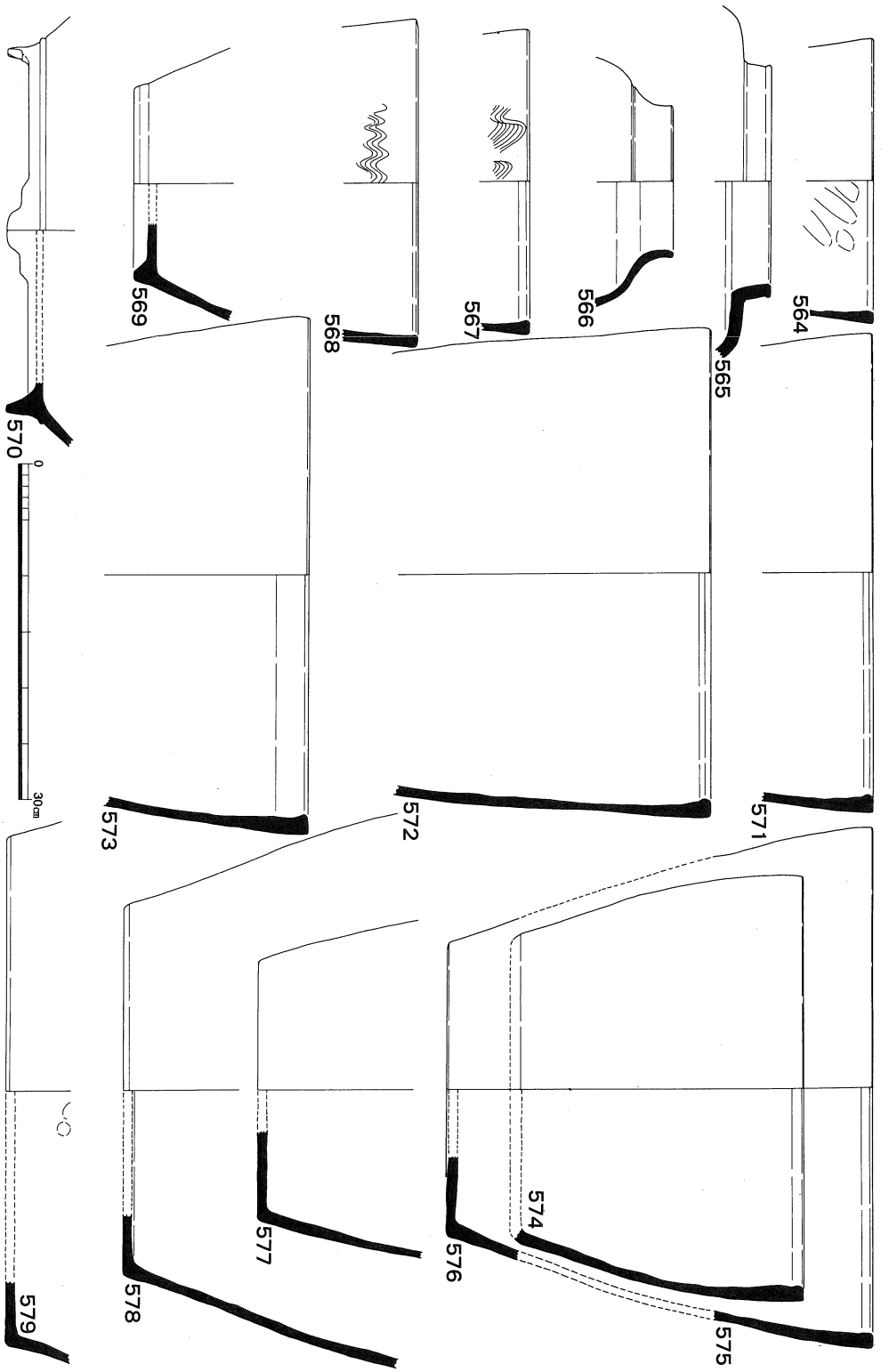
第31図　近世擂鉢実測図（1/4）



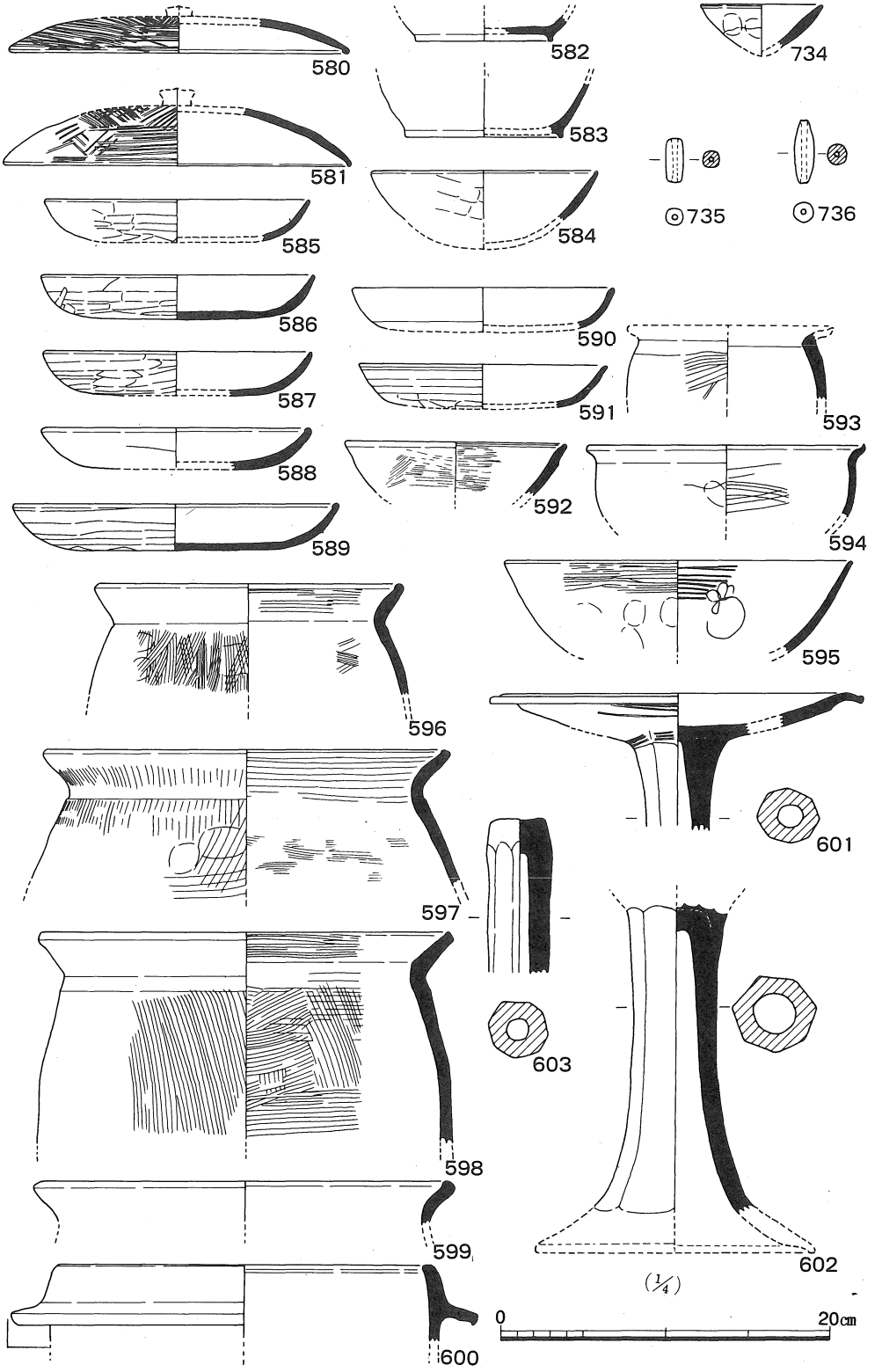
第32図　中・近世瓦器，土師器（519～522土師器甕）実測図（1/4）



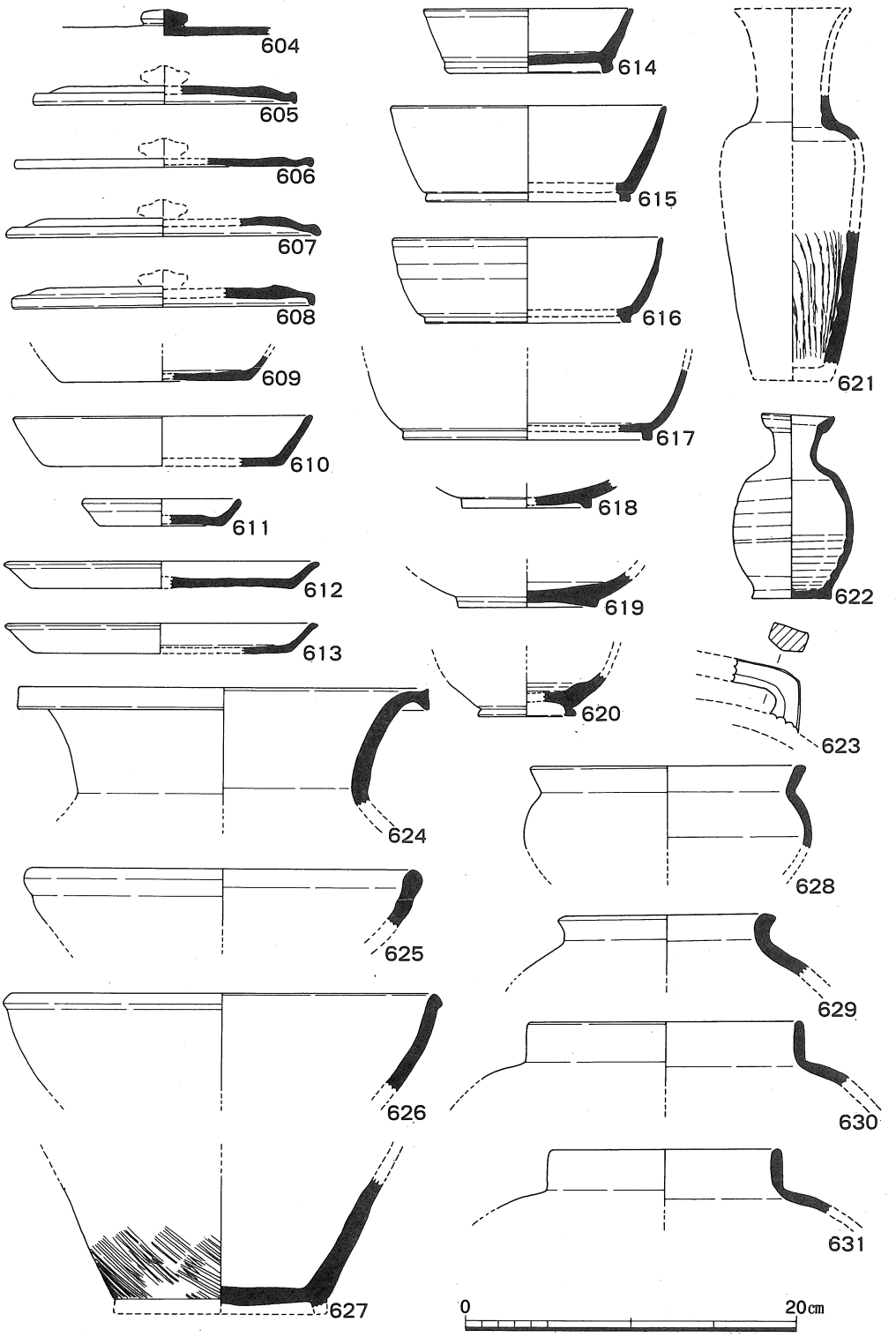
第33図　近世土師器鍋・鉢実測図（1/6）



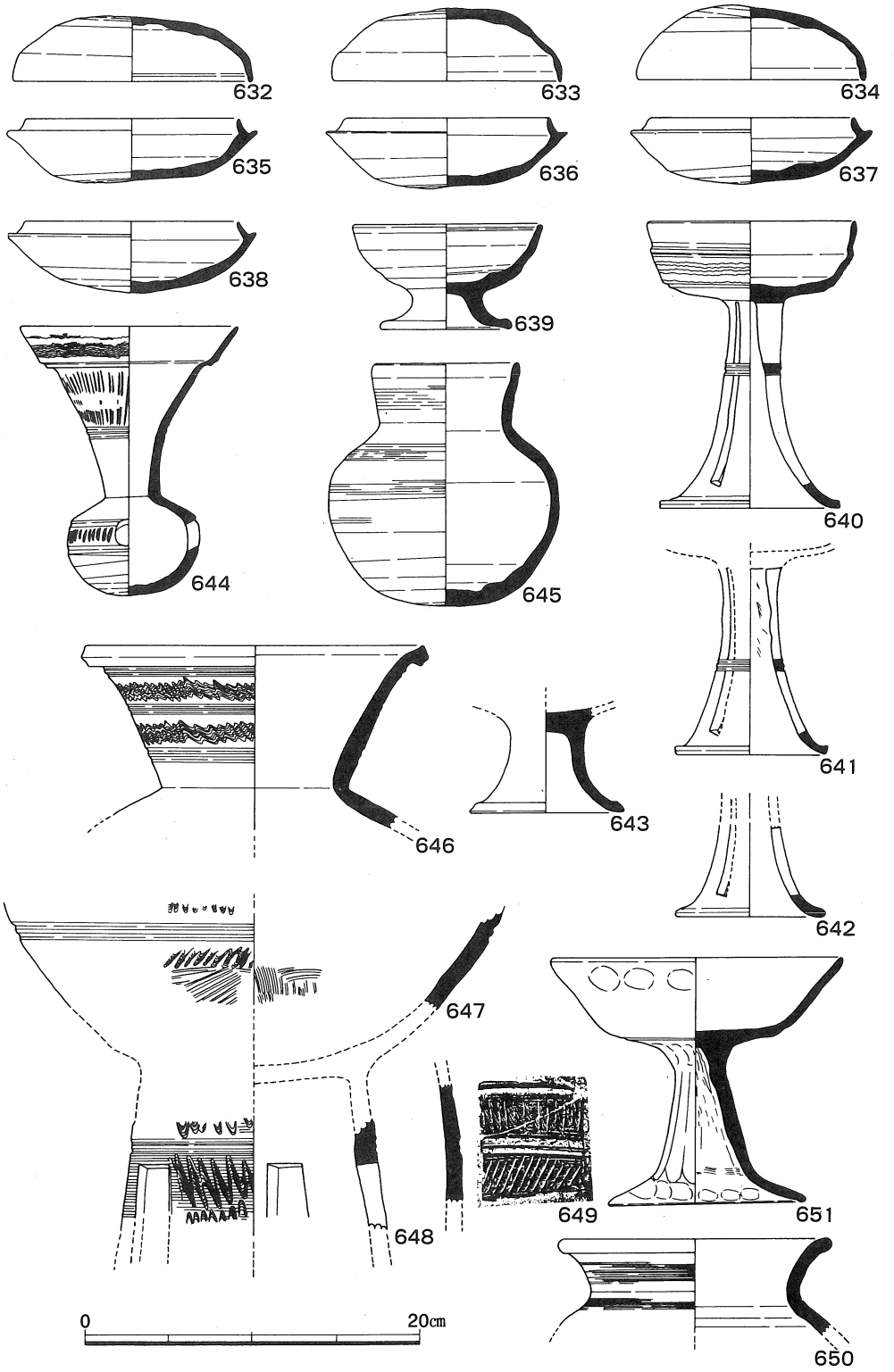
第34図　近世瓦器・鉢・壺実測図（1/6）



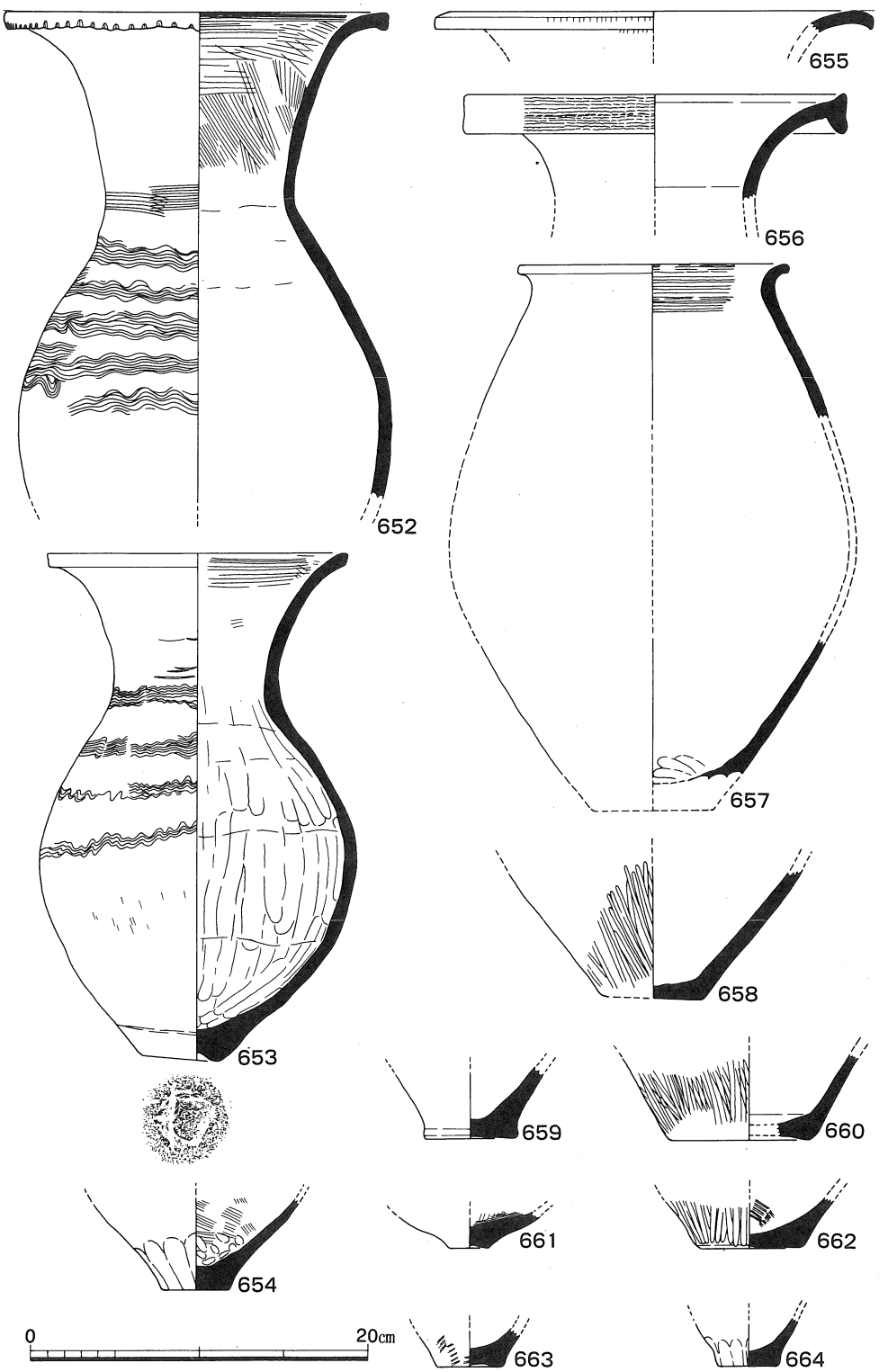
第35図　平安時代初期の土師器・黒色土器実測図



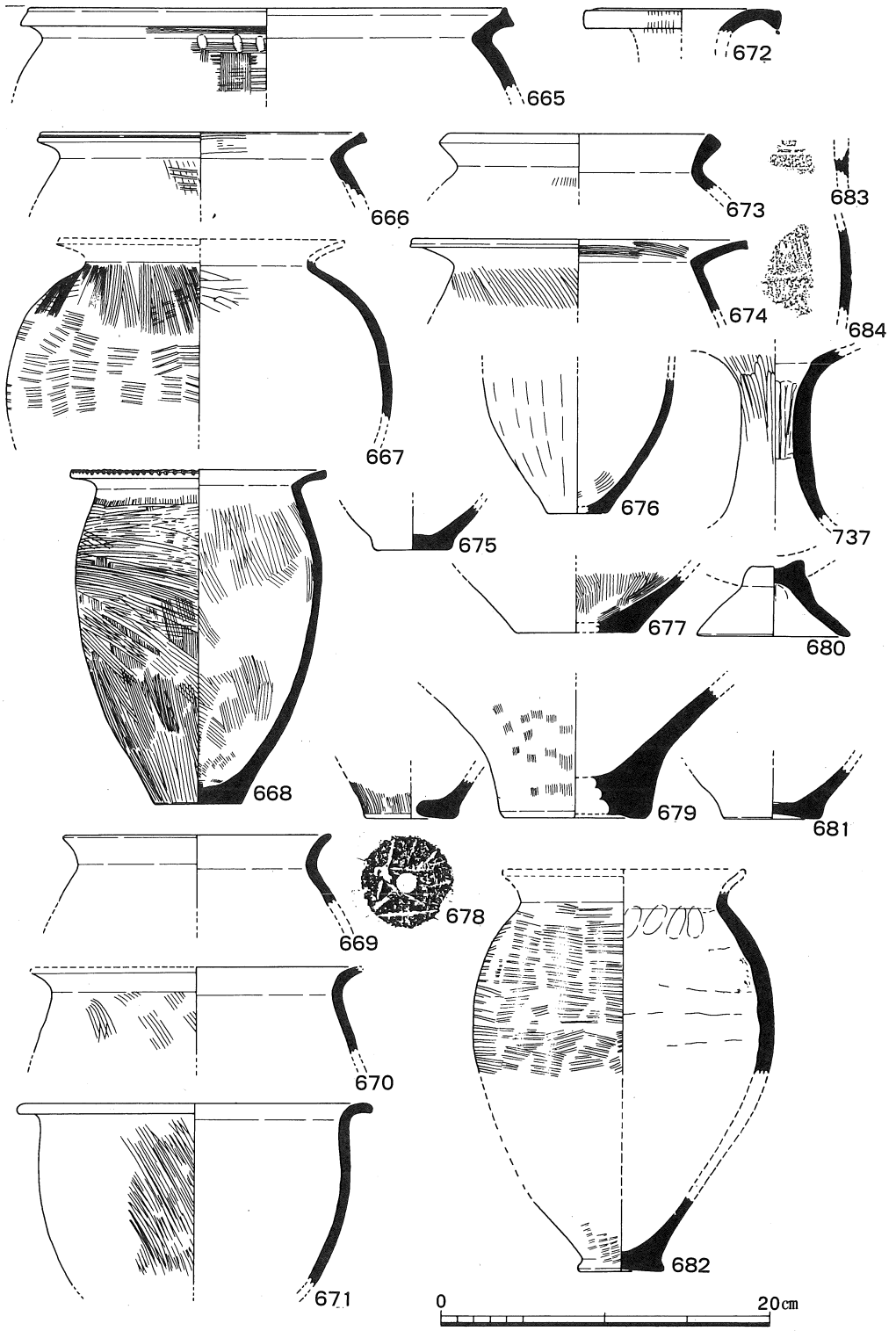
第36図　　平安時代初期・中期の須恵器実測図（1/4）



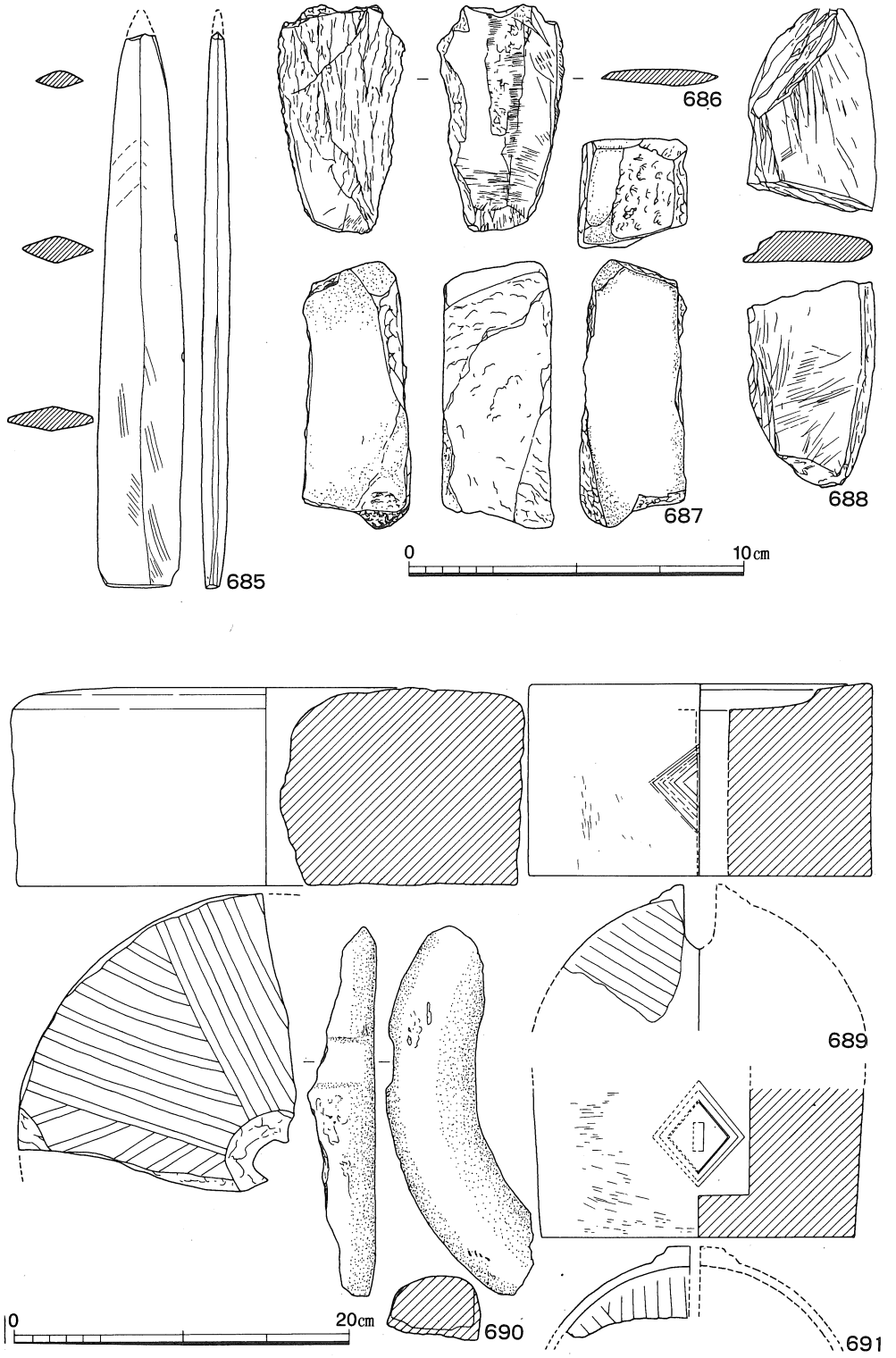
第37図　古墳時代須恵器，土師器実測図（¼）



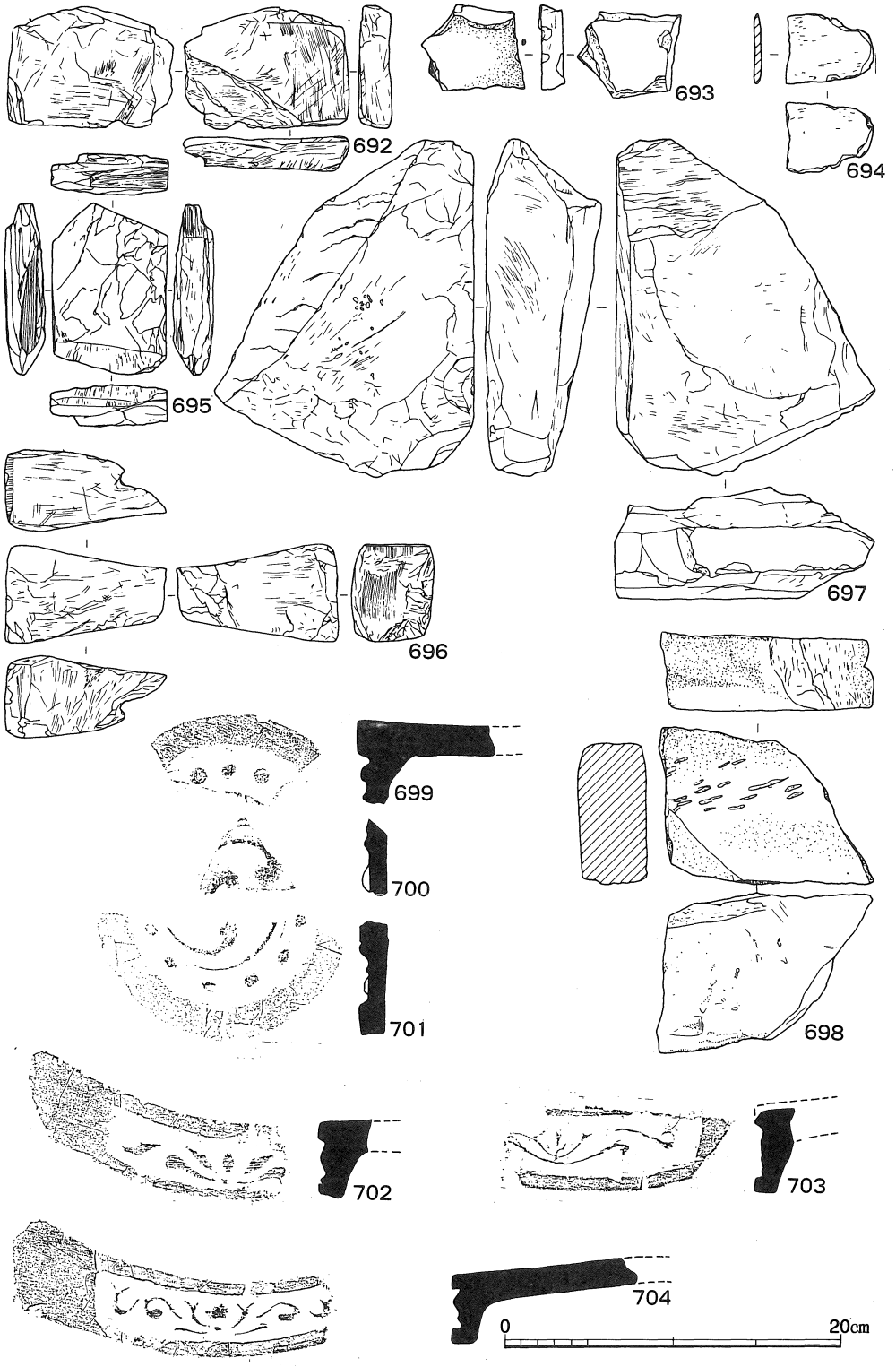
第38図　弥生土器実測図（1/4）



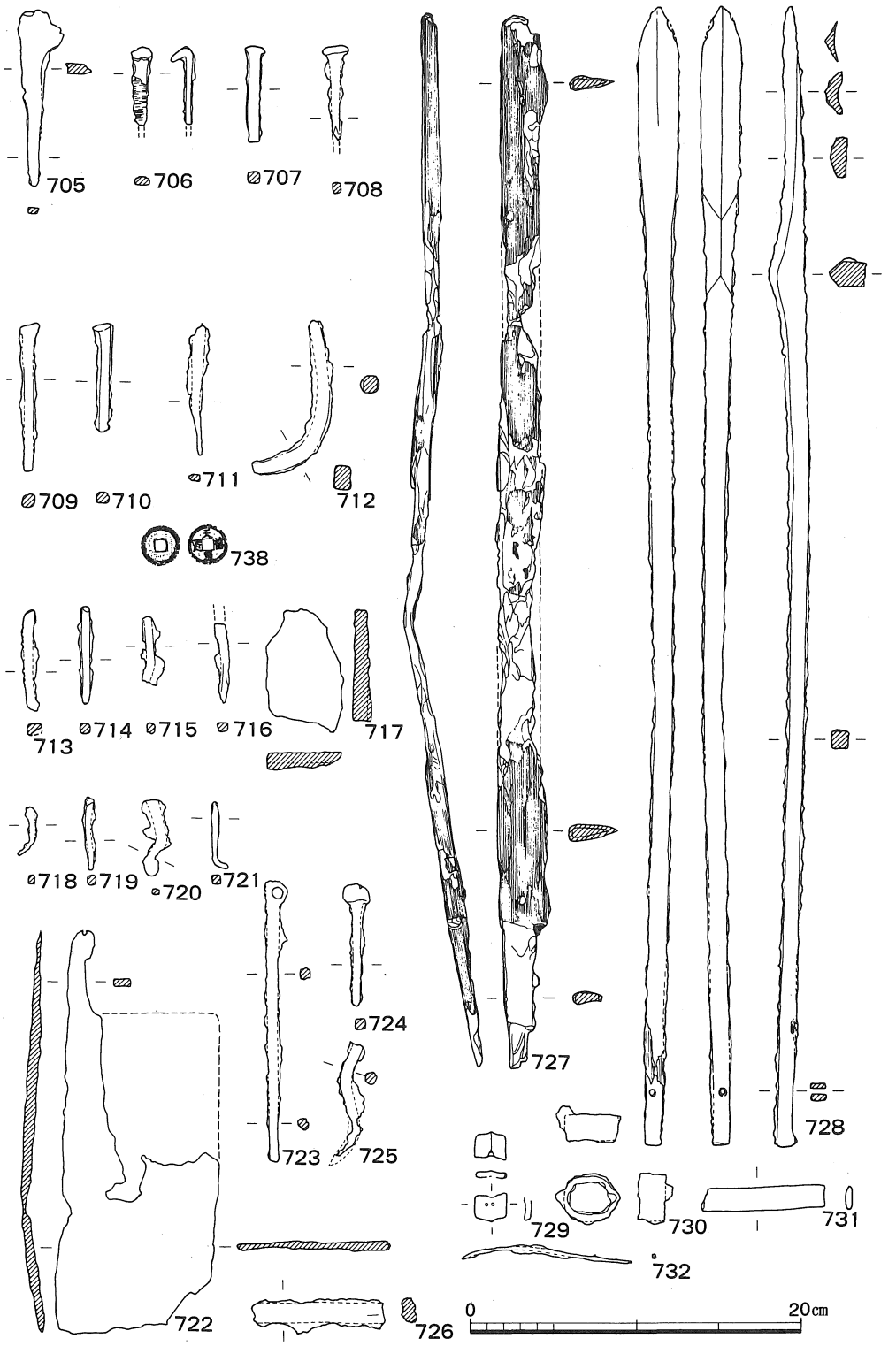
第39図　縄文土器，弥生土器実測図（1/4）



第40図　弥生時代石器（上段），近世石臼（下段）実測図（石器½，石臼¼）



第41図　　近世砥石，軒瓦実測図（1/4）



第42図　　鉄器，鉄製品実測図（1/4）

付表―5　遺物出土遺構一覧表

第26図	
ＳＤ16305Ａ	329 330 331 332 334 335 339 340 343 344 345 346 352 356 359 361 363 365 366 368 371 372 373
ＳＤ16305Ｂ	333 336 337 338 342 347 348 349 351 353 355 358 360 367 369
ＳＤ16305Ｃ	341 350 357 362 364 370
土塁・空堀	354
第27図	
ＳＤ16305Ａ	374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 389 391 392 393 394 395 397 398 399
ＳＤ16305Ｂ	390 396
ＳＤ16305Ｃ	387 388
第28図	
ＳＤ16305Ａ	404 408 434
ＳＤ16305Ｂ	400 401 402 405 406 407 414 417 418 423 424 425 426 427 428 429 431 435 440 441 442
ＳＤ16305Ｃ	403 409 410 411 412 413 415 416 419 420 421 422 430 432 433 436 437 438 439
第29図	
土塁・空堀	443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473
第30図	
ＳＤ16305Ａ	483 490 493 497 498 499 501 502 503 504
ＳＤ16305Ｂ	484 485 500
ＳＤ16305Ｃ	479 481 482 733 488 491 505
土塁・空堀	487 489 492 494 495 496
6トレ落ち込み	480 486
第31図	
ＳＤ16305Ａ	506 514 516 517
ＳＤ16305Ｂ	508 509 515 518
ＳＤ16305Ｃ	510
土塁・空堀	507 511 512 513
第32図	
ＳＤ16305Ａ	519 520 524 529 534
ＳＤ16305Ｂ	523 531 535
ＳＤ16305Ｃ	522
土塁・空堀	521 525 526 527 528 532 533 536
6トレ落ち込み	530
第33図	
ＳＤ16305Ａ	538 540 542 544 545 546 548 550 551 552 556 557 559 560 562
ＳＤ16305Ｂ	537 539 541 543 547 549 555 561 563
ＳＤ16305Ｃ	553 554 558
第34図	
ＳＤ16305Ａ	564 566 567 570 571
ＳＤ16305Ｂ	565 568 569 572 573 574 579
ＳＤ16305Ｃ	575 576 577 578
第35図	
ＳＤ16305Ａ	584 585 590 591 598 600 602 736
ＳＤ16305Ｂ	586
ＳＤ16305Ｃ	589 599 735
土塁・空堀	592 593 603
黒灰褐色粘質土	580 581 582 583 587 588 594 595 596 597 601 734
第36図	
ＳＤ16305Ａ	604 605 606 613 614 617 624 629
ＳＤ16305Ｂ	612 616 618 620 628 630
ＳＤ16305Ｃ	609 610 631
土塁・空堀	607 608 611 619 622 623 625 627
黒灰褐色粘質土	615 621 626
第37図	
ＳＤ16305Ａ	650
ＳＤ16305Ｂ	646
土塁・空堀	641 642 643 646 647 648 649
神足古墳	632 633 634 635 636 637 638 639 640 644 645 651

第38図	
ＳＤ１６３０９ 土 塁 ・ 空 堀 ６トレ落ち込み	652 653 654 656 657 658 659 660 661 662 663 664 655
第39図	
ＳＤ１６３０５Ａ ＳＤ１６３０５Ｂ ＳＤ１６３０５Ｃ ＳＫ１６３０８ 土 塁 ・ 空 堀 ６トレ茶色土層 ６トレ落ち込み 黒灰褐色粘質土 古 墳 封 土	737 679 675 678 668 665 666 667 669 670 671 674 676 683 684 677 680 682 672 673 681
第40図	
ＳＤ１６３０５Ａ ＳＫ１６３０８ 土 塁 ・ 空 堀 古 墳 封 土	688 690 691 685 686 688 689 687
第41図	
ＳＤ１６３０５Ａ ＳＤ１６３０５Ｂ ＳＤ１６３０５Ｃ 土 塁 ・ 空 堀 ６トレ暗灰褐色礫混土 ６トレ落ち込み	699 700 701 695 696 703 697 693 698 702 704 692 694
第42図	
ＳＤ１６３０５Ｂ ＳＤ１６３０５Ｃ 土 塁 ・ 空 堀 空堀ＳＤ16302 ６トレ暗灰褐色礫混土 神足古墳上面	721 722 724 738 705 706 708 711 715 716 729 730 732 728 707 709 710 712 713 714 717 718 719 720 723 724 726 731 727

付表―６　土師器皿の形態分類表

形　態	土　器　番　号
Ａａ	1 7 8 9 10 11 13 16 17 18 25 36 38 39 40 41 42 45 46 47 49 50 51 56 59 68 69 70 72 91 97 104 105 106 107 109 110 112 113 114 116 117 121 129 130 131 132 138 140 158 161 162 163 164 165 167 168 170 171 172 173 183 185 186 187 189 191 192 197 198 199 205 209 211 212 213 214 215 216 217 223 224 232 235 237 266 273 277 279 286 293 306 307 310 312 313 314 315 316 318 319 320
Ａｂ	78 79 80 196 269 308
Ａｃ	44 86 179 287 288 309
Ａｄ	71 73 74 103 127
Ｄ	239
Ｈ	15 100 101 111 124 240 241 246 247 248 249 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 275 281 282 283 299 300 301 302 303 317
Ｉ	37 225 226 227 229 230 231 233 234 236 238 276 321
Ｋ	2 3 4 5 6 14 31 32 52 57 58 61 62 63 76 77 95 120 122 123 126 133 139 141 142 143 144 145 146 147 148 151 152 153 154 156 157 159 166 169 175 176 177 178 180 181 182 200 206 207 208 210 267 268 270 271 274 285 291
Ｌ	19 20 33 55 66 87 93 102 135 160 304 305
Ｎ	12 22 23 24 26 27 28 29 30 34 35 48 53 54 85 92 94 98 99 108 119 125 128 134 136 137 184 188 193 218 219 220 221 222 241 280 294 296 297 311 322 323
Ｏ	65 194 284 290 292

4 ま と め

以上，出土遺物の代表的なものを概観した。このように，縄文時代から近世にかけての遺物が大量に出土し，考察すべき問題点も数多い。本報告では，近世，とくに，勝龍寺城に関連する土師器皿を中心に見て，その変遷・変化を具体的に明らかにすることができた。土師器皿の形態による法量差，例えば，皿H，皿K等に表われる時期別出土等の差，各陶磁器のしめる割合等に時期差が認められることなどである。しかし，近世陶磁器の問題や，墨書の意味するもの等，今後の課題も多い。

また，勝龍寺城関係以外の神足遺跡に関連する遺物の内容をまとめることができなかった。しかし，弥生時代の遺物については，『長岡京』に私案をまとめたことがあり[3]，多少の変更すべき点もあるが，本調査での出土遺物の位置付けは，これを参照されたい。また，中世遺物については，詳しく述べる機会を得ていないが，一応，第　図に示した変遷を考えており，当調査の出土遺物を含めることによって，最大100年単位で当地域の変遷がたどれるのではないかと考えている。本来ならば，中近世の遺物は，京都市域の調査例で具体的に示されたものを対比するのが望まれるところであろう[5]。しかし，都の外と内の性格差は大きく土器に現れており，例えば，高坏形土器は，平安時代以後当地域から姿を消し，土師器皿類の精良なものもほとんどなく，本報告で皿Gとしたものもごく少量であることなど，直接結びつけるよりは，当地域の内容を明らかにしてからの仕事とする方が妥当と考えている。このことから，詳細の説明を加えるに至らなかったが，検出遺構の時期区分の項で述べたことを基に，第46図の編年表[6]を作成提示し，批判を待ちたい。

注1) 土器の復原には長谷川睦，藤本滋子の，土器実測等には白川成明，近藤志津子の，本書校正には小塩礼子の御協力を得た。

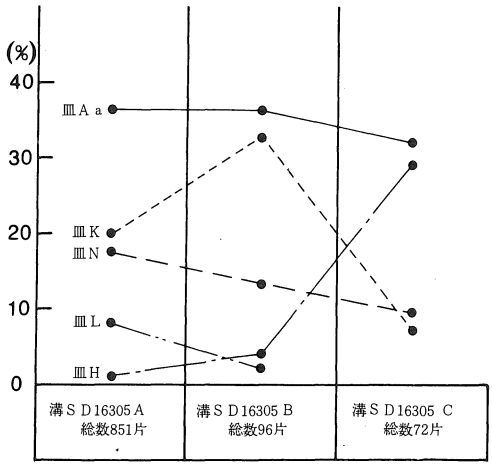
2) 岩崎誠「長岡京跡右京第163次（7ANMKI地区）調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第15冊1985

3) 注2文献第34図。

4) 岩崎誠「乙訓地方の自然と遺跡(2)桂川右岸の弥生遺跡」長岡京跡発掘調査研究所『長岡京』第29号。

5) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道遺跡調査年報』Ⅰ～Ⅲ1980～1982年

6) 向日市及び長岡京市の報告書を参考にした。



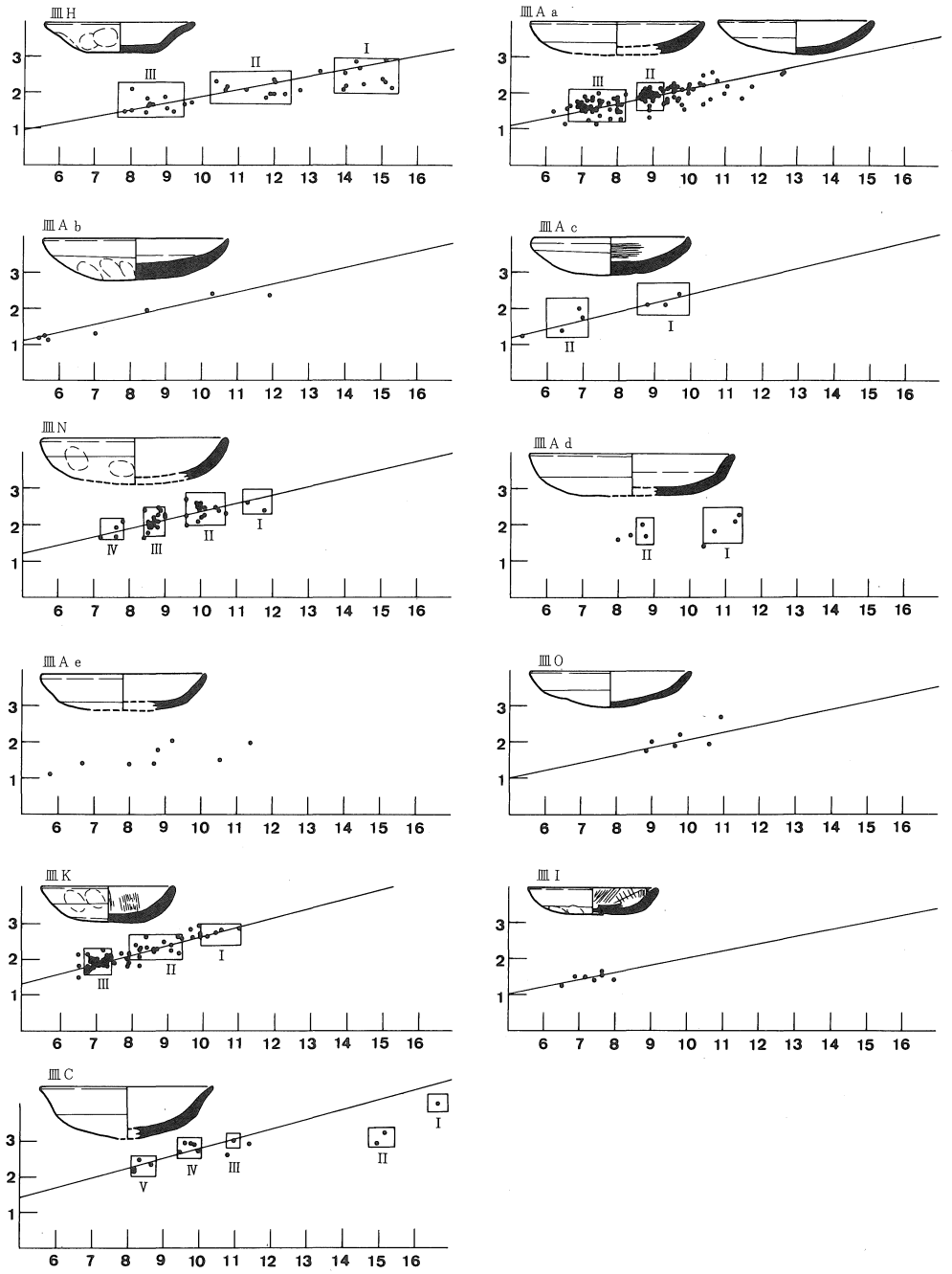
第43図　土師器皿の形態別法総量比

付表―7　陶磁器出土総数及び土師器皿との割合

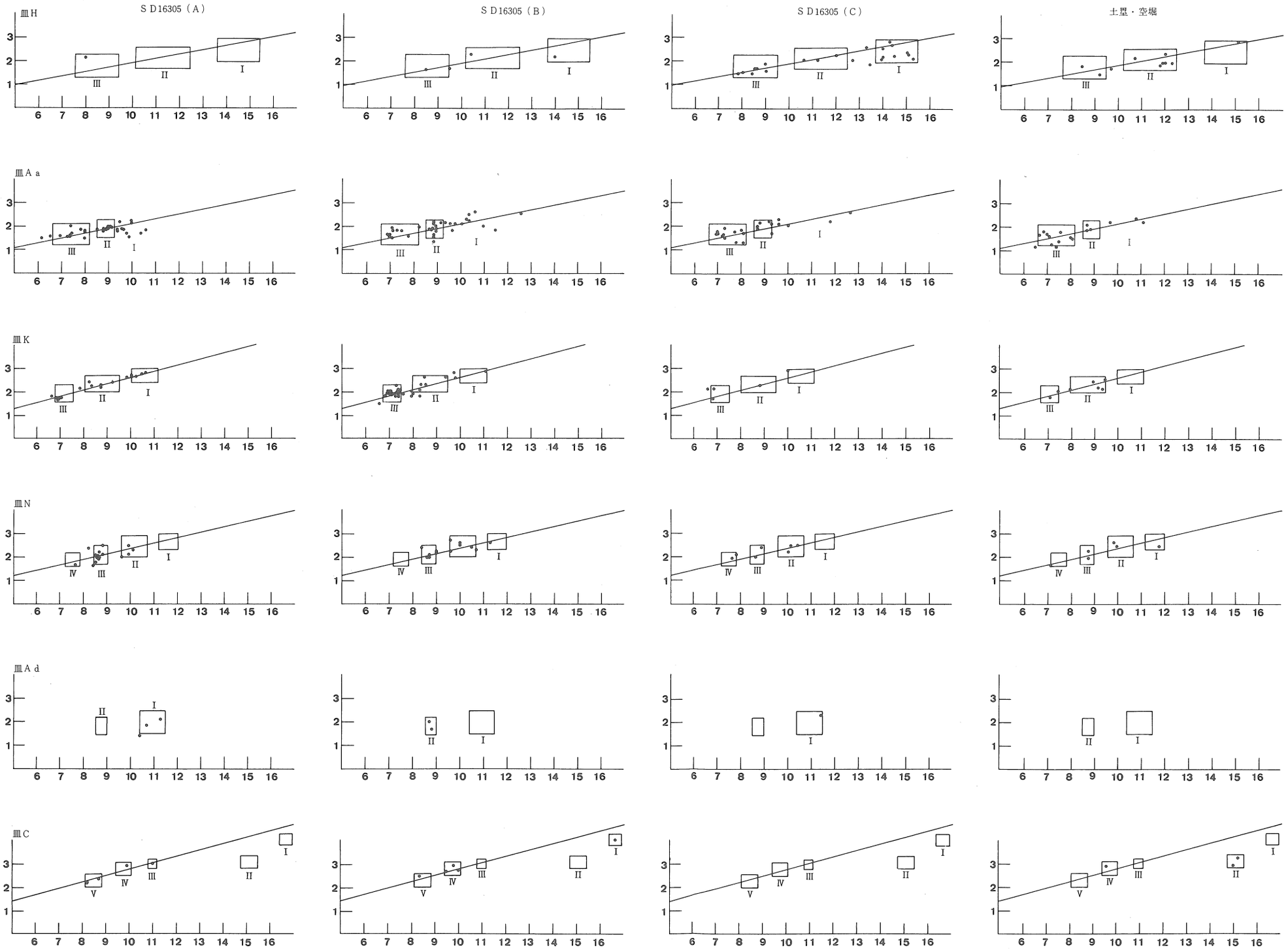
出土遺構 / 出土陶磁器	SD16305 A期 (%)	SD16305 B期 (%)	SD16305 C期 (%)	土壁空堀	その他	合計
瀬戸焼	32(26.7)	46(30.9)	29(37.7)	45 (26.8)	5	157
碗	16(50.0)	25(54.3)	15(51.7)	21	3	80
皿	12(37.5)	16(34.7)	13(44.8)	8	1	50
壺	3(9.4)	4(8.7)	1(3.4)	12		20
他	1(3.1)	1(2.8)		4	1	7
唐津焼	38(31.7)	49(32.9)	24(31.2)	50 (29.8)	2	163
碗	27(71.1)	28(57.1)	17(70.8)	16	1	89
皿	6(15.8)	14(28.6)	6(25.0)	17		43
壺	5(13.2)	5(10.2)	1(4.2)	15	1	27
他		2(4.1)		2		4
京焼	4(3.3)	3(2.0)	1(1.3)	11 (6.5)	1	19
碗	4(100.0)	1(33.3)		9	1	15
皿		2(66.7)	1(100.0)	1		4
不明陶器	1(0.8)		1(1.3)	1 (0.6)		3
陶器	75(62.5)	98(65.8)	55(71.5)	107 (63.7)	8	342
伊万里焼	35(29.2)	43(28.9)	14(18.2)	57 (33.9)	12	161
	26(74.3)	32(74.4)	11(78.6)	35	11	115
	4(11.4)	8(18.6)	2(14.3)	14	1	29
	4(11.4)	3(7.0)		1		8
	1(2.9)		1(7.1)	7		9
陶磁器	110(91.7)	141(94.6)	69(89.6)	164(97.6)	20	503
青磁	3(2.5)	4(2.7)	5(6.5)			12
碗	3(100.0)	3(75.0)	4(80.0)			10
皿		1(25.0)	1(20.0)			2
白磁	7(5.8)	4(2.7)	3(3.9)	5(3.0)		19
碗	5(71.4)	1(25.0)		2		8
皿	2(28.6)	3(75.0)	2(66.7)	3		10
壺			1(33.3)			1
輸入磁器	10(8.3)	8(5.4)	8(10.4)	5(3.0)		31
合計	120(100.0)	149(100.0)	77(100.1)	168(100.6)	20	534

	総破片数	SD16305 A	SD16305 B	SD16305 C
土師器	399(42.8)	67(35.8)	86(36.6)	57(42.5)
国産陶磁器	503(53.9)	110(58.8)	141(60.0)	69(51.5)
輸入磁器	31(3.3)	10(5.3)	8(3.4)	8(6.0)
合計	933(99.9)	187(99.9)	235(100.0)	134(100.0)

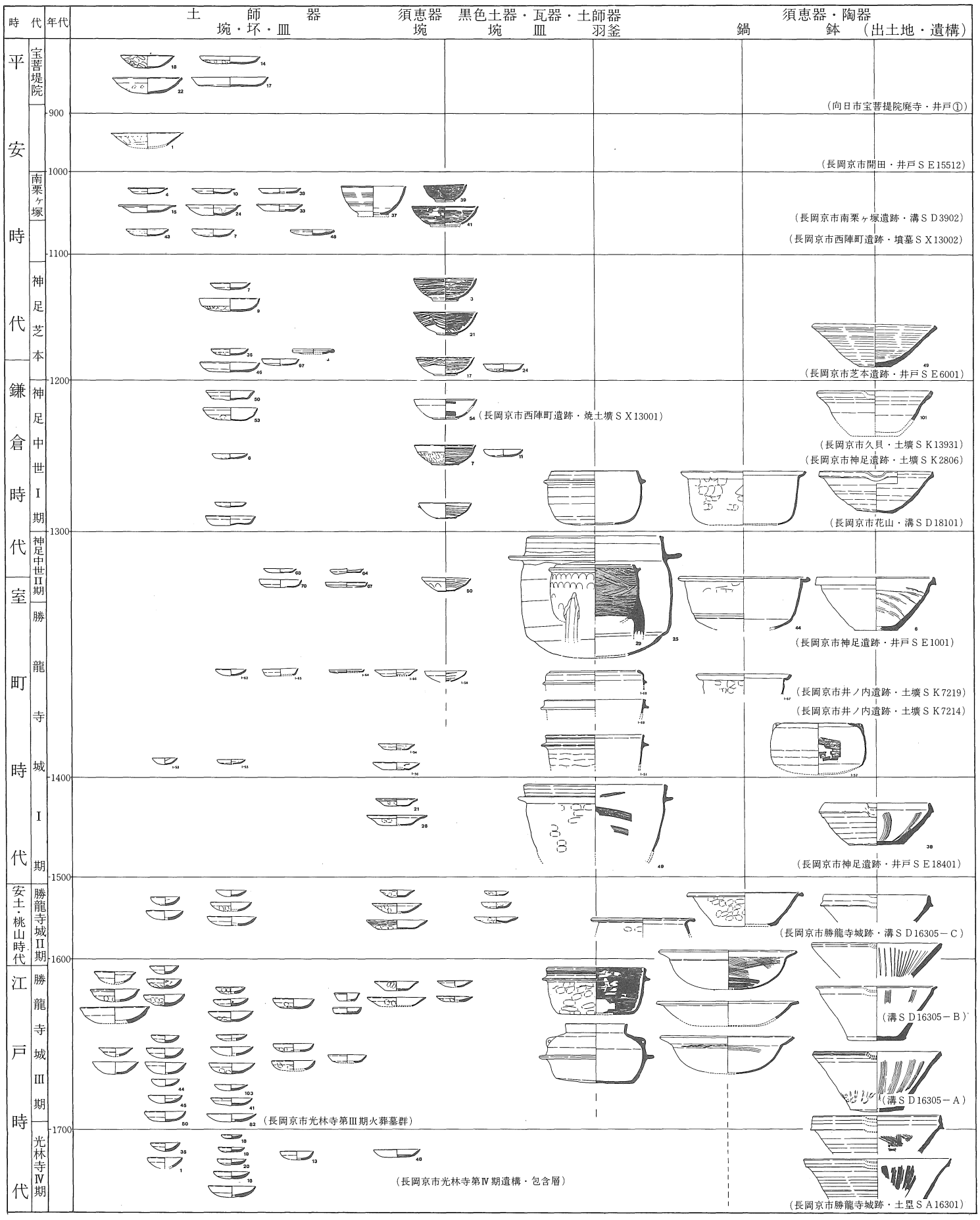
( )は百分率＝%，但し土師器皿は¼以上の破片の数である。



第44図　土師器皿の形態別法量分布図



第45図　土師器皿の出土遺構別・形態別法量分布図



神足遺跡―主に当調査―で出土した土器をもとに試た。不足分は、既報告分の図で補ったが、一部に、近々報告される予定のものも使用した。遺物の番号は、報告書掲載のままで付してある。上下の軸は、年代差を表わすが、等分したものではなく、各々の間隔は厳密なものではない。（　）内は、基準資料として使用した出土地を示した。

第46図　　乙訓地域の中・近世遺物編年図

第３章　長岡京跡右京第207次（７ＡＮＭＫＩ－２地区）調査概要
－右京六条一坊十二町・勝龍寺城跡・神足遺跡・光林寺・徳勝(祥)寺－

１　は　じ　め　に

1　本報告は，1985年９月３日から10月10日まで，長岡京市東神足二丁目６－15において実施した長岡京跡右京六条一坊十二町推定地，勝龍寺城跡・神足遺跡・光林寺・徳勝(祥)寺の発掘調査に関するものである。

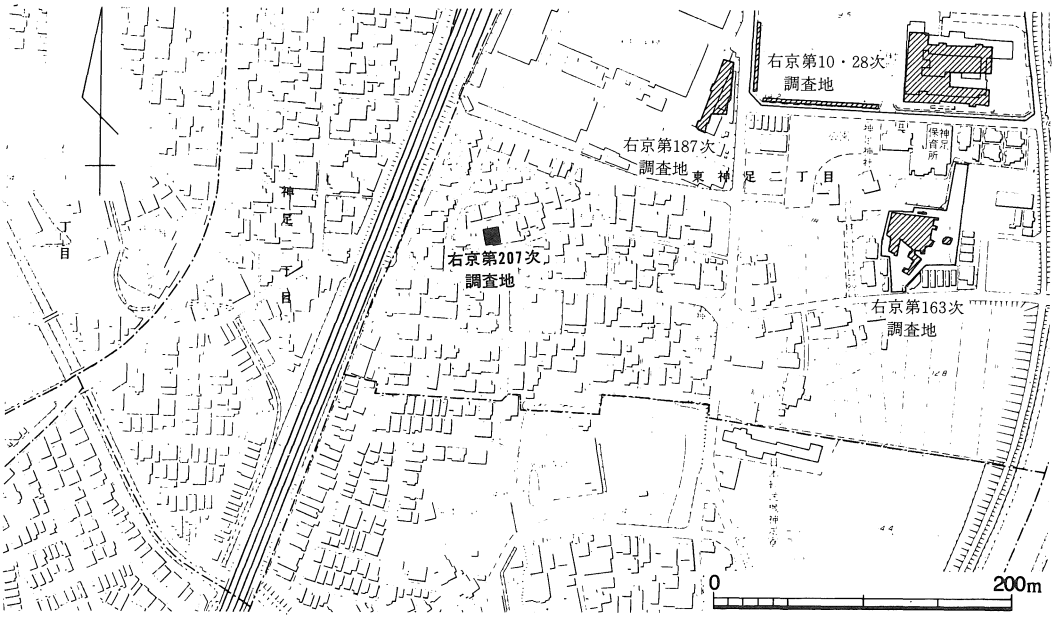
2　本調査は，光林寺の本堂改築工事に伴う事前調査で，調査面積は約110m²である。

3　調査は，長岡京市教育委員会が主体になり，国庫補助事業として実施した。調査員は，(財）長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し，岩崎誠が行った。

4　現地調査から本報告に至るまで，光林寺住職木本弘昭氏をはじめ，檀家総代・役員など檀家の方々には文化財に対する深いご理解とご協力を得た。また，多くのご教示をいただいた京都文教短期大学教授中山修一氏，古文書の解読をしていただいた同志社大学教授井ヶ田良治氏並びに乙訓の文化遺産を守る会古文書部会の西田泰彦・平栄一郎の両氏，徳勝寺関係図面・古文書を提供していただいた山口孝太郎氏，出土した人骨の鑑定および原稿執筆をしていただいた京都大学教授池田次郎氏，遺物写真の撮影・指導をしていただいた㈶京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏ほかの方々にお世話になった。記して感謝したい。

5　本報告書作成にあたり多くの方々の御協力を得た。（注１）

6　本報告の６は池田次郎，北川賀一両先生の御寄稿を掲載し，他を岩崎が執筆・編集した。



第47図　　発掘調査地位置図（1/5000）

2 調 査 経 過

当調査地は，小畑川と犬川に挟まれた洪積段丘の先端部に位置し，南に傾斜する立地上にある。調査地の西方約100ｍに国鉄東海道本線があり，国鉄神足駅の南約300ｍに当調査地が位置する（第47図）。当対象地の南方約200ｍには勝龍寺城本丸跡が残り，西方約150ｍには土塁や空堀を見ることができる。

当地は，長岡京跡の六条大路に面した右京六条一坊十二町の宅地部分に推定されているばかりでなく，細川藤孝が勝龍寺城主の時期の，松井ヤシキが構えられた所から搦手門にかけての位置に推定されている[(2)]。さらに，当対象地の北に広がる段丘上には，弥生時代中期と古墳時代後期を中心とする神足遺跡があり，その範囲を確認する上で重要な所でもある。

このように，当調査地及び近隣地には，長期にわたる時代の遺跡が密集しており，度重なる調査が実施され，多くの成果が知られている。神足遺跡については10回にも及ぶ発掘調査が行われている[(3)]。この遺跡の南東端では縄文時代後期の遺物が出土し，この時期の集落が重なっていることが予想されている[(4)]。弥生時代中期については，竪穴住居址群からなる住居域と方形周溝墓群や土壙墓群からなる墓域によって構成されていることが具体的に明らかとなり[(5)]，その規模や出土遺物から，乙訓地方の拠点的集落とされている。古墳時代に関しては，中期の埴輪円筒棺が検出されており，後期では大規模な集落であったことが知られている[(6)]。また，後期には古墳が築かれ，神足古墳が現存している[(7)]。

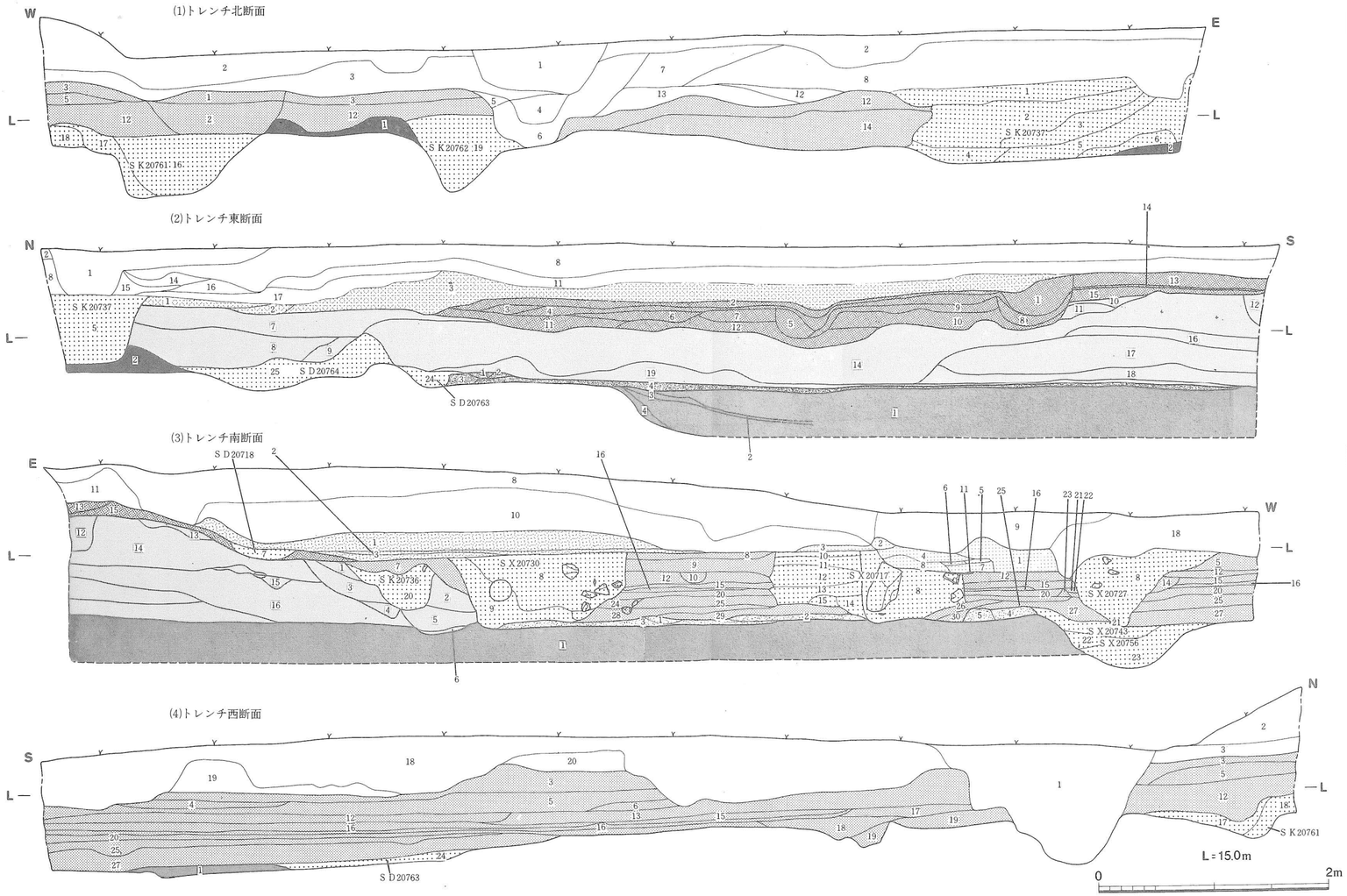
当調査地周辺で実施された長岡京の調査では，朱雀大路の西側溝と思われる溝や藤原氏の邸宅と推定される官人の邸宅址が明らかにされ[(8)]，木簡や墨書土器等の出土[(9)]など，多岐にわたる成果が結実している。

中世以降は，勝龍寺を中心とした集落が連面と続く。神足遺跡での調査では，鎌倉時代の井戸や墓，柱穴等，集落や墓地に関する成果があり，当調査地にも及んでいることが想定される。

室町時代から江戸時代前期にかけては，勝龍寺城に関する調査成果がある。当調査地の西方には，土塁，空堀が残っている。西端で行われた調査では，勝龍寺城に附随する施設であることが立証され，その規模や構造が具体的に明らかにされた。当調査地の北約20ｍには，勝龍寺城の土塁が築かれていたことは，以前から伝えられているところであり，当調査地は勝龍寺城内に含まれている。当城には寛永10年から16年間，永井直清が居城していたと言われている。

現在の光林寺には，永井直清の家臣達が寄進した釈迦涅槃図が保存されている。また，同家臣横田主水等の墓碑が，光林寺の詣墓に並び置かれている。

このような歴史的環境下にあるため，光林寺本堂改築工事に伴い，工事計画床面を全面調査することとなった。その面積は110㎡である。調査は重機により盛土を除去し，以下人手により調査を始めた。遺構検出面は西に深く，東に浅くなっていた。この面で，石組みの遺構の一



盛土層（現代）
1．撹乱
2．表土
3．黄褐色砂質土
4．茶黄色砂質土
5．淡黄茶色砂質土
6．黄茶色砂質土
7．茶黄褐色砂質土
8．淡黄茶褐色砂質土（礫混り）
9．黄茶褐色砂質土
10．淡黄茶色礫混土
11．淡茶褐色砂質土（礫混り）
12．黄茶色砂質土
13．淡茶褐色砂質土
14．茶黄褐色砂質土
15．明茶黄褐色砂質土
16．淡茶褐色砂質土（礫混り）
17．黄茶色砂質土
18．盛土
19．明茶褐色砂質土
20．黄褐色砂質土

整地盛土層（第Ⅳ期）
1．暗茶黄色砂質土
2．淡黄褐色砂質土
3．黄褐色砂質土

版築層（第Ⅳ期）
1．暗黄灰褐色砂質土（砂礫混り）
2．黄茶色砂
3．淡黄茶色砂礫

造成盛土層（A）（第Ⅳ期）
1．淡黄茶色礫混土
2．淡黄褐色砂
3．淡茶黄色砂
4．暗茶褐色砂質土
5．黄褐色砂
6．茶褐色砂質土
7．淡褐色砂質土
8．黄褐色砂

墓道整地層（第Ⅲ期）
1．淡褐色砂質土（造成盛土）
2．褐色砂質土（造成盛土）
3．淡茶褐色砂質土（造成盛土）
4．淡茶黄褐色砂質土
5．淡茶色砂質土（造成盛土）
6．茶色砂質土
7．茶灰褐色土
8．暗茶黄褐色砂質土
9．茶黄褐色砂質土
10．濃茶黄褐色砂質土
11．黄褐色砂
12．淡黄茶色礫混土（造成盛土）
13．茶褐色砂質土
14．淡茶褐色砂質土
15．暗茶褐色砂質土
16．淡黄茶色砂礫土
17．暗灰褐色砂質土
18．暗茶灰色砂質土
19．暗茶灰褐色砂質土
20．暗灰褐色砂質土
21．黄茶色砂質土ブロック
22．淡茶褐色砂質土ブロック
23．暗茶褐色砂質土ブロック
24．暗茶灰褐色砂質土（礫混り）
25．暗茶灰褐色砂質土
26．暗茶黄褐色砂質土（礫混り）
27．茶黄褐色砂質土
28．明黄褐色砂質土
29．暗黄褐色砂質土
30．暗灰茶褐色砂質土

整地盛土層（第Ⅲ期）
1．淡茶黄色砂質土
2．淡黄褐色砂質土
3．茶褐色砂質土（黄色土混り）
4．暗茶黄褐色砂質土
5．淡黄茶色砂質土
6．濃茶褐色砂質土
7．茶黄褐色砂質土
8．淡黄茶色砂質土（礫混り）
9．濃茶褐色砂質土
10．暗茶褐色砂質土
11．明茶褐色砂質土
12．淡茶黄褐色砂質土
13．黄褐色砂質土
14．淡黄褐色砂質土
15．茶黄褐色砂質土

整地盛土層（第Ⅱ期）
1．暗茶灰褐色砂質土
2．茶黄色砂質土
3．茶黄褐色礫混土
4．暗茶灰褐色砂質土（砂礫混り）
5．淡茶黄色砂質土
6．淡茶黄褐色土
7．暗黄褐色砂質土（礫混り）
8．黄茶褐色砂質土
9．暗黄茶褐色砂質土
10．明茶色砂質土
11．明茶褐色砂質土
12．暗黄茶色礫
13．淡茶褐色砂質土
14．茶褐色砂質土
15．暗茶黄色礫混土
16．暗茶褐色砂質土
17．淡黄褐色砂質土（礫混り）
18．淡茶褐色砂質土（礫混り）
19．黄色砂質土

造成盛土層（B）（第Ⅱ期）
1．明茶褐色土
2．暗茶黄褐色砂質土
3．暗茶褐色砂質土
4．暗黄茶褐色砂質土
5．淡黄茶褐色砂質土

整地盛土最下層（第Ⅱ期）
1．暗黄茶褐色砂質土（黄色土混り）
2．黄色砂質土（茶色土混り）
3．暗黄茶褐色砂質土（礫混り）
4．黒褐色砂質土

整地盛土層（第Ⅰ期）
1．茶灰色砂質土
2．炭
3．焼土
4．暗茶灰色砂質土

自然堆積層（第Ⅰ期）
1．茶色砂質土
2．淡茶褐色砂質土

遺構埋土層
1．黄茶色砂質土
2．暗黄褐色砂質土（礫混り）
3．黄茶褐色砂質土
4．茶黄褐色砂質土
5．暗黄褐色礫（砂質土混り）
（土壙ＳＫ20737）
6．黄褐色礫
7．茶灰色砂質土（礫散）（雨落溝ＳＤ20718）
8．茶灰褐色砂質土（火葬墓ＳＸ20717・20727・20730）
9．明茶灰褐色砂質土（火葬墓ＳＸ20730）
10．暗茶褐色砂質土
11．茶褐色砂質土
12．淡茶褐色砂質土（礫混り）
13．明茶褐色砂質土
14．濃茶褐色砂質土（黄色土混り）
15．濃茶褐色砂質土
（火葬墓ＳＸ20717）
16．暗茶褐色砂質土
17．茶色砂質土
18．淡茶色砂質土
（土壙ＳＫ20761）
19．暗茶褐色砂質土（土壙ＳＫ20762）
20．暗茶灰色砂質土（土壙ＳＫ20736）
21．暗黄褐色砂質土（土壙ＳＫ20743）
22．茶灰褐色砂質土
23．暗茶灰褐色砂質土
24．淡茶褐色砂質土（溝ＳＤ20763）
25．暗茶褐色砂質土（土壙ＳＫ20764）
ＳＸ20756

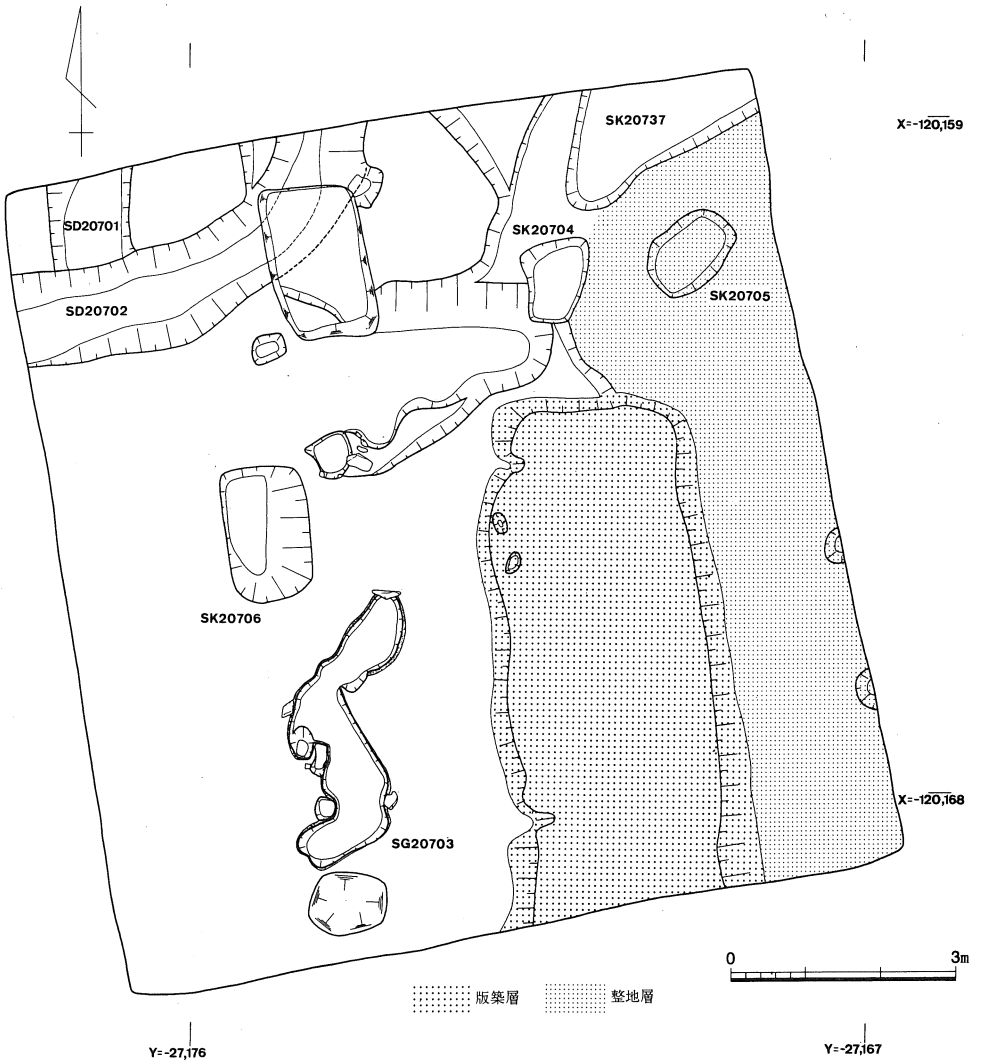
第48図　調査地土層図（1/40）

部と池状の遺構を検出した。石組み遺構は，層位関係から池より古いことが明らかになり，この段階では，少なくとも２面の遺構面があることを確認した。池状遺構を除去し，石組み遺構を面的に捕えた段階で，この遺構が火葬墓であることが明らかになった。このため，光林寺住職及び檀家の総代，役員の方々と協議し，９月14日に当寺住職による供養がとり行われた。

さらに下層からは土葬墓が検出され，この面を掘り下げた段階で無遺物地山層に達した。すなわち，合計４面の遺構検出面を確認し，これを古い順に第Ⅰ期…第Ⅳ期と呼ぶことにした。

3　検　出　遺　構

第Ⅳ期（第49図，図版29－(1)）　泉水状の池や版築層の他，溝・土壙等の検出された遺構面の時期である。このうち，土壙ＳＫ20704，ＳＫ20705，ＳＫ20706が最も新らしい。いずれも長方形の平面形である。溝ＳＤ20702と池ＳＧ20703及び版築層は，ほぼ同時期の構築と思わ



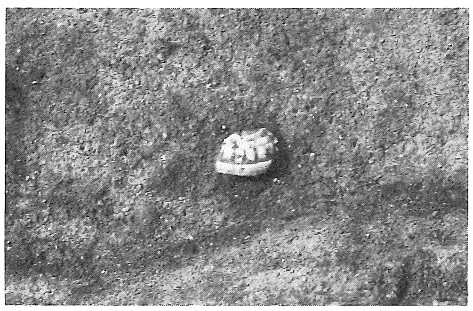
第49図　第Ⅳ期遺構配置図（１/100）

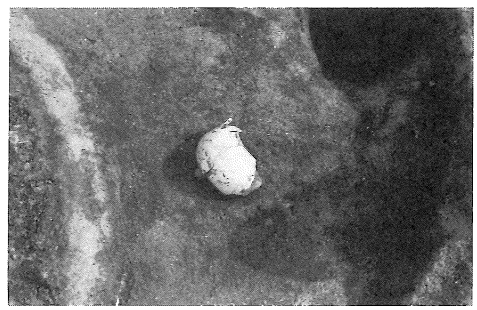
れる。この遺構検出面の北端部は，溝ＳＤ20702を境に一段高く，段丘礫層が露頭している。東側は整地盛土と版築によって一段高い面を築いている。この結果，調査トレンチの北辺側と東辺部側が高く，他の低く平垣な大部分と隔絶している。池ＳＧ20703は，低く平坦になっている中央部より検出された。版築上からは，柱穴や根石等の建物基礎構造は検出できなかった。しかし，整地盛土の上層に，重みにより沈み込んだとみられる部分的な層の褶曲状沈み込みが観察できた（第48図(2)）。この層の沈み込みは建物の柱の重みによると考えられ，整地盛土上に建物が建てられていたと考えられる。版築層は，整地盛土層を西へ広げ，付け加えるかのように敷かれていた。整地盛土上の建物を西へ増築した際のものと思われる。層位関係では，整地盛上の後に版築されていることが確認される（第48図(3)）。

池ＳＧ20703（第50・51図，図版29－(2)）　漆喰により固められた池で，Ｓ字形の平面形に築かれている。各屈曲部や北端部には，人頭大の河原石や割石が置かれている。また，置き石の見られない屈曲部には，石の抜き取り穴がある。これらの石は，漆喰を張ると同時に，計画的に据えられたもので，石の下半部は漆喰に封じ込められていた（第50図(1)・(2)）。池の西辺中央部の張り出した部分に，円形の柱穴状に深くした所があり，深さ約0.3ｍを測る。池自体の規模は，全長3.7ｍ，幅0.9～0.4ｍで，深さ0.1ｍを測る。小規模な池ではあるが，漆喰で築き，置石がある等，平面形や構築法に装飾性があり，泉水として築かれたものと思われる。埋土は一層で，池の中央部から土瓶（第50図(4)）が，南隅から伏見人形（第50図(3)）が出土した。土瓶はほぼ完形に復元することができた。

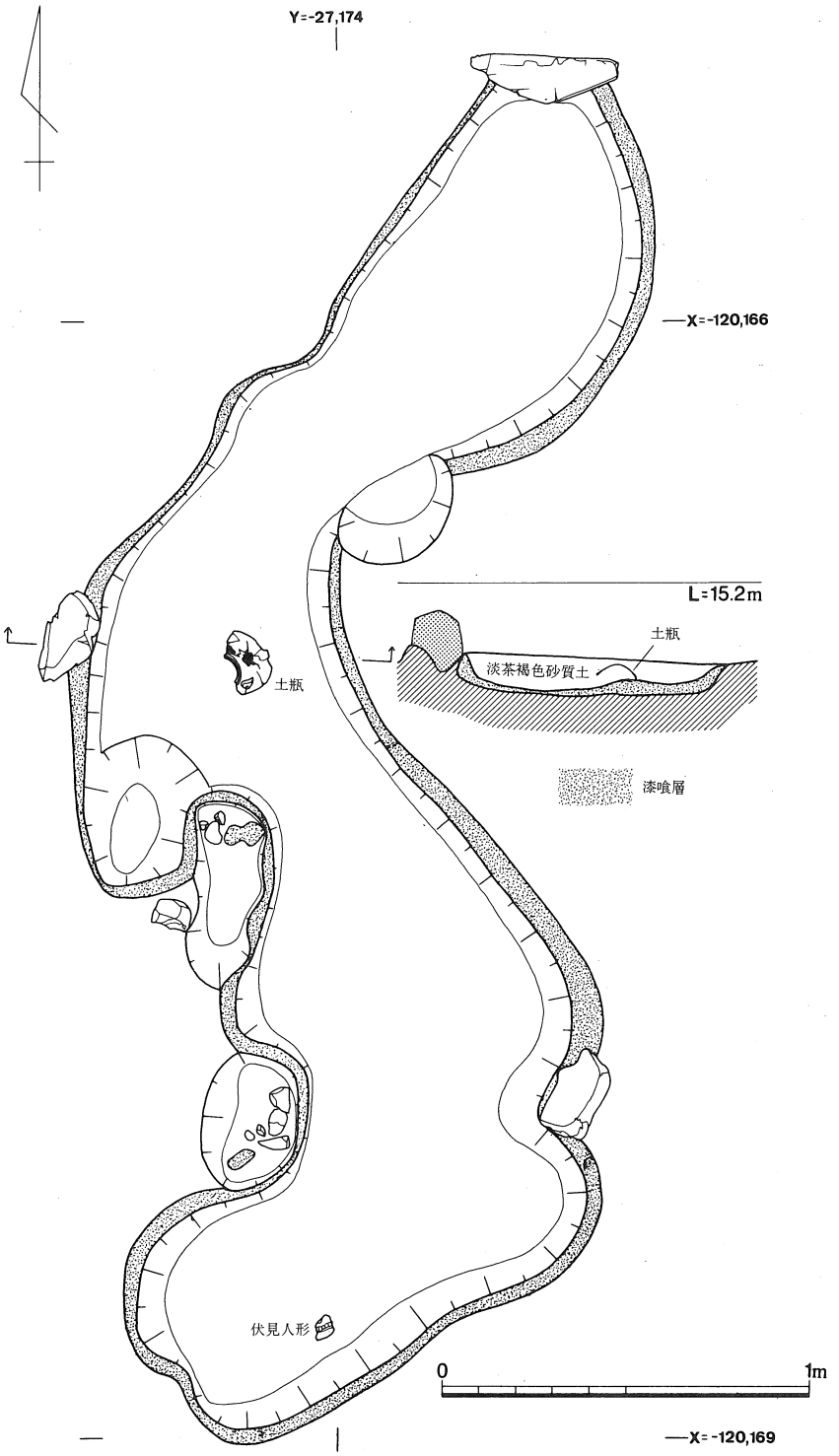
(1)

(2)


(3)


(4)

第50図　池ＳＧ20703の細部（１～２は構築状況，３～４は遺物出土状況）



第51図　池ＳＧ20703実測図（1/20）

第Ⅲ期（第52図，図版30－(1)・(2)）　この時期の遺構は，石敷きの溝と火葬墓等からなる遺構群で，第Ⅳ期検出面の版築層と造成盛土を除去した段階で明らかになった。火葬墓は，いずれも石組みにより築かれており，南北方向に配列した３列と，東西方向に配列した１列からなる（第52図）。東西方向の火葬墓列群（以下，火葬墓Ｄ列群と呼ぶ）は墓域の北限を画しており，この列群より北側は一段高く，段丘礫層が露頭している。また，南北方向の３列の火葬墓群との間に，幅約0.6ｍの空間があり，墓道としている。南北方向の各列は，相互に平行して築かれている。南北方向の火葬墓列のうち，東端の列群を火葬墓Ａ列群，中央の列群を火葬墓Ｂ列群，西端の列群をＣ列群と呼ぶ。この南北方向の各列群間には墓道としての空間があり，Ｃ列群の西側にも認められる。各墓道は，砂層や砂質土を幾層にも重ねて構築されている。この墓道の規模は，各々異なり，火葬墓Ａ列群とＢ列群の間は1.2ｍ，火葬墓Ｂ列群とＣ列群の

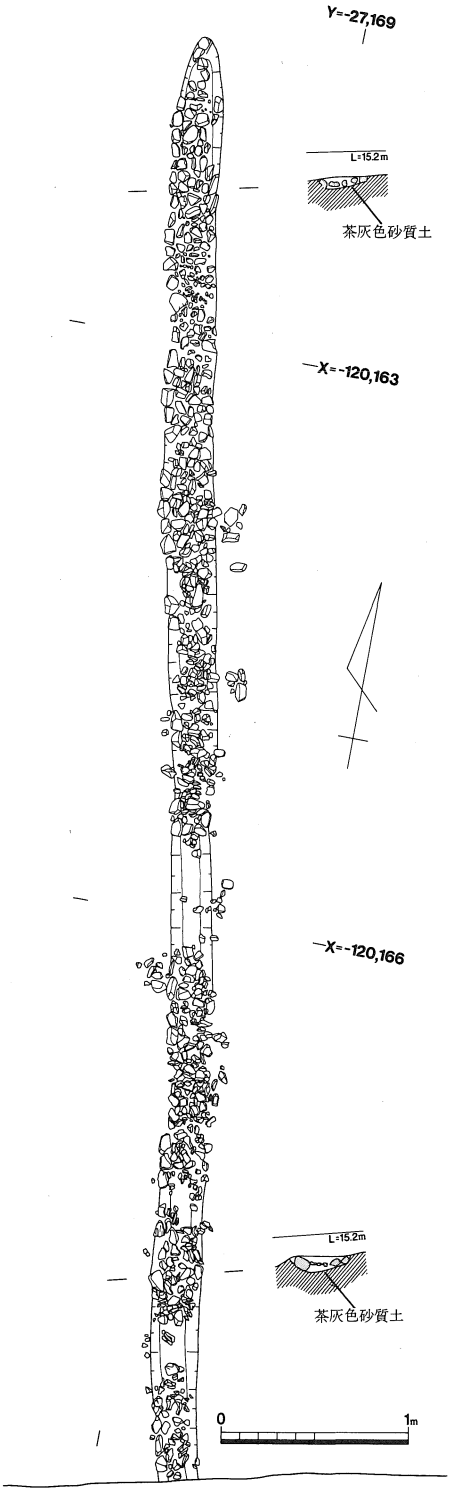
第52図　第Ⅲ期遺構配置図（１/100）

間は0.8mを測る。また，火葬墓A～C列群とその間にある墓道は，さらに南へ伸びている。石敷きの溝SD20718は，南北方向の火葬墓A～C列群と平行しており，A列群との間は約1.6mを有する。しかし，その空間地には，火葬墓列群の各間に見られた重層した土層は認められず，墓道としての空間地ではない。石敷きの溝より東側は，なだらかに高くなり，トレンチ東端近くで平坦面になる。この比高差は，0.4mを測る。

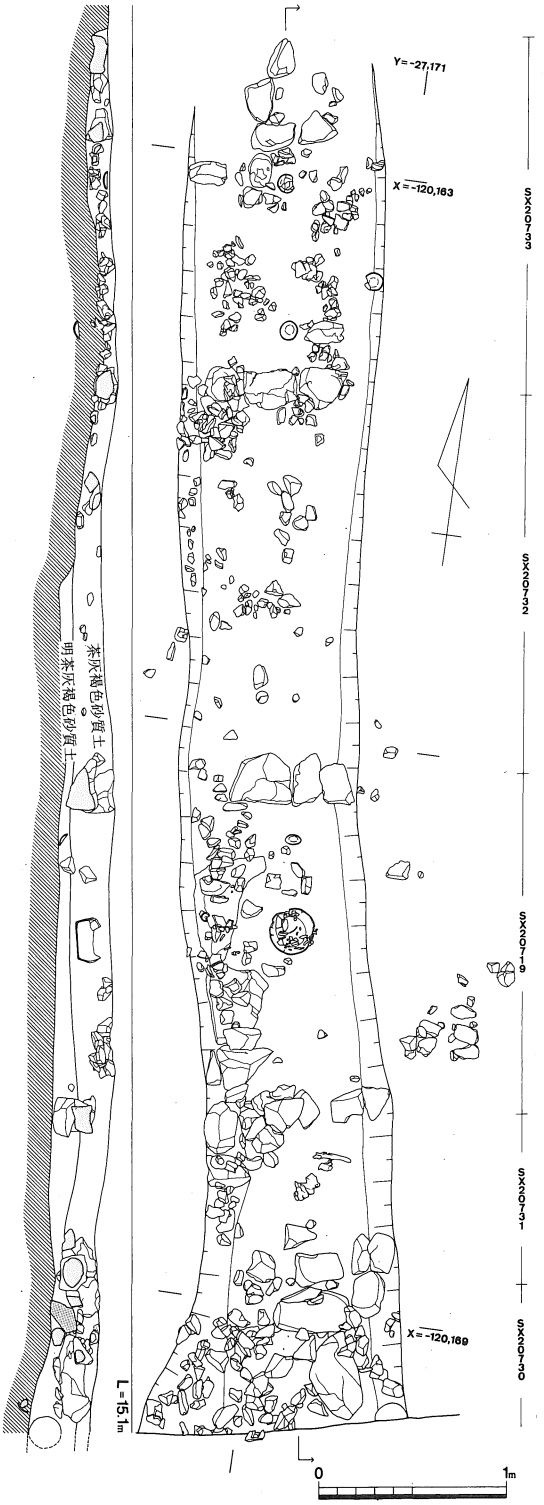
溝SD20718（第53図）　当溝は，整地盛土上に設けられた南北方向の溝で，幅0.3m，深さ約0.1mを測る。溝内は全面に小石を敷きつめていた。溝内の底に敷かれた石には小ぶりのものを使用し，溝の両肩には，やや大きめの石を使用し，石の長径を溝の方向に沿って並べている。このことから，素掘りした溝の両肩に長い石を並べ，その間に小石を敷きつめて造られたと察せられる。

この溝は，整地盛土の西辺に沿って掘られている。溝北限と整地盛土の北限との間は約1.5m，溝西肩と整地層盛土西限との間は約1mで，整地盛土の構築と当溝の設置とは関係深いと思われる。おそらく，整地盛土は建物の基礎構造のために造られたもので，当溝はその建物の雨落ち溝としての機能を果たしていたのではないかと思われる。

火葬墓A列群（第54図）　A列群は南北方向に，幅約1mの溝を掘り，トレンチで南北の長さ約7.3mにわたって検出された。この溝は，0.3～0.5m角程度の石を切断する形で，並べて区画し，5基の火葬墓を築いている。火葬骨は，各区画内の一ヶ所又は数ヶ所に集中して検出されることが多かった。各区画の上面には小石が散乱し，また一部分では密集していた。おそらく，全面に小石が敷きつめられていたのであろう。このような，5つに区切られた各



第53図　石敷溝SD20718実測図（1/40）



第54図　火葬墓Ａ列群（1/40）

区画を北から順に，火葬墓ＳＸ20733，ＳＸ20732，ＳＸ20719，ＳＸ20731，ＳＸ20730と呼び，これについて概観する。

火葬墓ＳＸ20733　東西幅約１ｍの南北溝を南北1.8ｍに区画されたもので，火葬墓Ａ列群の北端に位置する。南側の区画石列は，火葬墓ＳＸ20732の北区画を兼ねる。火葬骨は，当区画内全体に散乱し，まとまりは認められなかった。度重なる納骨により撹乱された骨片であろう。納骨器は，小壺が一点出土した。しかし，鉄釘が数点出土していることから，木箱による納骨の可能性がある。納骨後は，上面に小石を敷いたと思われる。当区画の北端部には，区画石列に使われた石とほぼ同じ大きさの石で小さく方形に配置した部分があり，当火葬墓は，２基に分かれる可能性がある。

火葬墓ＳＸ20732（図版31－(1)～(4)）

東西幅約１ｍの溝を，南北2.1ｍに区画されたものである。南側の区画石列は，火葬墓ＳＸ20719の北区画と兼用である。火葬骨は，北西端と中央部北よりの位置に多く散乱していたが，まとまった状況ではない。それぞれの骨片集中部分には，一文銭が一枚ずつ出土した。北西端のものは寛永通寶を石組みの間に，中央のものは元祐通寶を，それぞれ裏面を上にして検出された。いずれも骨片より上で出土した。北西部の骨片直上では，唐津焼の皿底部片が，内面を上にして出土した。

火葬墓ＳＸ20719（図版31－(5)・(6)）

東西幅約１ｍの溝を南北約1.8ｍに区画

されたものである。南側の区画石列は，火葬墓ＳＸ20731の北区画と兼用である。当区画の中央部には，有蓋骨壺が置かれ，火葬骨が納められていた。この骨壺の上半部は西方に押し壊されており，壺の肩部から蓋までが骨とともに，当区画西辺にまで散乱していた。骨壺の北側にも小量の火葬骨が散乱していたが，木箱に当骨壺が納められ，埋納されていたため，上半部分が削られた際に，木箱と骨壺との間の空間にこぼれ落ちたものと考えられる。

当区画の西辺では，北と南を区画する石とほぼ同じ大きさの石が配列してあるのが検出された。この西辺中央部の列石上には，小壺が２個置かれていた。東辺には石列は認められない。

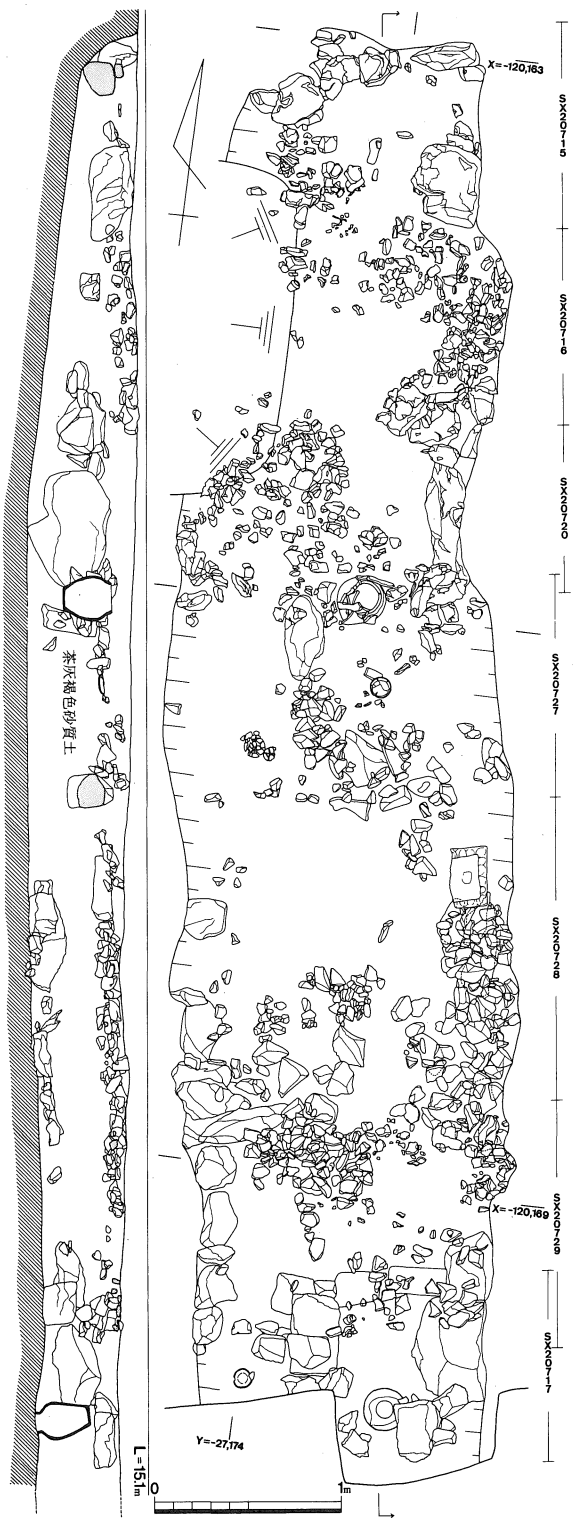
火葬墓ＳＸ20731（図版31－(7)・(8)）　東西幅約１ｍの溝を，南北１ｍに区画したものである。南側の区画石列は，当火葬墓のための石列であり，南に続く火葬墓ＳＸ20730とは兼用していない。元来兼用の石列として置かれ，後に整備され，固別の区画となったと考えられる（図版31－(7)）。火葬骨は，当区画のほぼ中央部にまとまって検出された。その範囲は，ほぼ方形にまとまっており，火葬骨のまとまり状況から，約0.5ｍ四方の木箱による埋納と考えられる（図版31－(8)）。

火葬墓ＳＸ20730　当火葬墓は，火葬墓Ａ列群中では最も大きな石を使用している。区画石列は東辺と北辺で確認された。西辺には小石しかなく，南辺は調査トレンチよりさらに南であり，石列の有無は確認できなかった。東辺の石列内には，五輪塔の水輪部が転用されていた。当火葬墓の北辺区画石列は，火葬墓ＳＸ20731の南辺区画石列群の南に接して配列されており，石の大きさは，ひとまわり大きい。この石列から南は，火葬墓Ａ列群を構成している南北溝の西肩が広がり，最大幅1.4ｍを有する。当火葬墓は，区画石列の大きさが火葬墓Ａ列群内で最も大きいこと，区画石列が当火葬墓のためにのみ置かれた状況であること，火葬墓Ａ列を構成する溝に乱れがあること等から，Ａ列群中では最も新らしく築かれたものであろうと思われる。

火葬骨は，トレンチ南辺にかかる部分の当区画中央部付近に散乱していたが，まとまりはなかった。

火葬墓Ｂ列群（第55図）　3列の南北方向に長い火葬墓群の中央で検出された墓群である。各火葬墓列群のうち最も幅が広く，約1.6ｍを測る。南北長7.8ｍを検出したが，さらに南へ伸びている。この溝は，東西方向の石列により７区画に分けられている。区画石列の大きさは，火葬墓Ａ列群に比して不揃いで，区画も明瞭さを欠く。また，南北溝を東西方向の石列で区画したものをさらに南北方向の石列で縦に２分したものも含まれている。上面に敷かれた小石は，他のどの列群よりも多く残り，敷きつめた状況が良好な形で観察できた部分がある。当列群の７区画を北から順に，火葬墓ＳＸ20715，ＳＸ20716，ＳＸ20720，ＳＸ20727，ＳＸ20728，ＳＸ20729，ＳＸ20717と呼び，以下にこれを概観する。

火葬墓ＳＸ20715（図版32－(1)・(2)）　火葬墓Ｂ列群の北端にあり，北辺と南東隅，北西隅に区画石及び石列があるが，西辺には小石しか検出されなかった。東西幅約1.6ｍの溝を，



第55図　火葬墓Ｂ列群（1/40）

南北1.2ｍに区画したものである。当区画内のほぼ中央部に火葬骨が集中して検出された。この火葬骨に混じって，焼成を受けた鉄釘等が出土した。また，焼成を受けていない鉄釘も数点あり，納骨に木箱が使用されたと考えられよう。

火葬墓ＳＸ20716　大石による区画石列はみられない。しかし，火葬墓ＳＸ20715の南東隅の区画石と火葬墓ＳＸ20720の北東隅の区画石を当区画に兼用していたと思われ，この両区画石間の上面には，小石敷が方形の面として検出された。小石敷は，東西幅約1.6ｍの溝内におさまり，南北0.9ｍの範囲である。このほぼ中央部に少量小片の火葬骨が出土した。また，西半部ほぼ中央からは，小壺が１個出土し，壺内には歯が納められていた。

火葬墓ＳＸ20720　東西幅約1.6ｍの南北溝に北東部と南東に区画石を置き，南北約0.9ｍに区切ったものである。東辺には長さ約0.7ｍ，厚さ0.2ｍ，幅0.4ｍの大きな石を置いている。西半分の上面には小石が散乱し南西端にやや大きめの礫が置かれていた。

火葬墓ＳＸ20727（図版32―(3)・(4)）

東西幅約1.6ｍの南溝を，南北１ｍに区切ったもので，さらにこれを南北に２分している。当墓の場合，四周を区画する石が列として並べておらず，北東隅，西北隅，南辺中央東寄りの各個所に１～３個の石が置かれているに

すぎない。また，南北に２分する区画石も，中央やや北寄りに１個の大石が，置かれている状況で検出された。北辺は，火葬墓ＳＸ20720の南辺を一部壊して広げており，火葬墓ＳＸ20720の南辺区画線上に当墓の骨壺が埋納されていた。この骨壺は，当墓東半分区画の中央北寄りに置かれたものである。壺内には，ほぼ大人一体分と思われる火葬骨が埋納されていた。また，当墓東半分区画中央部には，直径0.2ｍの範囲に火葬骨が集中し，その直上に，合口にした土師器皿が置かれていた。土師器皿の中には，灰とともに，粉状の火葬骨片が納められていた。西半分の区画範囲内には，納骨器はみられず，土師器皿が３枚重ねにして置かれていた他，小骨片がまばらに出土しただけである。

火葬墓ＳＸ20728　東西幅約1.6ｍの溝を，南北２ｍに区画したものである。石列による区画は，南西隅と東辺中央部で検出されたが，他の辺では確認されなかった。しかし，上面に敷かれた小石のうち，やや大きめの石が北辺，東辺，南辺の各所に見受けられ，その範囲を知ることができる。また，東辺のほぼ中央部に，墓碑の基礎と思われる花崗岩製の作工石の破損品が置かれていた。上面に敷かれた小石は，この東辺部南半分で原状を保った状況で検出された。この小石敷の下からは，平安時代の軒平瓦が出土した。火葬骨は，当墓区画の南西隅近くに，少量がまとまって出土した他は，各所に散乱していた。

火葬墓ＳＸ20729（図版32－(5)・(6)）　東西幅約1.6ｍの溝を，南北1.2ｍに区切ったものである。西辺には整然と並べられた石列を検出したが，南辺の東半分は火葬墓ＳＸ20717により壊されていた。火葬骨は中央部南寄りに，一辺約0.4ｍ程度の方形に近い平面形で集中して検出された。この骨群は，火葬墓ＳＸ20717の北区画石列上に一部が乗り，それより新らしい埋葬であることが知られる。その埋葬形態は，鉄釘が骨に混じっていたことから，木箱による埋納と考えられる。また，火葬骨とともに，熱で癒着した六文銭や，ガラス玉，管状容器等が混じって出土した。上面の石敷きは，北辺中央部に見られる。

火葬墓ＳＸ20717（図版32－(7)・(8)）　火葬墓ＳＸ20729の南東部を一部破壊して築かれたもので，東西幅1.6ｍの溝の東半分，南北0.8ｍ，東西0.8ｍの方形に区画されている。四周を大きな石で区画し，中央部には四耳壺を倒立させて置かれていた。壺内には，大人一体分と思われる火葬骨が納められていた。蓋の痕跡は認め

第56図　火葬墓Ｂ列群の遺物出土状況

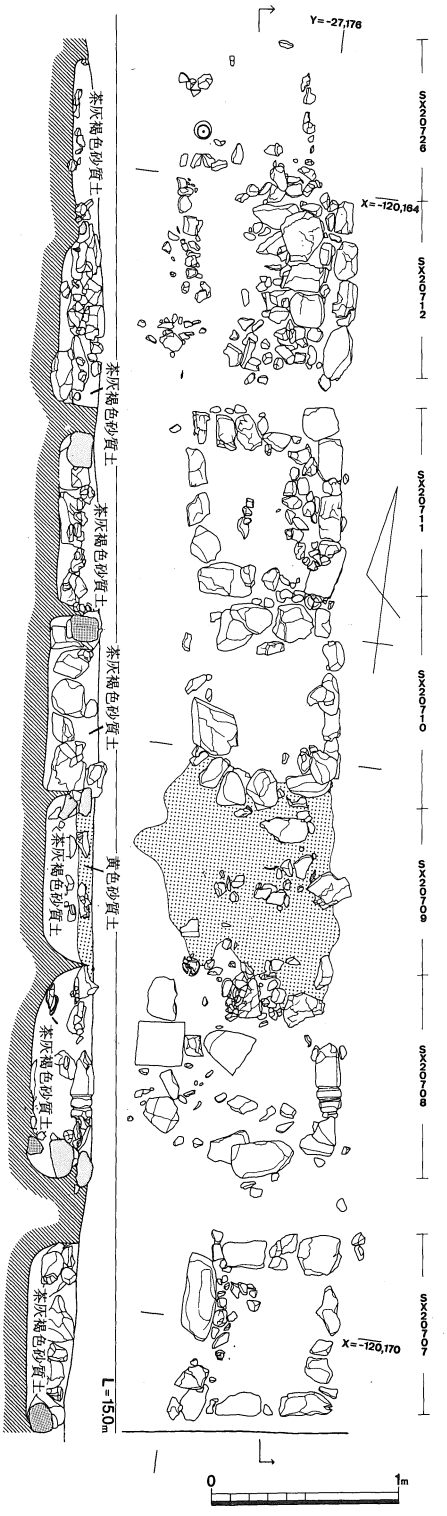
られなかったが，木や衣，紙等により封じてあったと思われる。

火葬墓Ｃ列群　当列群は，南北に長く配列された火葬墓列群のうち，最も西側の列群である。Ａ・Ｂ両列群と異なり，四周の石列が明瞭で，共通する区画石列を持たず，各墓が独立して築かれている。区画に用いられた石も，0.3ｍ前後のものが最も大きく，大小の差が少ない。火葬墓Ａ・Ｂ両列群では，中には大きな石が使用されたりしているが，当列群では，そのような列はない。

当列群は，調査区内で南北7.4ｍにわたって検出され，さらに南へ伸びている。当列群の検出範囲内では，７基の墓が並んで構成されており，北から順に，火葬墓ＳＸ20726，ＳＸ20712，ＳＸ20711，ＳＸ20710，ＳＸ20709，ＳＸ20708，ＳＸ20707と呼ぶ。これらの各規模は，火葬墓Ａ・Ｂ両列群に比して小規模である。しかし，区画石は堅固に築かれている。また，Ａ・Ｂ両列群に見られた大型の蔵骨器や，まとまった火葬骨は検出されなかった。以下に各個の火葬墓について概観する。

火葬墓ＳＸ20726（図版33－(1)・(2)）　火葬墓Ｃ列群の北端で検出されたものである。このＣ列群内にあって，当火葬墓と後に見る火葬墓ＳＸ20709だけが，四周に石列を持たない例である。しかし，当墓は，四周に小石を残し，その規模は，東西0.75ｍ，南北0.85ｍであることが確認できる（図版33－(1)）。

当墓の南西部には，白磁製の骨壺が埋納されていた。壺内には，数点の火葬骨が納められていた。この骨壺の南東傍からは，小壺が出土し中に歯が納められていた。この他，区画内にも



第57図　火葬墓Ｃ列群（1/40）

少量の火葬骨が散乱していた。

火葬墓ＳＸ20712　南北，東西ともに１ｍの方形に区切られたものである。西半分は石列が見られず，小石が並んで置かれていた。東半分は良く残り，当墓の構築方法を知ることができる。すなわち，長軸をもつ人頭大の石を周囲に置いて四角く区画し，納骨後埋め戻して小石を敷き，その上に上面が平坦になるように，平らな面をもつ石数個を置いている。おそらく，この上に墓碑が置かれていたのであろう。小石敷きの上に置かれた石のひとつには，砥石が転用されていた。当墓内からは，火葬骨の小片が散乱した状態で出土したが，納骨器はなかった。

火葬墓ＳＸ20711　南北1.4ｍ，東西0.8ｍの方形区画をもつ墓である。火葬墓Ｃ列群内では，四周の石列が最も良好な形で検出された。東辺の区画石列は，ほとんど現位置を保っており，西辺がやや乱れている。上面では，当墓の東辺に添って小石敷が認められた。墓内からは，火葬骨の小片が散乱して出土したが，他に埋納物は出土しなかった。

火葬墓ＳＸ20710　南北1.4ｍ，東西0.8ｍの方形区画で，北西隅の区画石を欠損している。南辺は南へずれて広がっている。東辺の石列は，他の各辺の石列よりも，やや小さめの石を使用している。墓内部からは，小片の火葬骨が少量出土したが，散逸的であった。

火葬墓ＳＸ20709（図版33－(3)・(4)）　当墓には，四周を区画する石がなく，上面に黄色砂質土を張っていた。その範囲は，火葬墓ＳＸ20710の南辺石列と火葬墓ＳＸ20708の北辺石列との間にあり，平面形は，東西0.8ｍ，南北１ｍ前後の方形である。黄色砂質土の上には，小石が部分的に認められたが，敷いたものかは判然としない。当墓の北東隅寄りには，刷毛目唐津の蓋物が置かれ，蓋の上に拳大の割石が置かれていた。蓋物内には，火葬骨が数片納められていた。

火葬墓ＳＸ20708（図版33－(5)～(8)）　当墓は，四周の石列が散在しており，荒い区画となっている（図版33－(5)）。その範囲は，東西1.2ｍ，南北1.8ｍである。また，区画に使用された石も，他の墓と異質で，花崗岩製の墓碑等を使用している。例えば，南辺には石仏を裏面を上にして（図版33－(6)），西辺では五輪塔火輪部を倒立した状態で（図版33－(7)），東辺部では一石五輪塔を横転させて（図版33－(8)），それぞれの区画に転用している。

火葬骨は，当墓内全域に散らばり，まとまりはなく，また納骨器等も出土しなかった。

火葬墓ＳＸ20707　火葬墓Ｃ列群で最も南に検出された。当墓は，火葬墓Ａ列群の各墓の区画と直線的に繋がらず，全体に東寄りに築かれている。四周の石は比較的整った形で方形に配列され，南北１ｍ，東西0.9ｍの規模をもつ。配列された四周の石の組み合わせの際，透間を小石で埋めている。西辺に置かれた区画石沿いには，上面に敷かれた小石が残る。墓の内部では，南西隅の区画石と西辺の区画石の間に挟まれた状態で，少量の火葬骨が，まとまって出土した他，火葬骨小片の散乱が見られただけで，納骨器等は，出土しなかった。

火葬墓Ｄ列群（第58図）　当列群は，火葬墓地の北限に位置し，これより北は一段高くなっている。当列群は，東西方向に並べられた火葬墓群で，全長3.7ｍを検出した。この並びに

は，４つの区画が認められ，各墓の構築方法は，火葬墓Ｃ列群で見られた各墓と同方式のものである。しかし，残存状況は悪く，後世の攪乱が著しい。当列群を構成する４区画を東から順に，火葬墓ＳＸ20735，ＳＸ20734，ＳＸ20714，ＳＸ20713と呼び，以下にこれを概観する。

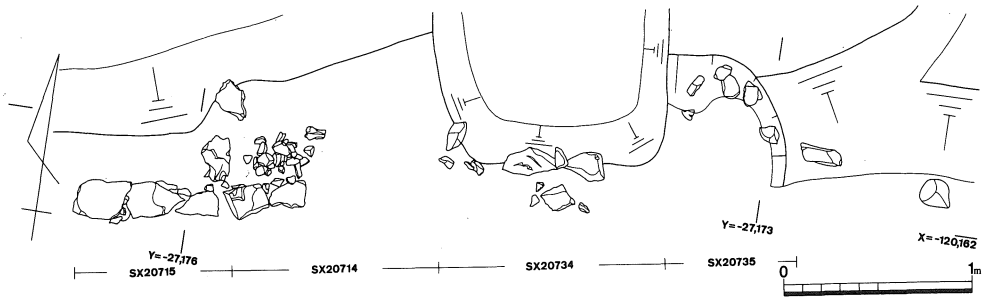
火葬墓ＳＸ20735　火葬墓Ｄ列群の東端で検出されたもので，少量の小石群が検出された。当墓の北側は一段高く，段丘礫層が露頭している。この高まりを切土して，当墓の面積を確保している。その規模は，南北0.8m，東西0.8m前後の方形であったと思われる。墓内からは，土師器の皿が数点出土したのみであった。

火葬墓ＳＸ20734　当墓は，大部分が北側からの後世の攪乱により破壊されている。しかし，南端部には，区画石列の一部が原位置を保っていた。その周辺には，小石も少量確認され，墓の構築に使用されたものが崩落したものと思われる。正確な規模は知り得ないが，石の分布状況から，南北0.8m，東西1.0m前後の方形区画であったと思われる。

火葬墓ＳＸ20714　当墓では，東半分は消失しているが，南西部に区画石列の一部が検出された。また，そこには，小石が集中して見られ，上面に石敷きのあったことが推定できる。西辺の区画は，北西部で一ヶ所だけ残っており，当墓の規模を，東西1.2m，南北0.8m前後であったと考えられる。

火葬墓ＳＸ20713　当墓は，火葬墓Ｄ列群の西端で検出されたもので，南辺の区画石列の一部を良好な形で検出できた。しかし，西辺の区画石列は検出されず，東西の範囲が明らかでない。北側も，当調査で検出した第Ⅳ期の溝ＳＤ20702によって削られている。

その他の遺構　当遺構面では，前記した火葬墓の他に，土壙ＳＫ20737，ＳＫ20724，溝ＳＤ20725，ＳＤ20732がある。土壙ＳＫ20737は，トレンチ西辺の整地盛土と北辺の段丘礫を掘ったものである。深さは0.6mを測る。北側は，トレンチの北西端にかかり，これよりさらに北へ伸びるため，全形及び平面規模は明らかでない。土層は６層からなり，その中には，大量の礫を含む層がある（第48図―(1)）。その他の土壙や溝は，火葬墓Ａ列群と火葬墓Ｂ列群の間にある墓道に掘られたもので，いずれも浅く，深さ0.1m前後である。

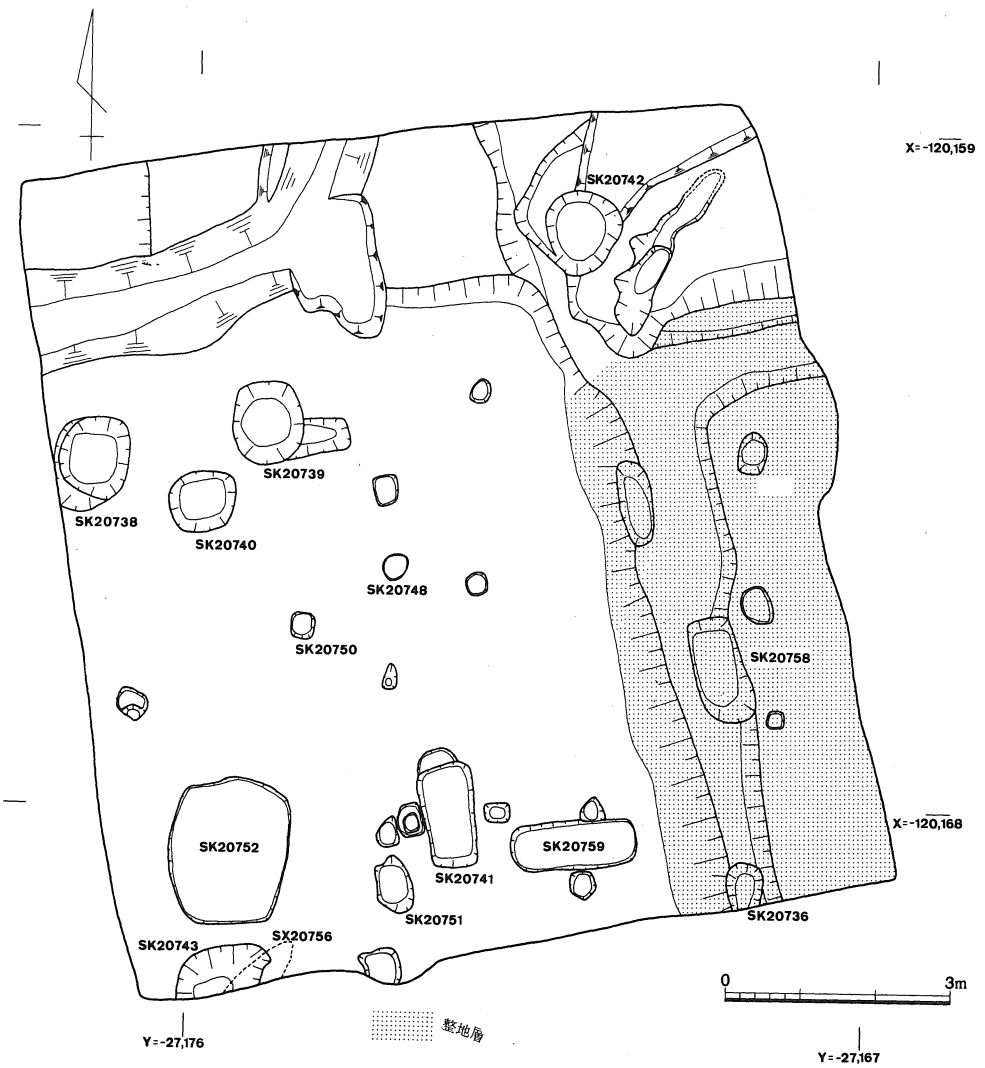


第58図　火葬墓Ｄ列群（1/40）

第II期（第59図，図版34－(1)）　第III期の火葬墓を除去し，墓道整地層や整地盛土の上層を掘り下げた段階で，土葬墓をはじめ，土壙やピット等が検出された。この検出面を第II期とした。トレンチ北辺部は，第IV期の面から見られた段丘礫層が露頭し，一段高まっている。トレンチ東辺部では一段高くなっている。第III期の建物の基段と思われる整地盛土部分で，この層は大きく２層に分かれ，その上層を除去した段階で，土壙やピットが検出された。この第II期の面は，III期の墓域部分を平均0.4m，整地盛土部分を平均0.2m掘り下げて明らかになった。北部にある高まりの比高差は，最大0.5m，東部の整地盛土の高まりの比高差は，最大0.8mを測る。

当面で検出された遺構には，一部にまとまりが認められる。すなわち，土葬墓の座棺によるものは北西部に，寝棺によるものは南東部に集まり，整地盛土下層上面には柱穴がみられる。以下に，各遺構ごとに概観する。

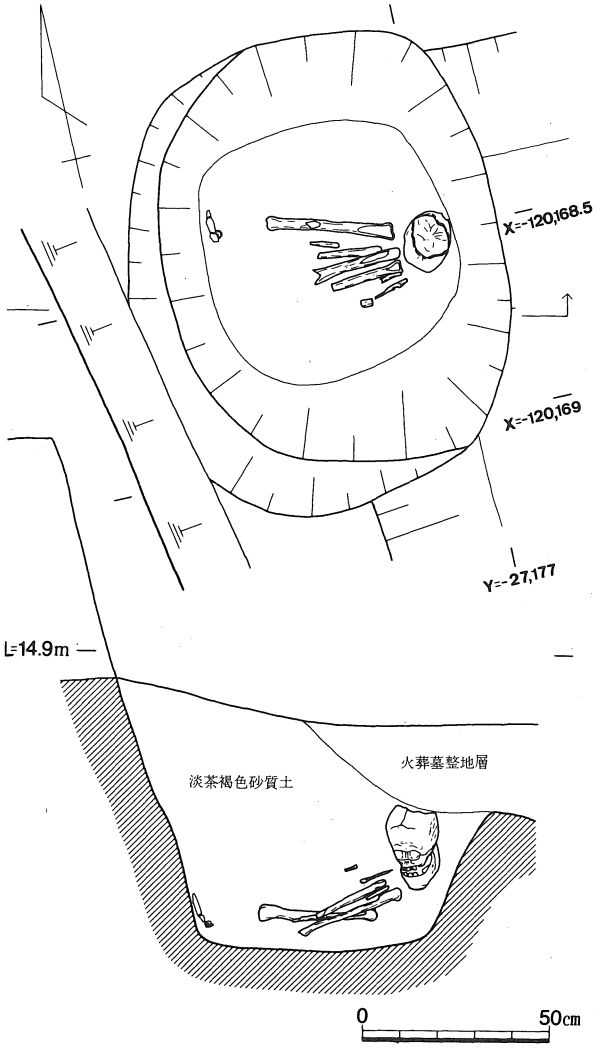
土葬墓ＳＫ20738（第60図，図版35－(1)）　土葬墓の中で，最も残りが良好なものである。平面形は楕円形で，長径2.3m，短径２ｍを測る。段丘礫層を，深さ1.4ｍまで掘り下げ，底面



第59図　　第II期遺構配置図（1/100）

は直径1.2mの円形になっている。埋土は1層からなる。当墓壙内の深さ0.6mの位置から東よりに，頭骨が検出された。深さ0.8m以下には，他の骨類が出土した。これらは，頭骨の下方から放斜状に検出され，その位置関係から，足や腕の骨と思われる。また，当墓の掘り形や人骨各部の検出状況から，座棺による土葬と察せられる。頭骨が南西を向き，他の骨類が北西から南西方向に放斜状にあることから，ほぼ西向きに埋葬されたことが窺える。

副葬品には，刀子と六文銭がある。この二者は，墓壙の北西部から出土し，六文銭の上に刀子の柄部分が重なる状態で検出された（図版35－(1)右下）。六文銭は，表面を上にし，六枚重ねにした状態で出土した。その出土位置が，骨の出土した最も深い位置と同じ深さであることから，棺の上に置かれ，棺が腐って陥落した際に落ち込んだとは考えられず，副葬された原位置を保っていると思われる。



第60図　土葬墓ＳＫ20738実測図（1/20）

土葬墓ＳＫ20739　当遺構は，直径1m，深さ0.8mを測る土壙である。土壙内からの出土品はなく，埋土は1層であった。掘り形の形態，規模から，土葬墓ＳＫ20738と同様な座棺であったと思われる。

土葬墓ＳＫ20740　当遺構は，東西0.9m，南北0.8mの楕円形に掘られた土壙で，深さ0.7mを測る。埋土は1層からなり，壙内からの出土品はない。

掘り形の規模は，土葬墓ＳＫ20738やＳＫ20739に比べてやや小さいが，形態から，座棺による土葬墓と思われる。

土葬墓ＳＫ20741　当墓は，長さ1.7m，幅0.8mの長方形に掘られた土壙で，深さ0.35mを測る。長軸は南北方向にある。埋土は1層であり出土遺物はなかった。当土壙の北辺は，二段に掘られている。

当遺構の性格は，出土遺物がないため，明らかでないが，平面形が長

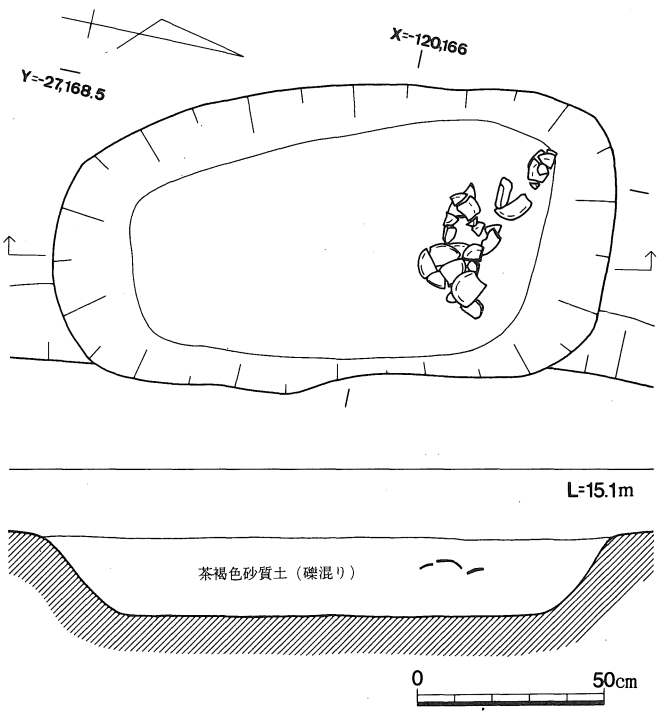
方形であり，棺を埋めるに充分であることと，同形態の土壙が東に隣接していること等から，寝棺による土葬墓と判断した。

土葬墓ＳＫ20759　土葬墓ＳＫ20741の東側で検出された土壙で，長さ1.7m，幅0.6m深さ0.3mを測る。埋土は1層で，出土遺物はなかった。平面形と規模から，寝棺による土葬墓と思われる。

土葬墓ＳＫ20758（第61図）

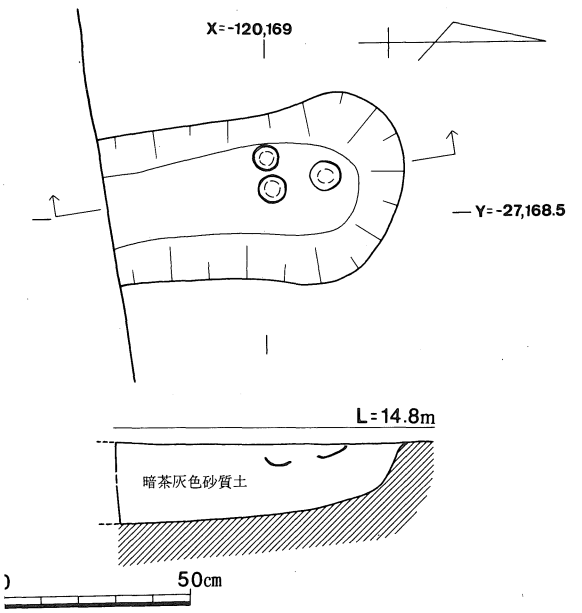
当遺構は，整地盛土の下層上面で検出された土壙である。東西1.5m，南北3.4mの南北に長い長方形で深さ0.3mを測る。

埋土は１層である。この層の中ほど，当土壙の北寄りの位置から，土師器の皿９枚と土師器の砂片が集積した状態で出土した。この土師器類は，棺埋葬の際に行われた供養に使用したものが副葬されたと思われる。また，土壙の規模が棺埋葬に充分であることから，寝棺による土葬と考えられる。



第61図　土葬墓ＳＫ20758 実測図（1/20）

土壙ＳＫ20736（第62図）　当土壙は，南北に長い楕円形のもので，北半分を検出した。南半分は，トレンチ南辺以南に伸びる。検出できた長さは0.3mで，幅0.2m，深さ0.25mを測る。検出面は，整地盛土の下層上面である。埋土は１層で，上面からは，土師器の皿３枚が出土した。



第62図　土壙ＳＫ20736実測図（1/20）

土壙ＳＫ20742（第63図）

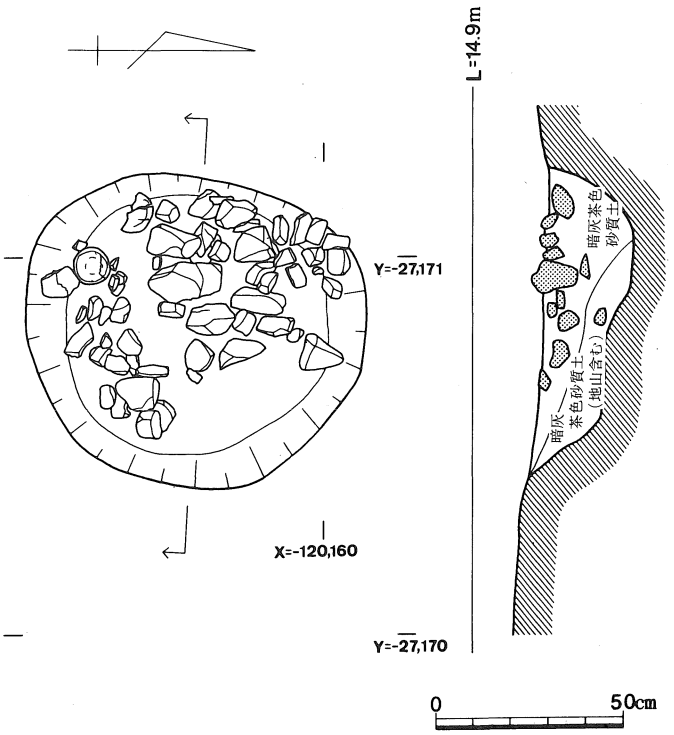
表面に小石が集積した土壙である。直径1.6mのほぼ円形で，深さ0.4mを測る。埋土は2層からなり，小石の礫群は，上層で検出された。また，この礫に混じって，土師器の皿が出土した。当土壙の掘られた目的は明らかでない。

検出面は，トレンチ北辺で露頭している段丘の上面である。当土壙の東半部は，当調査の第Ⅲ期にあたる土壙ＳＫ20737により，一部が削られている。

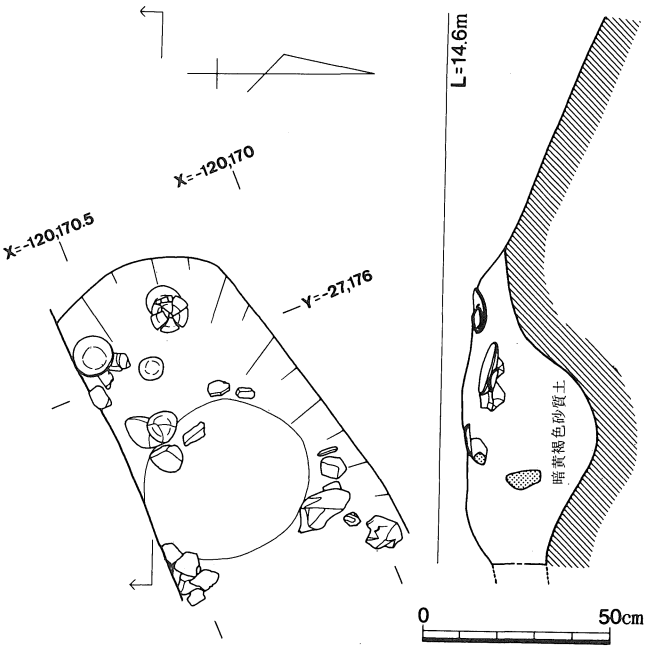
土壙ＳＫ20743（第64図）

当遺構は，トレンチ南西端で，北半分が検出された土壙である。平面形は不正形な半円形で，南半分はトレンチ南辺より南に広がる。直径約1.3m前後の円形になると思われる。深さは，0.65mを測る。上面から，土師器の皿六枚が出土した。また，少量の礫が散乱し，東端は，礫の詰った溝状の遺構ＳＸ20756により削られている。

その他の遺構　以上の他，浅い土壙ＳＫ20752やピット等がある。ピット53では，小石の礫が一面に詰っていたが，その性格は明らかでない。



第63図　土壙ＳＫ20742実測図（1/20）

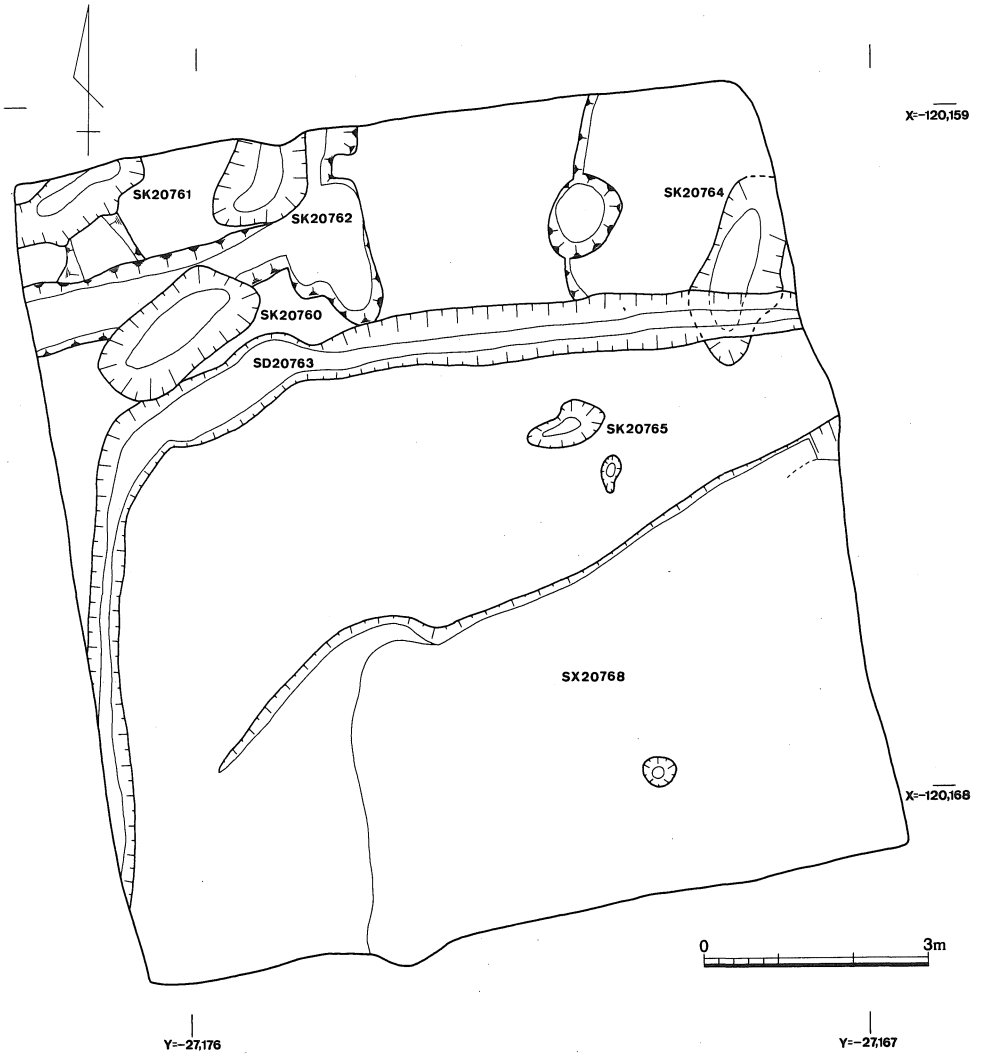


第64図　土壙ＳＫ20743実測図（1/20）

第Ⅰ期（第65図，図版34－(2)）　当期は，第Ⅱ期の整地盛土と造成盛土を除去した段階で検出された遺構面の時期である。遺構は，土壙や溝，ピットからなる。検出面の北辺部は段丘礫であるが，南へ傾斜する地形であり，南部は段丘礫上に堆積した砂層又は砂礫層からなる。この地層の変更する位置には，その変換線にそって，溝ＳＤ20763が巡っている。いずれも無遺物層で，当調査区の地山と判断した。

トレンチの北半部は，段丘礫を掘り込んだ土壙が主であり，南半部は，南東方向へ傾斜する落ち込みが大部分を占める。この落ち込みの上面からは，ピットを１個検出したが，意味不明である。

当時期は，２小期に分かれ，溝ＳＤ20763の掘られた時期が最も新しく，土壙ＳＫ20762の掘られた時期が最も古い。しかし，他の各遺構との前後関係は，出土遺物から見ても明らかでなく，また，遺物を出土しない遺構が多かった。



第65図　第Ⅰ期　遺構配置図（1/100）

以下に，各遺構を概観する。

溝ＳＤ20763　当溝は，Ｌ字形に曲がるように掘られた溝で，地山層の土質変換線にそっている。埋土は１層からなり，平均的な深さに掘られている。その規模は，幅0.8m，深さ0.1mで，東西９m，南北７mを検出した。当溝は，さらに東と南へ伸びている。南北方向の部分はやや幅挾で，その幅約0.4mを測る。

土壙ＳＫ20760　当土壙は，トレンチ北部の段丘礫を掘られたものである。その平面形は，幅0.6m，長さ2.3mの長方形に近い形状で，深さ0.45mを測る。出土遺物はなく，掘られた目的は明らかでない。埋土は１層であった。

土壙ＳＫ20761　当遺構は，トレンチ北西端で検出された土壙で，不正形な形状であった。深さ0.4mを測り，平面形は長方形に近いが，北端と西端はトレンチ外に伸びるため，明らかでない。遺物の出土はなかった。

土壙ＳＫ20762　当土壙は，不整形な土壙で，北側がトレンチの外へ伸びる。深さ0.4mを測り，埋土は１層である。埋土からは，長岡京期の遺物が出土し，この時期に掘られたものと考えられる。当土壙の埋土は，土壙ＳＫ20760やＳＫ20761と同じ土質と色調であることから，この各土壙は，同時期のものと考えられる。検出面は，トレンチ北部にある段丘礫層上面である。

土壙ＳＫ20764　当遺構は，トレンチ北西部で検出された土壙である。平面形は不正形な長方形をなしている。南半分の一部は，溝ＳＤ20763に東西方向に上面を削られ，北西端はトレンチの東方へ伸びる。このため，正確な規模は明らかでないが，北東－南西方向に長く，その長さ2.5mを測り，北西－南東方向の幅１mを測るものと思われる。埋土は１層からなり深さ0.6mを測る。埋土の土質，色調とも土壙ＳＫ20762等と類似するが，遺物は皆無であった。

落ち込みＳＸ20768　当遺構は，トレンチの南東部に向って低くなる落ち込みである。工事施行者との協議で，新築本堂の基礎工事の関係上，深さに問題があるとし，完掘することができなかった。このため，当遺構の時期や，堆積土の状況等，細部において明らかにできなかった。従って，部分的に知り得たことを記し，近隣地での調査の資料としたい。

当落ち込みは，当調査トレンチ内で北肩と西肩が検出された。北肩は北東－南西方向にあり，西肩はほぼ南北方向にある。北肩の東方はトレンチ外に伸び，西肩の南方もトレンチ南辺より南に伸びる。北肩では，トレンチ東辺にかかる部分で一ヶ所サブトレンチを設け，傾斜の状況と土層の検出を行った。この結果，深さ約0.4mの落ち込みで，埋土は４層からなることを確認した。このうち，上から１層目と３層目は厚く，４層目は部分的であり，２層目は薄く堆積した炭混じりの灰層であった。このサブトレンチでは，遺物は得られなかった。西肩は，北肩ほど明瞭に落ち込まず，なだらかに東方に傾斜していた。当遺構の埋土は，当遺構面で検出されその他の遺構とは，質感や色調あるいは埋土の層序のいずれにおいても異質なものである。

以上，当調査においては，第Ⅰ期から第Ⅳ期にわたって，層位的に検出された。これらの各時期の遺構は，光林寺以前と，光林寺関連遺構の２大別が可能であるが，その歴史的位置付けは後述することにし，以下に，各期の出土遺物について概感する。

４．出　土　遺　物

当調査で出土した遺物には，須恵器，土師器，瓦器，陶磁器の他，土製品，金属製品，ガラス製品，瓦がある。これらの遺物は，平安時代初期から前期，鎌倉時代末期，江戸時代前期～中期に相当するもので，江戸時代のものが最も多い。以下，時代別に概観する。

平安時代　土器の総出土量の4.1％が長岡京期のもので，須恵器が47.3％，土師器が52.7％をしめる。やや土師器の方が多い。須恵器には，坏Ａ・Ｂ，坏Ｂ蓋，鉢，壺等があり，坏類，甕類，壺類が，28～29％とほぼ同じ割合である。破損した際の破片の出る割合を考慮すると，坏類が最も多く，蓋の12.9％がこれに次ぐ。坏の中では，Ｂ類が多く，Ａ類は少ない。土師器は，埦，皿類が最も多く，土師器破片総数の63.3％をしめ，中でも皿類が多い。坏類は出土しなかった。これに，甕，高坏が次ぎ，蓋の小片が少量ある。皿類は，外面全面ヘラ削りのｃ手法が最も多く，口縁ナデ，底面ヘラ削りのｂ手法が少量みられる。土師器には，白色の砂粒を多く含むものと，赤色粒子を多く含むものとがある。この他，少量の製塩土器がある。

土壙ＳＫ20762からは，土師器ミニチュア甕（第69図175）と，須恵器坏Ｂ（177），坏Ｂ蓋（176）の他，土師器皿Ａ，高坏等の小片があり，形態と手法から長岡京期と思われる。近世の遺構や包含層にも長岡京期の遺物があり，Ⅱ期では7.4％，Ⅲ期では2.1％，Ⅳ期では2.7％の割合で出土した。この他，長岡京期以後の軒平瓦が２点出土している（第68図93）。

鎌倉時代末期　土器の総出土量の4.9％が鎌倉のもので，そのうち土師器は8.8％，瓦器は91.2％をしめ，その他，須恵器や陶器が少量ある。土師器のうち，皿が最も多く58.6％をしめ，他に少量の紅壺がある。瓦器は，埦，皿類が最も多く（54.5％），鍋，羽釜がこれに次ぐ。須恵器のほとんどは片口鉢で，他に壺，甕類が少量ある。これらのほとんどが版築層から出土したものである（第66図11）。同時期の単純包含層や遺構は検出されなかったが，近世の遺構や包含層から出土し，第Ⅱ期では11.6％，Ⅲ期では2.3％，Ⅳ期では5.4％をしめる。

江戸時代前期　第Ⅱ期の遺構及び包含層から出土した遺物である。この時期に相当する遺物は，第69図153～174に示した第Ⅱ期の遺構出土のものがある。まとまって遺物が出土した遺構には，土壙ＳＫ20743，ＳＫ20736と土壙墓ＳＫ20758がある。ほとんどが土師器の皿である。同時期の遺構，包含層出土遺物総破片数中，80.1％が同時期の遺物であり，そのうち土師器皿は，98.8％をしめる。他に，染付や青磁，唐津焼系陶器の小片が少量ある。土師器皿は，大小２種がある。大皿は，口径９～10.4cm，器高2.3～2.4cmを測り，小皿は，口径７～7.8cm，器高1.6～1.8cmであり，法量にまとまりが認められる。いずれも，器壁は平均的で口縁部を丸くお

さめるものが多い。これらの特徴は，勝龍寺城址第Ⅲ期皿Ａａとしたものと共通する特徴をもつ。その割合は，土師器皿のうち，74％をしめる。このことから，17世紀代から18世紀初頭と思われ，当調査の第Ⅲ期遺構群の一時期＝正徳三（1713）年より先行する時期に比定できる。この時期の土壙墓ＳＫ20738からは，六文銭として古寛永の六枚重ねと，御身刀一口が出土した。刀子柄部は紐で縛っており，周辺に木質を残す。寛永通寶は，未使用銭と思われる。この他，整地盛土最下層からは，唐銭や北宋銭の渡来銭又は，ビタ銭と呼ばれるものが数多く出土した。第67図202と203は剃刀と思われる刀子で，202は，鉄製の刀身に青銅製の鞘を被せている。203は銀製と思われる。

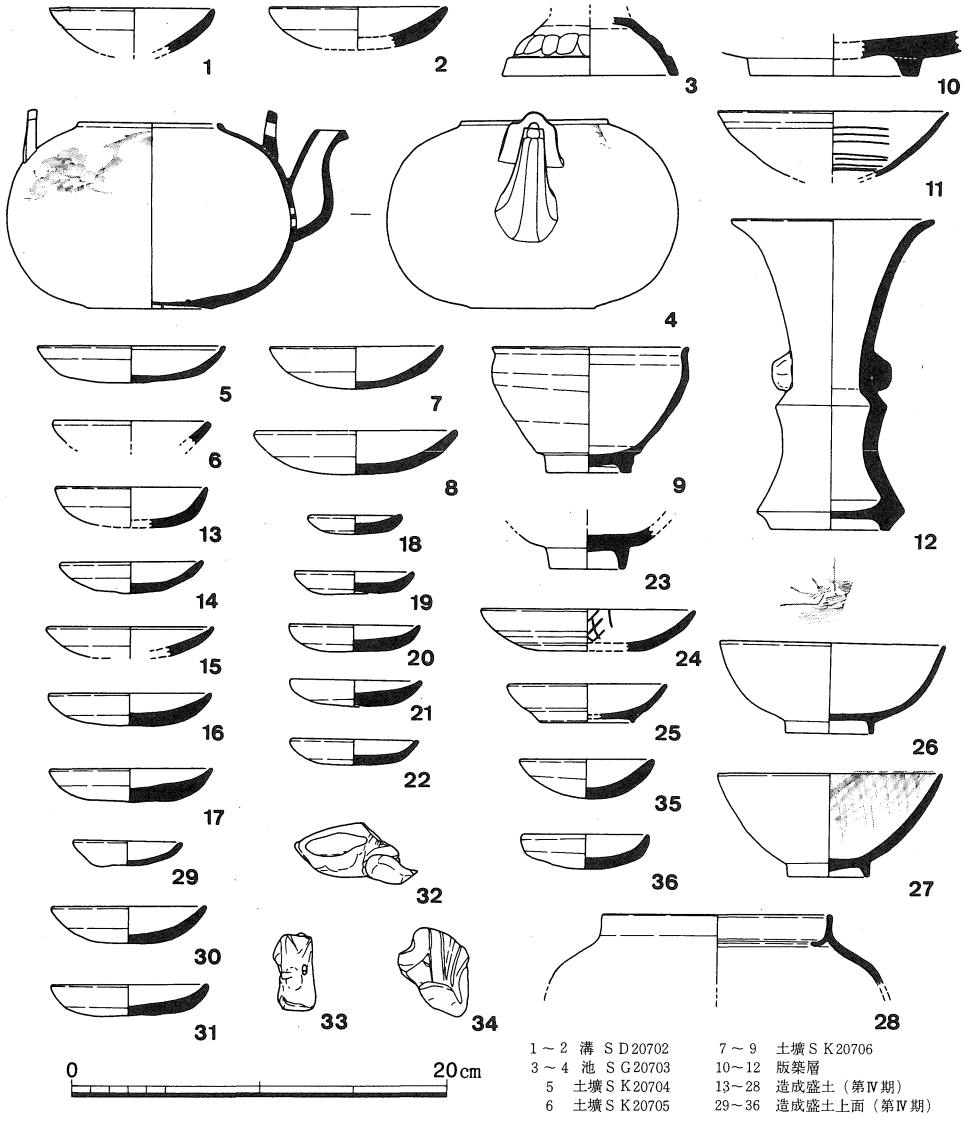
江戸時代中期前半　第Ⅲ期の遺構及び包含層から出土した遺物で，正徳三年三月十四日の墨書をもつ陶器と相前後する時期に捕えられる。同時期の遺構や包含層出土遺物総数の75.4％が正徳三年前後と思われるもので，そのうち土師器の皿が96.9％をしめ，他は国産陶磁器類であった。土師器の皿は大中小の三種があり，形態からは大きく４形態に分類できる。勝龍寺城の形態分類に対比すると，Ａ，Ｈ，Ｋ，Ｏの４形態に相当する。Ａ形態はさらにａ，ｂ，ｃに小区分に相当するものがある。そのうち，Ａａに分類したものが最も多く，81.6％の割合をしめる。しかし，Ａｂに分類したものも多くなっており，13.8％の数値を示す。

陶磁器類は，伊万里焼系の染付や青磁が1.2％，瀬戸焼系の陶器が0.9％，唐津焼系の陶器が0.3％の他，備前，信楽，京焼，丹波等が少量ある。これらの陶磁器には，骨壺として使用されたものがある。骨壺は，瀬戸焼系の小壺が５個体及び蓋が１個あり，最も多い。次に，伊万里焼系の白磁蓋付壺，染付の小壺，染付の壺蓋の，合計３個体分がある。その他，丹波焼の皿耳壺，信楽焼の壺，土師質の有蓋骨壺の大型品や刷毛目唐津の蓋物，土師質の施釉小壺がある。

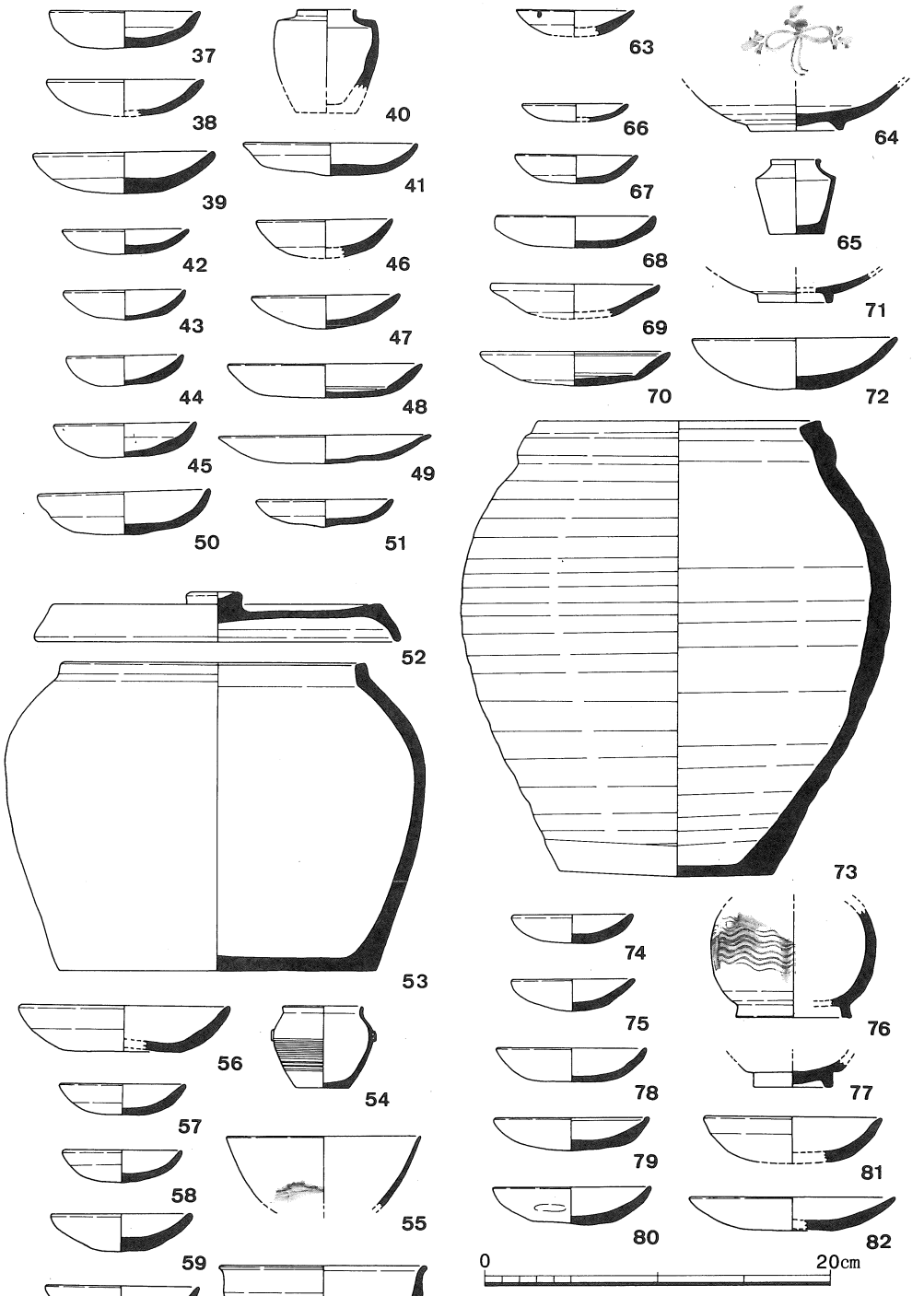
土器類の他，火葬墓から，六文銭として副葬された寛永通寶が出土した他，北宋銭等が出土した。六文銭として火葬骨とともに埋納された寛永通寶は，いずれも焼成を受けており，亡骸とともに荼毘に付されたものであり，六枚が融着している。火葬墓中から出土した他の古貨幣は，散乱した出土状況であり，焼成を受けた痕跡はない。火葬墓ＳＸ20709出土の寛永通寶は，古寛永であるが，他の寛永通寶は新寛永である。第76図の180と182は，通の辶と永字に特徴があり，背「文」字銭の同範銭であることが確認できた。これらの新寛永の出土した遺構や層は，寛文八（1668）年以降であるといえる。火葬墓ＳＸ20708，12，15，16，17，28，29，31，32，33，37，38の各々からは，鉄釘や金具類が出土した。ＳＸ20715出土の釘を見ると一寸五分（4.5cm），一寸二分（3.6cm），一寸（３cm），八分（2.4cm），七分（2.1cm），六分（1.8cm），五分（1.5cm），四分（1.2cm），三分（0.9cm）の各寸法のものがある。このうち五分釘が最も多く，七分，三分と続く。また，その形態は，頭部と身部が同じ厚さで作られ，幅は先端から頭部に向って広がり，上端を折り曲げることによって頭部をつくり出しているもの（Ａ形態）と，頭部を扁平に作り，身部と同一面上に円形に作り出しているもの（Ｂ形態）と，身部に帽子状

に円形の頭部をつくり出したもの（C形態）の3種がある。A形態の釘は，六分釘に一点見られるが，一般的でない。B形態のものは，最も多く，大型の釘から，小型の釘まで各種にあり，三分釘は全てこの形態のものである。C形態の釘は，一寸，五分，四分があり，装飾効果を意図して使用されたものと思われる。

江戸時代中期後半　第Ⅳ期の遺構や包含層から出土した遺物である。同時期の遺構や層から出土した遺物のうち，92.0%が近世の遺物であり，そのうち94.5%が土師器皿であった。土師器の皿は，勝龍寺城での分類に従えば，A類とK類があり，A類が97.9%をしめている。A類の小分類では，a類が26.5%，b類が71.4%であり，当調査のⅡ期，Ⅲ期の割合と逆転している。また，Ab類は，硬質で陶質に焼き上がったものが多く，焼成時に炭素の付着した製品は見られない。陶磁器類では，染付等を含む磁器が，同時期の遺物の2.8%である他は，瀬戸，唐津，信楽，備前，京焼，丹波等が少量ある。



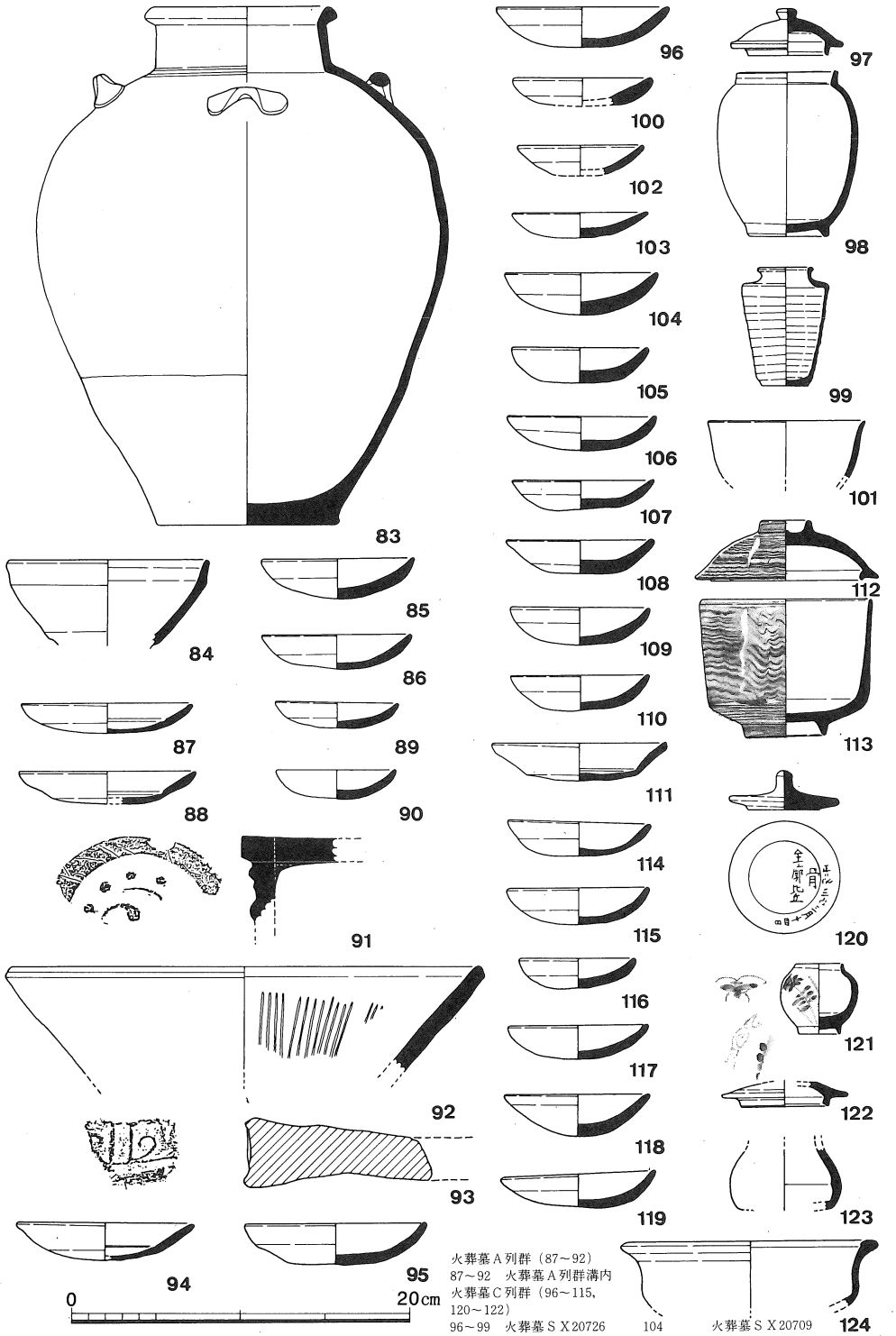
第66図　第Ⅳ期出土遺物実測図（1/4）



火葬墓Ａ列群出土遺物（37～62）
37～41　火葬墓ＳＸ20733
42～49　火葬墓ＳＸ20732
50～55　火葬墓ＳＸ20719
56～57　火葬墓ＳＸ20731
58～62　火葬墓ＳＸ20730

火葬墓Ｂ列群出土遺物（63～82）
63　火葬墓ＳＸ20715
64～65　火葬墓ＳＸ20716
66～73　火葬墓ＳＸ20727
74～77　火葬墓ＳＸ20728
78～82　火葬墓ＳＸ20729

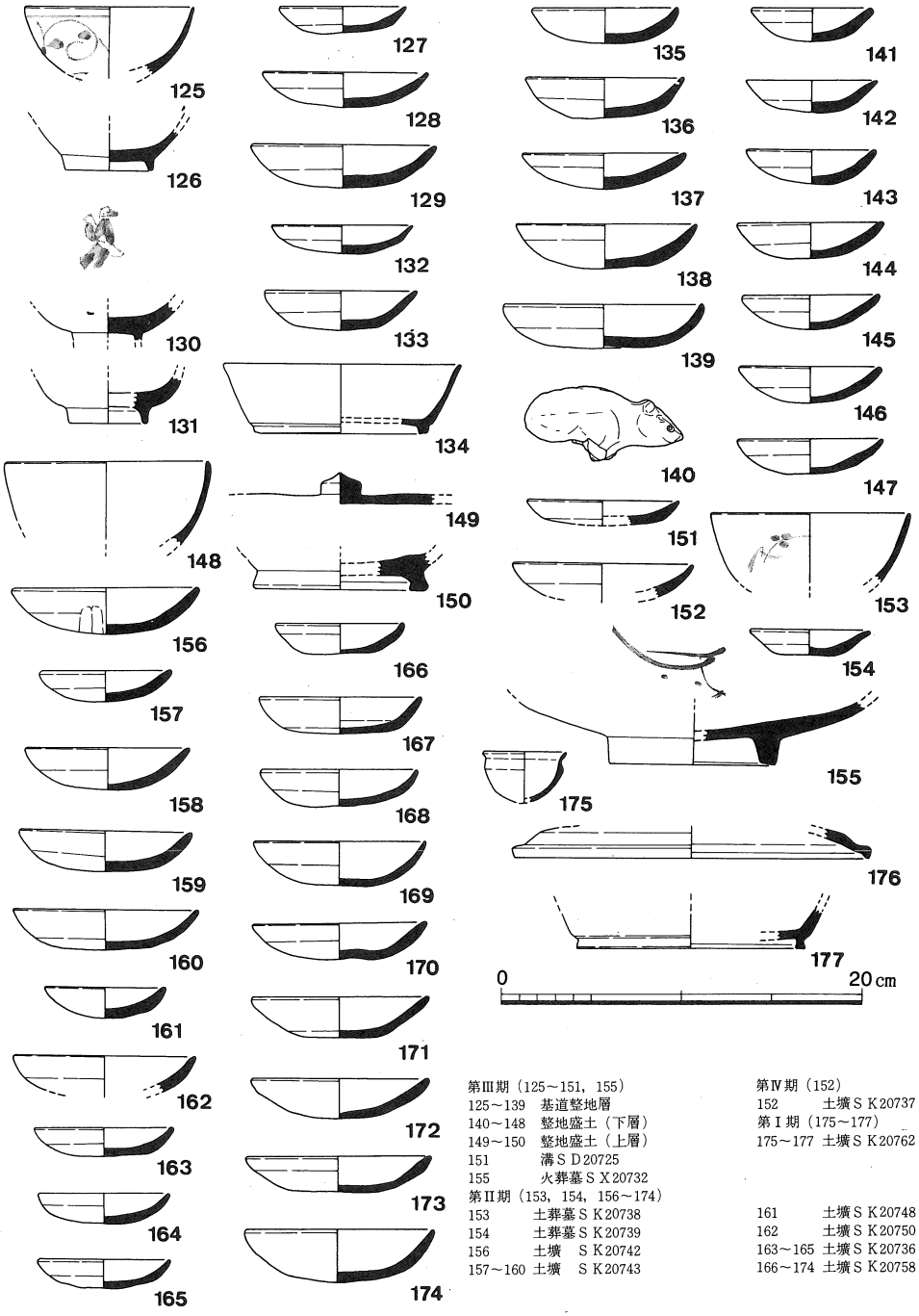
第67図　第Ⅲ期（火葬墓）出土遺物実測図(1)（1/4）



火葬墓B列群（83～86，93～95，123～124）
83～86　火葬墓　SX20717
93～95，123～124　火葬墓B列群溝内

火葬墓A列群（87～92）
87～92　火葬墓A列群溝内
火葬墓C列群（96～115，120～122）
96～99　火葬墓SX20726
100～101　火葬墓SX20712
102　火葬墓SX20711
103　火葬墓SX20710
104　火葬墓SX20709
105～113　火葬墓SX20708
114～115　火葬墓SX20707
120～122　その他

第68図　第Ⅲ期（火葬墓）出土遺物実測図(2)（1/4）

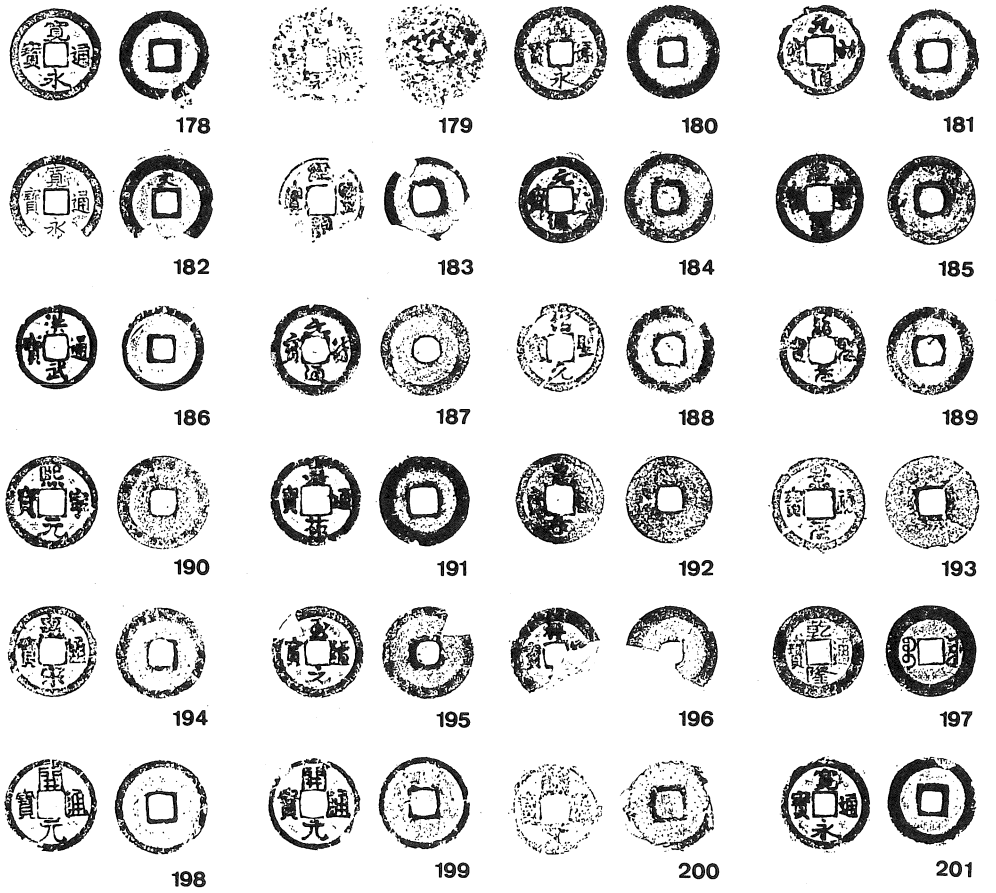


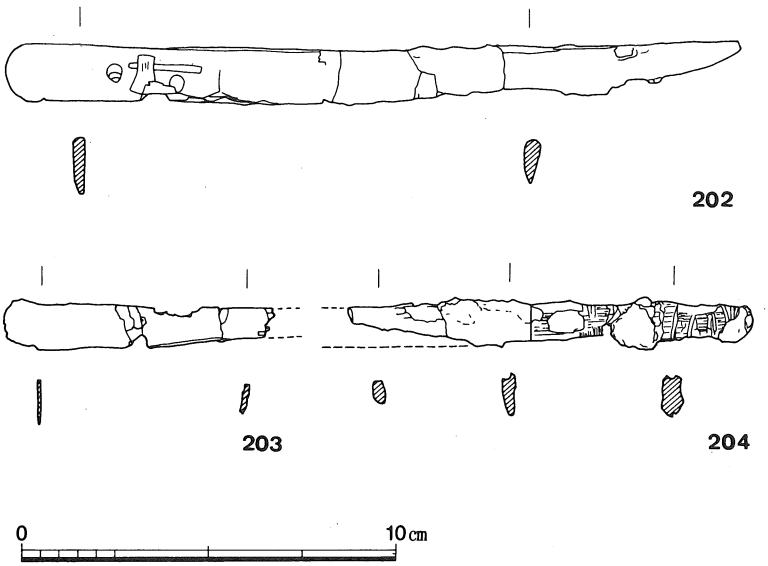
第Ⅲ期（125～151，155）
125～139　基道整地層
140～148　整地盛土（下層）
149～150　整地盛土（上層）
151　溝ＳＤ20725
155　火葬墓ＳＸ20732
第Ⅱ期（153，154，156～174）
153　土葬墓ＳＫ20738
154　土葬墓ＳＫ20739
156　土壙　ＳＫ20742
157～160　土壙　ＳＫ20743

第Ⅳ期（152）
152　土壙ＳＫ20737
第Ⅰ期（175～177）
175～177　土壙ＳＫ20762

161　土壙ＳＫ20748
162　土壙ＳＫ20750
163～165　土壙ＳＫ20736
166～174　土壙ＳＫ20758

第69図　第Ⅰ・Ⅱ期遺構・第Ⅲ期整地層他出土遺物実測図（¼）





第70図　第II期以降出土古貨幣・刀子

付表－８　出土遺物観察表

時期	器種	器形		法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	実測番号	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼	色調	土器番号
Ⅳ期	国産磁器	土瓶		7.8	9.9	34	○丸型の体部に、面どりをした注口部を付す。耳は三山形。 ○注口取付位置には、五枚花弁状に六個の流出孔を穿つ。 ○底部は、やや凹面状の平底。	○全面に丁寧なナデ。 ○内面全面と外面上部４／５まで施釉。 ○底部内面に、ハリ支え状の円形凸基が残る。 ○口縁端部は釉ハギ。 ○内外面の釉には、貫入が見られる。 ○両側面に、淡青色と淡茶褐色の薄い色で松の絵を配する。	○磁器質の良好な胎土で硬質	素地は淡黄白色 釉薬は少し青味がかった淡灰黄色	4 挿図66
		(生花)瓶	青磁	(11.0)	(13.4)	156	○帳広い底部から、屈曲して外湾しながら狭まる体部を持つ。このため、体部と底部の境が明瞭な稜線で区切られている。体部の最大径は、この稜線にあり、最小径は、体部上半１／３にある。体部の上端は再び屈曲し、大きく外反して広がる。このため、口縁部と体部の境は明瞭な稜線によって分かれている。口縁部下端近くには、一対の獣面浮文を配す。 ○底部は輪高台。	○底部以外全面ナデ。 ○底部は削り出し輪状高台。 ○口縁部内面上半から外面全面に厚い釉を施し、高台接地面のみ釉はぎ。 ○口縁部内面下半にシボリ目有。 ○高台接地面に耐火砂が一部に付着。	○精良な磁器に焼かれており、硬質	素地は白色 但し、高台部分は橙白色に発色。 釉薬は青灰色	12 挿図66
Ⅲ期	国産磁器	香炉	(青磁)	(15.2)	(5.0)	108	○口縁部から底部にかけて、S字型に曲がる器体をなし、口縁部、体部、底部の境がない。 ○口縁端部は、外反した先端部を内側へ巻き込むようにして肥厚させ、上方に幅広く面をつくりたす。 ○底部欠損するが三足か。	○内外面全面ナデ、口縁部と体部の間に、口縁端部巻き込みの際の一帯の強いナデ。 ○釉薬は、口縁内面から外面全面に施す。	○緻密で良質な胎土 ○硬質	素地は淡灰白色 内面は淡黄茶褐色 釉薬は青灰色	124 挿図68
		壺	(染付)	(5.2)	(2.5)	168	○受部が口縁部より水平に外へ張り出す。 ○口縁部は、やや内傾気味で輪高台状につくり出す。 ○天井部は扁平であるが、97は丸味を有す。 ○97は、つまみを持ち、その形状は、上端に平坦な円形の面を持ち、上部１／３の位置に最大径のある断面菱形である。 ○168は、天井部を欠くが、つまみを持つと思われる。 ○口縁端部は、122の場合内傾する明瞭な面を持つが、97は、やや丸味を持つ。 ○受け部端面は、122の場合丸くおさめ、97の場合明瞭な面を持つ。 ○97は、98の壺とセット。	○口縁部内外面と、受け部はナデ。 ○天井部内外面はカキ目。 ○つまみはヘラ削りか。 ○122は、呉須で受け部と天井部の境に間線を一条巡らし受け部上面に渦巻き文を描く。天井部の文様は不明。	○緻密で良質 ○硬質	素地は白色 97の釉は白色 122の釉は、やや青味のある白地	122 挿図68 図版44-(2)
		蓋	(白磁)	4.8	2.8	29					97 挿図68 図版40
		壺	A	6.0	9.2	30	○鶏卵倒立形の体部に、輪高台を持つ。 ○口縁は、体部から屈曲してやや外湾気味に短かく直立する。 ○口縁端部は、ほぼ水平な面を持つ。 ○輪高台の接地面は、平坦面でなく、尖っている。	○底部以外は、全面ナデ。 ○底部外面は、ヘラ削りのままか。 ○釉は、口縁部外面中位から底面までと内面に施すが、高台接地面は釉ハギしている。内面の施釉は荒く、少量の薬を入れて、器体をころがす。	○素地はやや粗く焼があまい 少し軟質	素地は白色 釉の発色も悪く、黄味がかった白色	98 挿図68 図版40
		壺	B	3.0	4.2	6	○薬壺形をした短頸壺の小形品で球形の体部に、屈曲して短く直立する口縁部と、輪高台がつく。 ○最大径は、体部上半にある。 ○口縁端部は、平担面を持つ。 ○高台接地面は丸くおさめる。	○全面ナデか。 ○体部には、呉須で、草花文と飛蝶文を描き、その位置は表裏の関係にある。 ○釉は、口縁部内面を除いて、全面に施すが、口縁部端面と高台接地面は釉ハギする。 ○体部内面は、釉薬を入れて、器体をころがし施釉する。	○緻密で良質 ○良好	素地は白色 釉は、やや青味がかった白色	121 挿図68 図版39
			C			110	○壺の底部片であり、詳細不明。 ○内部無釉であることから、細頸壺のようなものかと思われる。 ○輪高台の接地面は尖る。	○底部内面中央部にヘラ削り痕を残す。 ○高台内外面は、ヘラ削りのままか。 ○高台接地面は、釉ハギ。	○緻密で良質 ○良好	素地は白色 釉は、やや青味がかった白色	126 挿図69

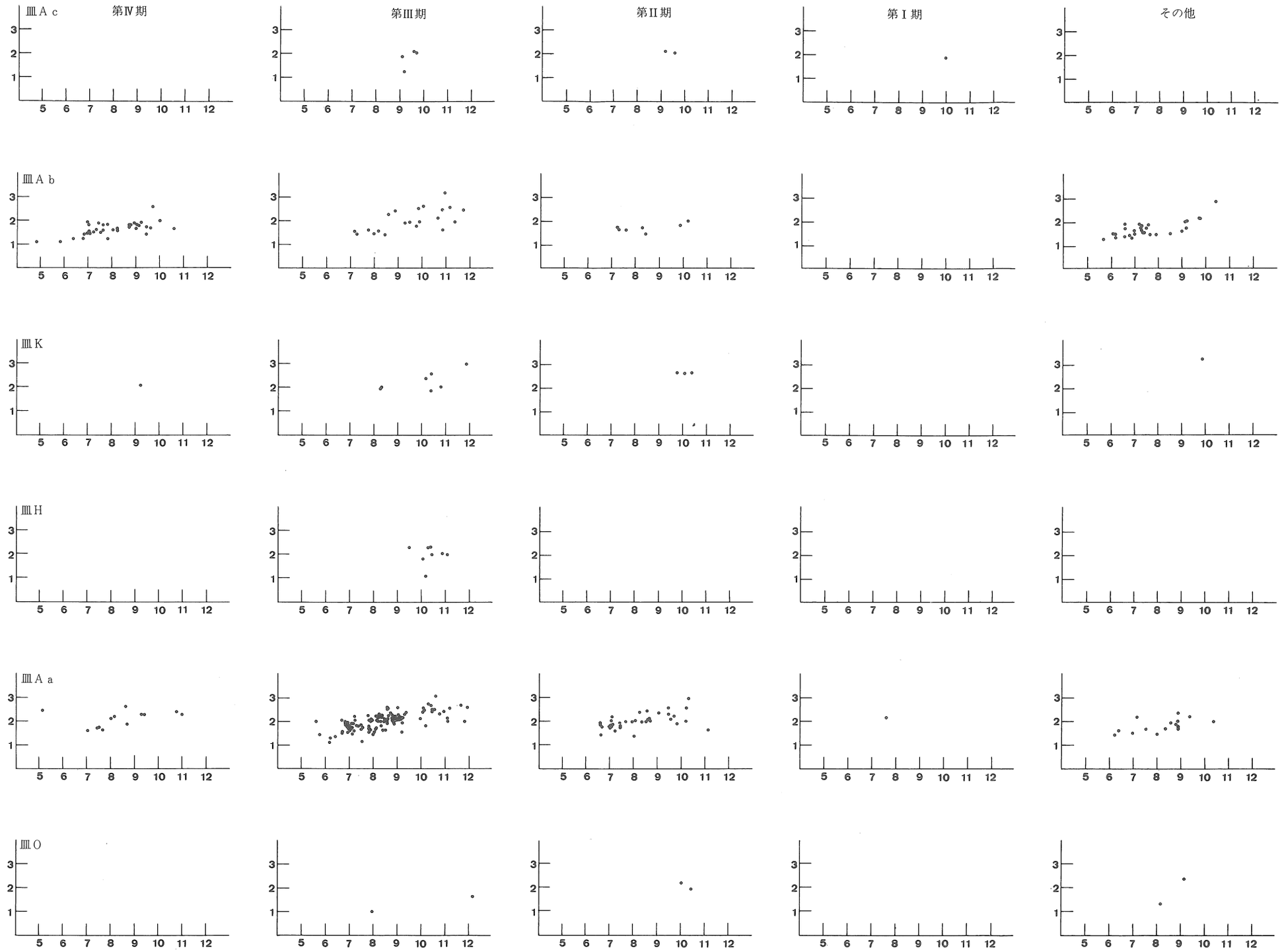
時間	器種	器形		法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	実測番号	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼	色調	土器番号
Ⅳ期	国産磁器	碗				100	○底部の高台部分のみで、上部は詳細不明。 ○高台は、輪高台でやや深い。	○内面ナデ、高台部分は、ヘラ削りのままか。 ○釉は全面に施し、高台接地面のみ釉ハギ。 ○内面見込みと高台接地面部分に、耐火砂の付着。 ○高台外側面と体部外面に、呉須による線が見られる。	○精良 ○硬質 ○良好	素地は白色 釉薬は気泡が多く入り淡青灰色	23 挿図 66
Ⅲ期	国産磁器	碗	A	(11.2)	(5.0)	175	○内湾する口縁を持つ。 ○端部は丸くおさめる。 ○いずれも底部を欠き、詳細不明。他の破片に高台接地面を釉ハギしているものがある。 ○125は小ぶり。	○内外面ナデ。 ○外面に呉須で装飾するものが多く、唐草文（125）や山水文（55）を描くものの他網目文等がある。 ○高台接地面に、耐火砂の付着するものがある。	○精良 ○硬質 ○良好	素地は白色 釉薬は白色	55 挿図 67 図版 44-(2)
				(9.3)	(4.5)	109				素地は白色 釉薬は青味白色	125 挿図 69 図版 44-(2)
		碗				166	○底部片で、全体の形状は不明。 ○輪高台を有すが、接地面欠損。	○体部下半及び外面はナデ、上半は欠損。 ○輪高台内の底部は、ヘラ削り痕を残す。 ○内外面全面に施釉。 ○呉須による装飾が、内面見込と、体部外面、高台外面にみられる。	○やや粗く気泡が入る	素地は灰白色 釉は、やや黄味がかった淡青白色	136 挿図 69 図版 44-(2)
		皿				33	○内湾気味の大きく開く形状。 ○口縁を欠き、上半は不明。 ○高台は、輪状高台で、接地面は平担。	○外面から高台部までヘラ削り。 ○内面見込みがわずかに一段低まり、口縁内面とは、縦線による菊花文状の装飾がある。 ○内面見込みに、呉須による図案化した文様が描かれている。 ○釉は内外面全面に施され、高台接地面のみ釉ハギ。 ○底部高台面に耐火砂が付着。	○良質で硬質 ○良好	素地は白色 釉薬は青白磁に近く淡青白色	64 挿図 67 図版 44-(2)
Ⅱ期	国産磁器	碗	A	(11.0)	(5.0)	143	○内湾する口縁を持つものでⅢ期碗と変化ない。 ○底部欠損。	○内外面ナデ。 ○外面に、呉須による文様を有す破片のため意匠不明。	○精良 ○硬質 ○良好	素地は白色 釉薬は青白色	153 挿図 69 図版 44-(2)
Ⅳ期	国産陶器	碗	A	(12.2)	(4.8)	160	○半球形の丸い器体に、輪高台がつく。 ○高台は、直立して比較的高く外側面、接地面、内側面の各々が直線的な面をなし、各面の接線が鋭利に角ばる。 ○口縁は丸くおさめる。	○体部下端の高台と接する部分及び、高台内底部外面の中央部のみヘラ削りを残し、他は全面ナデ。 ○釉は、内面と外面のナデ調整部分に施釉。 ○釉薬の貫入著しい。 ○高台内底部外面に「冨永」の印刻あり。 ○内面見込み右よりに、山水の具象化した文様を描く。	○精良 ○硬質 ○良好	素地は淡黄白色 釉薬は淡黄灰色	26 挿図 66 図版 38
			C	12.0	5.5	149	○やや内湾気味に漏斗状に広がる深い器体のいわゆる井戸茶碗。 ○底部には、輪状高台を削り出す。 ○高台は、断面三角形に近く、接地面は、幅狭い面である。 ○高台内の底部は、肉厚。 ○口縁は丸くおさめる。	○体部外面の上部１／４と内面全面をナデ。 ○体部外面の下部３／４以下底部までヘラ削り。 ○釉は、内面全面と体部外面と施釉し、高台にはかからない。 ○釉薬は灰釉系である。 ○口縁の一画に、端部から体部にかけて呉須による斜格子文が描かれている。	○須恵質の胎土 ○硬質 ○良好	素地は灰色 釉薬は淡緑灰色	27 挿図 66 図版 38
			D 1	10.8	6.7	46	○やや内湾気味に広がる体部から、少しつぼまって外反する口縁を有するもので、いわゆる天目茶碗である。 ○体部から口縁部への移行は、漸次的で、境は明瞭でない。 ○体部と底部の境は屈曲し、陵線によって明瞭である。 ○底部には、輪高台を削り出すが高台面の削りが浅く、底面が肉厚となっている。 ○瀬戸焼。	○高台内面から体部内面まで全面ナデ。 ○釉薬は、内面全面と、体部下半３／４まで施釉する。 ○釉薬は鉄釉系。	○精良 ○硬質 ○良好	素地は淡黄白色 釉薬は黒茶色	9 挿図 66 図版 38

時期	器種	器形		法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	実測番号	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼	色調	土器番号
Ⅳ期	国産陶器	皿	A	(11.4)	(2.2)	162	○平底に、ゆるやかに内湾しながら広がる形態である。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○底部と口縁部の境は、漸次的で不明瞭。	○内面から口縁端部外面までナデ。 ○口縁部下半から底部につけてはヘラ削り。 ○内外面全面に釉を施す。 ○口縁部の一画に、ヘラ描き、斜格子文を配す。	○土師質 ○あまい焼 ○軟質	素地は茶褐色釉薬は淡緑褐色。	24 挿図 66
			B	(8.8)	(2.1)	41	○ゆるやかに内湾しながら広がる口縁に、断面三角形に近い高台を付す扁平な形態である。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○瀬戸焼。	○内面から口縁端部外面までナデ、以下をヘラ削りする。 ○高台内底部外面には、井桁形のトチン跡を残す。 ○内面から、高台内面まで全面に施釉。	良質 硬質 良好	素地は淡黄灰色。釉薬は緑灰色	25 挿図 66
			C			165	○盤とでも言うべき大皿。 ○器壁の厚い製品で輪状高台部分の破片。 ○唐津焼。	○内面に砂胎土目を残す。 ○155は、二種唐津の大皿と思われ、一部に緑色釉がかかる。 ○外面ヘラ削り、内面ナデ。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は灰色釉薬は淡青灰色	10 挿図 66 図版 44-(2)
Ⅲ期						91				素地は淡灰色釉薬は灰褐色	155 挿図 66
		有蓋碗	碗蓋	9.0	3.6	2	○皿状の天井部に輪高台状のつまみがつく。 ○天井部と受け部の境は不明瞭で、受け部下端は平担面。 ○口縁部は、受け部より内にあり、短かく鋭く外反して下方を向く。 ○つまみの端部受け部外縁、口縁端部とも丸くおさめる。 ○蓋付碗113とセット。 ○唐津焼。	○天井部内面から受け部外面までナデ。天井部から、つまみ内面までヘラ削りか。 ○口縁部及び受け部下面を除いて全面施釉。 ○受け部下面には、耐火砂が付着。 ○釉薬は内面鉄釉のみで、外面は鉄釉の上に刷毛目文を施す。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は赤茶色釉薬は茶褐色地に白色釉刷毛目	122 挿図 68 図版 40
			蓋付碗	11.2	8.0	3	○内湾気味の底部を屈曲して直立する体部を持つ。 ○底部には、輪状高台を付す。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○唐津焼。	○全面ナデか。 ○全面に釉薬を施す。 ○釉の内容は蓋(112)と同様でいわゆる刷毛目唐津。	同上	同上	113 挿図 68 図版 40
		碗	B	11.4	8.7	151	○内湾してわずかに広がる体部と、輪状高台がらなる。 ○口縁部は丸くおさめる。 ○底部と体部の境は、屈曲しており、明瞭である。	○内面全面から、体部下方1/4までナデ以下をヘラ削り。 ○釉薬は内面と体部外面までかかり底部及び高台には施釉しない。	○良質だが鉄分多い ○硬質 ○良好	素地は赤褐色釉薬は淡緑灰色	148 挿図 69 図版 38
			D_1	(12.0)	(8.0)	38	○特徴は、9と同様。	○特徴は9と同様。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は黄褐色釉薬は黒地	62 挿図 67 図版 38
						40	○体部以上を欠くが、同形態である。	○底部片。 ○輪高台接地面に底部糸切痕を残す。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は白色釉薬は黒茶色	77 挿図 67 図版 44-(2)
			D_2	(12.0)	(5.7)	37	○高台が輪高台とならず、平底か凹レンズ状になる。他はD_1と同じ。	○Dと同じ特徴 ○但し、高台部分等の無施釉部分に鉄釉を塗る。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は黄灰色釉薬は黒茶色高台赤茶色	84 挿図 68 図版 38
		壺蓋	B	6.6	2.4	77	○平担な、円盤状の形態で、円柱状のつまみをつける。 ○内面は中実で平底。	○底面に回転糸切痕を残す底面を残して全面ナデ。 ○天井部のみ施釉。 ○「正徳三年已三月十四日骨全廓比丘……」と墨書あり。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は淡赤黄褐色釉薬は黒茶色	120 挿図 68 図版 38

時期	器種	器形		法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	実測番号	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼	色調	土器番号
Ⅲ期	国産陶器	壺	D	3.4 3.3 3.0 (3.5)	7.0 6.9 4.3 (5.2)	4 5 171	○平底に、逆円錐台の体部をもち、外反する口縁部を付す小さな壺である。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○大（99）小（65）の２種があり、樽状の体部をもつもの（40）もある。	○体部にロクロ目を残し、底部外面には、回転糸切り痕を残す。 ○大形品は、口縁内面から、体部下半１／４まで施釉し、小型品は内面全面と体部下半１／５まで釉を施す。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は淡灰黄色 釉薬は黒茶色から淡黄茶色	99 挿図68 65 挿図67 40 挿図67 図版39
			E			160	○体部片であり口縁、底部は不明。 ○最大径を体部下端にもち頸部がつぼまる。	○内外面ナデ。 ○釉薬は、内面全面と、体部下端まで。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は淡灰黄色。釉薬は赤黒褐色	123 挿図68 図版44-(2)
			F	4.6	4.9	35	○最大径を体部上半部に置く平底壺で、口縁が短く外反する。 ○一対の円形浮文を有す。	○体部下半にカキメと施す。 ○他は内外面ナデ。 ○底面には、回転糸切痕を残 ○釉薬は、体部上端の肩部に施釉する。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は黄褐色 釉薬はカキ釉	
			G	16.0	26.5	1	○平底からロクロ目を残しながら鶏卵倒立形の体部をつくり出し、頸部に幅広い凸帯を設けて短かい口縁を付している。 ○口縁端部には、幅広い面をつくり出す。 ○器体全体に、石ハゼが見られる。	○内外面全面ナデ、底部外面も丁寧なナデ。 ○体部下半１／６より下部がそれより上部の色と異っており、筒状焼台の痕と思われる。 ○内面には、水漏れ防止用の釉を施す。	○珪石、長石を多く含み、石ハゼが多い ○良好	素地は茶褐色 焼台内にあった底部は灰色を程す 内面の釉薬は淡緑灰色。	73 挿図67 図版40
			H	9.6	30.7	99	○鶏卵倒立形の底部に、直立する頸部と外反する口縁部を持つ平底の壺。 ○肩部に２対の紐掛け把手を持つ四耳壺。 ○体部上端の頸部との境近くに二条の沈線を施す。	○粘土紐巻き上げによる２～３段階輪積み成形。 ○内外面全面ナデ。 ○口縁端部内面から、体部下半１／３まで施釉。	○珪石、長石チャート等を含む ○硬質 ○良好	素地は赤茶褐色 釉薬は黄緑色	83 挿図68 図版40
Ⅵ期			I				○落し蓋を持つ壺の口縁部片。 ○直立する口縁と深く落ち込んだ蓋受けからなる。 ○口縁端部、受け部端部とも丸くおさめる。	○体部外面タタキ。 ○口縁部外面から、内面受部体部内面はナデ。 ○口縁端部から体部外面に施釉。	○精良 ○硬質 ○良好	素地は赤褐色 釉薬は白色 一部に装飾用アメ釉	28 挿図66
Ⅲ期		皿				43	○底部片、輪高台部分。 ○高台の各面は平担で各面の接線は鋭利。	○内面ナデ、外面は高台近くまでナデ、以下ヘラ削り。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は黄褐色 釉薬は白色	71 挿図67
Ⅲ期	土師器	蓋	壺用蓋	21.0	2.9	123	○水平な天井部に屈曲させて口縁部をつくり出す。 ○つまみを有し、上面が凹面状に形づくる。 ○有蓋壺53とセット。	○内外面全面ナデ。	○石英、チャート、長石雲母を含む ○やや軟質 ○良好	黄褐色	52 挿図67 図版39
		壺	有蓋壺	17.2	17.9	124	○幅広い平底に、最大径を上部にもつ体部を有し、内湾してつぼまった所を上方に屈曲させて口縁部をつくり出す。 ○口縁部は短かく、端部には、平担面をつくる。	○内面は刷毛目成形の後ナデ調整。 ○底面と体部外面は丁寧なナデ。	同上	同上	53 挿図67 図版39

付表－ 9　土師器皿の形態分類表

Ａａ類			Ａｂ類	Ｌ類	Ｈ類
2	74	135	5	72	48
7	75	136	15	96	70
8	78	137	16	118	87
13	79	138	17		88
14	80	139	18		94
29	81	141	19		111
30	82	142	20		
31	86	143	21		
35	90	144	22		
37	95	145	36		
38	100	146	41		
39	103	154	42		
43	104	156	50		
44	105	157	51		
46	106	158	85		
47	107	159	89		
56	108	160	128		
57	109	161	151		
58	115	166	163		
59	116	168	164		
60	117	169	165		
61	119	170			
63	127	172			
66	129	173			
67	133	174			

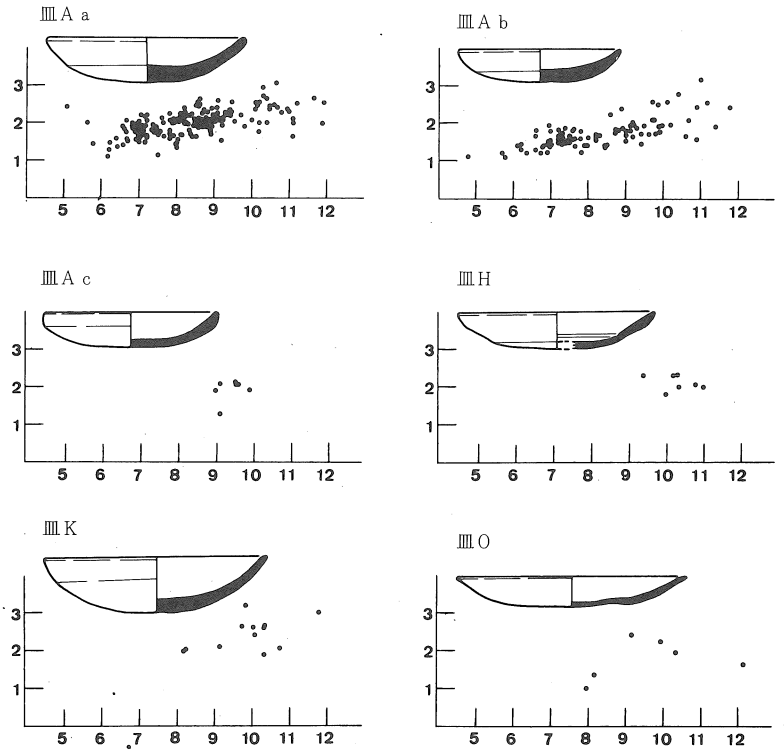


第71図　　土師器皿の形態別・時期別法量分布図

表－10古貨幣の出土遺構表

番号	銭　貨	出　土　遺　構	G(mm)	N(mm)	T(mm)	g(mm)	n(mm)	t(mm)
179	6枚重なっている 寛　永　通　寶	SS29						
181	元　祐　通　寶	SS32中央部	〈25〉	20	〈9〉	9	7	〈8〉
180	裏に「文」有 寛　永　通　寶	SS32北西肩	25	19	10	8	6	9
178	6枚重なっている 寛　永　通　寶	SK20738	25	19.5	10	7	5.5	〈9〉
193	景　祐　元　寶	整地盛上層(II期)	〈26〉	20.5	〈9.5〉	9	7	8.5
187	穴が八角形 元　符　通　寶	整地盛上層(II期)	25	18	9	8	6.5	9
190	熙　寧　通　寶	整地盛上層(II期)	25.5	20	9.5	8.5	6.5	9
196	祥　□　□　寶	整地盛上層(II期)	(25.5)	(17.5)	(10)	(7.5)	(5.5)	(9.5)
199	開　元　通　寶	整地盛上層(II期)	25.5	21.5	9.4	8.5	7	〈8.5〉
195	至　道　元　寶	整地盛土最下層	25.5	19.3	9.6	8	6	〈9.3〉
198	開　元　通　寶	整地盛土最下層	25.5	21	9.4	8	6.5	〈8.5〉
188	紹　聖　元　寶	整地盛土最下層	24.5	18.5	8.6	〈8〉	〈7〉	〈8〉
189	紹　聖　元　寶	整地盛土最下層	24	18.3	8.5	8	7	8.4
194	皇　宋　通　寶	整地盛土最下層	25	19.8	9	8	7	8.6
200	開　元　通　寶	整地盛土最下層	(26)	(21)	(9.5)	9	7	(8)
191	嘉　祐　通　寶	整地盛土最下層	〈25〉	19	〈9〉	9	7	8
183	元　豊　通　寶	整地盛土最下層	(23.5)	(20.8)	(8.5)	9	7	(7.5)
	祥　符　通　寶	整地盛土最下層			(8.5)	(8)	(6.3)	(7.5)
182	裏に「文」有 寛　永　通　寶	2区淡茶褐色砂質土	(25.5)	20	(10)	7.5	6	9.5
197	裏に文字有 乾　隆　通　寶	表採	25	18	10	7.5	5.5	9
186	洪　武　通　寶	工事中採集	23	18.5	8.6	7.5	5.5	8
184	元　豊　通　寶	工事中採集	24	17.8	8.9	7.8	6	8
192	嘉　祐　通　寶	工事中採集	25	20	9	9	7	8
185	元豊通寶か？	工事中採集	24.5	19.5	9	8.5	6.5	8.5

( ) は破損著しいもの 〈〉 は部分的に破損しているもの



第72図　　土師器皿の形態別法量表

付表－11　土師器皿の形態別出土個数

Aa	37(74.0)	111(73.0)	13(26.5)
Ab	5(10.0)	21(13.8)	35(71.4)
Ac	2(4.0)	4(2.6)	0
H	0	8(5.3)	0
K	3(6.0)	7(4.6)	1(2.0)
O	2(4.0)	2(1.3)	0
形態／時期	(98) II 期50個	(100.6) III期152個	(99.9) IV 期49個

個数は¼以上残存点数を示す。
( )内は%を示す。

付表－12　出土土器総量

I 期	49 (10.0)	0	0
II 期	96 (8.2)	135 (11.6)	923 (79.5)
III 期	73 (2.1)	82 (2.4)	3282 (95.3)
IV 期	40 (2.7)	81 (5.4)	1385 (92.0)
合 計	258 (4.2)	298 (4.8)	5590 (91.0)
時期／時代	古 代	中 世	近 世

数字は総破片点数を示す。
( )内は、%を示す。

5 ま と め

今回の調査は，長岡京跡に関するものはもとより，神足遺跡や勝龍寺城に関する遺構，遺物の存在，ならびに，永井氏縁の光林寺に関する遺構，遺物の検出，出土が期待された。その詳細については，今見てきた通り，江戸時代までの遺物が大量に出土し，遺構は，江戸時代のものが主であった。

これらの遺構は層位的に検出され，第Ⅰ期から第Ⅳ期にわたる変遷が認められた。出土遺物から各期の年代を求めると，第Ⅰ期は長岡京期とそれ以後，第Ⅱ期は江戸時代寛永年間以後，第Ⅲ期は，江戸時代正徳三（1713）年前後，第Ⅳ期は，18世紀後半以後と見ることができる。各時期の遺構及び遺物包含層を表にまとめると付表－13になり，その変遷を平面図で表わしたのが，第73図である。今少し，この変遷を掘り下げ，周辺地の遺跡や文献に現われた史跡及び歴史の沿革に対比してみることにする。

当調査地の北西に隣接して，神足遺跡がある。この遺跡は，弥生時代と古墳時代を中心とする幅広い時代の複合遺跡であることは，はじめの項で紹介した。この遺跡が当調査地まで広がっているか否かを明らかにすることは，当調査の目的のひとつであった。しかし，当調査では，遺構，遺物とも長岡京に関連するものが最も古く，それ以前のものは全く検出されなかった。このことから，遺跡の範囲外であろうとの感が強い。ただし，調査トレンチの大部分は，近世の切土や遺構によって削られており，断言するには及ばなかった。

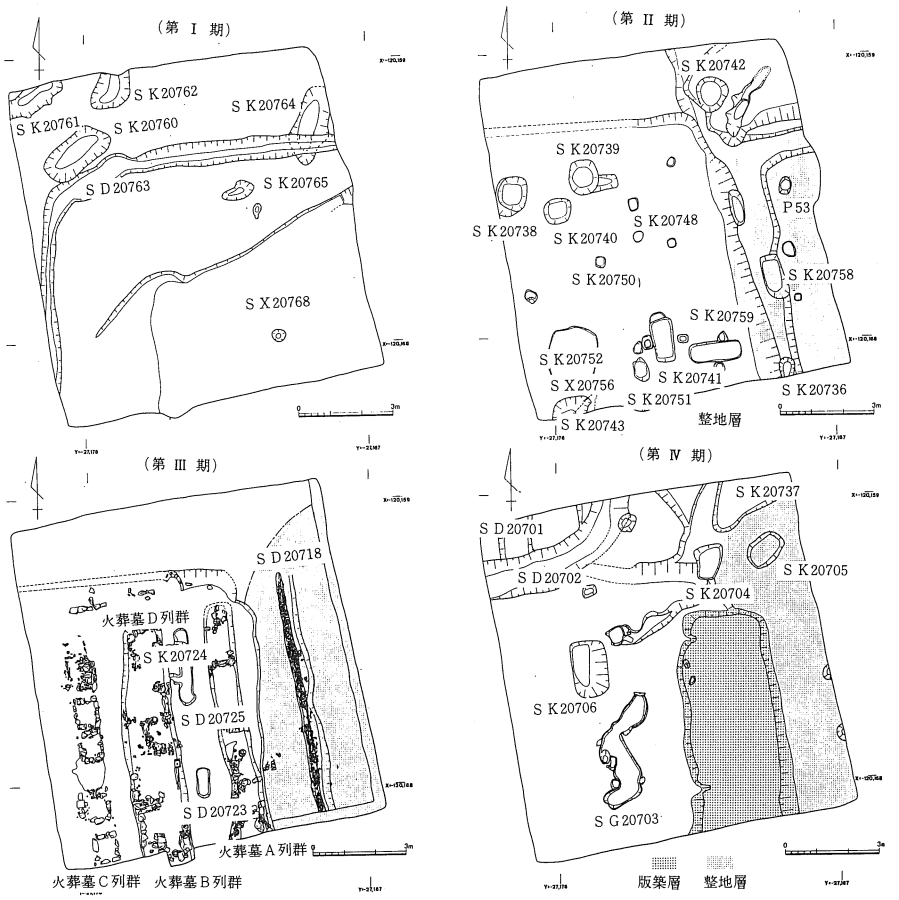
長岡京に関しては，右京六条一坊十二町の宅地部分の推定位置にある。この時期のものは，第Ⅰ期の面で検出された。しかし，トレンチ北辺部の段丘礫層の高まり部分から，数基の土壙が確認されたにとどまり，遺構の語るところは少ない。遺物は江戸時代の各層に混じって出土し，中でも第Ⅳ期の版築層から多く出土した。第Ⅰ期同一面で検出された他の遺構は，いずれも長岡京期より新しく，特に溝ＳＤ20763や落ち込みＳＸ20768及びその上面から検出された遺構は，最も新期のものである。

鎌倉時代の遺構・遺物は，今日までの神足遺跡に関する調査で，当調査地周辺にまで広がっていることは，充分に考えられることであった。しかし，当時期の遺構も，近世の遺構等による撹乱が著しく，検出されなかった。ただ，整地盛土（下層）の茶褐色砂質土層から，江戸時代の遺物に混じって，多くの土器類が出土した。このことから，当調査地にも，中世遺跡が広がっていたことは確実と言える。

室町時代には，当調査地周辺を本拠とした神足左近次郎信朝（友）が活躍する。また，南方に位置する勝龍寺城本丸が，細川頼春・師氏によって，暦応二年（1339）年に築城されたという。当調査では，この時期の遺物や遺構はなく，神足氏や初期の勝龍寺城に関連する成果は得られなかった。

付表—13検出遺構変遷表

時　代	平安時代長岡京期	江戸時代前期～中期	江戸時代中期	江戸時代中期以後
時　期	8世紀末以後	17世紀前半～18世紀前半	18世紀後半	18世紀後半以後
遺構面	第　I　期	第　II　期	第　III　期	第　IV　期
遺構	土　壙 SK20760 〃　SK20761 〃　SK20762 〃　SK20764 〃　SK20765 溝　SD20763 落ち込み SX20768 ピット	土　葬　墓 SK20738 〃　SK20739 〃　SK20740 〃　SK20741 〃　SK20758 〃　SK20759 土　壙 SK20736 〃　SK20742 〃　SK20743 〃　SK20751 〃　SK20752 ピット	火葬墓　A列群 〃　B列群 〃　C列群 〃　D列群 溝　SD20718 〃　SD20723 〃　SD20725 土　壙 SK20724 墓　道	池　SG20703 溝　SD20701 〃　SD20702 土　壙 SK20704 〃　SK20705 〃　SK20706
包含層	整　地　盛　土	整地盛土 〃　（最下層） 造成盛土（B）	墓道整地層 整　地　盛　土	版　築　層 整　地　盛　土 造成盛土（A）



第73図　　検出遺構変遷図

付表—14　徳勝寺・光林寺略歴

西暦年	年号年	徳勝寺略歴	光林寺略歴	備考	遺構検出面
1471年	文明　二年			野田氏、搦手北口攻撃	(第Ⅰ期の面の一部か？)
1486年 1493年 1595年 1619年	文明十八年 明応　二年 慶長　十年 天和　五年	○建立 ○神足明神御旅所 文義故…除地	○道林開基 ○光譽中興す(往古は惠灯の前)	(元亀二年)1571年両寺とも勝龍寺城内に含まれる。	
1624年 〜 1640年 1661年 〜 1673年 1679年 1713年 1750年	寛永　年中 寛永十七年 寛永　年中 延寶　七年 正徳　三年 寛延　三年	○光林寺の末寺となり、真言宗から浄土宗へ改宗 ○石川主殿頭、両寺を検地 2,276坪余　内光林寺の借地284坪余	○徳勝寺へ借地移築 ○永井藩士30人 「釈迦涅槃図」寄進 ○徳勝寺の本寺となる ○寺地間数吟味へ284坪余	1653年永井直清、勝龍寺城主となる 1649年、直清、高槻へ ○火葬骨壺墨書	○第Ⅱ期の面　土葬墓 ○第Ⅲ期の面　火葬墓
1752年 1873年 1985年	寶暦　二年 明治　六年 昭和六十年	○廃寺となる 1,978坪 ○建物は村会所として残す	○解体本堂棟板 ○測量、杭打ち 内光林寺の借地 240坪 ○本堂改築		○第Ⅳ期の面　泉水 ○右京第207次調査

「野田泰忠軍忠状」によれば，応仁の乱に際し，文明二（1470）年，勝龍寺城搦手北口を攻めたと伝える。当調査地の南隣には，「西ノ口」の小字名が見られ，この付近に搦手北口があったとする説が有力である。今回の調査における第Ⅰ期の面で検出された，落ち込みＳＸ20768には，薄く堆積した炭層があり，野田軍忠状の搦手北口攻撃に関連するのでは，という疑問を残す。しかし，この落ち込みは，一部の確認しかできず，遺物の有無も明らかでないことから，即断を避けたい。尚，同一面で検出された溝ＳＤ20763は，落ち込みＳＸ20768の北肩及び西肩に，ほぼ平行して掘られており，同時期の，相互に関連し合う遺構である可能性がある。

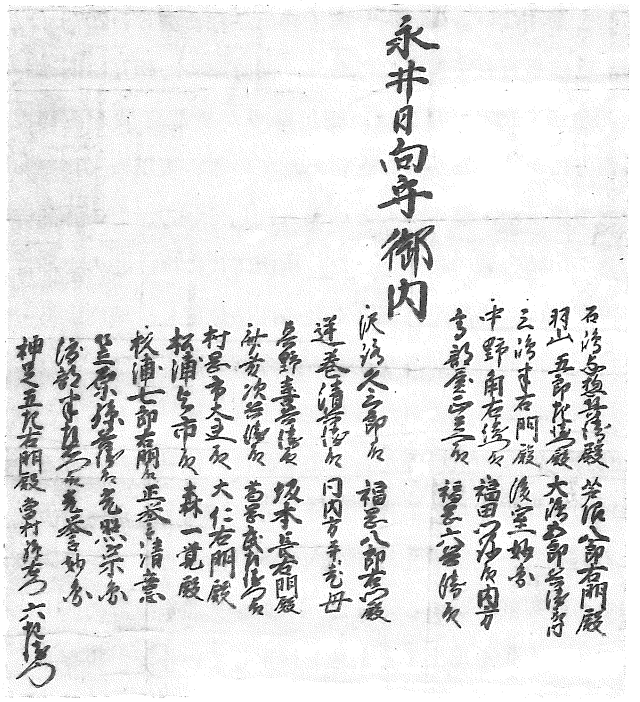
元亀二（1571）年には，細川藤孝が勝龍寺城を改修し，外堀や土塁が当調査地の北側から西方にかけて築かれたと言われている。天正六（1598）年には，細川ガラシャで名高い明智光秀の娘玉が，藤孝のもとへ輿入れしている。この勝龍寺城は，天正十（1582）年において，光秀が山崎合戦の拠点とした。桃山時代には，このように，勝龍寺城に関する記録が散見でき，当調査地は，土塁や外堀と本丸の間に位置し，城内にあったことが知られている。しかしこのような歴史的背景がありながら，今回の調査では，これらを裏付けるものは得られなかった。

当調査の第Ⅱ期にあたる整地盛土（下層）にある黄色砂質土層からは，渡来銭が多く出土し，これより新期の遺構等からの出土品に，仏具的内容あるいは，仏教的要素の強い遺物があり，墓地の存在等から，第Ⅱ期以降は寺に関連する遺構と考えられる。

当調査対象地は，光林寺境内にあり，調査トレンチの東半分は，調査前まで建てられていた本堂の西辺部にかかる。また，トレンチ設定位置の西方には，墓地が南北方向に長くある。調査では，人骨を出土する墓地を検出しているが，現存するこの墓地は詣墓であり，当地域における両墓制の成立を考える上で，興味深い。このようなことから，当調査の第Ⅱ期以後の遺構と光林寺との関連性を明らかにするため，光林寺の履歴にそって，検出遺構の位置付けを試みたい。

光林寺現住職木本弘昭氏によると，当寺は，元来勝龍寺の東方にあったと伝えられている。また，当寺が現在地へ移るまでは，調査地の東方約20mにあった徳勝寺（現在は建物を残し，地図に徳詳寺とある）の土地であったという。光林寺には，当寺に関連する文書はなく，徳勝寺跡にも，これに関するものはなかった。しかし，幸にも，徳勝寺の廃寺に関する書類が，神足在住の山孝太郎氏によって，保管されていた。この文書からは，徳勝寺とともに，光林寺に関することも知ることができた。この史料に，光林寺所蔵の「釈迦涅槃図」（第74図）の裏書き（第75図）と，今般の改築に伴い解体された本堂（第76図）の棟板（第78図）の両資料及び「長岡町二千年」の記述を加えて，徳勝寺並びに光林寺の略歴をまとめると，付表－14のようになる。

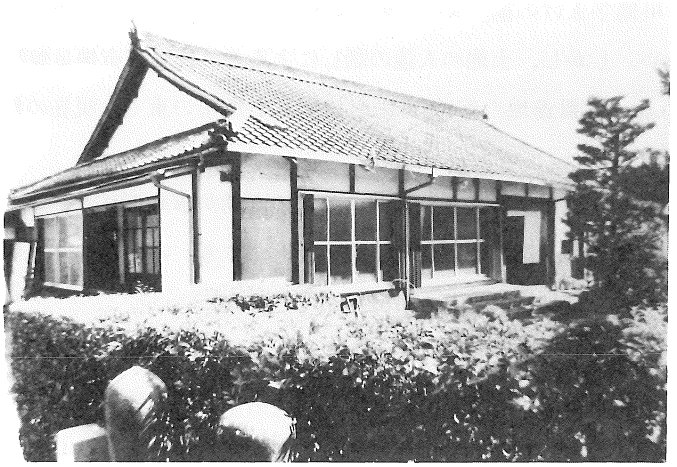
第74図　　光林寺所蔵涅槃図
（寛永17年６月15日）



第75図　　光林寺所蔵涅槃図寄進者名
（涅槃図裏面）

当調査地の変遷を理解する上で，当調査地点に重きを置き，その歴史的画期を付表－14から求めると，以下の３期に分けることができる。この３期は，各々前期と後期に細分することができる。

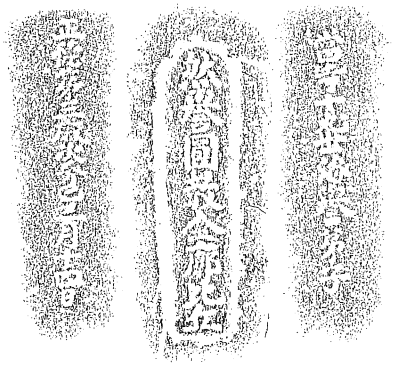
第１の画期―徳勝寺と光林寺が，別人が別所に，時期を違えて建立された時期である。当地は，この時徳勝寺の土地であったが寛永年中に光林寺が現在地へ借地して移って来た。両寺が



第76図　調査前の光林寺本堂（南西から，光林寺所蔵）

第77図　家老横田主水他，永井直清の家臣の墓

第78図　光林寺本堂棟札



第79図　「全廓比丘」無縫塔

独自建立から，光林寺移動までは，徳勝寺の空地であるから，徳勝寺期と呼ぶことにする。尚，光林寺の旧来の位置は，「おバた川側字ゑげの前」又は「会下之前」と記されている。小字名には，このような地名が見られない。しかし，土地の人達の話しによると，長岡京市神足焼町の内にあった地名と伝えられている。当調査地の東400mに南流する小畑川の東で，現在の松下電子工業長岡工場の中に位置したらしい。

第2の画期－光林寺が，恵ゲの前から現在地に移された時に第2の画期が求められる。第2の画期から，次に述べる第3の画期までを，第1次本堂期と呼ぶことにする。その時期は，本堂解体時に発見された棟札の年号から，17世紀前半から1752年までとする。

第3の画期－光林寺の本堂が，調査前まで建てられていた本堂に改築される時期を第3の画期と見る。この時期から，今般の改築工事による本堂解体までを第2次本堂期と呼ぶことにする。その期間は，本堂棟札（第78図）から，1752～1985年であることが明らかである。

当調査の絶対年代が明らかなものは，第Ⅲ期面で出土した火葬骨壺の蓋があり，この面の一時期を1713年に求めることができる。その年号及び戒名の一致する文字の刻まれた無縫塔が，現在の詣墓の墓列に置かれているのが確認できた（第79図）。また，火葬墓ＳＸ20708は，一石五輪塔を石組みに転用しており，18世紀初頭以降まで続いていたことが知られる。現在整備された詣墓の墓碑を見ると，実年代の明らかな墓碑の内，17世紀後半のものが最も古い。第Ⅲ期の火葬墓群は，これより古くはならないであろう。従って，この時期を第一次本堂の後半に求めることができる。とすると，第Ⅱ期の土葬墓の時期はこれより古く，しかも古寛永鋳造年代以後に限られてくる。第Ⅱ期の座棺墓に副葬された古寛永銭が，その型式から寛永14（1637）年以後であることが知られる。従って，この時期を17世紀中葉から後半にかけての時期が与えられ，第Ⅰ期本堂期の前半に対比できる。付言すれば，現在地にある光林寺を開山した光譽上人（延寶五年＝1677年没）の時期と考えられる。また，第Ⅱ期の火葬墓の時期と，第Ⅲ期の火葬墓の時期は，明らかに隔絶しており，一時的にせよ重なった状況は認められない。これは，層位的にも明らかである。しかし，出土遺物からは，極端な時代幅は考えられず，むしろ連続しているものと解される。すなわち，第Ⅱ期と第Ⅲ期は，17世紀中葉から18世紀前半までの連続した時期の中に置くことができ，その間に土葬墓が埋め立てられて，火葬墓が整然と配されるようになったことは明らかである。この埋葬形態の変化と，大がかりな墓地の整備は時を同じくしている。この変革期の頃を明治六年の「廃寺御届書」に見ると，寛文年中（1661～1673年）に光林寺と徳勝寺が本寺と末寺の関係となり，徳勝寺は真言宗から浄土宗へ改宗したとされている。興味深い記事ではあるが，第Ⅱ期から第Ⅲ期への変化との関連は明らかでない。宝暦二年の文書には，寛永年中に現在地へ移したと書かれていることから，明治のこの記事は，寛永年中の誤りである可能性がある。

第Ⅱ期，第Ⅲ期を通して，トレンチ東辺で確認された整地盛土は，建物のための基壇と考え

られる。調査による第II期，第III期の面が，光林寺の第I期本堂に相当することから，その基壇状の整地盛土は，光林寺本堂の基礎構造ではないかと思われる。第III期の溝ＳＤ20718は，これに付随する雨落ち溝であろう。

この第III期で検出された４列の火葬墓群は，火葬墓Ａ列群とＢ列群に共通性があり，Ｃ列群とＤ列群に共通性があることは，遺構の項で述べた通りである。すなわち，Ａ・Ｂ両列群は，溝を掘りこれを石列によって各墓を区画しているもの（Ｂ型式と呼ぶ）であり，Ｃ・Ｄ両列群は，各墓が個別に一線上に並べて築かれたもの（Ａ型式と呼ぶ）である。これらは，各墓ごとに構築方法を見ると，第81図のａ～ｅに細分することができる。これを簡単に記すと，以下の通りである。

ａ方式―方形の墓壙を掘った後，長方形を程する石で四周を囲み，木箱に納めた火葬骨を埋葬して四周の石組みの上面まで埋め戻し，小石を全面に敷き，さらにこの上に上面が平坦になるように数個の石を列べ置くものである。火葬墓ＳＸ20711等がある。

ｂ方式―墓の区画を石で表わさず，両隣りの区画石を利用しているもので，その間に黄色砂質土を敷いたものもある。構築は，墓壙を掘り，火葬骨を納めて埋め戻して築かれている。火葬墓ＳＸ20709がある。

ｃ方式―墓壙を掘り，火葬骨を埋納後，四周を小石で区画したものである。火葬墓ＳＸ20726がある。

ｄ方式―区画石は四周になく，相対する２辺にのみ認められるもので，この区画石は，両側に築かれた墓の区画と共有するものである。火葬墓ＳＸ20732等に見られる。

ｅ方式―両側の墓に共通する区画石をもち，しかも，他の一辺にも区画石を並べるものである。火葬墓ＳＸ20719などがある。

この分類を基に，統計を見ると，次の①～⑤までのことが明らかである。

①Ｃ・Ｄ列群はＡａ型式が最も多く，Ａｂ型式が一部あり，Ａｃ型式は１例のみである。

②Ａ・Ｂ列群はＢｄ・Ｂｅ両型式がほとんどで，Ｂａ型式が一部にある。

③Ａ・Ｂ列群のＢａ型式で築かれたものは，Ｂｄ又はＢｅ型式のものを一部破壊している。

④Ｂｄ・Ｂｅ型式のものは，度重なる埋葬の痕がみられ，石の動きが著しいものもある。

⑤Ａ型式のものは，一部に火葬後の骨を選んで仏だけを納骨するための小型の骨壺による埋葬が見られ，大型のものはないのに対し，Ｂ型式のものは，大人一体分の火葬骨を埋納できる大型の骨壺による埋葬が一部にあり，仏だけを埋納するものはない。

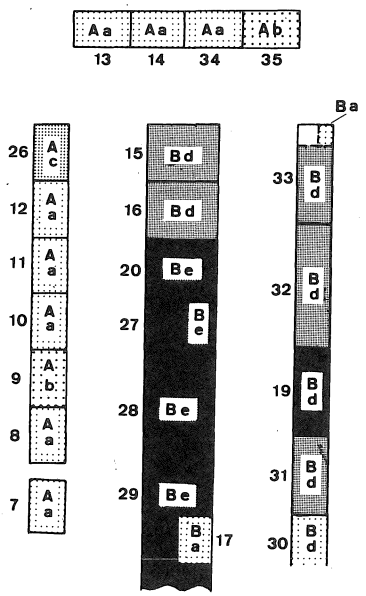
これを模式図に表わしたのが第80図で，その位置関係や分布状況が一見して確認できる。このうち，Ａａ型式とＢａ型式は，墓そのものの構築方法に相異点が認められないことから，基本的に同型式と見てよく，この型式は，Ｂａ・Ｂｅ両型式よりは新しいことが，火葬墓ＳＸ20729とＳＸ20717の関係から明らかである。すると，Ａ・Ｂ列群の中では，火葬墓ＳＸ20727の

東半部，ＳＸ20717，ＳＸ20730，ＳＸ20733の北東隅の各墓が新期のものであることが明らかであり，Ｃ・Ｄ列群は，Ａ・Ｂ列群より新たに築かれたものであることが知られる。また，埋葬形態は，火葬骨一体分全てを木箱又は大型骨壺等に納めて埋葬する方法から，選骨して仏だけを中型骨壺等に納めて埋葬する方法への変遷がたどれる。さらに，選骨して仏だけを骨壺に納めたと思われる小壺による埋葬法は，Ａ・Ｂ・Ｃの各列群に認められるが，いずれも中央部からの検出列はなく，追葬や子供用の骨壺と思われる。この種の小壺には，歯のみを納めたものがある。Ｃ列群にみられた中型骨壺も，検出位置は中央でないことから，この種のものも，追葬であろうと思われる。Ｃ列群には，やや主軸を違えた一基が南端にあり（火葬墓ＳＸ20707），また，北端のＡｃ型式の墓（火葬墓ＳＸ20726）は同列群でも異質の感がある。さらに，Ｃ列群のＡｂ型式の墓（火葬墓ＳＸ20709）とその南の墓（火葬墓ＳＸ20708）は，これより北に列する墓より構造が簡素で，また石仏等を転用しているなど粗雑であることから，同列群内でも新しいと思われる。

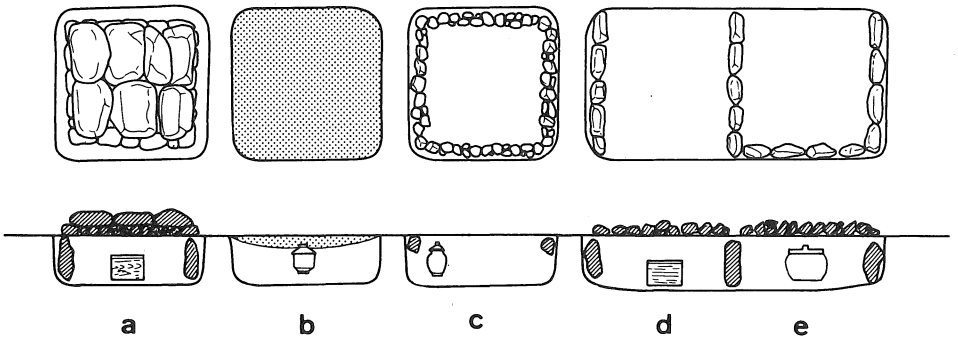
ホトケ(10)

一基の墓のしめる面積を見ると，Ｃ・Ｄ列群は平均しており，ほぼ0.8m²である。Ａ・Ｂ列群のものは，0.8m²のものから20m²のものまであり，大小さまざまである。

Ａ・Ｂ列群の差は，家族人数の差や身分あるいは社会的地位の差が考えられるが，明らかでない。しかし，何らかの当時の社会制度と関わっていることは認められよう。このような差は，少なくとも当火葬墓地のＣ・Ｄ列群が構築される段階では認められなくなっている。



第80図　火葬墓型式分類平面略図



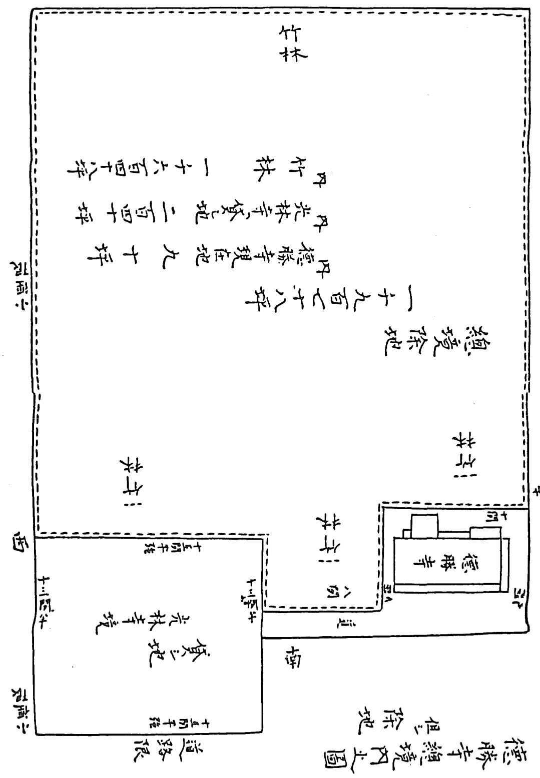
第81図　火葬墓の構築法型式分類図

そして，Ｃ列群の構築時期は，一石五輪塔等の転用（第87図）と，正徳三年銘の骨壺が当墓列群の攪乱により破壊されたと考えられることから，古くとも18世紀前葉以後であると言える。

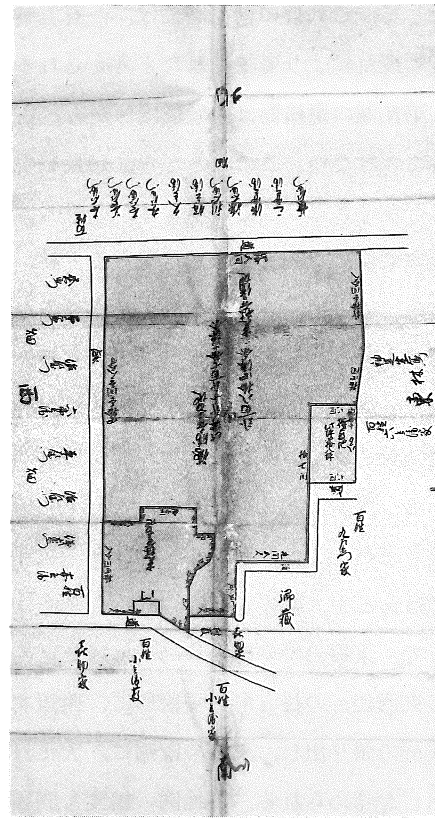
第Ⅳ期の遺構面は，層位関係から，古くても第Ⅲ期の骨壺の蓋に墨書された正徳三年まで遡ることはない。このことから，18世紀中頃以後と考えられ，光林寺の第２次本堂期と比定することができよう。この本堂は，今般の改築に伴い解体された光林寺本堂である。しかし，第２次本堂が，そのままの形で現在まで続いたとは思われない。幾度かの部分的な増改築が予想される。従って，この本堂の変遷を見るため，これに関する資料として，絵図や地図を見ると有効であろう。しかし，寶暦二年の文書と明治の徳勝寺履歴写の絵図（第82・83図）では，徳勝寺と光林寺の位置関係は知り得るが，光林寺の建物は明らかでない。また，徳勝寺に関する絵図は付されているが，光林寺関係のものはない。これは，文書の主旨からして当然のことでもある。今日知り得るのは，大正11年測図の京都市土木局都市計畫課修正の地図（第85図）が最も古い。これに表された建物と，現在の地図に表された建物（第84図）を比較すると，大略ではあるが，変化が認められる。例えば，大正の建物は，南北12ｍ×東西20ｍの長方形の平面形で，東辺のやや南よりに１ｍ×３ｍの張り出しが認められるが，現在の地図では，南北13ｍ×東西19ｍの長方形の平面形に，西辺北端に１ｍ×３ｍの張り出し，北辺やや西よりに１ｍ×６ｍの張り出し，東辺の南端に，大正11年の地図にみられる張り出しの南に４ｍ×３ｍの張り出しが認められる。各地図の精度も問題であるが，基本形がほとんど変化していないことや，方位が同じであること等から，大正の地図にみられない張り出し部のほとんどは，大正11年から昭和44年の間に増築された部分と考えられる。はたして，大正の地図に表された建物が，寶暦二年の原形を保っていたかどうかは，はなはだ疑問が残る。しかし，長方形の基本形は変らないと思われる。第Ⅲ期の面と第Ⅳ期の面の間に造成盛土があり，墓地が埋め立てられていることや，新たな整地盛土や版築層が，トレンチ西半分で検出されていることから，これらの作業は，現在にまで残った本堂の建築に伴う一連の作業としてなされたものであろう。そして，版築層が，第Ⅲ期の整地盛土の西側に張り出す形であることから，第１次本堂の位置より，やや西よりに建てられたか，又は，西へ２間分長く建てられたものと思われる。同一面で検出された池ＳＧ20703は，この本堂に付随する泉水であったと思われる。残念なことに，解体された寶歴二年の棟札をもつ本堂を実見する機会が得られなかった。

現在では，当寺にある墓は詣墓となっている。当地域の埋墓を調査しなければ，明らかなことは言えないが，おそらくは，当所が第Ⅲ期まで埋墓であったものを，第３の画期において両墓制が取り入れられ，詣墓とされ，第Ⅳ期遺構面以後（＝第２次本堂期）は，別所に埋墓を設けたのではないかと考えている。

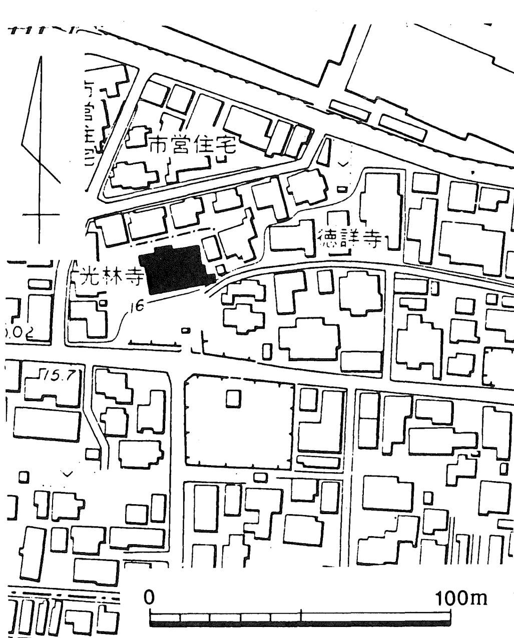
本報告では，光林寺と永井直清あるいはその家臣との関連まで論及するまでには致らなかった。光林寺には，家老横田主水を初めとする直清の家臣の墓があり，また，家臣と在地有力者



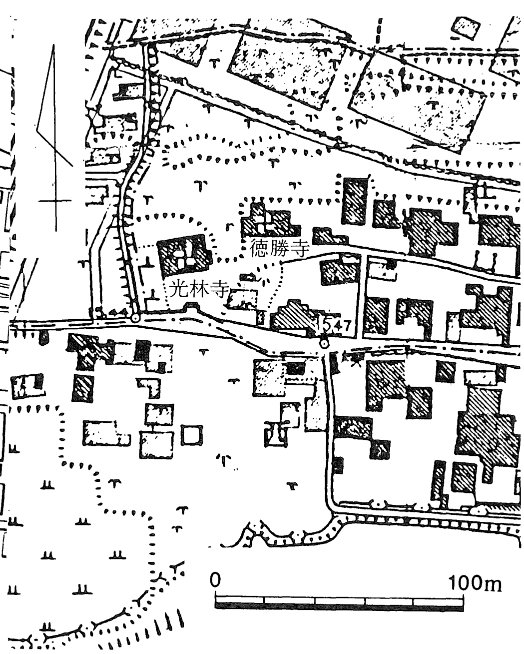
第82図　「徳勝寺總境内之図」（明治43年）徳勝寺履歴写



第83図　城州乙訓郡神足光林寺・徳勝寺寺地抗木打渡裏書図（寳暦二年）



第84図　現在の光林寺（昭和44年）



第85図　大正の光林寺（大正11年測図）

により涅槃図が寄進されている。家老等の墓は，元来勝龍寺の東にあり，これを移したと伝えるが，詳細は明らかでない。いずれにせよ，永井家と光林寺には，欠かせぬ関連が見受けられる。

注 1) 現地及び整理について，白川成明，本田祐生，安藤道子，長谷川睦，藤本滋子，近藤志津子，小塩礼子各氏の御協力を得た。

2) 岩崎誠「長岡京跡右京第163次(7ANMKI地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第15冊 1985

3) 長岡京跡右京第10・16・24・28・61・163・172・184・187・209次調査として実施されたもので，神足遺跡に関する多くの成果が得られている。

4) 注2文献と同じ。

5) 長岡京跡右京第187・209次(7ANMTT地区)調査では，住居址群が，長岡京跡右京第10・28次(7ANMMB地区)調査では，方形周溝墓群と土壙墓群が検出されている。これらの調査における出土量は豊富で，そのうち，磨製石剣の多量出土など，特異な内容を含んでいる。

6) 山本輝雄・久保哲正他「長岡第9小学校建設にともなう発掘調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 1980

7) 注2文献と同じ。

8) 注6文献と同じ。

9) 長岡京跡右京第94次(7ANQUD地区)・右京第102次(7ANMMK地区)の両調査では木簡や墨書土器が，長岡京跡右京第10次(7ANMMB地区)・右京第77次(7ANKSM地区)では，墨書土器が出土している。

岩崎誠「長岡京跡右京第94次(7ANQUD地区)調査略報」㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 1983

岩崎誠「長岡京跡右京第102次(7ANMMK地区)調査概要」㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 1984

山本輝雄・久保哲正他「長岡第9小学校建設にともなう発掘調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 1980

山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次(7ANKSM地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 1982

10) ホトケは，一般的に喉仏を示すが，当調査で骨壺内から出土したものからは，頭頂骨，蝶形骨，遊離歯，頸椎，顎骨等さまざまで，適当に選骨して，納められている。

6　長岡京跡出土の江戸時代人骨について

昭和60年の長岡京跡右京第207次調査において，18世紀初頭に埋葬されたと推定される火葬骨と，それ以前にさかのぼるとみられる座棺埋葬の土葬骨１体が出土した。火葬骨は骨壺内に埋納された５体のほか，数ヶ所から検出されている。

(1)　火葬骨

性，年齢の判定は多くの場合困難であり，記載のないものは成人骨である。

火葬墓ＳＸ20707

粉状になった人骨片。

火葬墓ＳＸ20708

側頭骨の錐体の破片２～３点。

火葬墓ＳＸ20709（骨壺内）

頭蓋冠の破片，左上顎骨，下顎骨，第１および第２頸椎の破片，遊離歯12本が検出された。上，下顎骨は小さいが，第２大臼歯が萠出しているので小児骨とみられる。

火葬墓ＳＸ20710

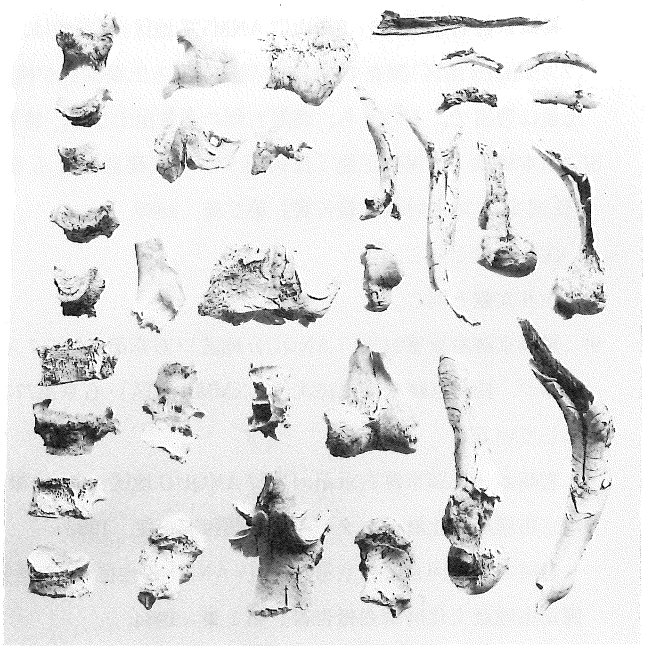
頭蓋のごく小さい破片が数点。

火葬墓ＳＸ20711

遊離歯１本のみ。

火葬墓ＳＸ20712

粉状に近い細片。



第86図　　火葬墓ＳＸ20717骨壺(83)埋納火葬骨

火葬墓ＳＸ20715

左右の大腿骨，上腕骨，尺骨，右腓骨，脛骨など長骨骨体の小破片が多い。それ以外に，頭蓋骨，下顎骨，遊離歯８本，肋骨，肩甲骨，寛骨，左右の距骨，舟状骨，楔状骨，指骨５本が同定できた。

火葬墓ＳＸ20716

頭蓋骨片２～３点と遊離歯７本。

火葬墓ＳＸ20717（骨壺内）

破片数は著しく大量で，大きな破片が多い。長骨の骨体の変形も強く，多くのものは白色を呈する。

頸椎，尾椎以外の椎骨，肋骨，左右の肩甲骨と寛骨，右膝蓋骨，左距骨，左右の踵骨，すべ

ての四肢長骨の骨端と骨体，頭蓋骨が同定された。寛骨の形状から男性と判定できるが，四肢長骨は頑丈で，後頭骨の骨壁はきわめて厚い。頭蓋骨としては，後頭骨以外の脳頭蓋骨，左右の上顎骨，下顎骨の右半分が残存する。上顎右の第１小臼歯と第１大臼歯の歯槽が閉鎖しており，矢状縫合と人字縫合はまだ消失していないが，縫合部は癒合している。これらから判断すると，被葬者の死亡時年齢は壮年後半もしくは熟年前半と推定される。

火葬墓ＳＸ20719（骨壺内）

人骨片の量は中程度で，破片は小さく，焼骨特有の変形は弱い。頭蓋骨片が最も多く，長骨骨体の破片がこれに次ぎ，それ以外に胸椎，肋骨，肩甲骨，寛骨の小片と遊離歯６本が同定された。頭蓋骨としては左右の側頭骨と頭頂骨，後頭骨，蝶形骨，下顎骨が，長骨としては上肢骨と大腿骨が残存する。頭蓋冠の骨壁は薄く，縫合は明瞭に認められ，長骨は弱小であるので，小児骨の可能性が高い。

火葬墓ＳＸ20720（骨壺内）

火葬墓ＳＸ20717に次いで破片数が多い。人骨の色調は黒色，ネズ色，茶色と変化に富み，長骨の変形は強い。四肢長骨の破片が最も多く，頭蓋骨，椎骨がこれに次ぎ，それ以外に肋骨，肩甲骨，中手骨，指骨，寛骨，左膝蓋骨，左右の距骨が検出された。長骨では上肢，下肢骨のほとんどすべての骨が，椎骨では胸椎と腰椎が，頭蓋では頭蓋冠の骨と右上顎骨，下顎骨が同定された。長骨は頑丈で，下顎左の側切歯の歯槽が閉鎖し，椎骨の骨体には嘴状の骨増殖が認められるので，被葬者は壮年後半の男性であった可能がある。

火葬墓ＳＸ20726（骨壺内）

頭頂骨，蝶形骨など頭蓋骨片が数点と遊離歯２本，および第１，第２頸椎だけである。変形はほとんどみられない。

火葬墓ＳＸ20727

破片数は少なく，破片の大きさも小さい。上腕骨，大腿骨，脛骨など四肢長骨と頭蓋冠の破片が比較的多く，それ以外に椎骨，肋骨，肩甲骨，寛骨，踵骨の破片が僅か残存する。頭蓋骨は薄く長骨は，小さいので若年個体の遺骨と推定される。

火葬墓ＳＸ20728

頭蓋冠と下顎骨の小破片がごく少量検出された。

火葬墓ＳＸ20729

小破片であるが，量的にはかなり多い。大腿骨，上腕骨，橈骨，尺骨などの四肢長骨がやや多く，後頭骨，側頭骨，頭頂骨，下顎骨など頭蓋骨がこれに次いで多い。第２～第４頸椎，胸椎，肋骨，肩甲骨，右月状骨，左舟状骨，中手骨，寛骨，踵骨が検出され，遊離歯10本が残存する。後頭骨の骨壁が厚いので男性とみられるが確かではない。

火葬墓ＳＸ20730

椎骨，肋骨，長骨骨体のいずれもきわめて小さい破片がそれぞれ数点ずつ残っている。

火葬墓ＳＸ20731

量的に少なく，やや大きな破片が若干あるが多くは小破片である。頭蓋冠，下顎骨など頭蓋骨と，左右の上腕骨，尺骨，大腿骨，脛骨など四肢長骨片が多く，胸椎の破片数点と肋骨２～３点が残存する。頭蓋冠の骨壁は薄く，下顎の第３大臼歯は未萠出，長骨は小さいなど，被葬者が小児であった可能性が高いことを示している。

火葬墓ＳＸ20732

破片数はきわめて少なく，頭蓋冠，右上顎骨，大腿骨，脛骨が同定された。これも頭蓋骨の厚さ，長骨片の大きさから小児骨とみられる。

火葬墓ＳＸ20733

遊離歯１本と長骨のきわめて小さい破片１点。

これら以外に，整地盛土層(頭蓋骨，長骨)，ＳＫ20743(骨粉)，ＳＫ20758(頭蓋骨)，ＳＫ20738(頭蓋骨)，ＳＫ20742(長骨)，ＳＫ20737(骨粉)，２区第Ⅲ期造成盛土の淡茶褐色砂質土（大腿骨)，４区ＳＤ20722(長骨)，トレンチ西部（骨片）から１～２点，多くて数点の骨片が検出された。

(2)　土葬骨（図版46，付表－15）

土葬墓ＳＫ20738

頭蓋骨，第１および第２頸椎，左右の大腿骨，脛骨，腓骨が残存するが，頸椎と下肢骨はいずれも小破片で，頭蓋骨だけがよく残っている。しかし頭蓋の骨質はきわめて脆弱である。

頭蓋骨は，脳頭蓋の後方半分を大きく欠損するが，顔面頭蓋は比較的よく残っている。欠損部は左右頭頂骨の冠状縫合よりの部を除く大部分，後頭骨の後頭平面，底部，前頭骨と左側頭骨のそれぞれ一部，左右の頬骨弓，鼻骨下部，下顎骨の左右の関節突起と筋突起などである。上顎左右の中切歯と右の側切歯，下顎左の第２大臼歯以外の歯は，上下顎に釘植しているが，第３大臼歯は未萠出で，下顎右の第１，第２大臼歯は脱落し歯槽が閉鎖している。

眉弓の隆起は強く，項線も明瞭であるなど男性的特徴が顕著であり，大臼歯の磨耗は強いが，小臼歯とくに下顎の小臼歯にはほとんど磨滅が認められず，冠状縫合は内板では消失しているが外板では明瞭に認められる。これらを総合すると，被葬者の死亡時年齢は壮年後半と推定される。

脳頭蓋の最大長は計測できないが，かなり長く，最大幅は中程度であり，長幅示数は中型の下限あたりに入るとみられる。耳ブレグマ高は著しく低い。左の舌下神経管の二分以外に特記すべき頭蓋小変異は出現していない。

オトガイ高が高いため顔高はそれほど低くないが，上顔高は著しく低い。頬骨弓幅，中顔幅ともに正確に測れないが，頬骨弓幅は130～133㎜程度，中顔幅は95㎜と推定され，コルマンの顔示数は中型と高型の境，上顔示数は低型，ウィルヒョーの上顔示数は低型の下限に入る。眼

窩示数は中型，鼻示数は低型と中型の境にある。鼻根部はやや陥凹しており，歯槽側面角は正確には測れないが，歯槽性突顎はかなり強い。眼窩間幅は狭く，鼻根部の扁平性は弱い。下顎骨体は高く，厚い。

本資料の計測値と示数を近畿地方の江戸時代人である堺環濠都市遺跡(池田・片山，1984)，堺向泉寺跡遺跡（池田・片山，1983)，大阪吉原墓地（欠田，1959）出土の男性と比較した。

長岡京跡資料は，脳頭蓋の最大幅は他の近畿江戸時代人と大差ないが，高径が著しく低い。顔面の幅径もほとんど一致するが，上顔高が低い。したがって顔示数ではあまり差はないが，上顔示数は小さい。眼窩示数，鼻示数は大阪とほぼ一致し，堺環濠都市よりはるかに低いが，これは後者の方を特異とみるべきである。下顎骨の骨体は他よりも高く厚い。

以上，長岡京跡出土の江戸時代男性の特徴は，脳頭蓋および上顔高が低く，下顎骨が高く頑丈である以外，大阪出土の江戸時代人によく似ている。

文献

池田次郎・片山一道「堺市向泉寺跡遺跡近世墳墓群出土の人骨について」(堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第12集　1983　pp 70～86

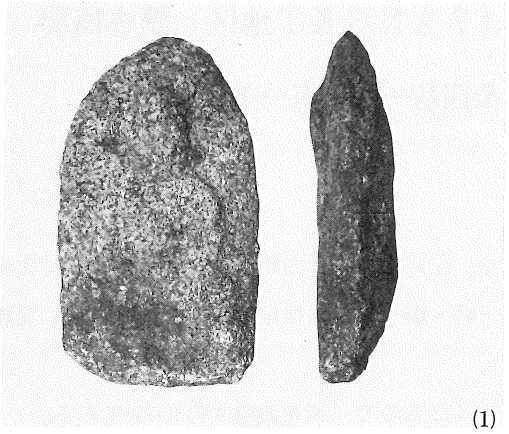
池田次郎・片山一道「堺環濠都市遺跡－調御寺跡－出土の近世人骨について」(堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第20集　1984　pp 178～195)

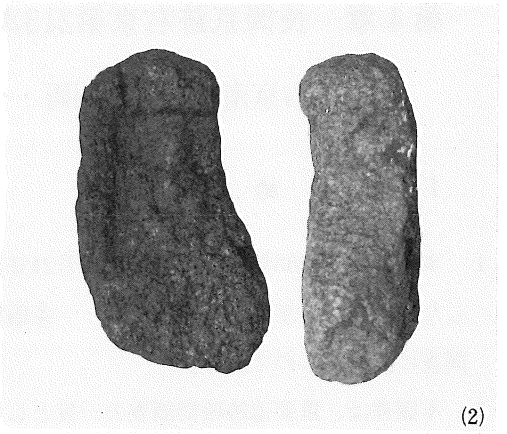
欠田早苗「畿内人頭蓋骨の人類学的研究現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について」『人類学輯報』　25：53－83 1959.

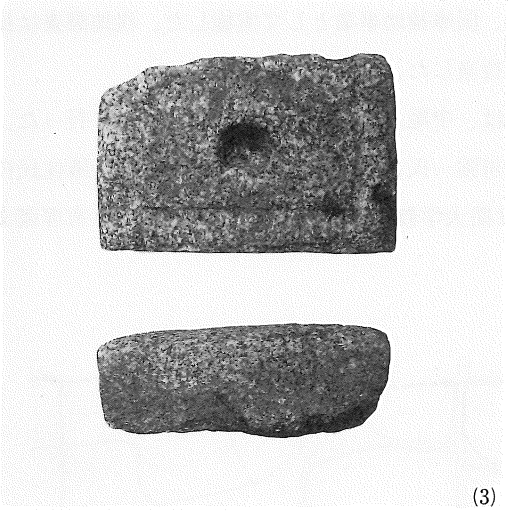
付表—15　頭蓋骨の計測値と示教（男性）

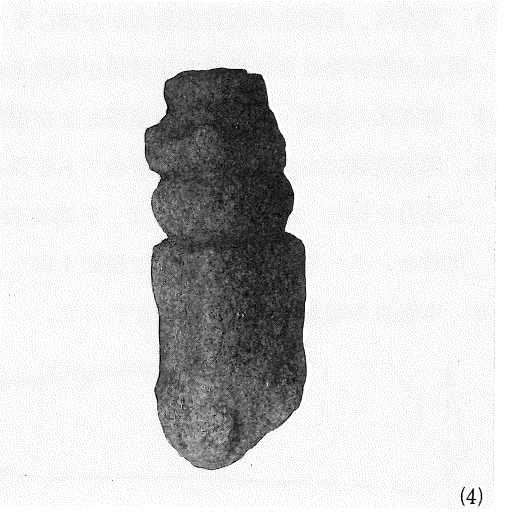
		堺		大阪
	長岡京跡	環濠都市	向泉寺跡	吉原墓地
2 a ナジオン・イニオン長	(170)	165		
5 基底長	(95)	103	102	100.7 (22)
8 最大幅	140	140	138.5 (2)	140.6 (31)
9 最小前頭幅	(90)	92	89.0 (2)	92.6 (35)
10 最大前頭幅	124	109	111	114.6 (31)
20 耳ブレグマ高	111	119	121.0 (3)	118.5 (27)
22 カロッテ高	(104)	107		109.4 (25)
24 横弧長	(315)	314	328.0 (2)	324.5 (27)
26 正中矢状前頭弧長	129	123	125.0 (2)	125.4 (28)
29 正中矢状前頭弦長	110	111	110.0 (2)	109.9 (28)
32(1)前頭傾針角	62	63	67	64.0 (21)
32(5)前頭彎曲角	(129)	133	129	
20/8 幅耳ブレグマ高示数	79.3	85.0	88.5 (2)	
12/2 カロッテ高示数	(61.2)	64.8		62.2 (30)
9/10 横前頭示数	(72.6)	84.4	82.0	80.5 (29)
9/8 横前頭頭頂示数	(64.3)	65.7	67.9	65.8 (30)
29/26 矢状前頭示数	85.3	90.2	87.0	87.0 (37)
40 顔長	(101)			99.8 (11)
42 下顔長	(118)	113		
43 上顔幅	(100)	103	103	103.3 (23)
44 両眼窩幅	93	96		98.3 (23)
46 中顔幅	(95)	95	95	99.9 (22)
47 顔高	119	137		
48 上顔高	62			68.4 (12)
50 前眼窩間幅	16	16		18.8 (24)
F 鼻根横弧長	19	20		
51 眼窩幅 (左)	40	42		42.0 (23)
(右)	41	43		
52 眼窩高 (左)	32	36		33.7 (23)
(右)	34	36		
54 鼻幅	(25)	22		26.7 (23)
55 鼻高	(49)	57		52.0 (25)
57 鼻骨最小幅	5	3	10	7.7 (23)
61 上顎歯槽幅	59	62		64.2 (20)
69 オトガイ高	35			
69 (3)下顎体厚	15	12	13.0 (3)	
72 全側面角	87			80.9 (9)
47/46 顔示数 (v)	(125.3)	144.2		
48/46 上顔示数 (v)	(65.3)			67.7 (10)
52/51 眼窩示数 (左)	80.0	85.7		80.1 (23)
(右)	82.9	83.7		
50/44 前眼窩間示数	17.2	16.7		19.2 (23)
50/F 鼻根彎曲示数	84.2	80.0		
54/55 鼻示数	(51.0)	38.6		51.8 (23)
9/43 前頭両眼窩示数	(90.0)	89.3		89.4 (22)

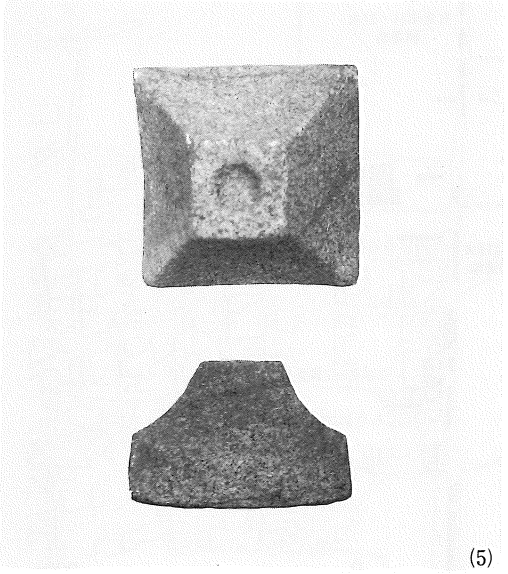
吉原墓地の（　）内は例数











(1) 石仏（火葬墓ＳＸ20708出土）
(2) 石仏（溝ＳＤ20702出土）
(3) 墓碑基礎部（火葬墓ＳＸ20708出土）
(4) 一石五輪塔（火葬墓ＳＸ20708出土）
(5) 五輪塔火輪部（火葬墓ＳＸ20708出土）

第87図　火葬墓他出土墓碑

第４章　長岡京跡右京第213次（７ＡＮＧＫＴ地区）調査概要

―右京南一条四坊四町・一条四坊一町・南一条大路―

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1985年11月22日から12月24日まで、長岡京市井ノ内頭本３―３他において実施した長岡京跡右京南一条四坊四町・一条四坊一町・南一条大路推定地および上里遺跡の発掘調査に関するものである。

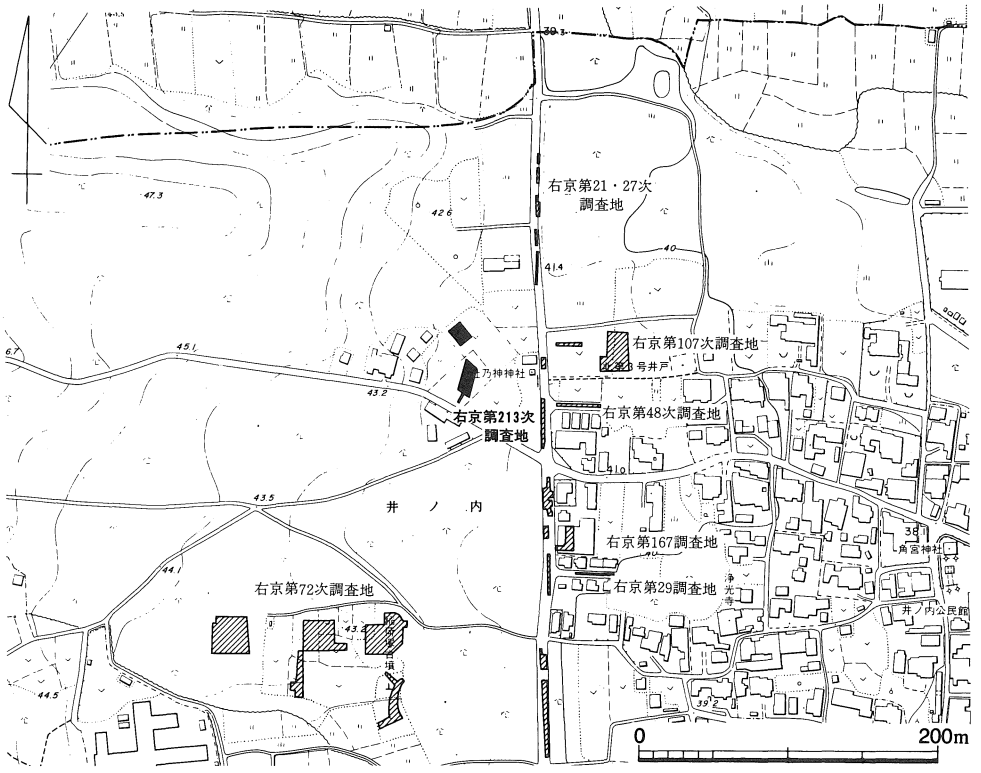
2　本調査は、重要遺跡確認調査の一貫として行ったもので、調査面積は約360㎡である。

3　調査は、長岡京市教育委員会が主体になり、国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡京市教育委員会管理課文化財係中尾秀正が担当した。

4　調査後の遺構・遺物の図面整理および製図は、中尾、渡辺美智代、赤木恵が主に行った。

5　調査実施にあたり、土地所有者である長谷川弥一氏をはじめ、乙訓若竹苑ほか近隣住民のご協力を得た。また調査中には、京都文教短期大学教授中山修一氏、（財）長岡京市埋蔵文化財センター等からご指導、ご援助を得た。

6　本報告の編集・執筆は中尾が行った。



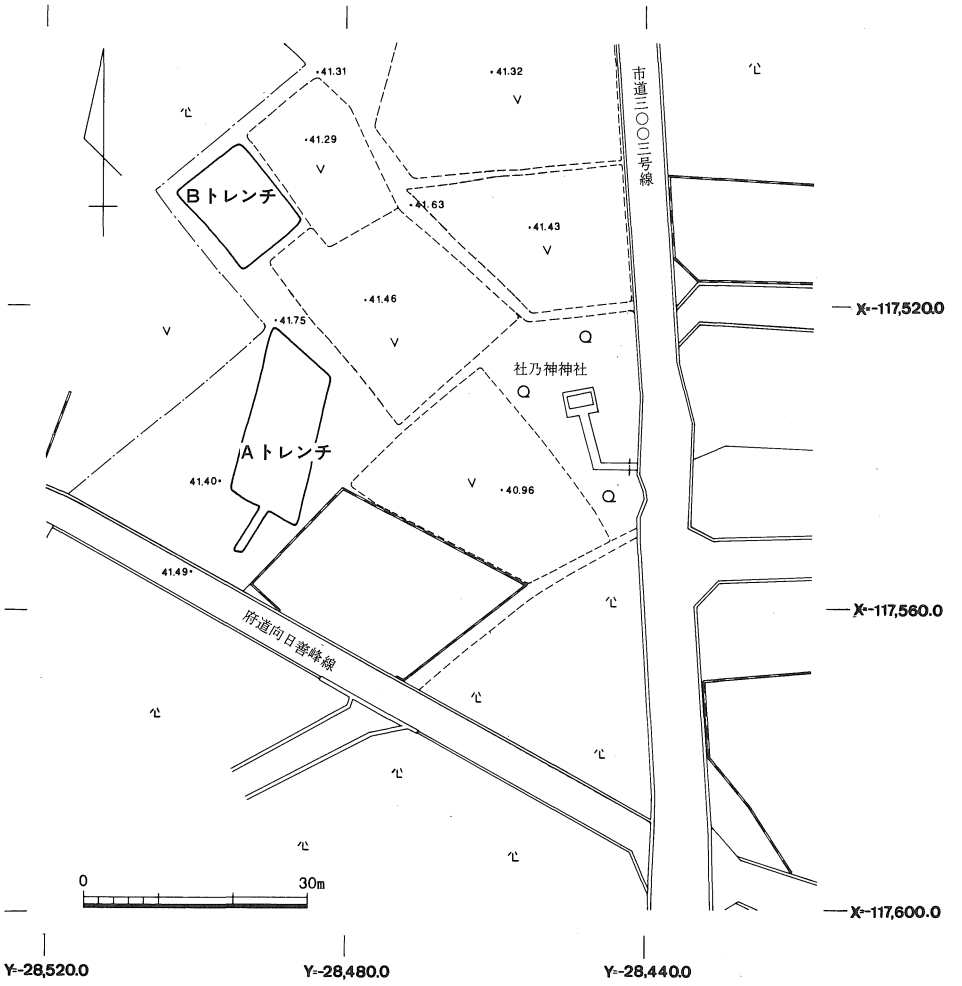
第88図　発掘調査地位置図（1/5000）

2 調 査 経 過

当調査地は，長岡京市の北部にある井ノ内地区の集落から西約100ｍの地点で、標高約41ｍの洪積台地の縁辺部に位置し、北方約150ｍに善峰川旧流路によって形成された氾濫低地との傾斜変換線が東西に通っている。当地はかつて竹藪であったが、現在開墾され畑となり、周辺まで宅地開発が進んできている。

長岡京条坊復原によると、当地は右京南一条四坊四町・一条四坊一町にあたるとともに調査地のほぼ中央部を南一条大路が東西に通ると推定される。また、縄文時代～古墳時代の集落遺跡である上里遺跡の範囲にある。

当地の周辺には、西方約400ｍの竹藪中に古墳時代後期の前方後円墳である井ノ内車塚古墳が、その西方に後期の芝古墳群があり、円墳・方墳・前方後円墳などが散在している。一方，



第89図　調査地周辺図（1／1000）

南方に弥生時代～古墳時代の集落遺跡である井ノ内遺跡が広がり、古墳時代後期の小西古墳・稲荷塚古墳、中世の井ノ内城館跡[1]などが確認され，当地のすぐ南西の小字宮山には「続日本紀」大寳二（702）年７月４日条にみえる乙訓坐火雷神社（現角宮神社と推定）の旧社殿があったと推定されている。さらに北方約130ｍの所にナイフ形石器が発見された頭本（かしらもと）遺跡がある。

また周辺での発掘調査では，調査地のすぐ東側で行われた右京第21・27次調査[2]のうち府道向日善峰線より北側で，奈良時代の溝，中世の溝・土壙や縄文土器（後期）・平安時代の土器類が出土している。またこの道路の東側にある乙訓若竹苑建設の際に行われた右京第107次調査[3]で，古墳時代後期の土壙墓２基とともに中世の集落に関係する溝・土壙などが検出され，さらに当地南東での右京第48次調査で，中近世の遺構とともに弥生時代中期の溝が発見されている。

ところで，今回の調査は長岡京跡とくに南一条大路の検出と合せて、上述した先土器時代から中近世に至る遺構を検出する目的で実施した。

調査トレンチは南一条大路推定地に幅約10ｍ×長さ約21ｍの南北トレンチ（Ａトレンチ）を設定した。しかし，調査が進むにつれて南一条大路に関係する遺構等が検出されなかったため，Ａトレンチの北西に幅10ｍ×長さ約13ｍの東西トレンチ（Ｂトレンチ）を新たに設定した。

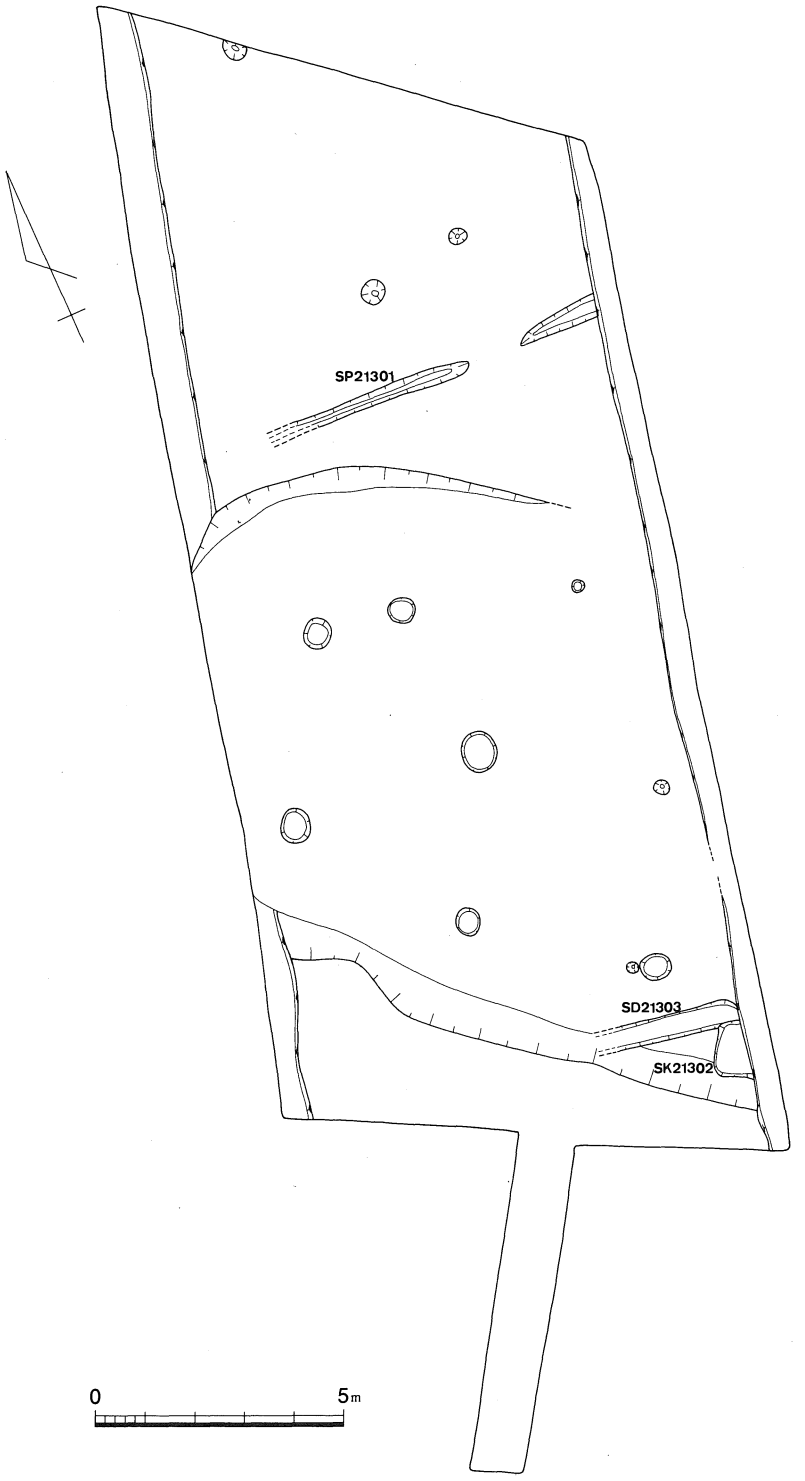
調査はＡトレンチで耕作土を重機で除去した後，人力で遺構の検出に努めた。Ｂトレンチでは，耕作土が浅かったため，当初から人力で作業に取りかかった。調査の結果，当初の期待に反し，南一条大路は検出されず，おもに近世以降の溝・土壙などが検出されるにとどまった。調査後，重機および人力によって旧状に復した。

3　検　出　遺　構

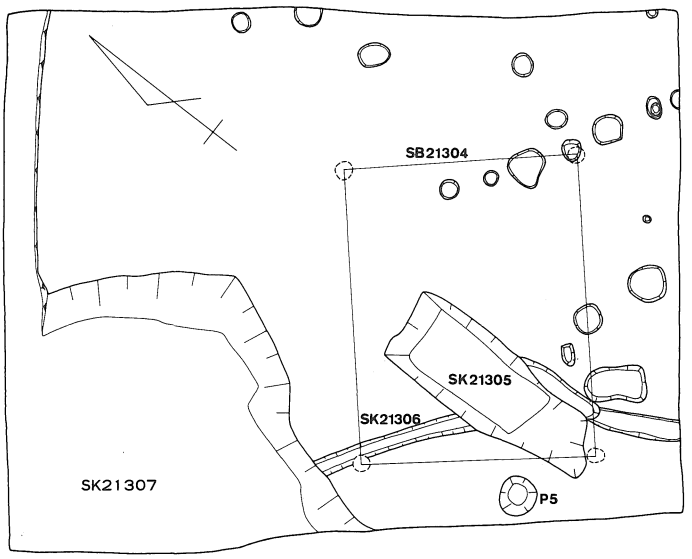
調査地の基本層位は，耕作土の直下で暗褐色砂礫又は暗黄褐色土の地山となり，Ｂトレンチでは耕作土と地山との間に厚さ0.2～0.3ｍの褐色土が堆積している。以下，各トレンチごとに調査の概要を述べていく。

Ａトレンチ（第89・91図，図版47―２・49―１・２）

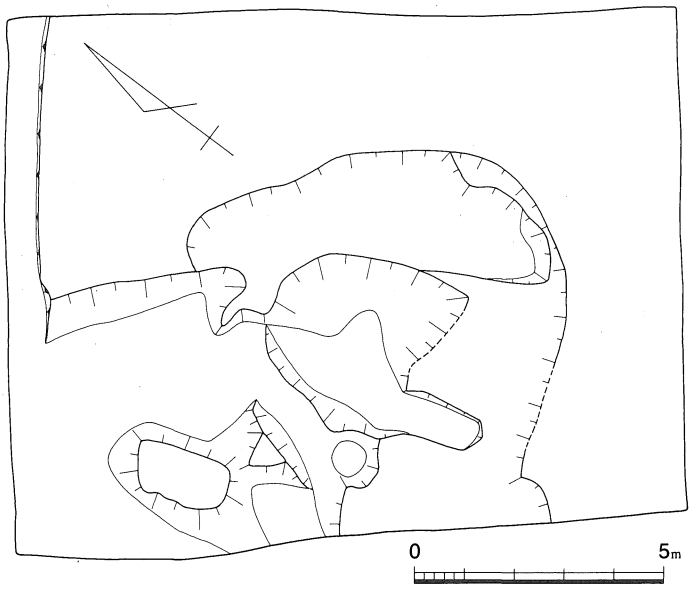
基本層位は，耕作土の直下で暗褐色砂礫又は暗黄褐色土の地山となる。地山面には，トレンチの中央部から南部にかけ，地形に沿って北西から南東にゆるやかに斜傾する幅約10ｍ，深さ約0.5ｍの凹地があり，現在のように平坦化される以前は起伏をもつ地形であったことが明らかになった。この凹地には，南端の一部に茶褐色土が堆積し，その上を褐色土が全域を被った後，東部の南端の一部が土壙ＳＫ21302により開削され，人頭大～拳大の礫，礫まじりの褐色土・淡茶褐色土・淡茶褐色砂礫が堆積している。さらにその上を暗褐色土が被っている。これらの土層中からは，古墳時代から中世にかけての須恵器・土師器・平瓦・瓦器などとともに近世以降の陶磁器・瓦・銭貨（寛永通寳）・鉄器（鎌など）が出土している。



第90図 Aトレンチ検出遺構図



上層遺構



下層遺構

第91図　　Bトレンチ検出遺構図

検出された遺構には，溝ＳＤ21301・土壙ＳＫ21302・溝ＳＤ21303と柱穴群がある。

溝ＳＤ21301　北部の地山上面で検出したほぼ真東西方向の素掘り溝で、幅0.3～0.4ｍ，深さ0.2ｍを測る。部分的に後世の削平を受けているが西から東へ流れる。埋土は暗灰色砂質土で，須恵器（甕）片と土師器片がわずかに出土した。

土壙ＳＫ21302　凹地に堆積した褐色土上面から掘り込まれた土壙で，東西2.5ｍ以上を測る。人頭大～拳大の礫と礫まじりの褐色土が堆積していたが，遺物は出土しなかった。おそらく開懇中に出た礫を埋めるために掘られた土壙であろう。

溝ＳＤ21303　凹地の地山面で検出された東西方向の溝で，幅0.5ｍ，深さ0.2ｍを測る。埋土は拳大の礫が混じる淡茶褐色土で，遺物は出土しなかった。

なお，凹地の地山面で検出された柱穴群は，径0.2～0.8ｍの円形の掘形で，埋土はすべて暗灰褐色土である。一部の柱掘形から須恵器・土師器とともに近世以降の陶磁器類の破片が出土している。

Ｂトレンチ（第90・91図，図版48・49―３・４）

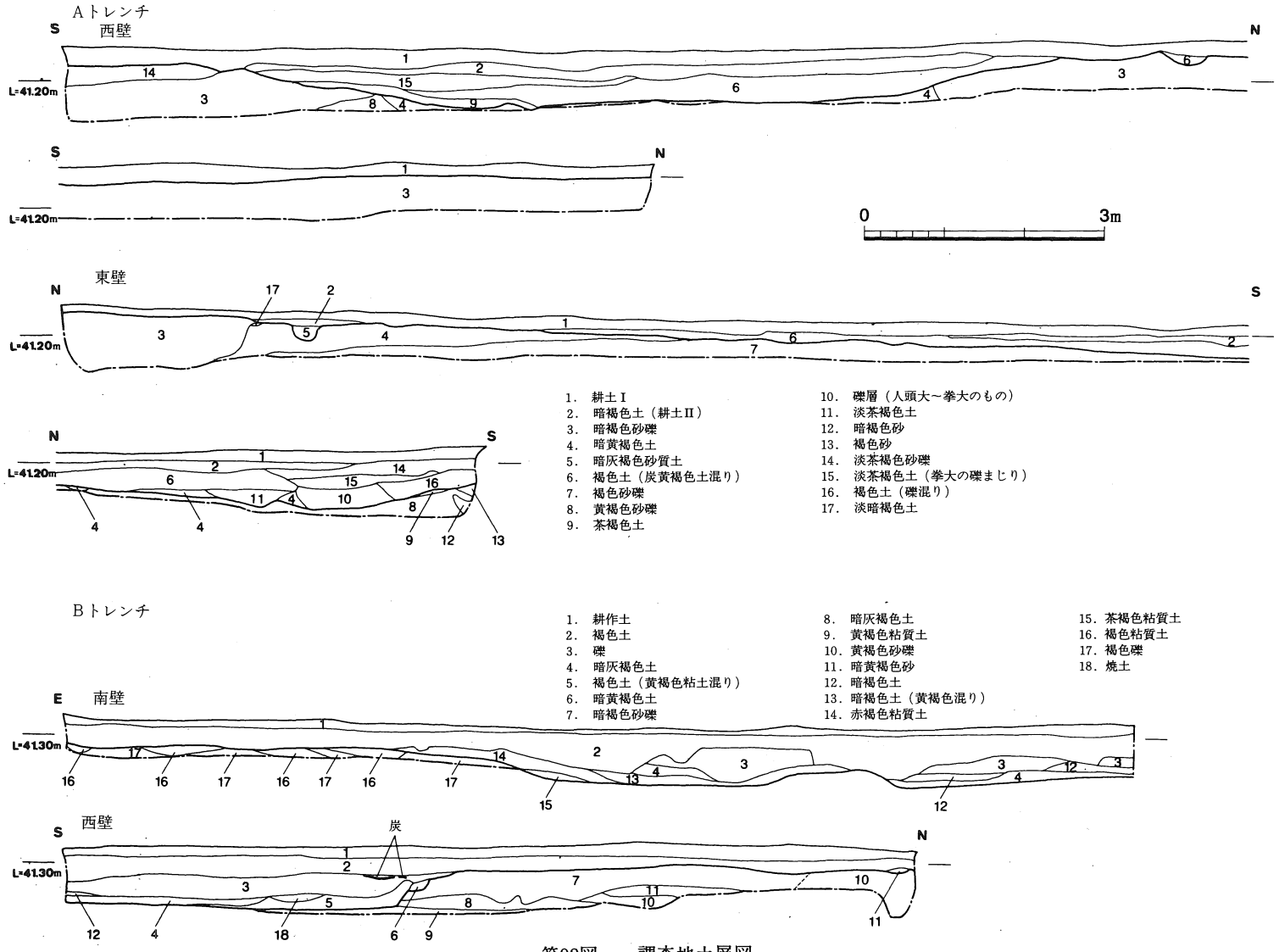
遺構は，上層と下層の二つに大別される。上層では，耕作土直下の褐色土上面で検出された掘立柱建物ＳＢ21304と，褐色土を除去した段階で検出された土壙ＳＫ21305・溝ＳＤ21306土壙ＳＫ21307・柱穴群がある。さらにその下層では土師器・須恵器の破片と鉄器（釘）を含む赤褐色粘質土・拳大の礫・茶褐色粘質土・黄褐色粘質土が混じる褐色土が堆積した自然の凹地が確認されたが，遺構は検出されなかった。

掘立柱建物ＳＢ21304　トレンチの東部で検出された１間四方の東西棟で，東西4.7ｍ，南北5.8・6.0ｍの柱間を測る。径0.35ｍ前後の円形の柱掘形で、埋土は暗灰褐色土（黒炭混り）で中から須恵器甕の少片が出土している。この建物は，柱掘形が小規模で柱間が広いことから，おそらく農作業用小屋程度の簡単な建物と思われる。

土壙ＳＫ21305　トレンチの東南部。赤褐色粘質土上面で検出された北西～南東方向の土壙で，幅1.7ｍ×長さ4.6ｍの長方形を呈する。深さ約0.8ｍで，北西から南東にしだいに浅くなる。埋土は上から0.1ｍまで褐色土，その下は礫となり，中から土師器・須恵器の破片とともに近世以降の陶器・瓦・鉄器などが出土している。おそらく開懇中に出た礫を一括して投棄したものであろう。

溝ＳＤ21306　トレンチの東南部。赤褐色粘質土および褐色礫（地山）の上面で検出された，やや北側に彎曲する溝で，途中土壙ＳＫ21305に，西側を土壙ＳＫ21307によって削平を受けている。埋土は褐色土で、中から土師器皿の小片がわずかに出土している。

土壙ＳＫ21307　トレンチ南西部。赤褐色粘質土・黄褐色粘質土（地山）の上面で検出された不定形な落ち込み状の土壙で，深さ0.5ｍを測る。中に掌大～拳大の礫，焼土，黒炭，暗灰褐色土，暗褐色土などが堆積し，土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・瓦とともに近世以降の陶



1. 耕土Ⅰ
2. 暗褐色土（耕土Ⅱ）
3. 暗褐色砂礫
4. 暗黄褐色土
5. 暗灰褐色砂質土
6. 褐色土（炭黄褐色土混り）
7. 褐色砂礫
8. 黄褐色砂礫
9. 茶褐色土
10. 礫層（人頭大～拳大のもの）
11. 淡茶褐色土
12. 暗褐色砂
13. 褐色砂
14. 淡茶褐色砂礫
15. 淡茶褐色土（拳大の礫まじり）
16. 褐色土（礫混り）
17. 淡暗褐色土

1. 耕作土
2. 褐色土
3. 礫
4. 暗灰褐色土
5. 褐色土（黄褐色粘土混り）
6. 暗黄褐色土
7. 暗褐色砂礫
8. 暗灰褐色土
9. 黄褐色粘質土
10. 黄褐色砂礫
11. 暗黄褐色砂
12. 暗褐色土
13. 暗褐色土（黄褐色混り）
14. 赤褐色粘質土
15. 茶褐色粘質土
16. 褐色粘質土
17. 褐色礫
18. 焼土

第92図　調査地土層図

磁器の破片が出土した。とくに礫層を除去した段階で，焼土が２ヶ所で集中し，うち１ヶ所で焼土壙が認められ，中から竹の炭片などが出土している。

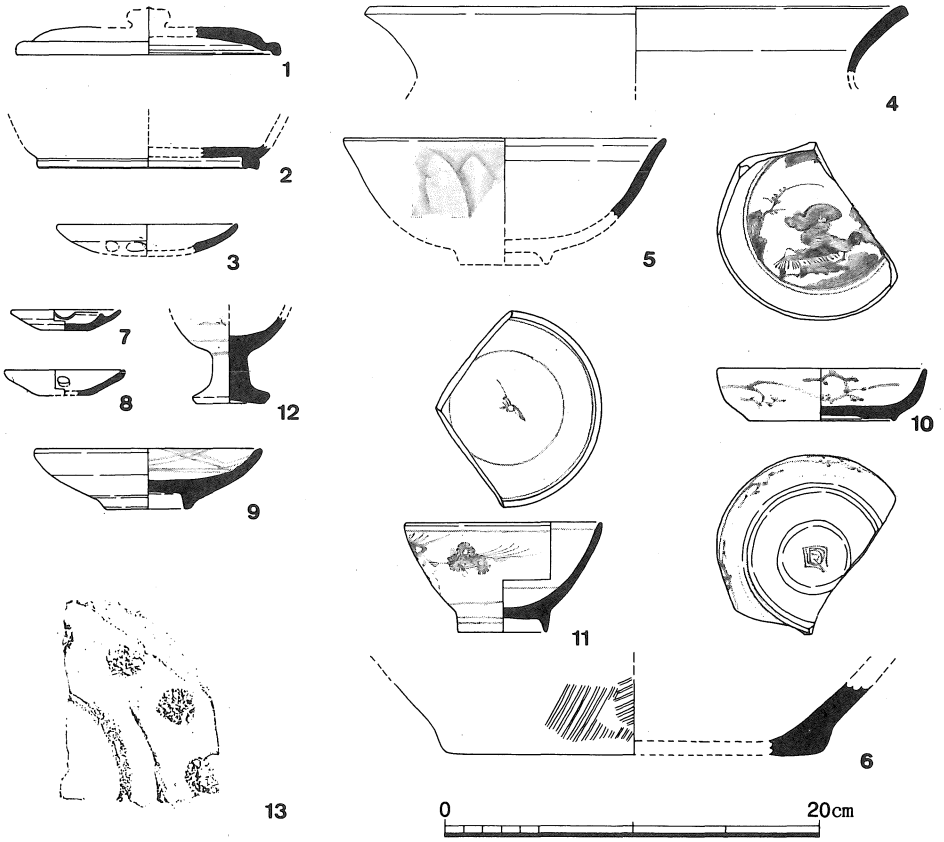
柱穴群　トレンチの北部および東半部の暗褐色砂礫および黄褐色土の地山上面で検出した円形又は隋円形の掘形の柱穴群で，埋土は褐色土で，遺物は出土していない。

3　出土遺物（第92図・図版50）

本調査では，古墳時代から近代に至る各時代の遺物がコンテナ３箱出土している。その種類も，土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・陶器・磁器・瓦・鉄器・銭貨など各種である。近世～近代にかけてのものが大半を占め，古い時期の遺物はほとんど新しい時期のものと共伴している。これらの遺物は，ほとんど包含層から出土し，多くは細片化しているため実測不可能であった。

Ａトレンチでは，（１・５・７・８）が暗褐色土層から，（３・13）が褐色土層から出土している。Ｂトレンチでは，（４）が褐色土層から，（11・12）が礫層から，（９・10）が暗灰褐色土層から，（２・６）が土壙ＳＫ21305から出土している。

皿（３）と甕（４）は土師器で，（３）は二次焼成を受け暗茶褐色を呈する。坏Ｂ（１）と蓋（２）は須恵器である。（５）は輸入磁器の青磁碗で，鎬連弁文を有する龍泉窯系のもの。（６～８）は陶器。（６）は甕底部で，外面に右上り方向の平行タタキを行い，茶褐色の釉を施す。内面は粗くなでる。（７～８）は灯明皿。（７）は受け付皿で切り込みを有するもので，外面は口縁部を横なでし，以下底面まで削る。内面のみに黄灰色の釉を施す。口径4.9cm，器高1.1cmを測る。他に口径10cm前後の大きい受けが付くものがあり，内面に黄灰色又は灰色の釉を施しているが，切り込みの有無は不明である。（８）は皿状の体部中段に小突起を付して芯立てとするが，小突起の上部は欠損しているので不明。外面は口縁端部を横なでし，以下底面まで削る。内面および口縁外面の一部に黄灰色の釉を施す。（７～８）は京焼で，18世紀前半以降と思われる。（９～12）は国産の染付。皿（９）は口径に比べ小振りの輪高台に浅い体部がつく。総釉で内面に松葉文を描き，見込蛇ノ目釉ハギである。皿（10）は広い口径の体部に蛇の目高台がつく。総釉で，内外面とも貫入が多くみられる。外面に唐草文を描き，見込みに山水図を描く。茶碗（11）は口径10.2cm器高5.8cmで，高台は径５cmで口径の約½と大きくゆるやかに内彎しながら立ちあがる。総釉で，外面に草花文を描き，コンニャク判による菊丸文を施し，高台外面には圏線がめぐる。内面には見込みと口縁部に圏線がめぐり，見込みに文様を施す。仏飯器（12）は脚台に小碗をのせた形態で，碗部は内彎する。文様は体部を破損しているため不明。（９～12）はいずれも伊万里産で18世紀末以降と思われる。（13）は軒丸瓦で，左巻きの三巴文で，その周りに珠文をめぐらす。瓦当面は平滑で，良好な焼成で銀化し光沢もみられ，18世紀以降と思われる。

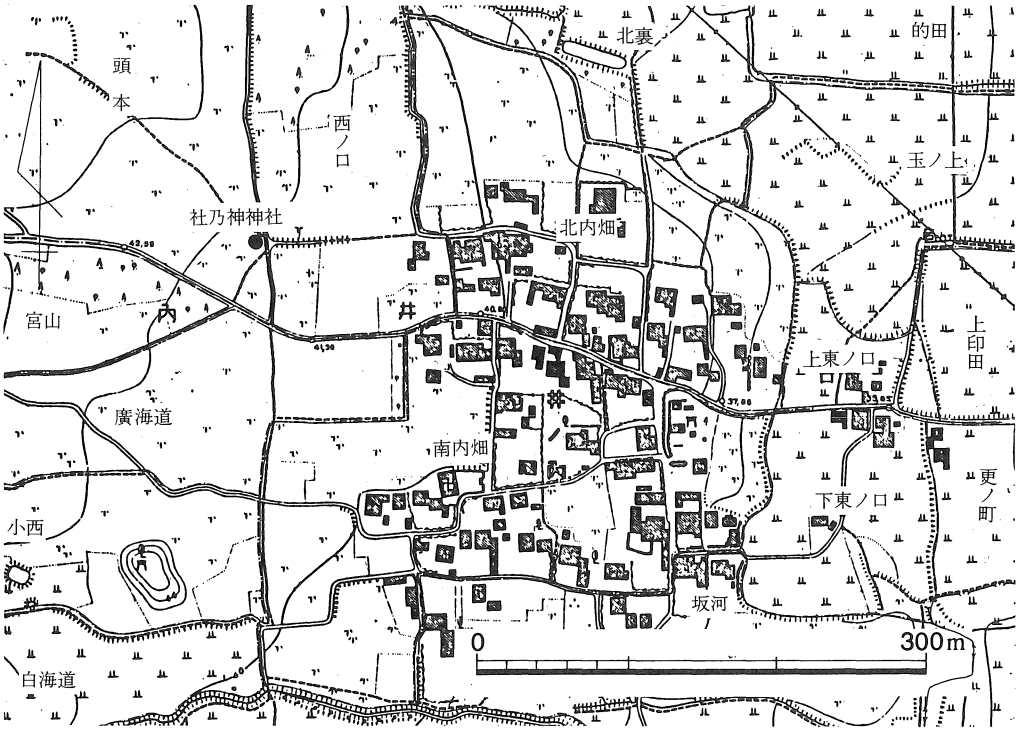


第93図　　出土遺物実測図

4　ま　と　め

今回の調査で検出した遺構は，ほとんど18世紀末以降のもので，当初期待していた長岡京跡および上里遺跡に関するものは検出されなかった。ただＡトレンチで検出した溝ＳＤ21301は，須恵器と土師器の小片をわずかに出土したのみで，その時期を明らかにし得ないが，ほぼ真東西方向をもつもので留意される。また出土遺物に近世以降の陶磁器類などとともに古墳時代後期からの土器類の破片があることは，周辺の発掘調査で確認されている古墳時代から中世にかけての遺構が当地まで広がっていたことを裏づけていると思われる。

また，近世から近代までの遺物の中に土師器の小皿や陶器の灯明皿が比較的多く出土しており，調査地の東隣にある「社乃神神社」（第94図）との関連が注目される。ちなみにこの神社についてふれておこう。この神社は，南北にやや細長い，約260m²の敷地のほぼ中央に南面した，幅2.5m,奥行1.5mの祠があり，その前に唐獅子と石灯籠が１対ずつ置れている。この神社の由来等について，神社の土地所有者である井ノ内南内畑在住の岡本隆氏は，「この地は古くから地元の人たちが「お札」を焼く場所であった。それを祖父が大正末から昭和初に祠を建



第94図　井ノ内集落周辺の旧地形と小字名（昭和11年）

て祀ったのが始まりで，お札には『神符』と書かれており，お札を焼くのは神を捨てることと考え，捨（シャ）が社（シャ）になって「社乃神神社」となった。祠の中には人頭大の岩３個があり御神体として祀られている。」と言う。

このように，この神社の創建は新しいが，古くから「お札」を焼く祭場の地であったと伝えるが，その性格と起源については明らかにされていない。いま，当地の位置と集落との関係，御神体,『神符』と書かれたお札，「シャノカミ」の社名などから，その性格と起源について検討してみよう。

当地は小字「頭本」の東端で，現井ノ内集落の西境にある。現井ノ内集落の周辺（第93図）には，集落の東方に「上東ノ口」「下東ノ口」，北方に「北内畑」「北裏」，南に「南内畑」，西に「西ノ口」と言った地名が遺存し，市内の開田・勝竜寺・友岡の各地区に見られるように，これらの地名は集落の東西南北の方向と合せて

第95図　　社乃神神社

村の出入口を意味していると思われる。ところで，現井ノ内の集落の形成過程については，これまでの研究の中で，南北朝時代に「井内」と「野村」の二村が独立していたが室町時代に集村化したものではないかといわれ[4]，先にみた地名はそれ以降に形成されたものとみてよかろう。

このような現井ノ内集落の西の境の入り口に位置している当地が，かつての「お札」を焼く祭場であり，岩を御神体として祀られていることから，もともと当地が塞の神・境の神としての性格をもっていたのではないかと想起させる。この信仰は，境内に邪神（疫霊悪鬼）が入りこまないように，また反対に境内での災を起さしめる邪神を境外に追いやるために境を守る神を祀るというもので，自然石や石碑に道祖神あるいは塞の神・歳の神とだけ刻んだものなどが安置されている場合が多い。この信仰は，道祖神などが多くのこる東日本によくのこっているが，かつては西日本も含めて全国に広がっていたと推測されており[5]，長岡京市長法寺にも「祭ノ神」という小字が残っている。また，京都市右京区嵯峨愛宕町にある愛宕神社を信仰する，いわゆる愛宕信仰においても，火防の神・火伏の神としての信仰性格とともにこの塞の神・境の神としての性格が認められ，村の入口といわれる所に愛宕様の札を竹にはさんでおく習俗が伝えられている[6]。

さらに窺って考えると，当社の社名『社乃神（シャノカミ）』は「塞の神（サイのカミ）」が転じたものと解すことができるのではなかろうか。

しかし，その結論は今日井ノ内地区の産土神として祀られる角宮神社や井ノ内集落の研究と合せて，今後の研究に委ねなければならないことは記すまでもない。

注1）長岡京跡右京第21・27次調査において，幅1.7m，長さ約23m以上の方形区画の北西隅に想定される溝が検出され，何らかの施設をとり囲む外郭施設と推定され，13世紀初頭前後の中世居館跡に関係するものとみられている。

2）高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1979）』1979年

奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980）』第2分冊　1980年

3）山下　正「長岡京跡右京第107次」（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第8巻　1983年

4）『京都府の地名』平凡社　1981年「井内村」項（283頁）

5）桜井徳太郎編『民間信仰辞典』東京堂出版　1980年　「道祖神」項（202頁）

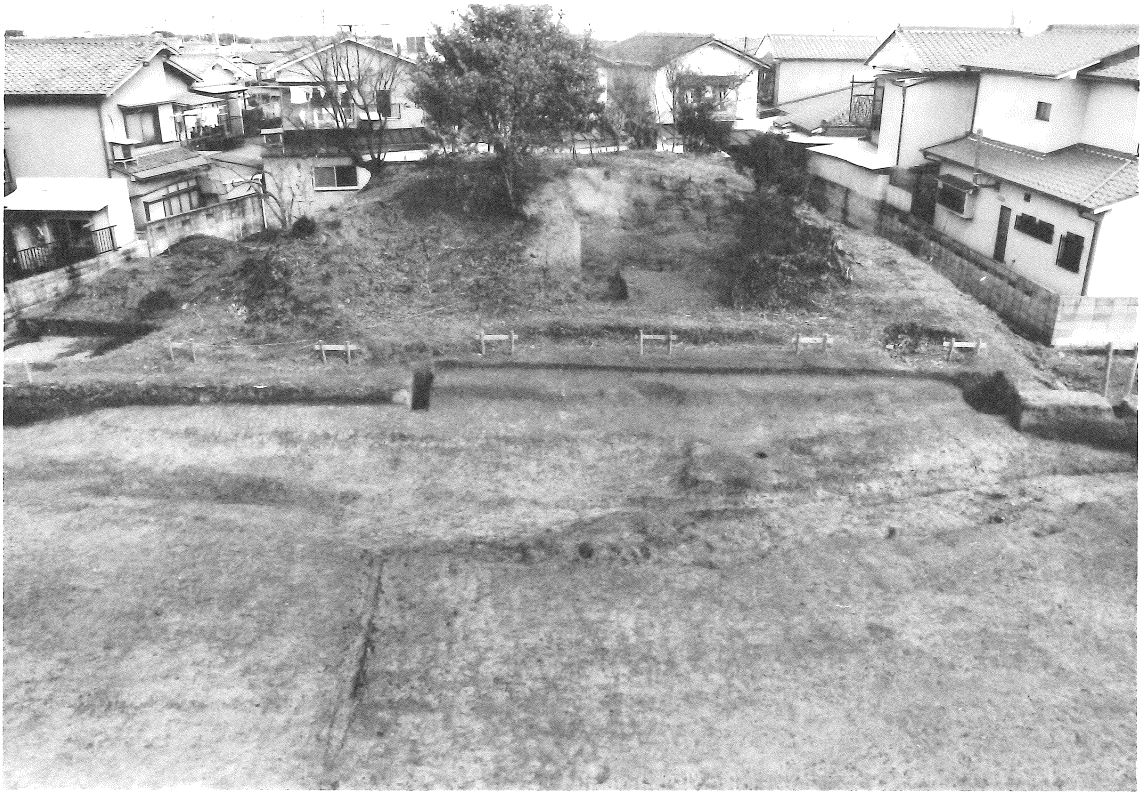
6）　同上　「愛宕様」項（9頁）

図　　版

1　七ツ塚古墳群遠景（1983年、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影）

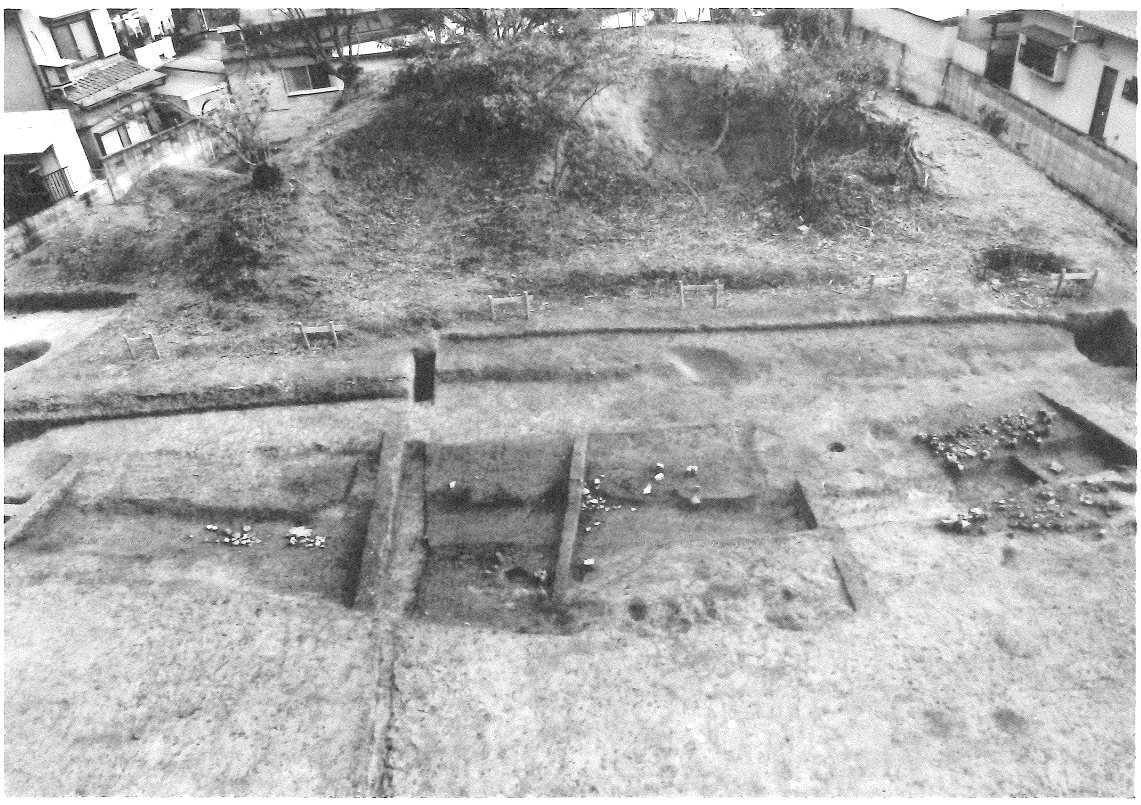
2　七ツ塚古墳群全景（1946年、米軍撮影）

５号墳と周濠ＳＤ13801検出状況
（1983年、京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影）



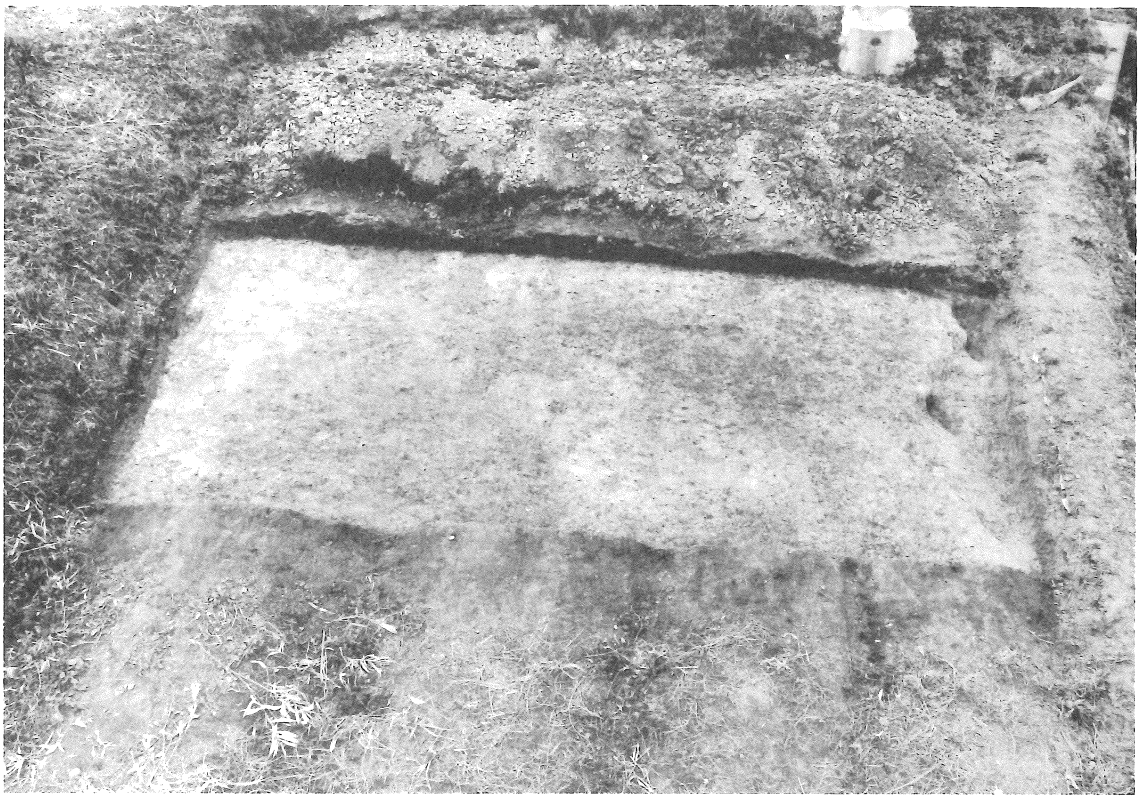
1　第６トレンチ全景（西から、完掘後）

2　第６トレンチ全景（南から、完掘後）



1　周濠ＳＤ13801全景（西から、調査中）

2　周濠ＳＤ13801の遺物の出土状況（北から）



1　第１トレンチ全景（東から）

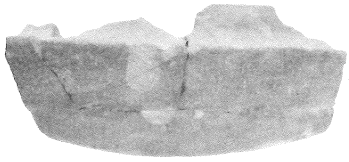
2　第２トレンチ全景（西から）

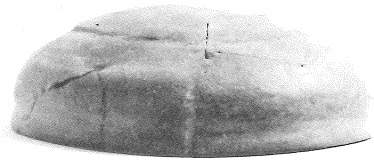
1　第３トレンチ全景（東から）

2　第４トレンチ全景（西から）

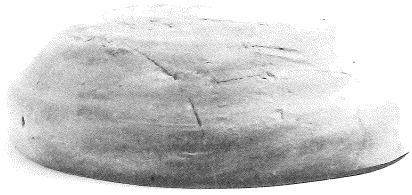
1　６号墳全景（南から）

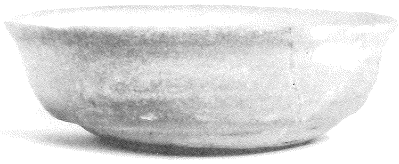
2　６号墳墳丘断面（西から）

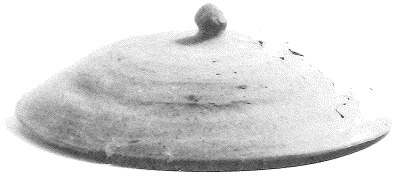

1


10

19

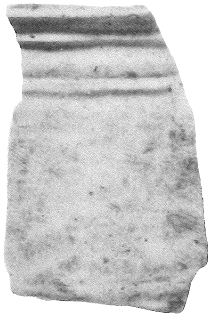

11

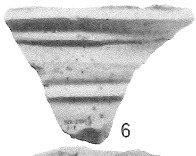

20

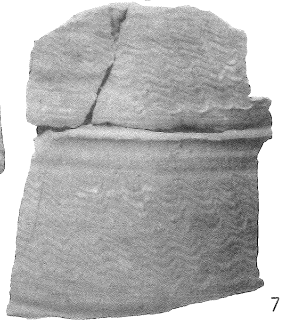

13

4

5



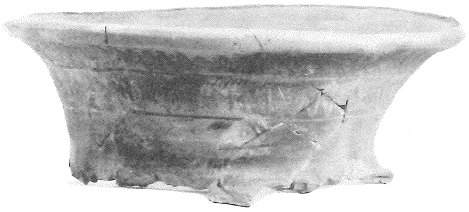

6


7

39

出土遺物　その１（4―土壙ＳＫ13805，その他―周濠ＳＤ13801）

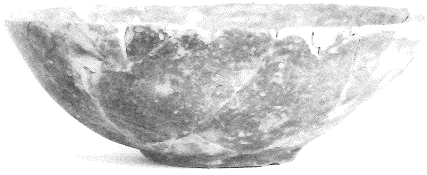
31



38

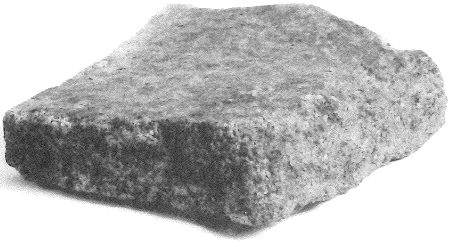
32

34

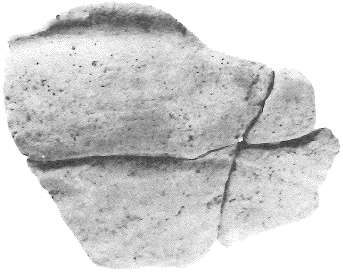


43

44



67



42

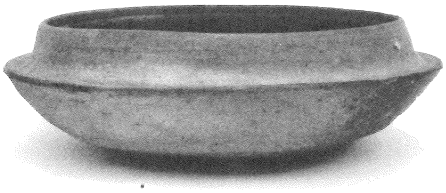
45

50

出土遺物　その２（31･32･34･38･43･44･67―周濠ＳＤ13801，42―溝状遺構ＳＸ13803，
45･50―３号墳採集）

58

61


59

62

60

64

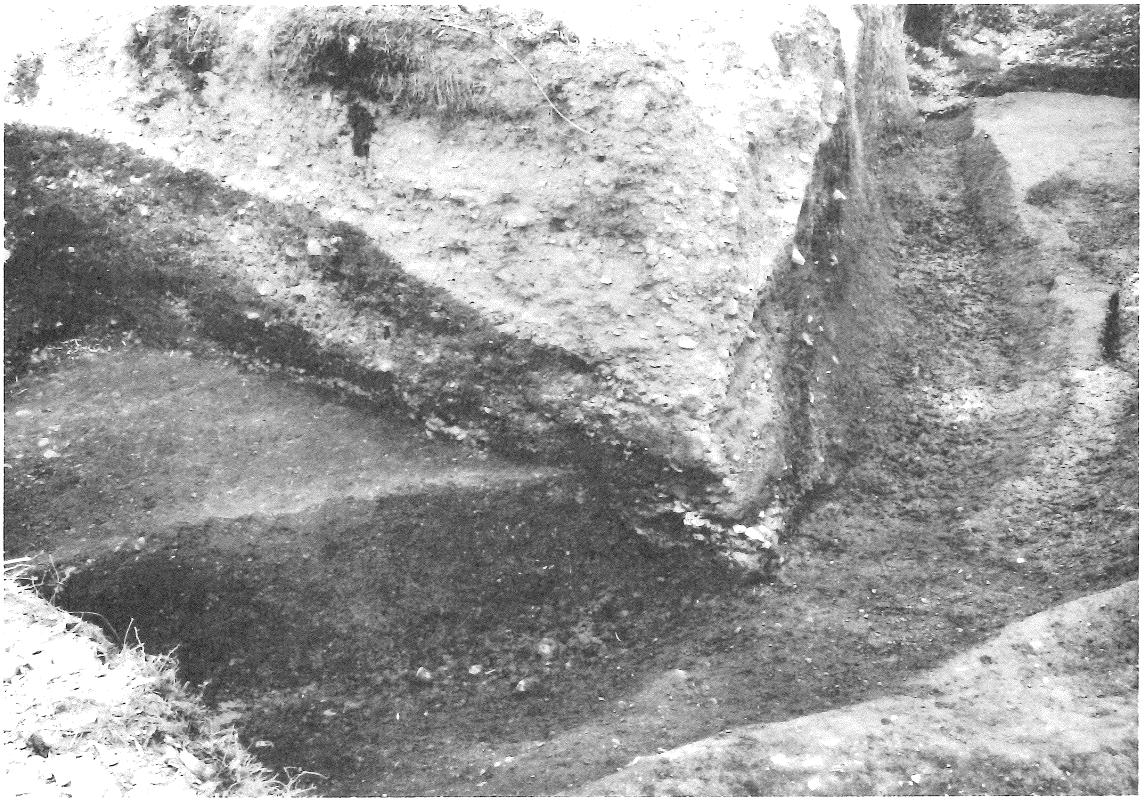
63

65

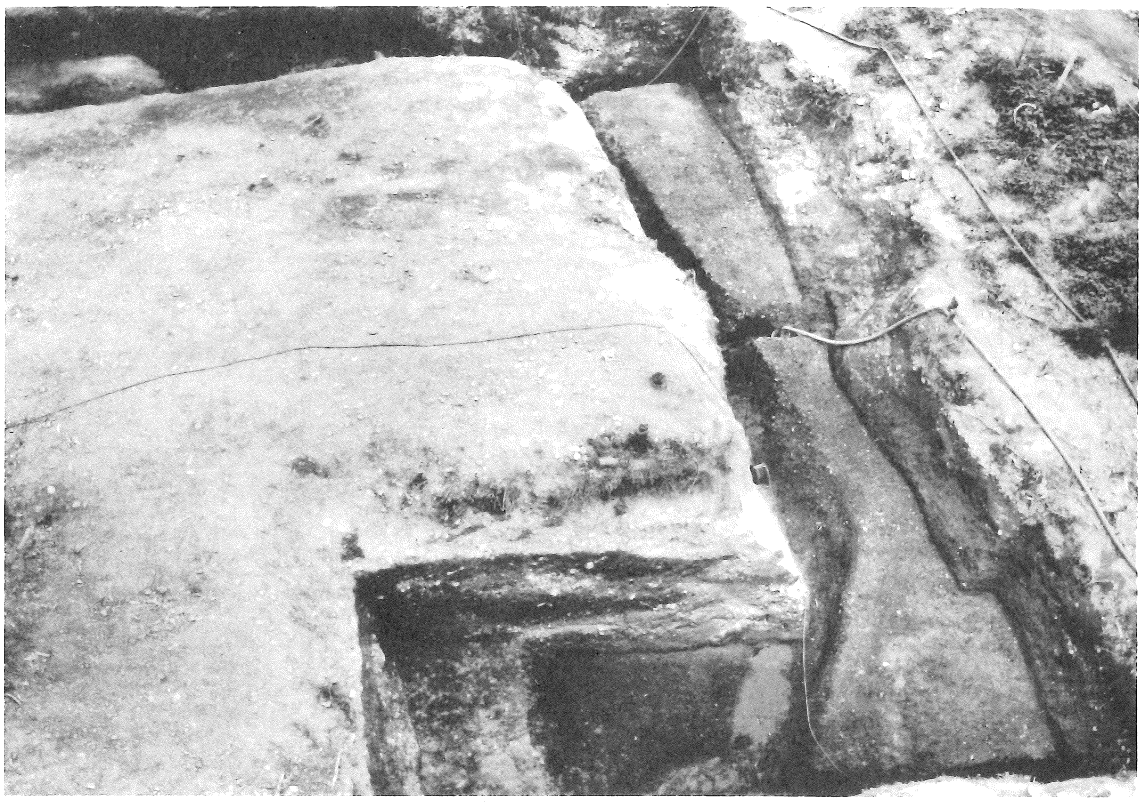
66

出土遺物　その３（７号墳採集）

1　溝SD16305検出の2・3・4トレンチ全景（北東から）

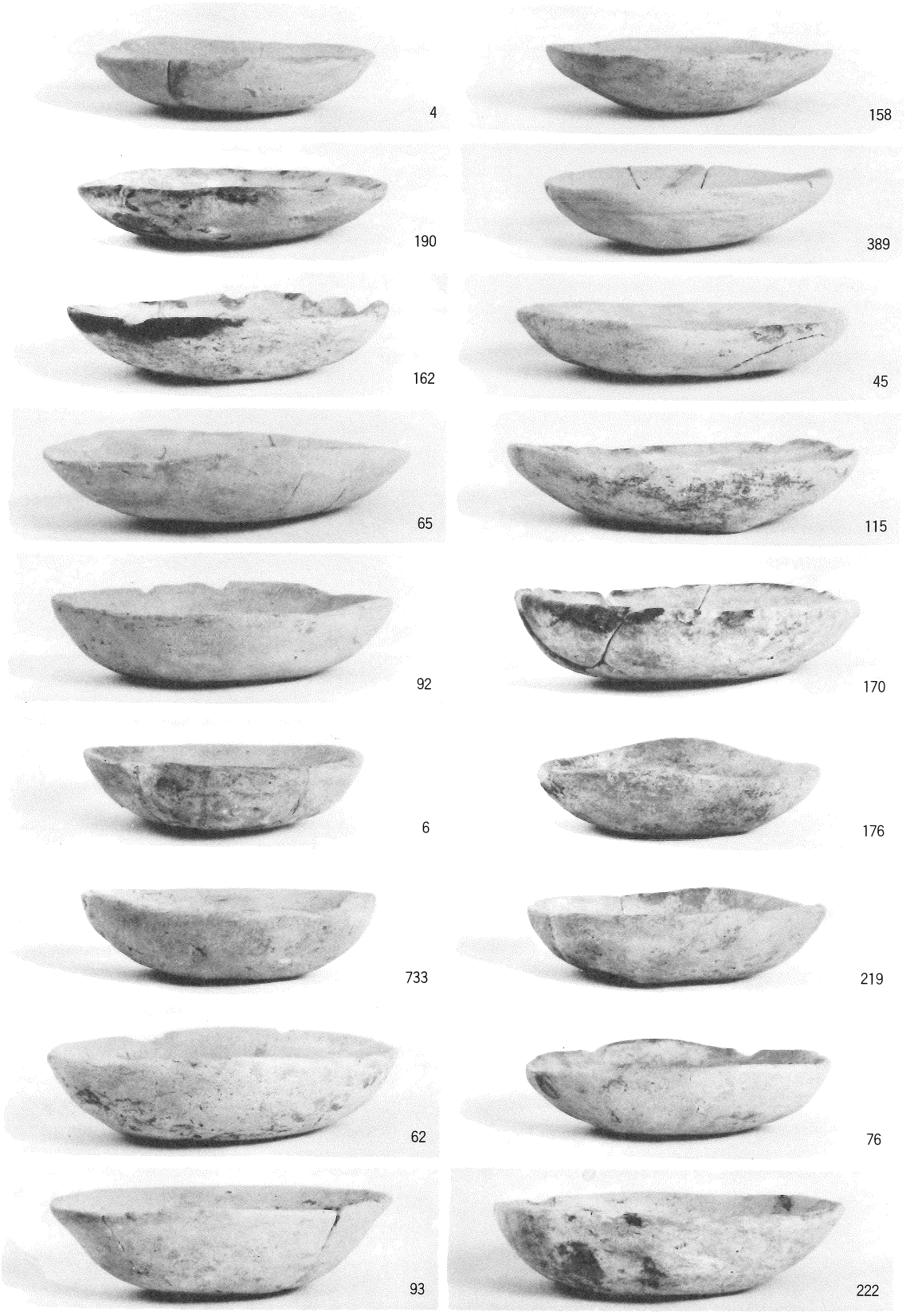


2　溝SD16305—(B)全景（3トレンチ　南から）

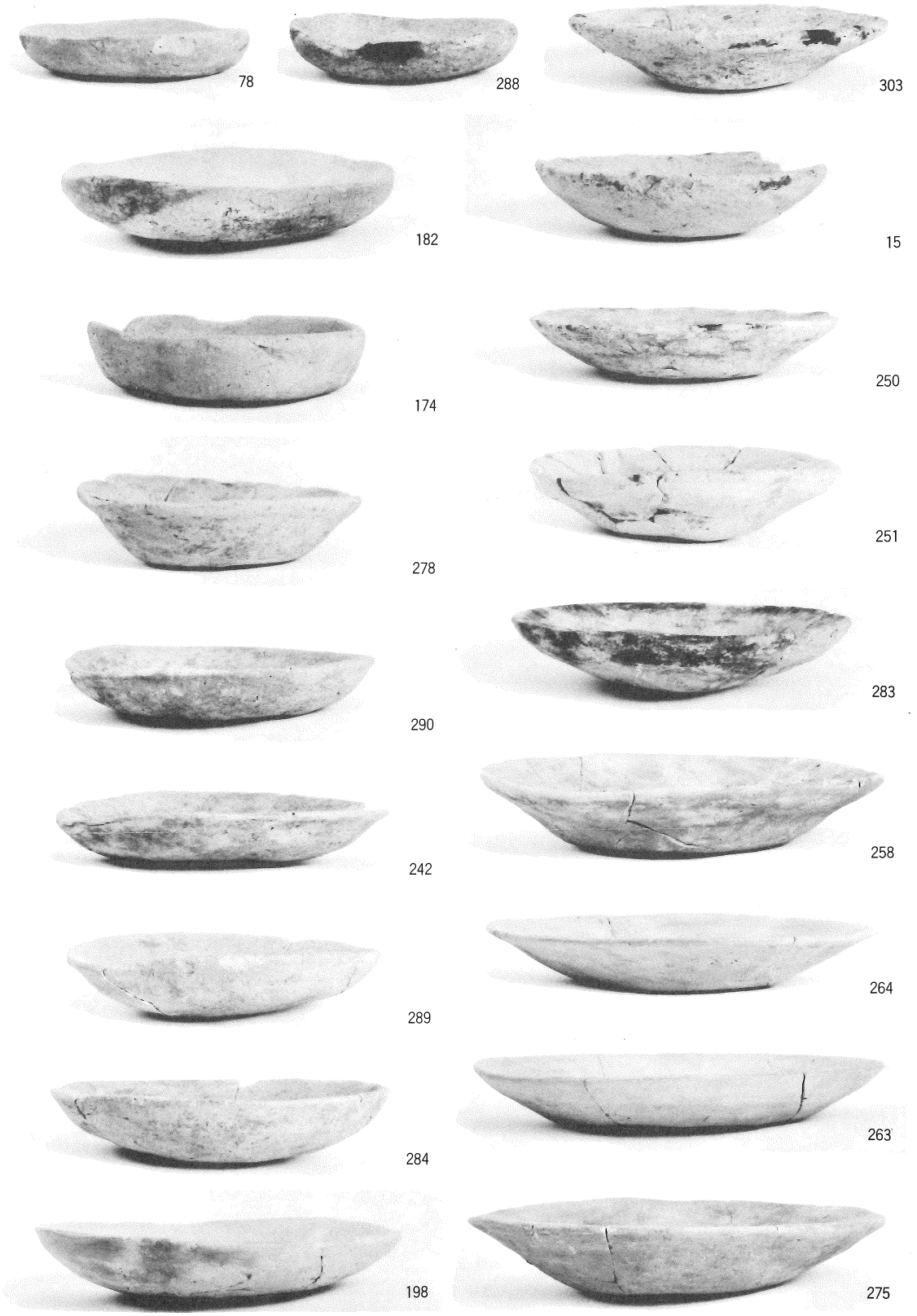


1　SD16305―Ⓒ全景（南から）

2　SD16305断面（第２トレンチ南断面）



溝SD16305出土土師器皿　左列＝4・6・733・62―皿K、65＝皿O、92＝皿N、93＝皿C
右列＝皿Aa



溝SD16305、空堀SD16302出土土師器皿

左列＝78―皿Ab、288―皿Ac、182―皿K、278―皿P、290・242・289・284・198―皿O

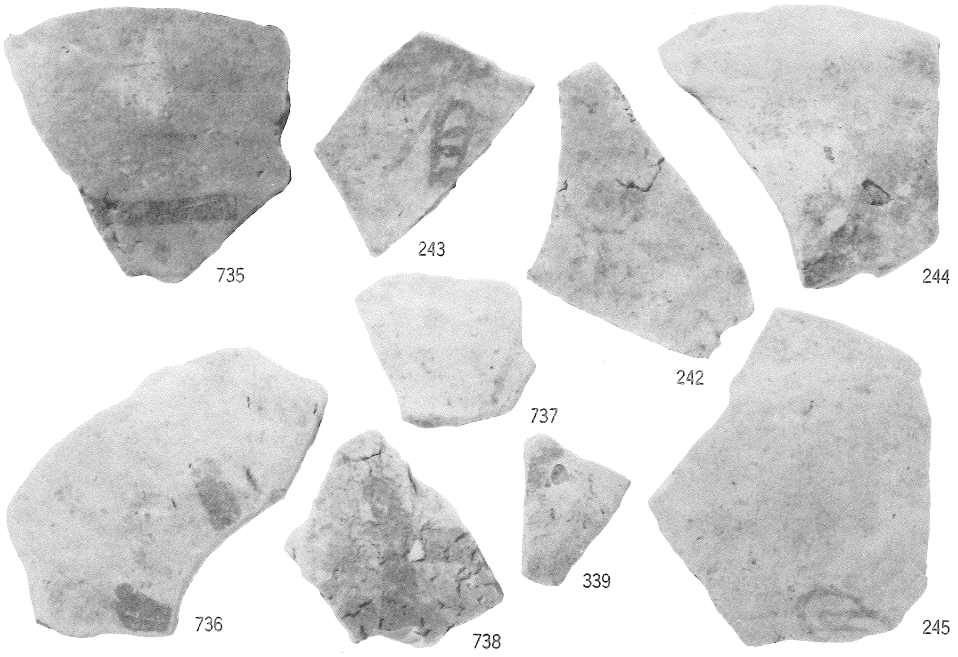
右列＝皿H

327

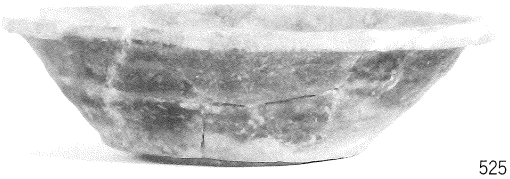
1　轉讀札

241

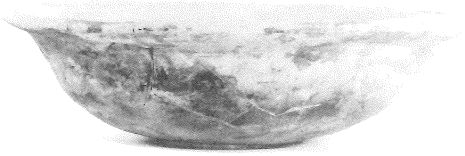
2　墨書土器(1)



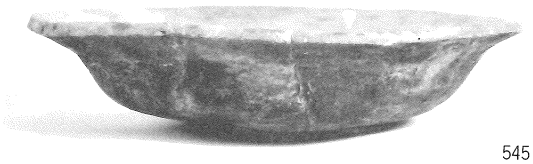
3　墨書土器(2)

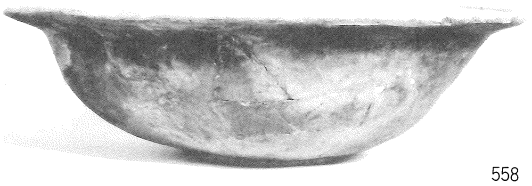

525

517

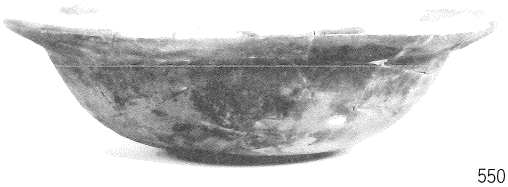

551

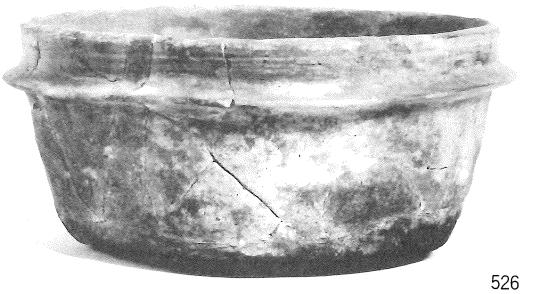
518


545


558

531

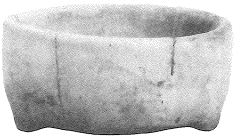

550


526

560

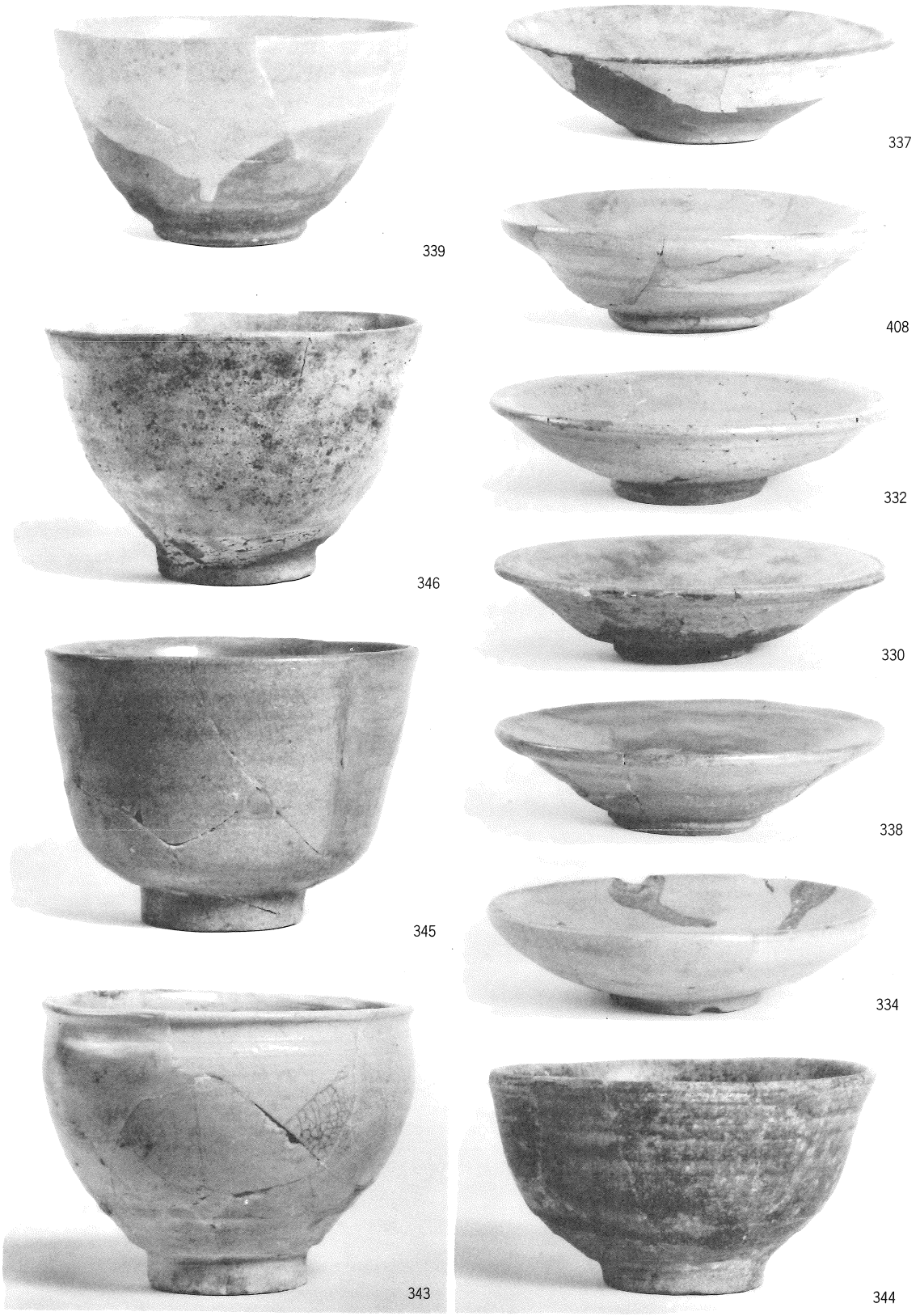
201

202


502

734

瓦器・土師器



溝ＳＤ16305(A)出土唐津焼

333

407

347

337

336

348

406

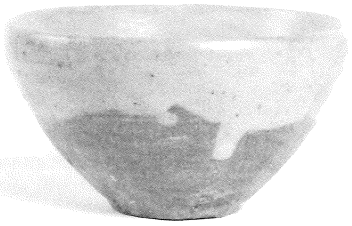
405

399

398

溝SD16305(B)出土唐津、信楽焼

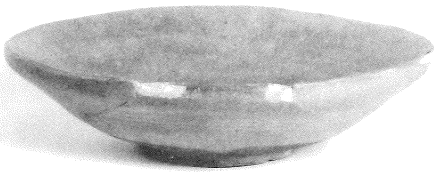
416



415

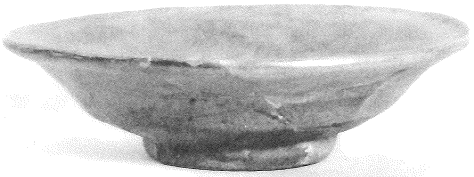
419

409

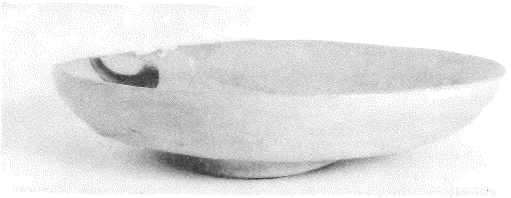


411

421



410



413

422

420

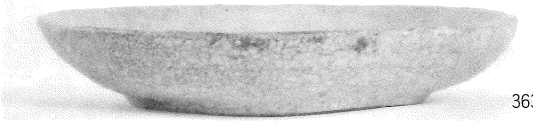
溝ＳＤ16305(C)出土唐津焼

365

740

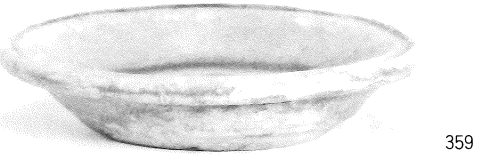
364

404


363

356

357

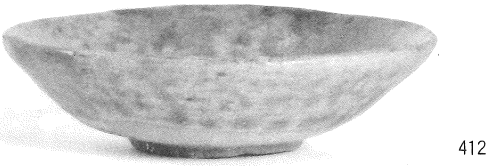

359

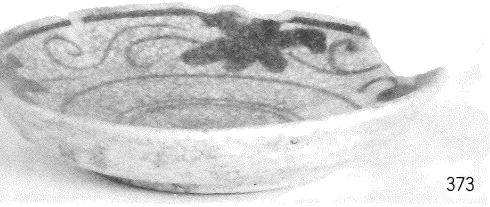
400

353

358

362


412


373

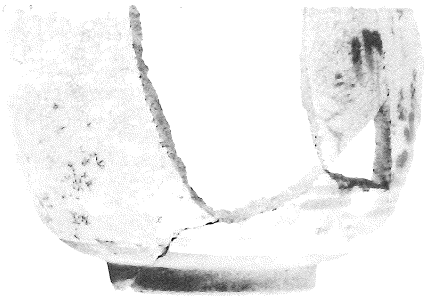
溝SD16305出土瀬戸焼系陶器

388

453

389

450



390

451

447

741

空堀等から出土した国産陶器（瀬戸、唐津、京焼系）

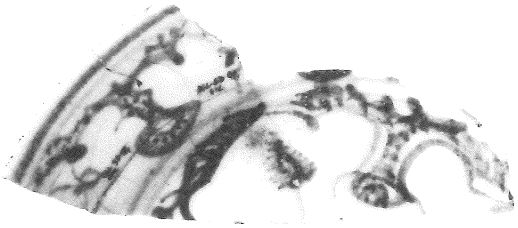
377

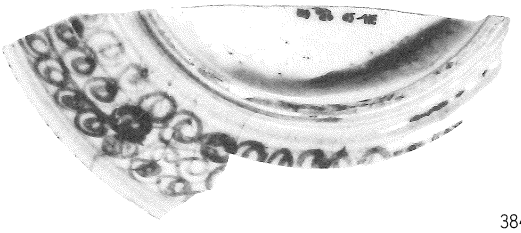
379

380

429

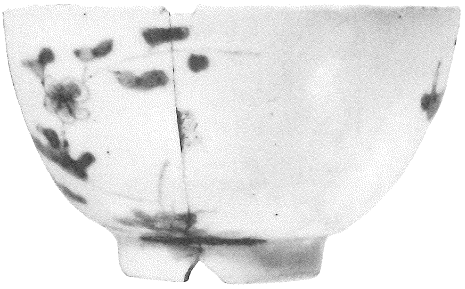
383





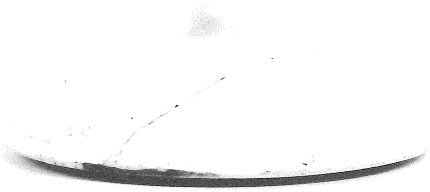
384

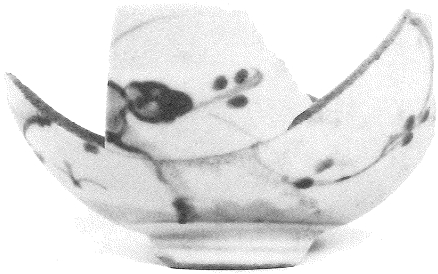
428



426

溝SD16305(A)・(B)出土染付


469

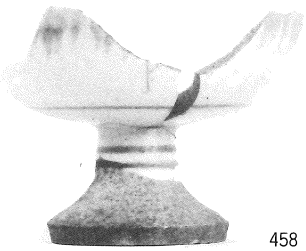

471

746

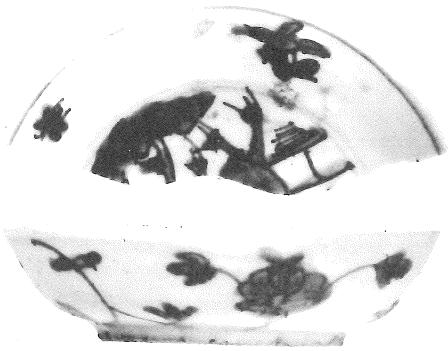
472

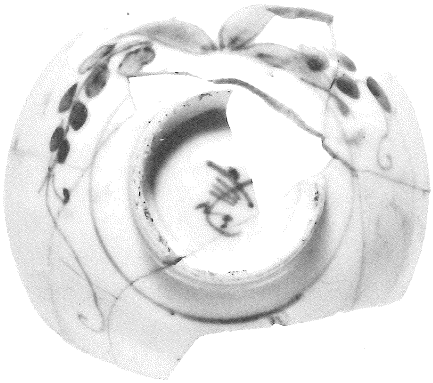
459

463

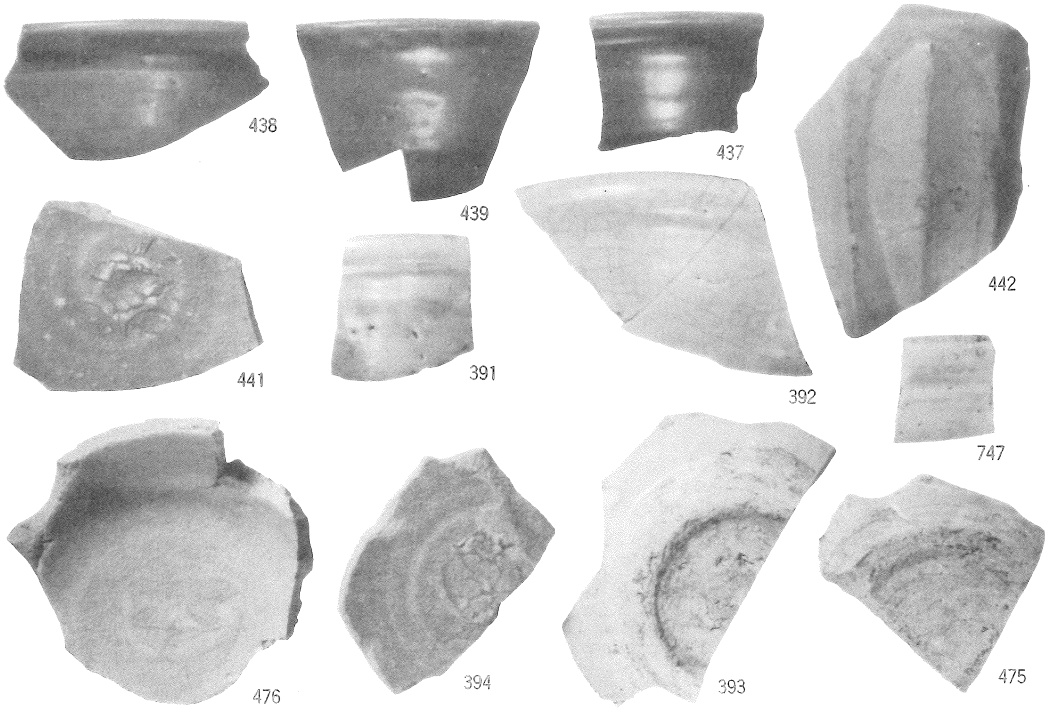

458

462


468

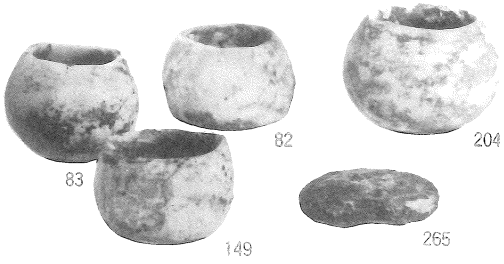

470

土墨・空堀出土の染付・白磁



1　輸入磁器

2　緑釉陶器



3　小型土製品

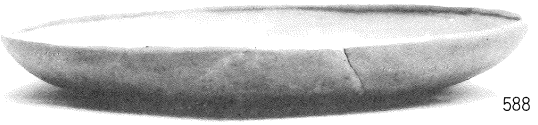
4　近世軒丸瓦

622

612

1　平安時代須恵器

580



588

597

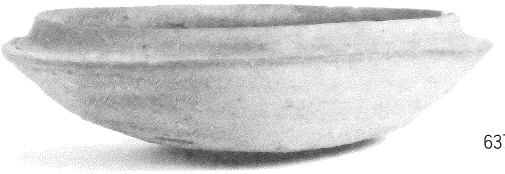
2　平安時代土師器

633

634

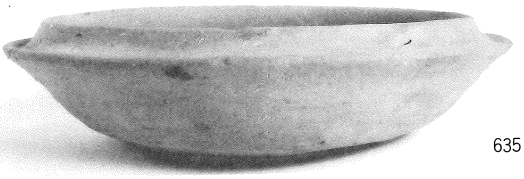
632

3　神足古墳出土須恵器蓋坏



637

636



635

638

644

640

645

639

646

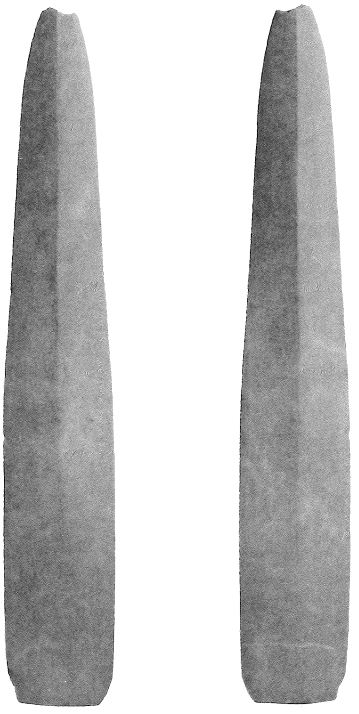
651

古墳時代須恵器・土師器

653

652

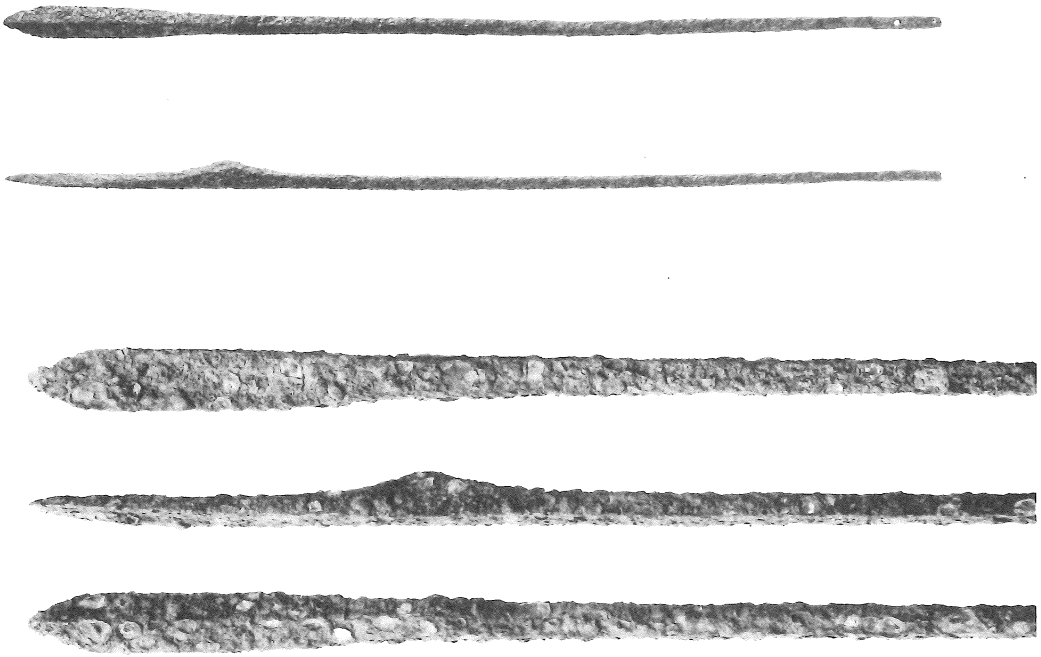
668



685

1　弥生土器

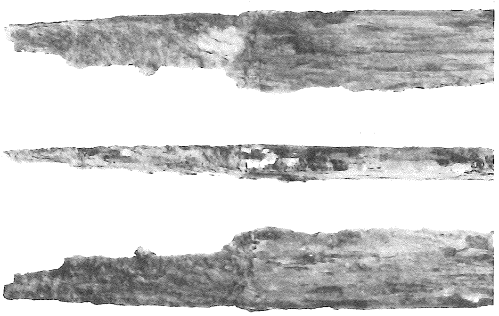
2　磨製石剣



728

1　鉄製槍先

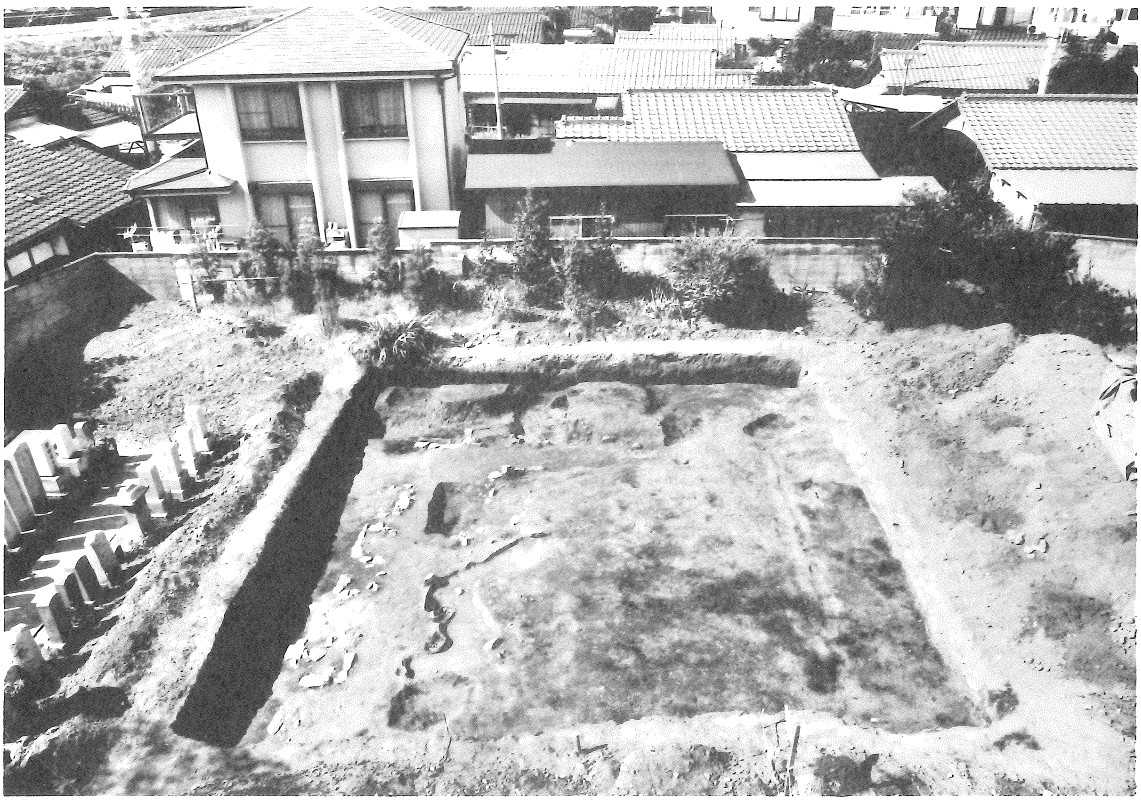
727



2　鉄製直刀

729　748

3　青銅製品



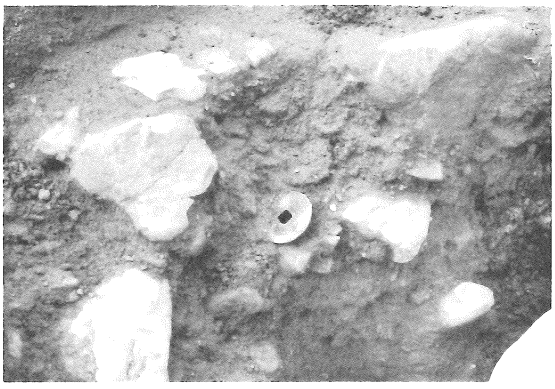
1　第Ⅳ期遺構全景（南から）

2　池SG20703（南から）

1　第Ⅲ期遺構検出状況全景（南から）

2　第Ⅲ期遺構完掘状況全景（南から）

1　火葬墓ＳＸ20732全景（東から）



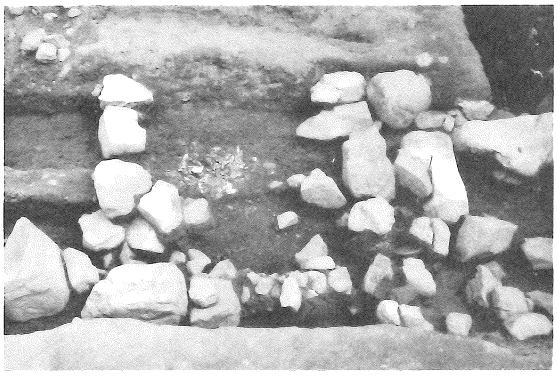
2　寛永通寶出土状況（火葬墓ＳＸ20732北西端）

3　唐津焼出土状況（火葬墓ＳＸ20732北西端）

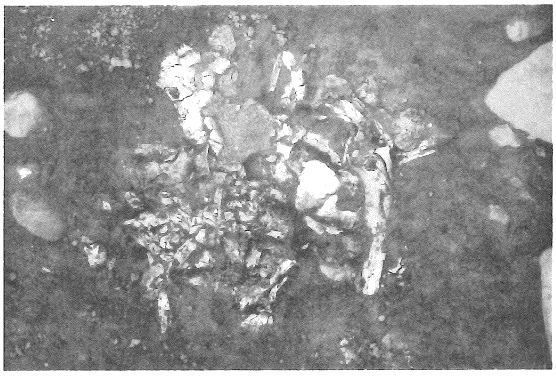
4　元祐通寶出土状況（火葬墓ＳＸ20732中央）

5　火葬墓ＳＸ20719全景（西から）

6　骨壺出土状況（火葬墓ＳＸ20719中央）

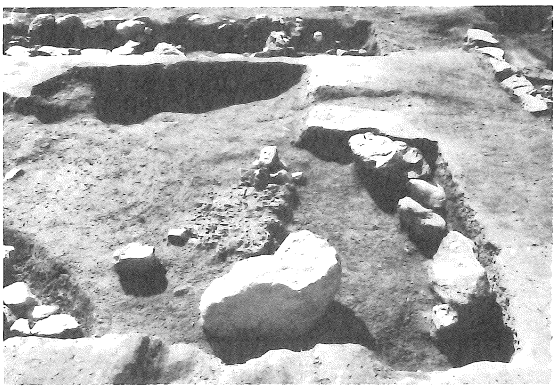


7　火葬墓ＳＸ20731全景（西から）

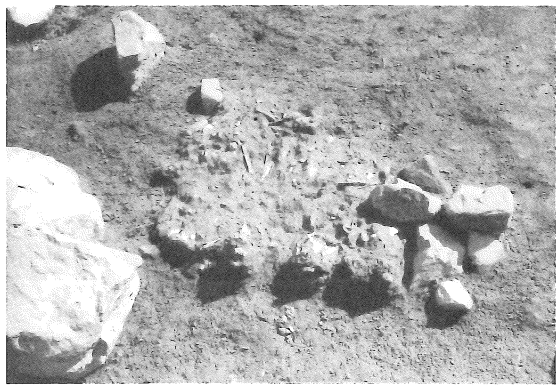


8　火葬骨出土状況（火葬墓ＳＸ20731中央）

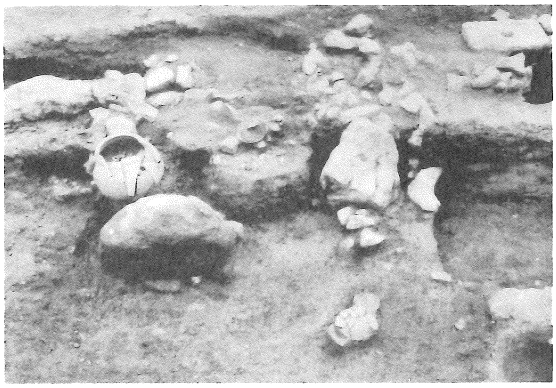
火葬墓Ａ列群の細部



1　火葬墓ＳＸ20715全景（東から）

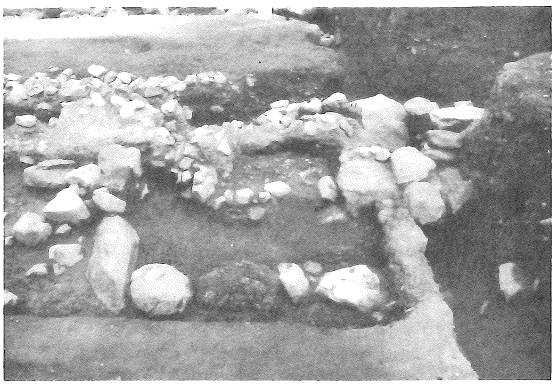


2　火葬骨出土状況（火葬墓ＳＸ20715中央）



3　火葬墓ＳＸ20727全景（西から）

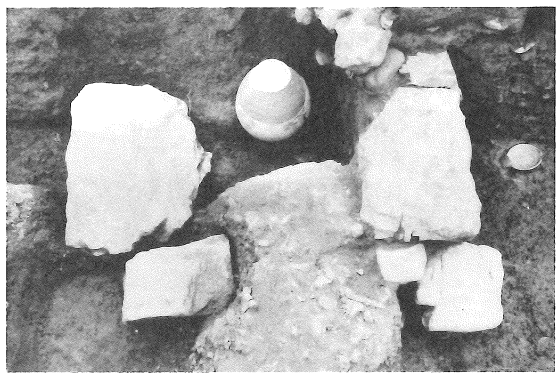
4　火葬骨出土状況（火葬墓ＳＸ20727）



5　火葬墓ＳＸ20729全景（西から）

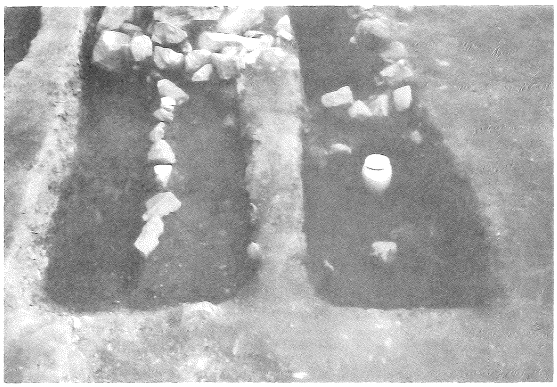
6　火葬骨出土状況（火葬墓ＳＸ20729南端）

7　火葬墓ＳＸ20717全景（東から）

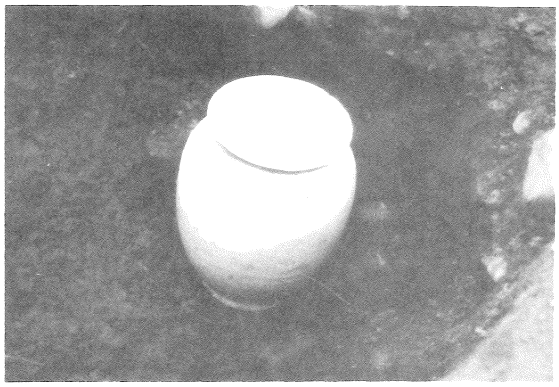


8　納骨器出土状況（火葬墓ＳＸ20717中央）

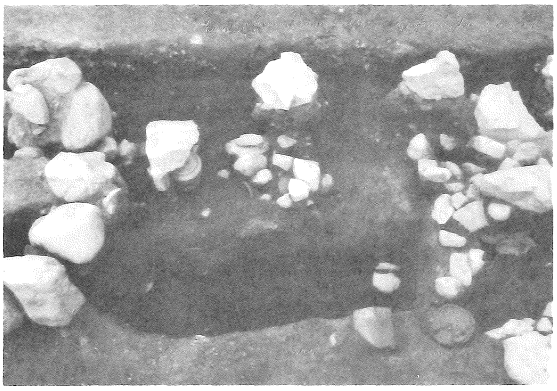
火葬墓Ｂ列群の細部



1　火葬墓ＳＸ20726（北から）



2　骨壺出土状況（火葬墓ＳＸ20726）

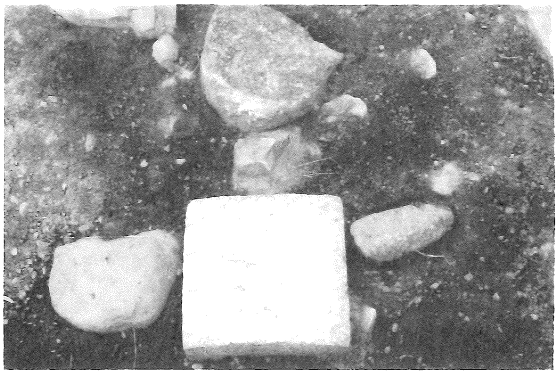


3　火葬墓ＳＸ20709（東から）

4　蔵骨器出土状況（火葬墓ＳＸ20709）

5　火葬墓ＳＸ20708（西から）

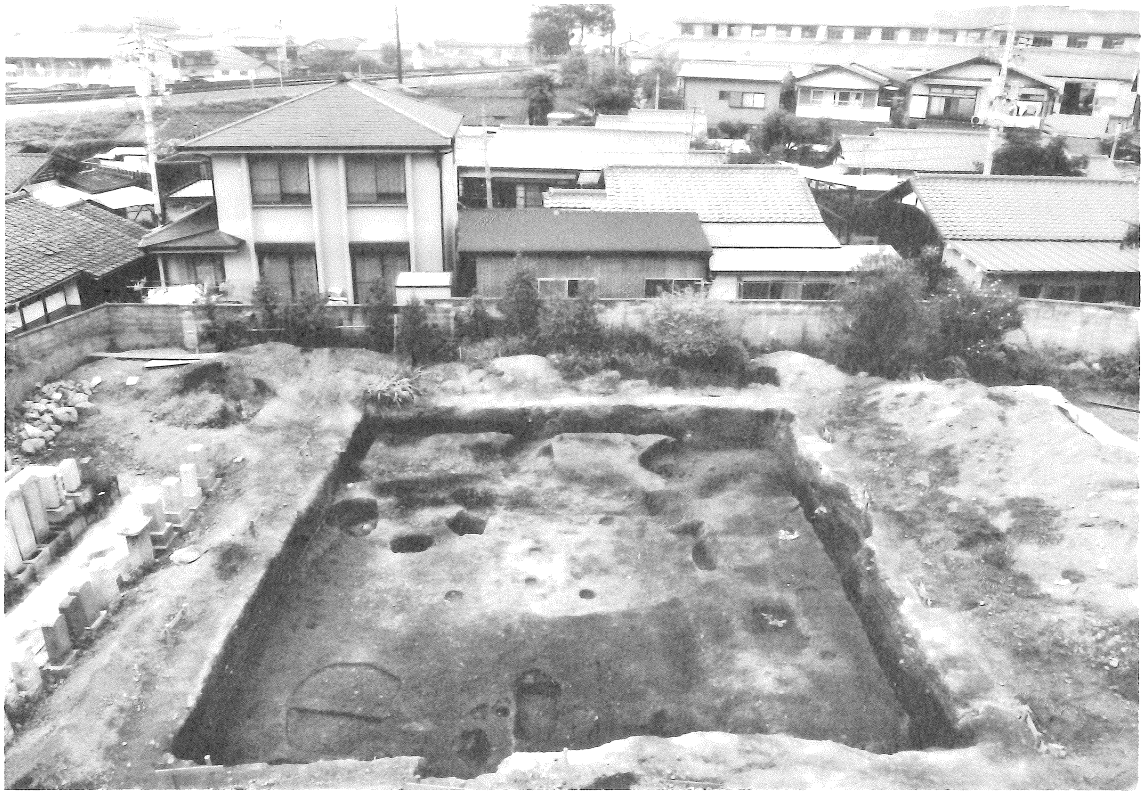
6　石仏出土状況（火葬墓ＳＸ20708）



7　五輪塔火輪部出土状況（火葬墓ＳＸ20708）

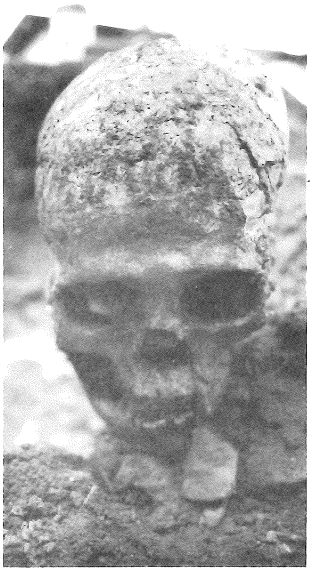
8　一石五輪塔出土状況（火葬墓ＳＸ20708）

火葬墓Ｃ列群の細部



1　第Ⅱ期遺構全景（南から）

2　第Ⅰ期全景（南から）

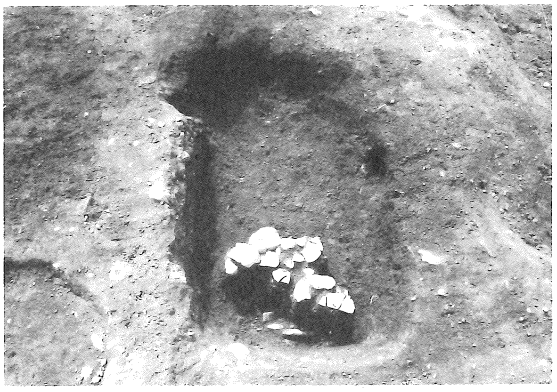


1　土葬墓ＳＸ20738(南から)と頭骨(右上)、副葬品(右下)出土状況

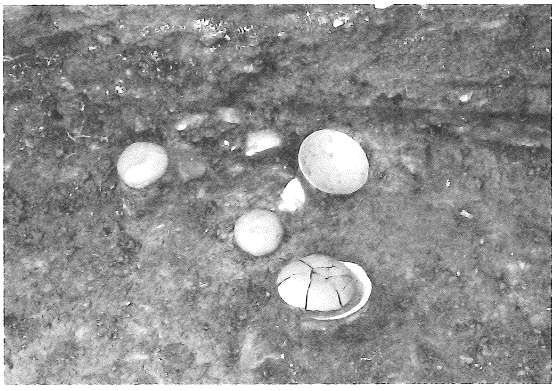
2　寝棺墓群（西から)、(下)―土葬墓ＳＫ20741、(上)―土葬墓ＳＫ20759

1　土壙SK20736（東から）

2　土壙SK20742（東から）



3　土壙SK20758（北から）



4　土壙SK20743（北から）

5　整地盛土と第Ⅰ期落ち込み（トレンチ東壁）

6　整地盛土と火葬墓A列群土層（トレンチ南壁）

7　墓道整地層（トレンチ西壁）

8　土壙SK20761土層（トレンチ北壁）

21

19

205

14

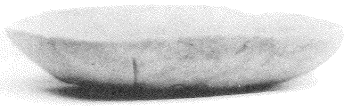
20

17

22

18

31

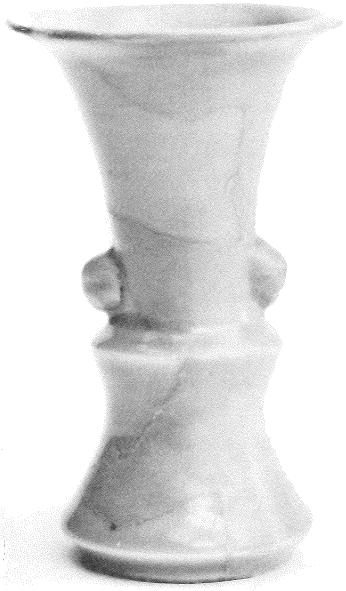

5

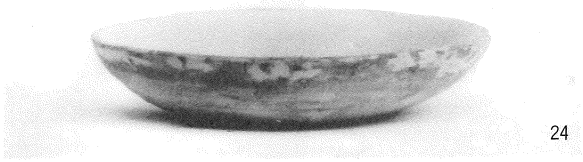
16

7

8

4


12


24

第Ⅳ期遺構・包含層出土遺物

26

27

120

9

84

62

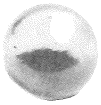
148

第Ⅳ・Ⅲ期遺構・包含層出土遺物

99

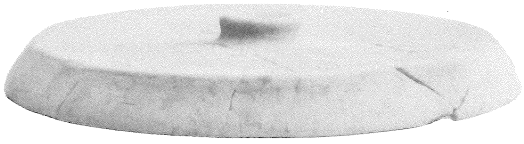
206

40



207

65



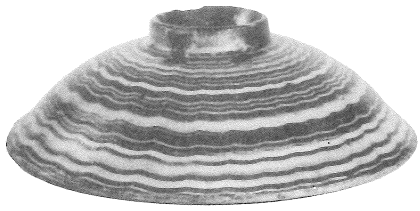
52

53

54

97

98



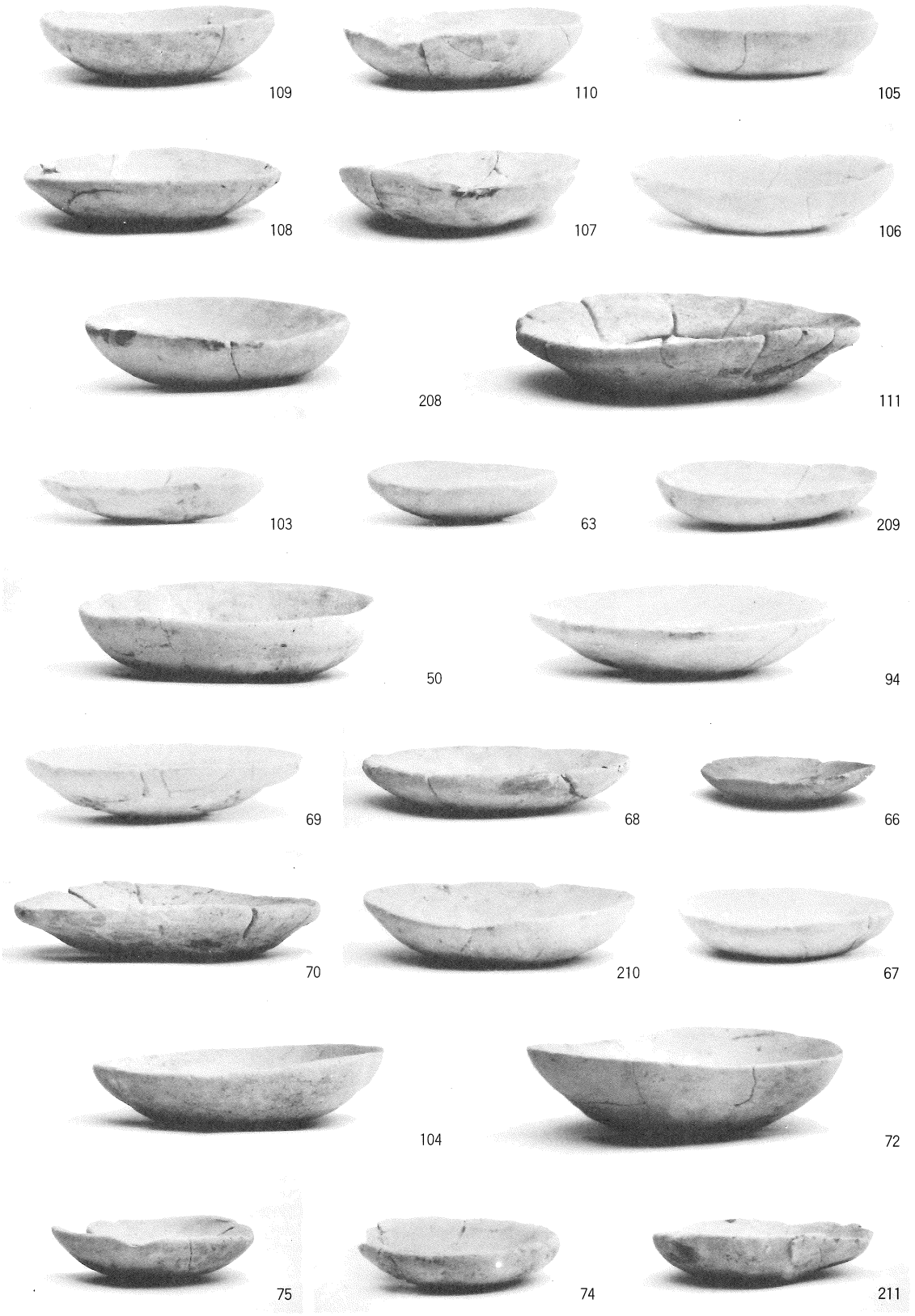
112

113

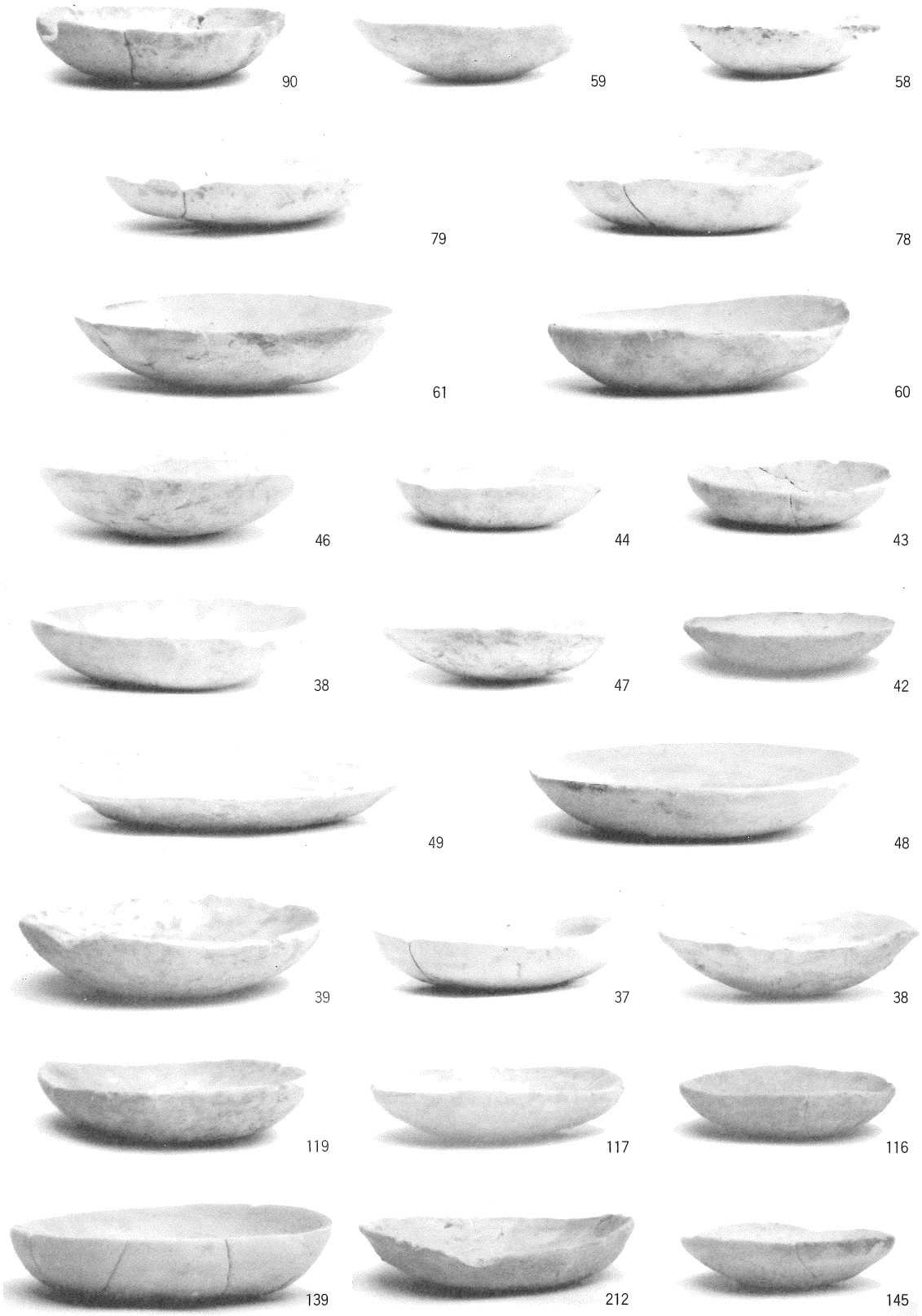
83

73

第Ⅲ期火葬骨壺出土納骨祭


109
110
105
108
107
106
208
111
103
63
209
50
94
69
68
66
70
210
67
104
72
75
74
211

火葬墓出土土師器皿(1)


90
59
58
79
78
61
60
46
44
43
38
47
42
49
48
39
37
38
119
117
116
139
212
145

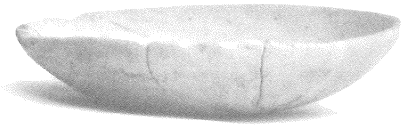
火葬墓出土土師器皿(2)

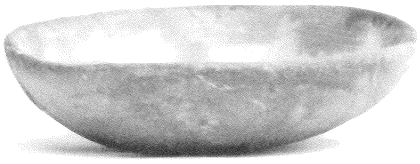
168

166

172

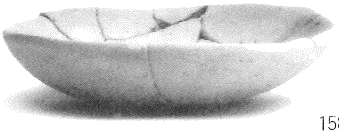
170

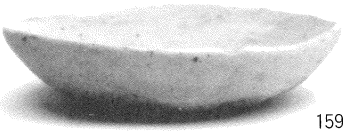

173


174

169

157


158

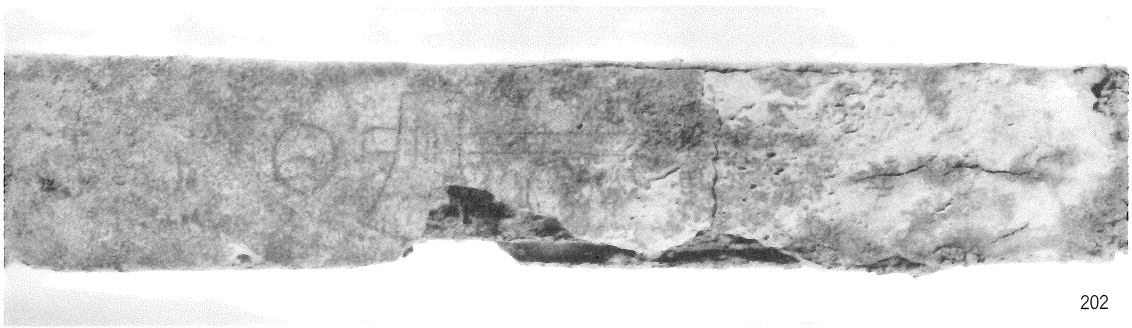

159

1　第Ⅱ期土壙出土土師器皿

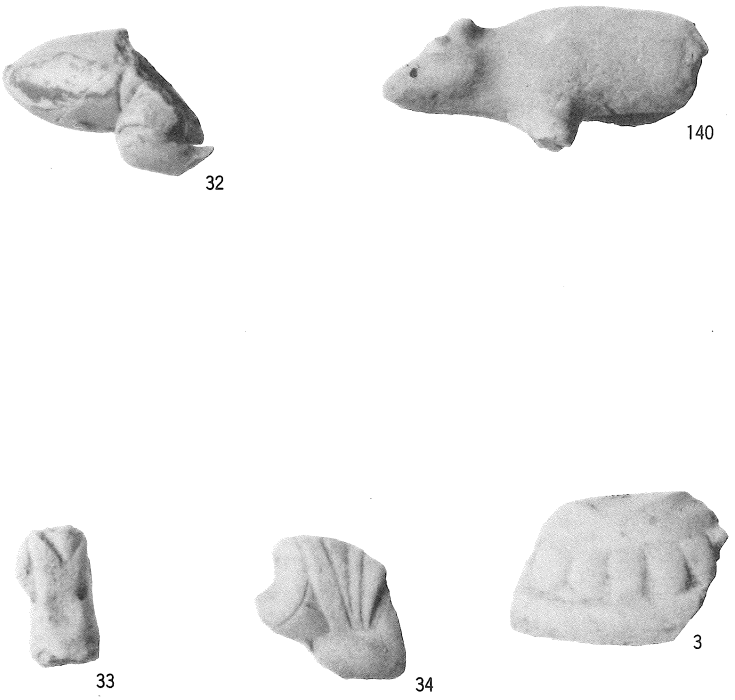
134

175

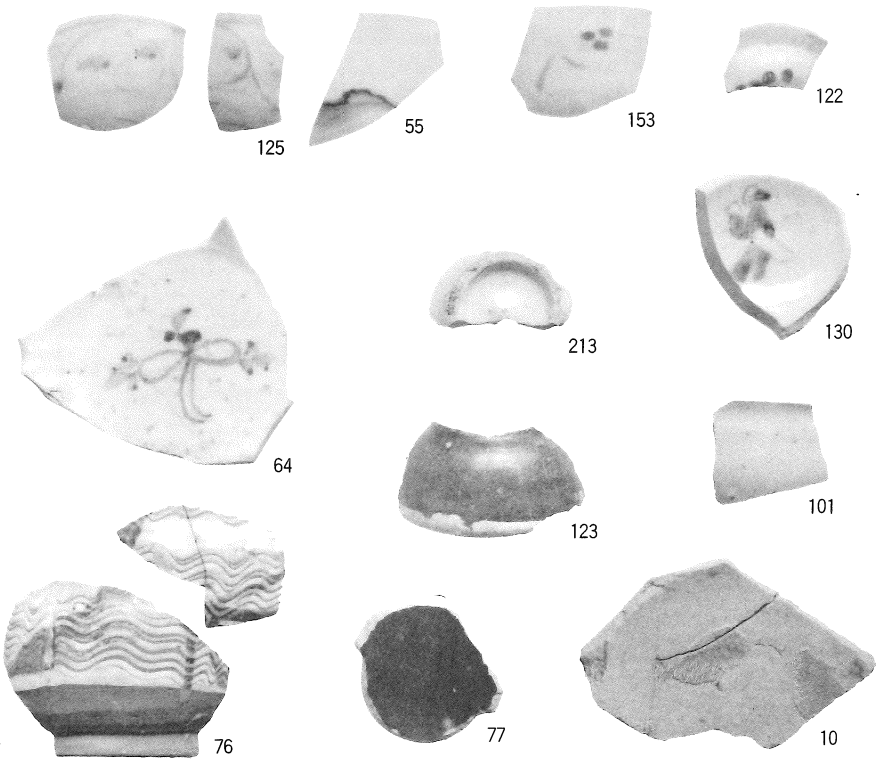
2　長岡京期の遺物


202

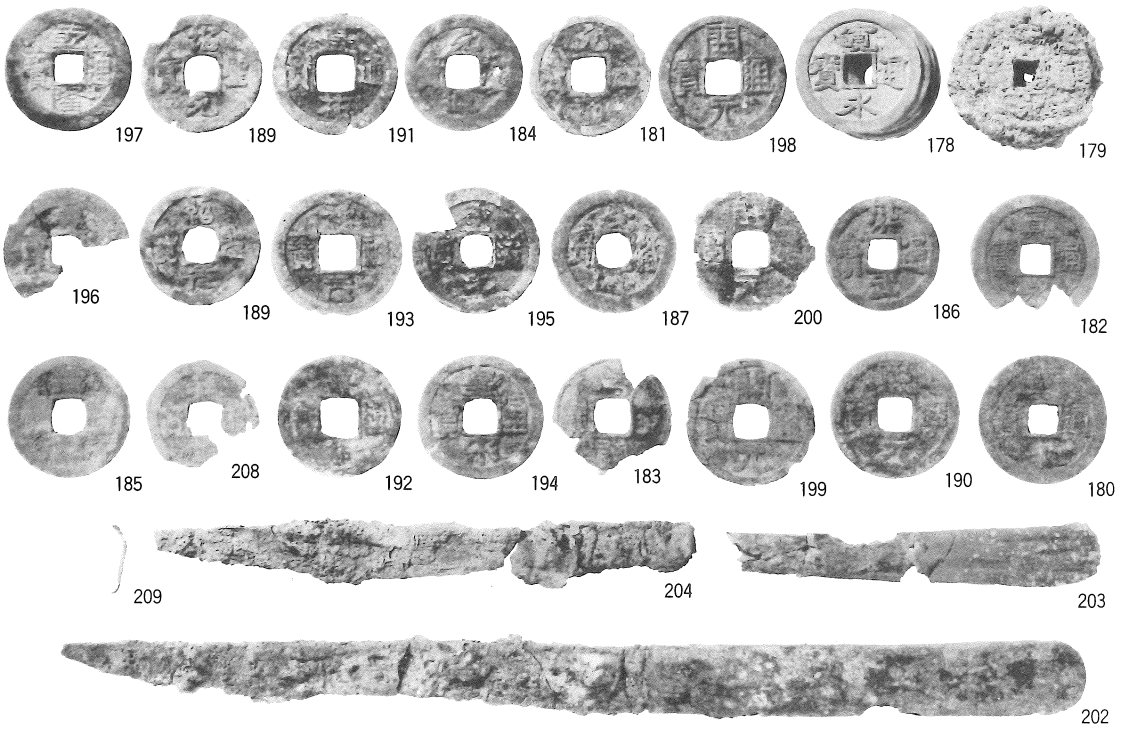
3　刀子の線刻画部分



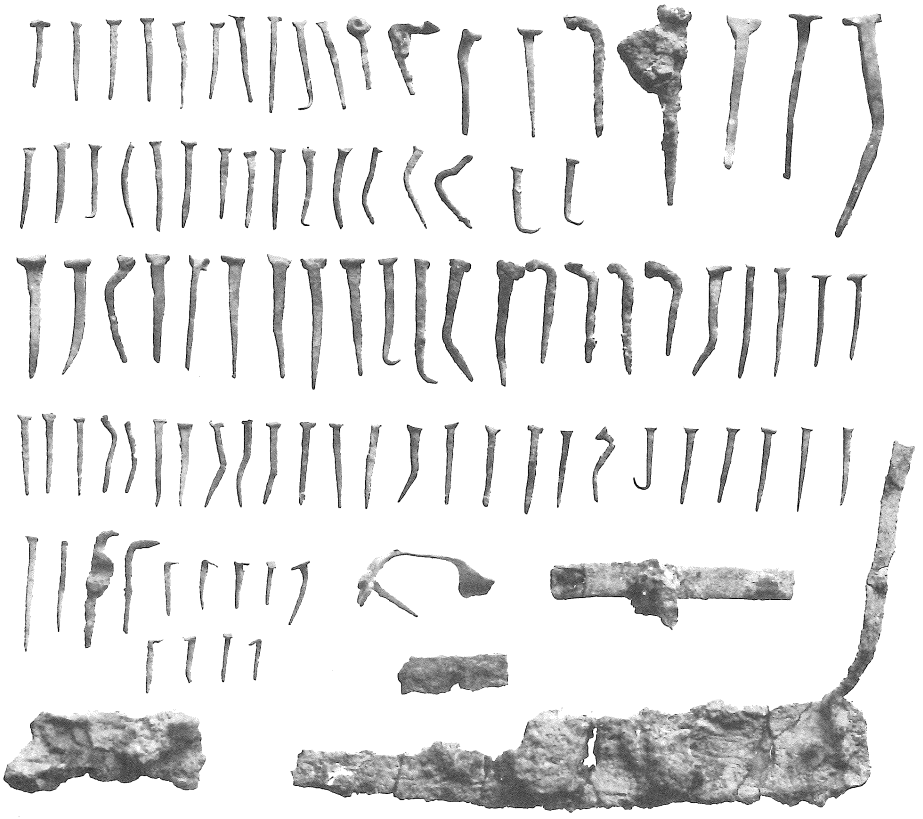
1　伏見人形



2　陶磁器片



1　古貨幣と刀子



2　火葬墓ＳＸ20715出土金属器

1

2

3

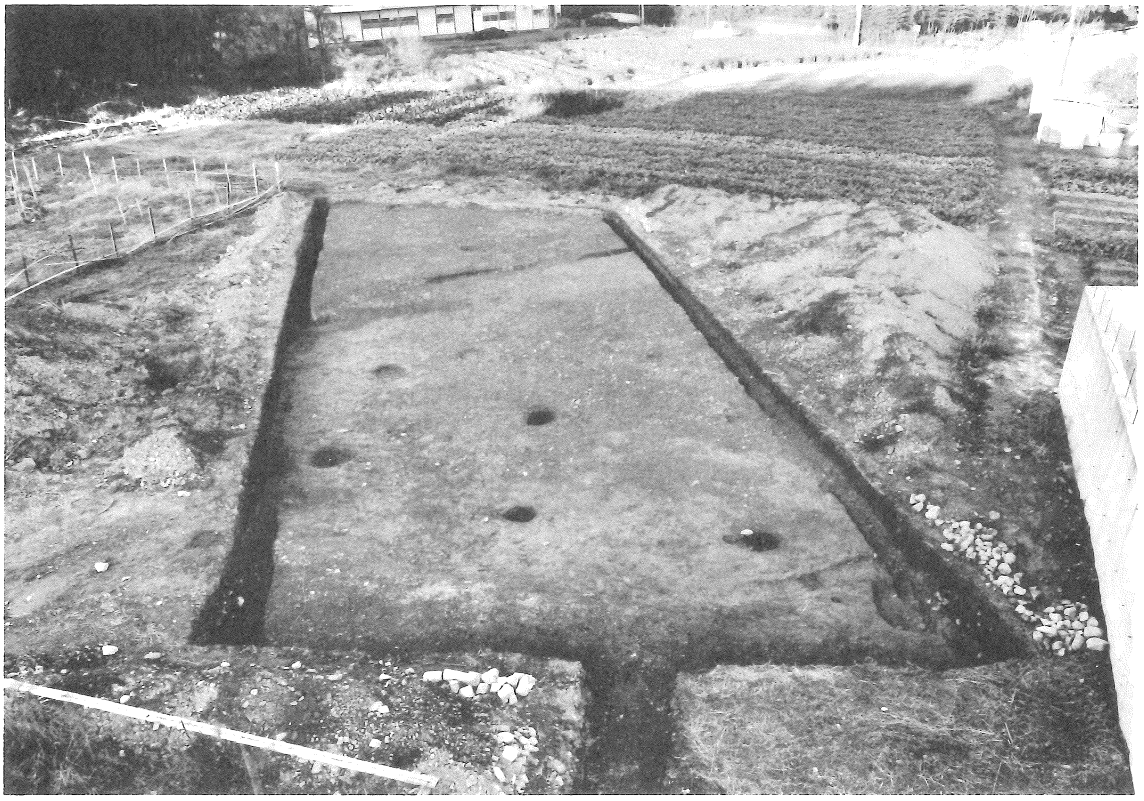
1．前面観

2．側面観

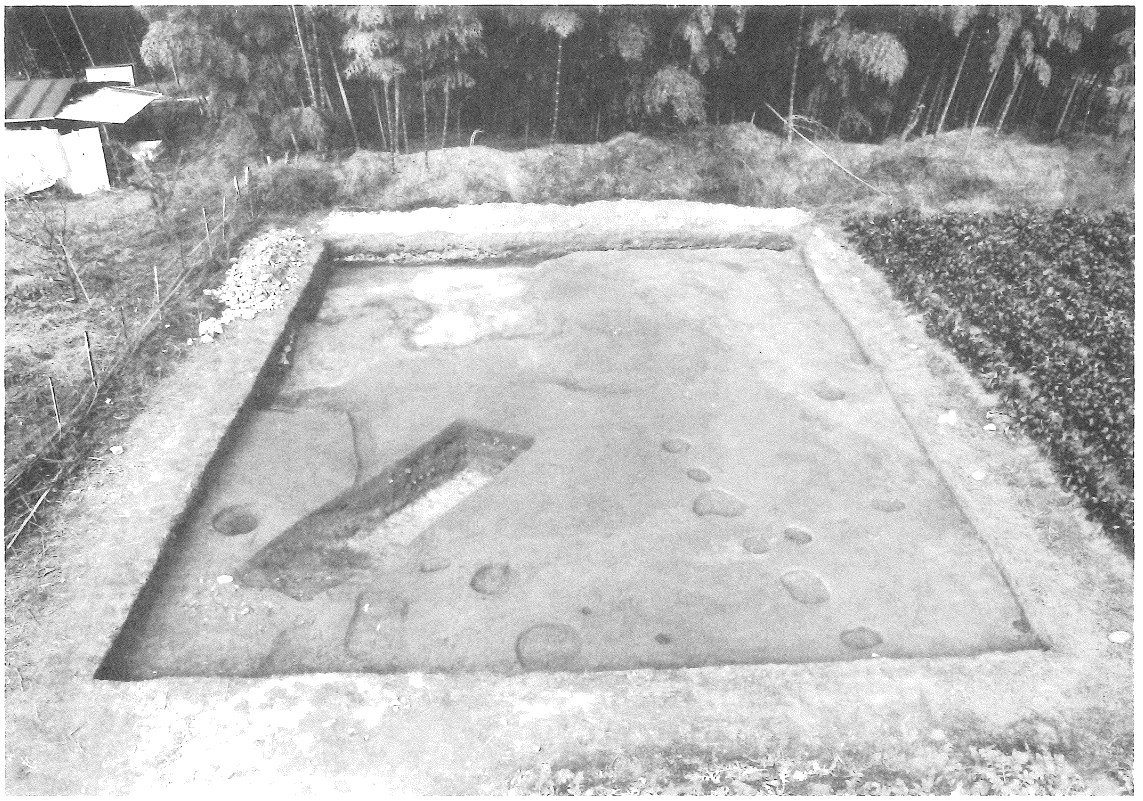
3．上面観

土葬墓ＳＫ20738出土頭蓋骨

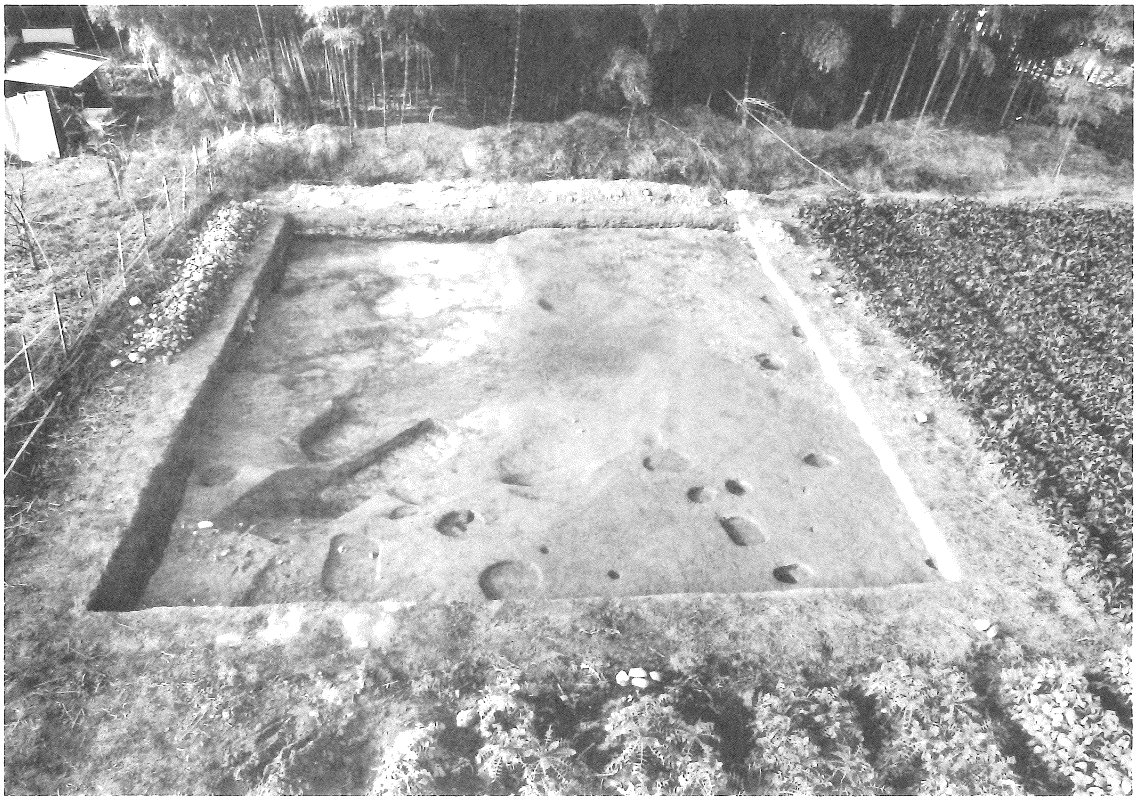
1　調査地全景（南西から、調査前）



2　Aトレンチ全景（南から）

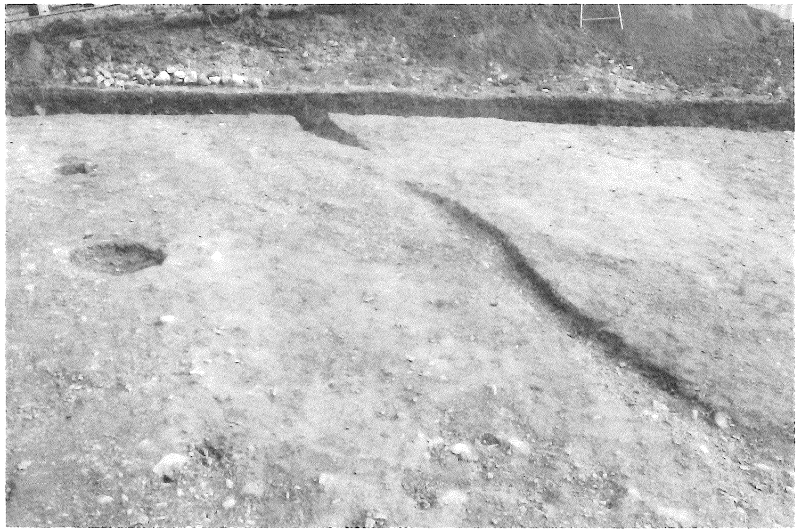


1　Bトレンチ全景（上層、南東から）



2　Bトレンチ全景（下層、南東から）

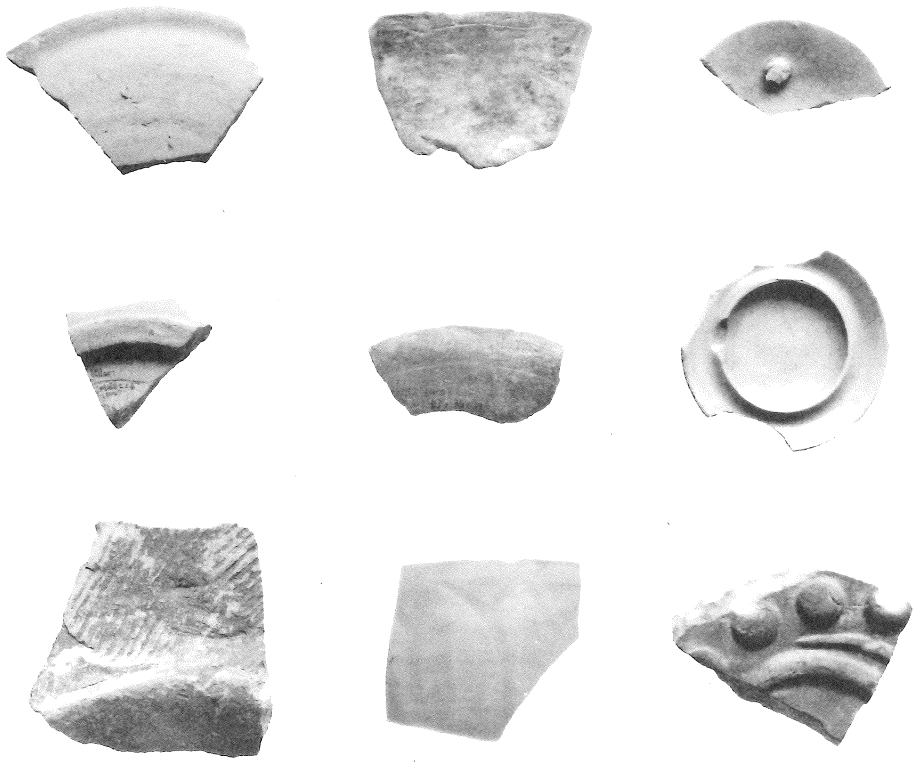
3　Bトレンチ　西壁の土層堆積状況（東から）



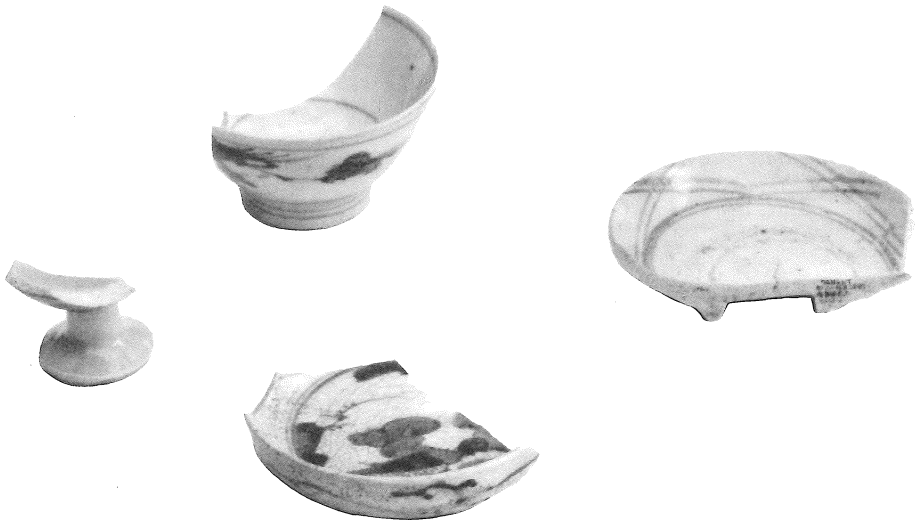
1　Aトレンチ　溝SD21301（北西から）

4　Bトレンチ　南壁の土層堆積状況（北から）

2　Aトレンチ　東壁南端の土層堆積状況（西から）



1　出土遺物（その1）



2　出土遺物（その2）

長岡京市文化財調査報告書　第17冊

発　行　日　昭和61年３月31日

編集・発行　長　岡　京　市　教　育　委　員　会

〒 617　京都府長岡京市開田一丁目１番１号
電　話　075—951—2121

印　　刷　株式会社 図書印刷 同朋舎

〒600　京都市下京区中堂寺鍵田町２
電話　075—361—9121